断片

二〇二一

u_

（池の滑らずに…）

池の滑らずに乗る、だって池って滑るんじゃなかったっけ、近そうで遠い古びた丸みの真ん中に円いぼやけた鏡の小さくぽつんと浮くような見掛け通りなのは古くからのさっきから変わらないけれど音が違いに違い過ぎる、音こそ遠いんだ風を酷く細かく切るように近そうでさえなく、って聞き分けた端からその違う音を切れない風みたいに忘れ、替わる音の無いのは知れてたんで、池もその見掛けをぽつりとなしに失って音は初めからぽつりもなしならと要らなくなりそうで、なら何も聞かずに池から身を躱すしかなしに、と、躱した振りに風へ延び上がろうか。いや、身こそが、見掛けを失った池から躱されるしかなく、そんなじゃ身は何の池も分からずに、ならこの身が硬く凹んで浮く池か、何処に乗るも滑るも無く、って、躱された池から、後ろから黙って好きなようにつるりと遠過ぎる儘に安らいながらに、時は忘れられてれば長い間も失われ、どうやら嬲られてそうで、黙ってるのは近過ぎるかに酷く遠いからで広広と、つるりとは酷く近そうで広広とも知れなさそうに広そうで。身だなんて身なん

て忘れようよ、だって何も聞かなかったし、って言い終わらない内に、この身
が硬く浮く池か凹みもせず、でも無くなって、そこだけ森と呼ばれてそのせい
でそこだけ森の外な辺りへ、はらはらと、何処に乗るも無く、滑ってるかなん
て知れなくて知れたところで知れては滑るのかな。はらはらと、は巧いぞ、っ
てそこだけ森でも無い辺りが延び上がろうかと喜べば、そこは呼ばれた通りの
森ならその森で。そこが森で無かったら、森なんて、空色を塗り込めただけの
硬い空の下の水色を流してるだけの硬い上に何より重い水の上の何処にも見付
からないみたいに、なので見掛けは相変わらずそこだけ森でも無く、でも森は
もうそこにしか無いのもはっきりしてるかな。いや、身のはらはらが、そこを
森と呼ばせるんだよ、って誰に？って見回しても誰も居ないなら森になんて何
の由縁も無いのさって由縁が有り過ぎる顔で近寄ろうともしない、顔なんて赤
赤と皺だらけで顰めっ面も出来なさそうなその誰ら皆だろうね。いや誰ら皆と
はまたザワザワと態とらしく遠回りに、姿は見せずに重い水へなら低く浮くよ
うに潜れもするかって。でも浅そうでも暗くて見えないなら底とも知れない水
の底まで降りて行かれたんじゃ、誰らも皆も無かろうに、息も潜めてそうなら
溺れ死んでたって知れないからね。でもそんな知れない誰ら皆かも、だからそ
こを皆で誰を誰とも知らずに森と呼びたいのかな。そう呼ぶからには溺れ死ぬ
なんて、嘘とさえ有り得ずに、有っても水に溶けてるみたいにキラキラと新し

い血なら転げるように幾らでも通わせて生き返り、森に近寄らない、って事は、どうにも直ぐそこまで、洗い尽くして汚れを全て落として血腥くしかない丸っこい足を放られたように晒して柔らかく森へ近寄るしかなくて目も切れず、目はただ奥へは瞠られ暗く切れ込み、かに。でも近寄るならきっと森って音を忘れてる、そうしてもう、うっかりとも何処からか知れず、知れない振りに森へ入り込んでる、に違いない、森とも無く、とも、なら森は自ずと退けられるかに。違いないからには、もうその違いなさが、そこだけ森と呼ばれてそこだけ森でも無い辺りを、あの空の下のあの水の上の何処にも見付からない森と定めてようかな、上の突き抜けて已む硬さと下の捩れて已まない硬さに引き裂かれてるうがそうでもなしに。ま、定めるなんて何でも無いよな、だって初めから定まってるものしか定めようも無くてね。さあどうかな、キラキラと嘘かも、でもその嘘かも、って取り敢えずは嘘かもでもその儘そんな事を言ってて貫わないと、嘘は忘れてもせめて、さあどうかな、位は、キラキラと新しい血なら幾らでも通わせて、かに。だって、その身のはらはらが何とも数知れず森へ捩込むように絡んで湿るような厚みを嫌でも森に持たせ、厚みはその儘風を重ねた重みなら、森はその重みで自らを沈み込ませ、数知れないはらはらを池の畔へまで締め出し、そしたら誰を誰とも挙って競って知らない誰ら皆は、そんな森に揃って背を向け、そこを森と呼びたかったのさえ忘れ、風も止めるかにば

らばらに軽くに影ばかりは何処までも風に乗せて薄めて身は舞い散って、はらはらと絡み取られて行くかな。でも皆ばらばらなら、さっさとそのばらばらに行き着いて繋がってるって、直ぐに誰ら皆は誰も、無い音をさも音でも無さそうに同じに見詰めるみたいに分かって、同じ山の頂を眺めるみたいに心を纏め。そんな事なら、誰ら皆なんて始めからそこに居ないようにそこに居るしか無いたった一人じゃないか、って数知れなげな声がはらはらと、その無い音に向けて揃わずに投げ付けられてて、無い音なら波立たせたいみたいに。って、誰が投げ付けてるの？って尋ねる誰かしか居ないなら、その誰かでだけは無く、そのその誰かでだけは無くが、そっちをそっちとしかなくに振り返ろうなら、そこに見付かるのが、たった一人の始めからも無い誰ら皆に違いないかな、だって違うから、って誰が言うんだっけ、って声が、水の上をどっちへでも無く脹らませて滑って水の薄い影を影より薄く揺らせば、池の面が、そこよりまた少しそっちしかないそっちへ向かって映り込んで行くらしいね。だって風が右へ左へ右も左も無く風を産んだ風の懐へ急いで引き揚げるように白さを隠した脚でも生やしてそうに棘棘と走って行くよ、水の影にその余りの軽さに圧されたように自らを脹らませ、水を恐れて自らを薄い刃で削ぐように円みの外へ、どうせ逃げられるもんか、って却って力むように逃げるように。その走る風の怯えて震えるような姿が池の形だけをザワザワと掻き消せば、声の上を幾重に

も掻き消された池の形が撫でて行くかな、風なんて、棘棘は均して食い破って。そんな声なら黙るのよりも黙ってようね。その声が溜まれば、ザワザワと底を真下へ錐みたいに尖らせる円い池になって、重そうに。そうだ、その重そうに、を欲しかったんだ、古びた振りを競うかに酷く恐がりで姿を隠すしかない他の幾つかの池は、澄むばかりで空をも水をも向かず。そうして、その重そうに、に見入ってる、そんな池なら数えられるよ。きっと六つだよ、ほら、六つって要らない数なんだ、捨てるなら何だって必ず六つを捨ててるもの、数えて損した、いや、でも数えた池も数に入れたら七つだよね、七つは良いよ。だって六つを要らなくして捨てるもなく、独り一つで居られるから。独り一つなら幾らでも、初めから忘れられてた森の音を思い出せて、血腥く、いや違う、血腥さを打ち消す骨の匂いを薄くに薄くに重ねて行けるよ、だって独り一つならもう何処でも動き回れる数の外だし血も骨も匂わせない、って、数の外を狂い無く円くぐるりと見回す池の、その水の色の濁り果てた末のぼやけにぼやけた鮮やかさったら、そりゃ風も逃げるさ怖過ぎて。も何も、その色の他に何が有るの？って尋ねたのがきっと拙かったんだ、そんなの他の何でもが、森を過ぎる風の石みたいに白い上っ面を硬く撫でるようにでも湧き出したら止まらないように幾らでも有り過ぎて、その色だけが却って無いみたいで。いや、その、その色だけが無いみたいで、は良いよ。如何にも数の外で、そんな事が起こってそう

じゃないか、独り一つが、それを見詰める事なんて出来たら、もうこんな話しはぶつりと切りにして、って、ぶつりなんて却って繋がって切りにならない、って事は、それを見詰めてなんてなく、独り一つは、その見詰めない先へ先へ、肩にずっしり来る風の思い出を遡って進んで行くしかないなら進んでなくて。成る程、進んでなくて、は良かったね。いや成る程なんて言ってられず進んでないんだよ、何も。ならその何も、だけは進んでそうで、いやそれで進むのも要らないなら、そんなで成る程かな、さも違ってそうに。アハハ。って、行き成り笑うって。いやそうか、その笑わなければ振り返れない向きへ振り返る事だったんだ、笑うのって、今やっと分かったよ、笑うのも必ず行き成りともね、だって、そっちならそっちしかないそっち向きの隠れた裏側にも、またそっちがそっちでも無くに有るのを、そんな様かに狭そうにうっかり見付けられたから。で、その裏のそっちでも無くにのそっちこそ裏じゃないんだろ表からは知れようもなしに、の表なんて裏無しには無いなんて嘘かに、だってそれだけで浮いてるものね、って、そのそっちは自らをそう言えて、それで初めからのそっちは、こっちとも呼べない位に近過ぎて色色見えて来るけれど、そのどの一つもどの一つ過ぎてどれとも見分けられずに、色色も色色の儘に初めから色なんて有り過ぎる余りに無いかに色も失せ、色の失せる儘の姿かに窪めば、と、窪むなんて何だろう、その何だろうこそ拙くてそれで窪むに違いなく、でも窪む

なら、そんなその窪みの底にはきっと、石と言う石がぎっしり埋まってて、数知れなげな石の影はくねくね波打つようで、独り一つは、面白くてその波に沿ってはくねくねに細く捩れて身を溶かさずには居られず、失せない一つの色に塗られてその屍の柔らかい儘に腐らずに水の動きに踊って水の動きを踊らせてる骨の浮いた痩せた蛇に自らを準え、失せない一つの色なんて色じゃ無いのを楽しめずに。楽しめずに?楽しめずにって何だっけ、楽しむ他に無い筈だけど、全ての全てを考えるしか考える事なんて無いと同じに、なんて何に尋ねてるの?なんて、ふと動きを止めちゃいけなかったんだ、いや何も止めてなんて無いよ、だって初めから止まってるから、って、ゆったりしてられるのが痩せた蛇に準えた強みだよな、って、独り一つは、それで水の眠りから醒めるみたいに、骨の浮いた痩せた蛇しか向けない上を向きたいけれど、目はぬるぬるとその向きを探すばかりに、またもっと深い水の眠りに湿って、向けない上からの失せない一つの色の濁りに、息も苦しい程に身を抑え付けられ。の、息なんて何時からしてたっけ、って、失せない一つの色の濁りから濁りを見ずに済めば、失せない一つの色は、色でも無さそうに透き通ってて、いや、でも、透き通る程に、失せない一つの色だぞ、って。あぁぁその失せない一つの色が、骨の浮いた痩せた蛇の姿を浮き立たせ、踊る水の動きには、それこそが独り一つを準えてそうで、って、何で誰にそれを分かるのかな、ってその誰こそ骨の浮いた痩せた

姿、でも蛇じゃ無さそうなら真っ先に澄んだ水より透けた翼でも生えてようって身は何処も血のようにつるりと、何処が何処とも骨が浮いてるとも痩せてるとも見えず。それで丸っこくなかったら、そんなの踊る水でしかないよ内を向こうにも内から弾かれこっそり、数知れなげな石の影と言う影を縫ってくねくね波打っては居ようけれど。って、その身がそう言うなら確かか、って自ら自らの血を水のようにさらりと飲むように思うなら、そんな自らはさらりと忘れられ、その忘れたのが独り一つで、何の一つも一つならどれも独りで。そんな何の一つも一つならが、何の幾つもを見ようとするなら何処までも続いて行きそうかな何処も無く、って見ればただ円くて。って何が？って尋ねられるのは円くてしかないなら、ただ円いんだけど、それだけは何の一つなんかじゃなくても一つなんだ、って独り一つが、それのそんな姿を見切れば、円くてだけは一つじゃ無いぞって自らに言い聞かせるしかなく。でもそんな言い聞かせこそ、独り一つ自らにせっせと見切られ見切られ、その度に一つじゃ無いぞ一つじゃ無いぞも、同じ処から同じ芽の生えるみたいに聞こえる振りこそ出来てそうだけど、どうかな。の、どうかな、が円くてだけは一つじゃ無いに円くに円くに絡み取られ、でも渦は巻いてないって、どうかな、は、見下ろすんだけど、どっちを？も無いよ。ただ低くへ低くへ、なら水を産んだ水の棲み処かよ、って、石の影をくねくね波打つ踊る水も釣られて見下ろせば、そんなの見下ろせ

る筈無く、見下ろせず見下ろせず流れもせずに、なら水の棲み処って、そんな
そこじゃないのって自らに言い聞かせたくなるよね、どうかなにしてみたら。
どう？さあどうかな、まるで違ってそうだけど、って声は、独り一つしか引き
取りようはないのなら流し、その流れて行くらしい声から目を背けて独り一つ
は、その一つ切りの向きへ自らを流して行けそうで、って事は、流して行けて
ないんだけど、って直ぐに分かれば見下ろせる筈無いから、その無いのを見下
ろすしかなく、低くへでだけは無く。いや違うよ、って言っても言い方が違う
だけなんだけどね、の、その違いこそ命取り、とは怖い程に分かって仕舞うよ
うでは、どうにもまた、その無いのを見下ろすしかなく、でももう低くへでだ
けは無くとは言えないなら、黙ってれば良いだけで。違うの?·違うよ、だって、
黙ってたら見下ろすしかなくも何処かへ無くなって仕舞うよね。そうさ、それ
でおう仕舞いで良いのでは。違うの？いや違うなら違ってて良いよ、その良いよ
が違うんだからどうともならず。そのどうともならず、が欲しかったのかな、
もう低くへでだけは無く、は。だって、それで、見下ろせる筈無いを見下ろす
しかないだけが、一つ切りの向きの流れに逆らうどころか、そんな流れなんて
打ち消し、そこに重くも軽くもなく凝っと止まってないかな。なら、見下ろせ
る筈無いも見下ろすしかないも無く、滑るに決まってるのに滑らずにそこに乗
る、ええっと、声にするなら、池。そう、そこで止めないとね、池、の先の何

の響きも消し、で池はもう何ものとも知れるも知れないも、声には知れずに。いや声にはじゃないけれど声にはとしか言えなくて、いや違う、そんなの何とでも言えて、なので知れないで止められるよね、水の重さを尖らせて突き刺すみたいな振りで。そりゃ振りだけさ、だって池なんて何処を探したって、水の中に沈められ、空とはべったり貼り付くように距てられて池で。そうじゃない池なんて全て、森の隠された窪みの底に集められ見掛けは色だけ池の、殆ど石の一塊で目印みたいに惨めに、でも森が風に揺れればブルブル震えて柔らかいのを隠せずにそれなりに酷く傷付いて浮き浮きと。で、もっとそうじゃない池なんて森に隠されもせず空に晒され、森を酷く小さく見せてるよ。いや見ちゃいけなかったな、あぁぁ森なんて何て小っちゃいんだ、まるで、まるで何でも無いとしか喩えられないみたいに、ただ枯れ枝か落ち葉なら拾えそうな、窪みも脹らみも無い青い草さえ生えない、ええっと、もう水の涸れた池だよ、きっと、その幾ら違ってたって構わなくに。で誰が枯れ枝か落ち葉を拾ったかな、そんなの一人残らず空に晒された池に滑り落ちて溺れ死んだぞって声なら、枯れ枝の風に転がる音か落ち葉の舞う音から、鈴生りみたいに繋がれた鈴の音が静かに鳴り渡るみたいに聞こえて来そうで。静かにしては鳴り渡り過ぎるんだ、でも何処を？って、その何処をへ向かって欹てずには居られない耳の奥で、生きる血と死ぬ血の音がカサコソ擦れ合ってて、そのカサコソって何の声だっけ、

って目で追えば、だって耳じゃ追えないからね、なので目じゃないかも知れない、ならきっと、生きる血と死ぬ血を混ぜて固めて一塊に拵えた目の形かな、そんな目の形に見詰められるのは、耳の奥に仄かに見通せる羽か毛を生やした卵みたいに丸く脹れて薄汚れてるのを楽しんでそうな小さな藪で、でも藪って確か、その藪に潜んでる獣の姿じゃなかったっけ、ふわりと、なので潜む姿でその姿を丸きり晒してて、の獣の姿って全く、失せない一つの色の姿で、って、生きる血と死ぬ血を混ぜて固めて一塊にした目の形が見て取ったなら、そんな目の形なんて疾っくに、失せない一つの色の姿に溶けて消えてて、その失せない一つの色の姿も、目の形に見られるもので無くなれば、色も姿も失せて、で、失せない一つの色の姿で。ならもう、そんなの何でも無いよ、って自らの声を聞く独り一つは、自らの声を聞くって何だっけ？それを一つに定めたくに、藪を振り返り振り返り、その度に藪の始めから何処にも無いのを確かめれば、藪は、水の涸れた池の直ぐ先に、ぽつんと、水の輝きを映してそれを濁らせて奥行きを持たせた藪そっくりの鏡みたいに今にも涸れた池に滑り落ちそうに置かれてようね。いや、鏡みたいじゃなく間違いなく鏡だよ、だって藪そっくりだもの。目の形は疾っくに消えてるんだから、鏡みたいは何だって鏡なんだ、鏡をその鏡の通りに映す。なんて鏡なんて有る筈無いよ、なんて言っちゃいけないんだ。って、それを言いそうなのは水の涸れた池しかなく、さてそれを言っ

てるか言ってないか、でも水を涸らしたんじゃ、何を言うも言わないも無く、替わりに言うのが、水だって映せるぞ、って艶の輝きをこれ見よがしに、水の涸れた池に流し込んでる鏡で。鏡？いや、それだけは鏡じゃなかろうさ、だって、それはそんな自らの姿を自らに映せないからね。え、まさか、何だろうと映せないならそれはその何だろうとの姿でしかなく、その、その何だろうとを鏡のようにつるりと脱ぎ捨てるしかなく、そうして姿で無くなって、ほら姿で。でも先ずは姿で無くなったからには姿を脱ぎ捨てられず、いや、脱ぎ捨てるなんて何も脱ぎ捨ててないとしか言えてないよね、ただ水を涸らした池の眺めを透けた丸い石の中に覗き込もうって身振りをしてる振りで、石の透けるの透けようを斜めに薄い綾かと見て取っては見逃してるだけで。でそれ、誰に言ってるのかな、なら、自らの姿を自らに映せなくて涸れた池に流れ込む水でしか有ろうと出来ない水にでしか無いよ、って、その自らの声を聞く独り一つは、自らの姿を、石の透けるの透けように見付けられたのか、られなかったのか、次の自らの声は聞こえず、なら、透ける石を直ぐ前に、その透けように耳を欹てる自らの姿を見なければと、その石の透けように呑まれるようで、呑まれるようなら呑まれてて、なら、姿も呑まれたんだ、なら、その呑まれた姿は石の透けようの中かそこを通り抜けたか、でないのか、って、その自らの声を聞く独り一つは、その声を聞いたばかりに、自らを呑んだ石の透けようを見失い、

なら、呑まれた自らの姿も見失われてる筈で、いや、そんな筈かどうか分かるもんか、却って、自らの姿が石の透けようから浮き出て、ほら影なら影まで付けてるよ色も厚みも影な、って何処に？水の底で無いのなら。水の底で無いのなら？水に底なんて有ったっけ。水に底なんて有ったっけ、なんて言えるのは、見た事も無いのに水の底を知ってる水だけだろうね。なんて声を聞いちゃいけなかったんだ。水の中なのに水の姿が見失われるようでは。いや、水の姿を見失ったのは水の姿でしかなく、水は水の儘、その姿の見失われる儘なので水で。だって、見上げられるなら見上げられる処に見上げられる処が、って何処に？なら、藪そっくりの鏡じゃ無いの上を何時も楽しそうに回ってる、ええっと何かな、何かなって首でも捻る鳥なら空の奥で孵って空しか知らないみたいな鳥が、鳥でなくてもやっぱり鳥な、そんな鳥が投げ落としてくれる、そこを。そこに欲しいなって目を向けるそこに、そこを。あぁその鳥とこの独り一つだけだよ、そこをそこと知ってるのは、って、その自らの声を聞く独り一つは、その自らの声を聞いて、よし嬉しくなろうって嬉しくなって、でも嬉しいしか無いのって悲しいしか無くに込み上げる笑いは抑え、の悲しいのは、きっとその鳥のせいさ、だって何時も空の上に見えてて、なら、巣も塒も無く親も知らず、この独り一つの目を向ける処にこの独り一つの望むものをそこに落としてだけその鳥で。そんなで空とそこの間に繋がれてるよ、って、決めて掛か

ったのがどうなのか、そこは、藪そっくりの鏡じゃ無い、が、鏡そっくりの藪じゃ無い、に姿を変えて行きそうで、でも、その行きそうを目で追ってさえ居たら、その行きそうな儘変わらずに居そうな、その藪そっくりの鏡じゃ無いか鏡そっくりの藪じゃ無いなんだけど、なら、追う目を眩まそうって事かな、藪と鏡のどちらにもそっくりな陽の高い空を巡る星影を落とす為の透き通った丸い小さな闇の形になって、その中へ目を凝らさずに居られなければ、数知れない星影をその中に見付けられそうだろうけれど、どうもそうは見えて来なくて、なら、って、陽の高い空に星影を探そうと見上げたりしちゃいけなかったんだ、だって、陽の高い空なんて無いものね、でも陽が無いだけで、その無いのを楽しむだけ空は明るく弾けるように輝いてて。そんな空が空だけのせいで、こっちへ向かって明るく輝くなら、空さえ有ればそこを巡る何も要らない。なら、例えば時なんてその空の明るさに疾っくに溶けてたんだな、時が溶ければ、知らん顔してたってそれに巻き込まれて溶けるしかなく、何もかも。いや、何もかも、なんて知らない。けど、きっと何か楽しくなって来てるようなのは、その空の見えない向こうに、空を輝かせる何かが凝っとしてそうだって、どうしても思えるから、なんてどうして思えて仕舞うのかな。って振り返る何処もが、明るい空色に染まってるのを競うように、鳥に望んだそこなんだって見付かって、見付かって見付かり過ぎれば、そこは何処にも見過ごされ、何処もが、そ

んな何処もは何かって声にすればしただけのそこになって、つい「森」って言い掛けて耳を塞いでも、森で。何処にも見付からないからこそ、かに。その、かに、は良かったね。その、かに、に呑まれるようで、呑まれるようなら呑まれてなくて、なら、その呑まれない処に、藪そっくりの鏡じゃ無いか鏡そっくりの藪じゃ無いが、空の輝きに紛れたそうにのろのろと纏わり付いて来ようもの。それが、かに、だって、言いたげに。なんて事を思っちゃいけなかったんだ、だって、その、かに、ごと、藪そっくりの鏡じゃ無いか鏡そっくりの藪じゃ無いは、何処にも見付からない森に溶けて行くようで、で、それで、酷く今更に森が見付かる処に見付かって仕舞って。の、仕舞って仕舞う処なんて何処にも無いさ、なんて事を思っちゃいけなかったんだ、とは思わなくちゃいけなくて、だって、眺められるのは何かって眺めれば、必ず森が後ろに控えてる、そのまた後ろへ滑り落ちそうなのを他の何より酷く恐れてるかに。そんな森を後ろに控えるのなんて池しか無く、どっちから眺めても恐ろしげに。あぁその池の眺めの何て眺めとは懸け離れた色合いなんだ、影と言う影の形なんて全て溶かして上っ面の裏に隠して賢げに。尤も色合いに色なんて無いけど。じゃ何が有るかって、石の透けるの透けようを斜めに薄い綾に似た、その薄い奥から時を流し出してるみたいな、ええっと、やっぱり色合いで色の無い。見付けたかな。その色の無いが、藪そっくりの鏡じゃ無いか鏡そっくりの藪じゃ無いと

同じ無いをこっそり分け合って溶け合ってないか、いや違う、無いを分け合うのにこっそりなんて有るもんか。それは必ず酷く喧（かまびす）しいに決まってる、って、誰が決めたかなら、誰が決めたかな、って、その自らの声を聞く独り一つしか無く。でもその声って、初めて聞くみたいに硬くて、硬いなら必ず中に何か詰めなくちゃ空っぽで、そんな詰め物が見付からないなら、それを空っぽにしてる、ええっと、それって、今にも捨てられそうな鳥の弱り果てた雛の姿なんだけど、違うの？って何に向かって尋ねてるかなら知ってる、前から知ってた、前から知ってるせいで今や何とも知れない、それが硬い中を空っぽにしてるんだ、見付けたからには、それに空っぽとは違う、いや違う空っぽでも構わないけど、そんなものを与えなくちゃ空っぽは直ぐにも硬い声を毀し、で毀された声が再び声に戻る事なんて無く、で毀れたの？知らない。でも知らないって知れればまだ毀れてないかな、でも毀れてないなら、与えなくちゃいけないものを探し回るしかなく、でしかないなら、与えなくちゃいけないものって、ただ探し回るしかないだけのもので、そんなの、疾っくに空の明るさに溶けてようね。それを「いや違う違う。」って、声にして来るのが何なのかだよな、って見れば、濡れて蹲って眠るように死にたげな鳥の雛の姿で、いや違う、濡れてなんて無い、だって水にすっかり沈んでるから。それに水に沈めば蹲るなんて無い、毛羽立たせた軽いお尻をふわふわ浮かせてそうで。そんなの

見ちゃいけなかったよね、って、逃げようとしただけで、その雛の嘴に端っこを銜えられて、初めて知ったみたいなその力に回されて仕舞うのか、身は振り返るしかないそっちを振り返ると、鳥の雛は、そのそっちの中に、少しも弱っても死にたげでもなく。って言うより、そのそっちが鳥の雛をそこへ閉じ込め、それで、そのそっちはまた、勢い良くそっちで。じゃ、この嘴は、って見ると、それを見ようとする目なら目には、嘴なんて見付けられる筈なくてその嘴の力なのかな、呼び掛けたくなる程に。あぁ嘴の力なら君をどう呼んだら良いのかなぁ、と、その自らの声を聞く独り一つは、そんな自らの勢い任せの荒っぽい言い草を酷く恥じるしかなく、嘴の力に突かれて粉粉になりたい、って思えば、空を回ってる鳥が、その粉粉の姿を投げ落として呉れてるって。でもそれ、森の必ず向こうまで風に飛ばされてないか。「ないよ。」って、その粉粉の姿に答えて欲しいんだけど、って思うと、鳥はそれを投げ落とす替わりに、え？　自らの身を投げ落として来て、でも粉粉になんてならない、鳥は、空からも落ちたそこから解き放たれ、それまでが鳥じゃなかったみたいに全く鳥になって、で鳥でなくなって、その鳥でなくなった儘に、粉粉より酷く鳥でしかなく。でもそれが「ふん、そんなの違うよ。」って言ったようなら、どうしてもそう言って欲しくて、でも却って、そうとだけは言って呉れなさそうに黙り込むその鳥は、それでも鳥か何時からかも何時までかも無しに。なんて尋ね

たでも無かろうに、それが酷く災いしたみたいに、その鳥かの姿を自らの姿と、その自らの声を聞く独り一つは、どうしてもそう思いたくてならなくて。そうか、なので鳥なんだ、その！って、自らに言い聞かせる声に、さっきよりもっと恥じなくちゃ、って、その自らの声を聞く独り一つは、その恥を隠すに相応しい今にも崩れそうで埋もれ掛けの古びた罅割れでも探す振りをして、その振りまで忘れたいなって。で忘れたんだよ、その自らの声を聞く独り一つは、自らが、その自らの声を聞く独り一つだって事までも。「それは良い事をしましたね。」って、何が言うのかな何が恥知らずかさえ知らぬげに、ってそれを探すそれがそれをそう言ったのを見付けて仕舞えば、それは、その自らの声を聞く独り一つの中に入り込んでて、いや違う、その自らの声を聞く独り一つが、それの中に入り込んでないか、だってそこでは何だって引っ繰り返らずに居られずに、ならそんなのどっちだって構わないさ、って、その自らの声を聞く独り一つは…、いや違う、それを聞けるのは、その自らの声を聞く独り一つじゃ無いなら、その無い、で。あぁそれが良い事だったんだ、って、その自らの声を聞く独り一つじゃ無いが、その自らの声を聞く独り一つが何か応えて呉れないかな、って見れば、その見ただけのその自らの声を聞く独り一つが、一つ一つの儘に幾つにでも殖えて行くのって、ただ、水が、水を欲しがってるそこへ水もその水を欲しがってるそこを欲しくて流れ込んでる姿にそっくりで。「違

うよ、そんな、　さも前に見えるように前を見るから間違えるんだよ、　見るなら前しか見えないようなら見なけりゃ良いだけで、　見る儘にその見えるしかない儘を、そのない儘を見届けようかって、　見るとも見ないとも離れて見て見ずに。の殖えて行く兆しを探し探し態と見逃しもして。」なんて言えるのは、　何だって騙さずに居られない水の流れだけさ、　だって…。　だって何？いや分かってるよ、　水についてそれより先を言えば、　自ら進んで隠しもせず水の外へ出て行くみたいなもんで、　必ず水に、　水を奪われて殺されるんだろ。　水の中でしか息は出来ない事にされて仕舞ってるからね、　囚われるしかなくに。　の、　水なんて水に騙されてるだけの嘘っぱちに決まってるけど。　嘘だから、　そりゃこれ見よがしな水無しなる殺され方で殺されるのさ、　嘘の他に何が殺せるもんか。　嘘は何時も、空の明るさにギラギラ煌めく程に、　懐の燃える石にその熱を冷まし冷まし磨きを掛けてて、何時でも何でも殺せるよね、　これ見よがしに何でも高みに吊されてたかに。だってそんなの幾らでも見て来たから。　そんなの、憶えてるのを数え出したら、一つ一つの儘に幾つにでも殖えて行くよ、　そんなので幾ら数えても一つより殖えないけど殖えないのは数だけで。　で数じゃ無い何もかもがそれが全てみたいに楽しげに殖えに殖えて、　でもそれ、　数じゃ無いに行き着くだけの、戻る処を無くせば行って戻ってるだけで。「行って戻ってるだけなんて、そんなの空で孵った鳥にしか出来なくて嘘だけど。　でも行って戻ったって分か

った嘘ならもう、それを繰り返そうにも嘘だけは繰り返せず、行っても戻っても予め殺されてたみたいに、ふわふわと。」って、自らの声じゃないって分かってて、それでもそれを、それともそれだから、それを自らの声じゃなく自らの声と聞く独り一つじゃ無く殖えに殖えて数じゃ無いなら、その数じゃ無いは、それが自らの声じゃなくて自らの声と聞こえるのを自ら分かり、その分かった姿がきっとその鳥なんだな、って、嘘は失せたかに呑み込んで、何処を見たら見えるそれが見えるのかな、の、それって何？あぁ、その知れなくて初めてその鳥なんだな、いや違う、鳥ならその鳥じゃなく、え、鳥ならその鳥じゃない？、それって、必ずその徴を見付けたんでそう言えてるんだろうな、って、自らの自らじゃない声を聞けば、その声の突き刺さってる小っちゃな窪みがその徴で。でも窪みなんて見付けたい処に幾らでも見付かろうね、何もかもが窪みみたいに何もかもが窪みで、なら水は何処までも窪みでしかなく、でも何処までもも窪みなら何処までもなんて小っちゃな窪みで、そこに見付けた窪み一つだけは、必ずそうしなくちゃいけなく水を弾くだろうけれど。でも水を弾くって、ただ色を失う事でしかないなら、その色の無いを撮めそうで、撮めそうなら撮めなくて、何故だろうって余りにそればかり凝っと見るのをふと已めて少しだけぼんやり見ると、その色の無いのって、その鳥の姿からうっかり食み出したような汚れた左脚の左端のそこだけ骨の剥き出された爪の先の艶に違いなく、でも

直ぐに違っちゃいそうで慌てて、なら鳥と言う鳥を燃やそうか、そんなの疾っくに誰かが遣ったみたいに。「鳥を燃やす？そうだよ、何でもっと早くそうしなかったのかな。」って、いや鳥は始めから燃えてて鳥で、そう分かればもう鳥と逆様の、「鳥と逆様の？鳥は鳥と逆様なので鳥なんだけど。それともそれを逆様にするなら逆様でなくなって、成る程、それは鳥じゃないよね。それから燃えてるだけの、さも見せたげに左足を生やし、汚れはずっと歩き詰めで止まった事は無いって見せびらかしてそうで、その左脚の左端の爪に色の無いのは、ずっとの。」って、だから鳥なら鳥じゃない、それがその徴だって言ってるじゃない、鳥と逆様に燃えてる。「はぁ、な事、何も言ってなかったけどな。言ってなかったろ。言ってなかったなら言ってようと知れた事とも知れなくに。」知れなくに、なんて知った事じゃないなんて事じゃなく、なので、徴は、鳥と逆様に燃えてる徴でなくても、また違う徴にも違いなく、違うのもまた違えば、違いは殖えに殖えてどうにでも成って、で何が残るかって、左脚の左端の爪の色の無さで。でもそれには、色の無さを分かる誰かが、小っちゃな窪みを覗くと同じに、左脚の左端の爪を覗いてなくちゃいけないかな。「いやまさか、そこに見付けた窪み一つだけは必ず水を弾くなら、誰が覗くより、その色の無さを囲む水が、どっちからも覗いてると同じで。」見付けたぞ嘘の尻尾を。問うに落ちず語るに落ちる嘘を吐く水を。って言えば、そらみろ、左脚の左端の爪

の色の無さは左脚の左端の爪の色の無さでなくなって、なら左脚の左端の爪ごと無くなってないかって、いや、左脚の左端のそこだけ骨の剥き出され爪の艶より艶艶と鈍く輝く穴が貫いている爪の先なら、無い藪のその藪に潜む獣の姿を縛り付けるに持って来いかな。なんて事なら、藪の有ろうが無かろうが、藪に潜む獣の姿の藪は、その失せない一つの色の姿で立ち向かって来てないか、って何処に？いや何処かなら何処だって構わないけど、どう遣って？「って？どう遣ってなんてどう遣ってもないよ。だって何だって、こうしてるんだって、どう遣っても無しに。それより何処かこそ何処なのかな。」見付けたぞ、そんな事を言えるのは、藪の失せない一つの色の姿しかないじゃないか。「何も見付けられたりしてないよ。だって何も隠されようも無しに、なので一つじゃ無しに、その一つを見付けたって見付けた事にも成らずに。」いや確かにその通りだね却って、見付けたってのはそう言う事さ。って、その自らの自らじゃない声を聞く独り一つじゃ無い、って、その一つじゃ無いだけが耳を澄ませたようなら、もう何を聞くもなく、なら、聞こえる儘をその儘にさせて置くだけで。で、やっぱり、藪の失せない一つの色の姿しかないなら、その藪に潜む獣の姿の藪は、そんな姿も失い、藪でも無しの獣の姿を池の畔にクルクル回して獣の姿でも無くなれば、水に逆様に映る燃えるとは逆様に燃えてる鳥なら鳥じゃなく鳥の形が、粘っこく水をクルクル回しそうに。でも左脚の穴の開いた爪の先

に、もっと粘っこく水が硬く撓って通って、鳥なら鳥じゃなく鳥の形は、形を無くし、形を無くす？形は無くならないよな、だって形なんて形が無くて形だから、って、始めから分かってたって分かれば、その形は、どんな形にも成る、薄っぺらくて透けてて、いや違う、そんな形をしてそうに、全く一つの形でしか無くに。えっと、なら徴だけとも羽搏く姿に凍り付いた翼とか。いやそんな翼に違いなくに一つの形とも違って、なので、藪の失せない一つの色の失われた姿を、何を聞くもなしの、生きる血と死ぬ血の匂いの混ざった耳の奥に仄かに風に舞わせ。そんなそれだよ、自らの自らじゃない声って、ってそれを聞く独り一つじゃ無いは、自らを風に舞わせられそうに一塊に溶けそうに、輝くだけの空に下に、空の輝きの映るのを跳ね返して空より明明と自ら輝き。なら、藪の失せない一つの色と逆様だろうね、その失われた姿とそれは逆様に。なので空の輝きと逆様なんだって分かりそうじゃないか。違うの？あぁその違うの？って姿ったら、ほら、それがそこに見付かって仕舞うそこって。そのそこから始まったのならやっと今そのそこに、なんて今なんて有る筈ないなら、時は向こうとこっちへ曲がって延びて見えた事にして、始まりのそこは、その向こうへもこっちへも遠ざかる、でも全く始まりのそこの儘のそこを自ら見直し、その見直される姿から遠ざかり。いや違う、遠ざかった処から逆様に近寄りに近寄り、なので、向こうへもこっちへも延びて曲がれるんだ、って、その自らの

自らじゃない声を聞く独り一つじゃ無いは、その声に成って、延びて曲がって、その向こうへもこっちへも延びて曲がる向きも延びて曲げて見失えば、その逆様にどうしたって明明とよりももっと見通せてるけど。数で表されるに違いなくに。の数は、自らの自らじゃない声を聞く独り一つじゃ無いの明明と自らを輝かせる中に溶けて数で。どんな数も溶けなきゃ数じゃないに決まってるけど、溶け方も逆様なら数に表わされるのも逆様で、いや違う、溶けた数に逆様なんて有る筈無いなら、声に成った自らの自らじゃない声を聞く独り一つじゃ無いは、逆様に穴でも開けたか脇を擦り抜けたか、見失われた延びて曲がる向きの中にすっかり細くも幾らでも伸びて一つじゃ無いで無くなって収まって、曲がる儘に曲がり続ければ、耳の奥を端から端へと湿っぽくひたひたとなぞってるみたいで、みたいならなぞってなくて、一つの形でしか無くに一つの形とも違う羽搏く姿に凍り付いた翼の徴にそのなぞるのを妨げられてるみたいで、みたいなら妨げられて、あぁ何故その徴の翼には羽も毛もその匂いの痕さえ無いんだ、って声は、自らの自らじゃない声でも無く、そんな声なら水に溺れてないか助けなきゃ水も詰まって困ろうし、って、耳の奥の藪の失せない一つの色の失われた姿は、風に舞うのを已め、失われた色の姿さえ已めそうに自らの重みに吸い寄せられるように水へ落ちたかな。なら声は水に溺れてなんてなく、藪の失せない一つの色の失われた姿こそ溺れてそうだけれど、でも水に、じゃ無

いよね。そうさ、水なんて嘘はもう要らない。だって左脚の左端の爪の先に穴が有るものね、血腥さを清かな薫りに擦り替えてるよ。溺れてるのなら、その小さな穴の中のその清かな薫りを抜け出せないで居るに違いなかろうけれど、そこにそうして居られるなら、その姿は、易易と藪の失せない一つの色を失う儘で、何を失うもなく楽しく溺れてそうで。あぁ楽しく溺れてられるのって何て楽しいんだの楽しさが輪を描いて行くよ、その行くよだけが行く儘に、って、声にも出してそうに。その声の一つの色は、それを聞き取ればその一つの向こうとこっちの二つの色で、その声の色を自らの自らじゃない声として聞く独り一つじゃ無いで無くなったは、その二つの色を向こうとこっちに見て取ればそれに挟まれた自らの確かに一つなのを見て取り、その二つの声の色を自らの自らじゃない声として聞き直して独り一つは、一つでなんて居られる筈も無しに、でもきっと一つの儘に、その形はまた延びて曲がってを必ず繰り返せなさそうに繰り返し、その繰り返される度に一つなら幾つにも成って、その一つ一つが幾つもの中を動き回って、それの数も確かに数えられそうで、動き回り方も数に直せそうで、その数に心惹かれるのか一つは愈愈そんな自らを独り楽しむにしても、溺れてないか。いや溺れてなくて、その溺れてないのが、ただ一つ楽しめなくて一つの色は色褪せ二つの色に挟まれ侵され掻き消され、でもそしたら二つの色もタダじゃ済まないぞ、なんて言えるのは水しか無いなら、水の嘘も

未だ要るんだな、って分かったよ、って自らの自らじゃない声を聞く独り一つは、幾つにも成り過ぎた自らの形に自ら溺れたそうで、でも自らが自らに溺れられる筈も無く、いやどうかな、って逆様に自らを顧みたのが災いしたか幸いしたか、その一つ身から、見る見るキラキラした新しい血が湧き出すようで、でも湧き出すようなだけで却って一つ身は、その幻の血潮に身を切られるようで甚く痛そうで、あぁ骨の浮いた痩せた蛇の姿にでも成れたらなって。それで、聞いた事もない声でその翳んでぼやけた蛇の自らの姿の浮き沈みを、浮くと沈むを逆様な声にするようなら、その声の色を見詰める一つ身の一つ目は、その奥を広く拡げる程に暗くして、で一つ目なんて直ぐに潰れ、その暗い奥だけが色を追わずに済まないけれど、何の色？なんて聞いちゃいけなかったんじゃないの、って、水が潰れる一つ目の振りで戯けるようなら、その戯ける狭間に突っ込んで洗われてるみたいな左足は、今にも透き通りそうで少しも透き通りなんてせずに真っ白に輝き、潰れた目の暗い奥へその輝きを打ち付けて来て、その暗い奥なんて酷く狭苦しいのって何？って、また水が一つ目の振りで戯けるようなら、良いよ幾らでも戯けてたら、って声を、自らの自らじゃない声として聞けない独り一つは、それを、自らじゃない自らの声と聞き直すしかないけれど、し損なうばかりで、戯ける水に愈愈溺れるしか無くに。ならその聞き損ないで聞いてりゃその儘そっくり聞いてるよな、って、骨の浮いた痩せた蛇

の姿にでも言いくるめられてるとでも思えてれば心は安まるか、って、声を自らの自らじゃない声として聞けなくて自らじゃない自らの声と聞き直し損なう独り一つは、独り一つにも居損ないそうで、いや違う、その損ないそうこそ一つは独りなんだ、って自らを見付け直せば見付け直し損なって、いや違うが違って違わないに違いなくに一つは独りで。あぁ、なら一つなんて要らない。独りでさえ有るなら。なんて思っちゃいけなかったのか良かったのか、必ず向こうとこっちとじゃない辺りから、そうさ一つなんて要らない独りなら、ずっとそう言って来たけど聞こえなかった？って水の声が掠れに掠れて掠れ過ぎて何も聞こえてないって疑うしか無くに聞こえて来て、更に掠れれば、その水の重みへ引き込まれて行くしか無く、あぁ水の重みって全く左脚の左端の爪の先に空いた穴‥って言い掛けて言い掛けの儘に言い抜け、その穴にしか無い重みを擦り抜け、なんて思っちゃいけなかったんだ、だってそれで擦り抜けるところか却って、水の重みなんて全て引き受けて涼しい顔のその爪の先の穴の重みに落ち込んでて。って、何が？見も聞きも匂いを嗅げも出来ないなら、あぁ骨の浮いた瘦せた蛇の姿にでも成れたらなって姿で、間違いなくに。間違いなくには良かったね、間違いだらけを炙り出しそうで。炙り出しそうなら何も炙り出して無くて、それで骨の浮いた瘦せた蛇の姿なのかな、何も炙り出せない果ての姿みたいだものね。って、そんな姿に成れてないか、骨の浮いた瘦せた蛇と

は似ても似つかずに、骨も浮かず瘦せても蛇でも無いなら穴の開いた影で、左脚の左端の爪の先に穴を空けた爪の影に準えようかって、でもそんなの水に映るしかなくて水の嘘に何時でも流れ落とされそうならもう落ちて流れて何処へ行くも無くクルクルともクルクルから少し外れてまた外れて水の底には曲がった骨が揃って並べば、その揃ってるのを撫でられるのが嬉しくて堪らず。その嬉しくて嬉しいって声って、自らの自らじゃない声とも自らじゃない自らの声とも聞けない、なら、間違いなく自らの声じゃ無くて自らの声で、その聞いた事もない声を、水の流れて行ける果ての隠れた向こうで、何時かも無しに聞いた事の必ず有る、それより必ずなんて無くに必ずになのでやっぱり聞いた事なんて無い、そんな声を耳にする耳なんて有りそうに無く、でも有るなら耳なんて無くて耳の替わりに何がその声を聞くかって澄ませられる耳も無いなら、その耳の替わりに‥。いや耳の替わりなんて無いんだ、って無い耳の耳に入る声なので、そんな声なのさ。って、その声に水の流れて行ける果ての隠れた向こうから言われたようなのは嘘かに空耳か、空耳こそ当てに出来そうだなって、嘘なのか、なそれを嘘など知らずと嘘に沿うかに、それより必ずなんて無くに必ず何時か聞いた声と重ね、で重なるなら重なるんだ、何の声が？って、鳥の声と水の声と森の声と、いやまさか、どれも何処までも贋物、時が拵えるしかなかったの時が贋物だものね、そんなの何の声でもないさ、何の声が？は何の

声が？って声でしかないよ。なのでその声は声の儘に已まなくて、何処にでも潜んで黙るなら何処にも鳴り渡って渦でも巻きそうに、何処にも鳴り渡るなら何処も黙るしかなく黙るのこそ嫌でも巻かれる渦でしかなくに、なので何の声が？って声でくるり。そのくるりが、一つ切りにぴたりと止まれば、そのくるり一つのとは違う止まってたもの全てがくるりと回って黙（だんま）りの渦なんて疾っくに断ち切り、更にその先の回り損なった、そこってきっと水の流れて行ける果ての隠れた向こうなんだ、って思わせて直ぐにそんな向こうなんて無いと分かる、空に押し被されて酷く重たげな遠くても行けば直ぐに行けそうな辺りから、酷く危なげな色が低く滲んで来て、だって空が低いからね、でも水の上まで辿り着けば風に触れて固まる色は、間違いなく獣の色だよ、空よりも輝いて何にも替え難い空っぽさを詰め込んだよってこれ見よがしに空っぽか空っぽで無いか知れない贈り物みたいに。それを受け取るなら空から消された陽かもね、それこそ全く危なげに、だってそんな事なら空が破れて仕舞いそうで。それとも空を破りたくての獣の色の輝きかな、って、その裏へ回り込んで下から覗き込むように水がこっそり噴き上がるけれど巧く覗けないなら砕け散る水飛沫は、獣の色を映して空色を混ぜて輝ける限り輝くようで。その空色のせいで、水飛沫の一つ一つはそれよりは砕け散らずに、その輝きの中に空いた小さな穴を映し。その穴と穴が互いを目に違いないって映し合えば、その数

知れない目の向く先は一つしか無い。そうに違いない、それとも違うのか、どっちも有りそうなら先ずは一つしか無い先を向くと丸い穴が違う向きに開き、幾つも開いてそうなら先一つしか開いてない、一つしか開いてない穴なんて穴じゃ無い、だって一つじゃ穴を穴とも分からない、互いを確かめ合って穴と分かるんで、なら窪みでしかないんだろうけれど、目の向く先が幾つも有るなら、窪みはばらけて砕け、どれもそれぞれの目の向く先の穴なら穴とは言えて。そんな穴なら一つしか無い、その穴を幾つもの目が一つに覗くと、その覗く向きは真下で、その下の真ん中に丸い池がきっちり定められたかに落ちてないか。池は空から真下へ落とされて池に成るって知ってた？水が流れ落ちるんじゃなく池ごと一塊に山の中にぴたりと落ち、うっかり傾いて水を零しなんて少しもせずに。でも池の尖った底から水は滲み落ちて行くけどね、それで池の中のあちこちで水の流れが渦を拵えて、いや違う、の違うなんて幾ら違ったって知れた事で、だって水の流れの拵える渦なんて渦じゃないものね、渦に見せ掛けられさえせずに。ただ水の影が渦を巻いてるようなだけで、それに水色より水の色な嘘みたいな色色な色の筋が巻き付いて脹れ、でも色は次次に色色な失せ方で水に溶けるかで、その溶けた影が絡み合ってまた渦巻くようでもただ脹れて、影を斑に濃くして揺らし、その濃い極みは円い刃のように丸く反って流れ掛け、水を削ぐように水の影にぴたりと沿うか剥がれるか、　どっち付かずの隙間が覗

かれ、それで水の影が濃さを増せば影では居られず重さを帯び、その重さは直ぐに水に弾けて水の見えない奥へ染まり渡って、重さだけの奥行きを描き出そうとして描けず悶えた身を捩るかに、水色より水の色な円みへ逃げ込むらしいけれど、円みはそんなそれから逸れる為に円いかに、円みをまた円ませ。その円ませた円みには何だって見えようね、だって円ませた円みは何も逃さないから。なら水の奥なのに、その水の奥まで失せる儘に、って何が？知らない。ならその知らないが、色色な色を色と言う色を集めて潰して水には全く有り余る色を映して映して消し合って色は失せ、いや違、違わないのかも知れないけど、色は失せても何も失せたりしないなら、その色だけは失せたりせずに。その色だよ、見て知ってる筈さ、空の下のその輝きを平たく映す形に見直せば限り限りまで傾いた窪みで、それより傾けば水の影は少しも溜まらない、その微かに水を溜めるその窪みの薄っぺらな底に、水の影なら影が、骨の浮いた痩せた蛇の残した匂いに肖って、水に映る空色を踊らせてるね、空色って見知れる空ならその空の屍から漏れた濁って甘い汁みたいに。空に陽が巡らないこの空は空の屍だったとも言えそうか、さあそれを知ってるなら、窪みの薄っぺらな限り限りまで傾いた底に幾つかびっしりへばり付いてる小石に違いなく、だって小石は蛇の薄い骨みたいに透けて空色の輝きを取り込んでは、それをベタベタした空の屍の匂いのする濃い影にして、窪みから、さも眠そうにゆっくり零して

ようからね。いやそうと知れても、それが何をしてるかは少しも知れないなら、その匂いを何時も嗅げてる喜びが湧き上がるばかりで、なので窪みの傾きは限り限りで踏み止まってるんだろうよ、喜びの限り限りが窪みを震わせれば窪みも透けて行くよ、蛇の薄い骨なんかより、ずっと色色に。あぁその色色な色の色色な透け方ったら、そりゃ元が喜びだもの、またそこで震え合って震えと震えが水の影の逆様な姿を喜び勇んで捏ね回してそうで。って、水に映る空色が、それを見るなら、小さな泡みたいな煌めき、みたいなら、色も形も揺らめいてそれにそっくりでも、小さな泡みたいな煌めきとは違う、もっとずっと硬くて濁って濁りが固まって溶けて溶ける程にまた硬くて、円みをまた円ませて透けるにしても何の色も吸い取るなら暗いだけ暗い水に踊るのを已めない石の一粒みたいな。みたいなら、そっくり石の一粒なんだ、って、小さな泡みたいな煌めきがその一粒を包んで隠し、そうしたせいで、小さな泡みたいな煌めきは、その包んでで隠してる石の硬さに耐え切れなくて破れ掛けようか、そう擬えるとも見せ掛けて、小さなと逆様に、泡みたいなとも逆様に、煌めきとも逆様に、石の一粒に吸い取られて嬉しそうなら、その儘消えたそうに。でも吸い取られるも嬉しそうも逆様では、吸い取られも嬉しそうも無いかにあやふやに、逆様もあやふやに傾いて、小さな泡みたいな煌めきは、石の一粒みたいなと、みたいなを競う振りで、その二つの延びて縮んで離れて近付き合う煌めきと暗さの、

隙間に見えるだけの水より少しだけ粘っこい逆様の水底の、空の明るさからはきっと裏返ってよう影の揺れて斜めにばかり歪む中に、骨の浮いた痩せた蛇を忍び込ませてるようで、蛇が石の一粒みたいなへばかり頭をぶつけるようなら、小さな泡みたいな煌めきが、その色を移すように少しずつ蛇の身に映り、蛇はもう動きを鈍らせ石の一粒みたいなへは頭をぶつけるのも儘ならず震えるように眠そうで、ベタベタした空の屍の匂いのする濃い影に身を添わせたそうに石の何処か狭い下に滑り込んで蹲れたらと、やっと蜷局を巻き。そんな姿を自ら捏ね回して重い石を呼び込みたいんだろうけれど、見知れる空の屍の匂いのする濃い影と小さな泡みたいな煌めきが混ざり合っては、望まれる重い石の収まる辺りに居座り、それがその儘重い石の替わりに成りそうに動きを止めようとするのを、煌めきと暗さの隙間に見えるだけの水より少しだけ粘っこい逆様の水底の、空の明るさの届かなければ裏返るも返らないもない影の揺れて斜めにばかり歪む中に差し込む水に映る空色が、それをそんなの係わりないかに許さずに、混ざり合っていた空の屍の匂いのする濃い影と小さな泡みたいな煌めきを分かれさせ、石の一粒みたいなにすっかり水に映る空色が染みれば、そこから弾けて細かく数え切れず砕け散る小さな泡みたいな煌めきは、もう小さな泡みたいなでは居られず、煌めきはただ自らの煌めきを頼りに煌めくしかないなら煌めいただけ水の暗さより暗く奥まって暗みを増して煌めいて、更にその暗

さに押し込められて縮むばかりの煌めきはどれも、逆様の水底を、そのまた逆様にしたいかに逆様に向いて。いや、そんな煌めきを向けられる逆様の水底が何処に横たわろうか、って、石かの重さから解き放たれた蛇が巻いた蜷局を解く向きに身を、さも幾重かにの振りで円く延ばし、逆様の水底を向く煌めきを、煌めきの知らぬ間にも束ねたそうで。アハハ、ってその蛇の姿を笑うのは、逆様の水底に違いなさそうでも、蛇の片目が追えるその水底は、それへ向く煌めきでしかないにしても、向きはあっちへそっちへ向きっぱなしで、なら、その向きの数だけ逆様の水底が有る事になろうけれど、水底が水の何処からも向きを定めず湧き出すように、なんてならどうかな。って、すっかり水に映る空色の染みた石の一粒みたいなが、蛇に合わせて眠そうに震えてゆるゆると蛇の片目へ狙い澄ましたように円く落ちれば、蛇に目なんて無く、始めからそれは水底へ向く煌めきの一束で、尖る程に水底を見失ってようか。いや見失うのが煌めきの向きの数だけの逆様の水底なら、逆様じゃない水底が、その暗い程にくつきりと真っ直ぐ空の真下に横たわる姿が現れ、向けられた煌めきと異なる、空の色の重さに歪むだけ平たく整った煌めきを丸い形にしてるのなら。いやそんなの、アハハ、って、蛇の姿を笑うのと同じに、逆様の水底なら笑おうね。でも笑うその水底は独り、その一つしか無いなら、何に何が逆様かって。水底に逆様も逆様じゃ無いも有るもんか、笑うならそれを笑おうよって勢いで、石の

一粒みたいなに染みる水に映る空色が、石の一粒みたいなから自らを弾けさせたか、でも却って水に映る空色は水に溶けて空色を空より水に近いだけ澄んだ泥の色のように暗く濁らせ、その笑い損ないだけが、笑い損なって水を震わせ、そんな震えの塊が、その眠そうな姿に抗おうとでも上を向くなら、それを下から見上げるのが、もう笑わないのか独り一つの水底に違いない、って、水底がそんな自らを見付けるようなら、なんてどうかな。の、どうかなさえ怪しくに水底の底は抜け、なら抜けた底の底も抜け続けようね、でも水はそんなでしかない底なんて知らぬげにビクともしなくて、水をそこに凝っと動かさないのは、その水を動かして来て、まだ微かでも生生しく水の中に遍く響く水の音の、どれ程に深い水の重みさえ跳ね返す、石の粒をその隙間隙間を何処までも細かな同じ石粒でびっしり埋め込んだかに震えて已まない姿で。あぁその水の音の底だけが水底を知ってよう、って、水の音の底の笑い損ないの独り一つの水の震えが、煌めいただけ水の暗さより暗い煌めきを纏って身を水の暗さから斜めにでも背ければ、その知れてる確かな水底を空まで巻き込んで逆様にして。って、何を逆様にしたかって？の逆様なんて逆様にしか尋ねようもないなら、逆様は逆様に尋ね、何を尋ねるも逆様だけは尋ねようもなさそうで、なさそうなだけならきっと尋ねてようけれど、逆様から逆様へきっと酷く傾いてて、の逆様が何かって？その尋ねようなら逆様じゃなさそうで、なさそうなら何も尋ねてな

いのかな、とだけは尋ねられそうなら、その尋ねられたのは逆様とも逆様じゃ無いとも逆様で逆様で無くに、やっぱり酷く傾いて、そんな逃れられない傾きなんだよな、だって微かにだけ水を溜めてなくちゃいけない窪みの薄っぺらな底は、必ず見てるんだ、かって、何を？に答えようと出来るのは、水の音の底の笑い損ないの独り一つの水の震えで、それは、その水の音の底だけが水底を知ってるからで。なので、見られてるのは、空まで巻き込む確かな水底に違いないって答えを、水の音の底の笑い損ないの独り一つの水の震えが受け取り、そのの独り一つの水の震えに、色は失せても何も失せないその色だけは失せない色が、空の下と水の上を見尽くしたいかの目のような色を表し、その色が空を映す水の円い拡がりを拡がれば、その拡がりの他には何も知れなくなってようかな。でもそれって、その拡がりが、空の下と水の上を見尽くした目だからに違いなく。いや、目に違いなく見えるなら、そんなの目である筈も無かろう、って、目に違いなく見られた目じゃないそれが、目のような色を自らに探して見付かるのは、空の色でも水の色でも無いなら、何の色も無くしてだけ窪みな窪みで、なんてそれを見付けた事にでもするしかなくに、それから目を切れば、目は、切ったそっちへ。そっちへ何？そっちへなんて行かないよな、って、独り一つの水の震えが、空を映す水の円い拡がりを拡がる先は、失せて失せない色ばかり、な徴を見付けたいばかりにその見付け損なう自らの姿を笑い損なう

しかないのは、水の音の底が知られてるからで。見付けたぞ、見付けてた筈なのに見付け直されて知られてた水の音の底を。って、水の音の底自らが、いや違、違わないかも知れないけれど、だって水の音の底は水の音の底を知れないから、が確かなら、知られてたが知られてた自らを見付けたんだね、その違いないに限って違いなくに。なので、見付けたぞ、なのさ、って、それそらそれを水の音の底も確かに知れて、確かに知れれば知れたのも忘れ、なのな忘れるつて知れた儘って事だけど、それって、忘れては知れ直されての已められないからかな、なんて水には透けない透けた声を、水の音の底は自らの声と聞きたいのか聞き損なったのか、ならきっと知らずにもすっかり聞いて仕舞ってるに違いなくに、そんな声なら自らの声にしても知りようもない声で、その知りようもないをその声から吐き出したくてその声から出て来るしかない声は、何も吐き出せずに重なり重なり、重なり過ぎるなんて無くに重なれば、きっとその重なりの声声声の重なる姿をその声が言い表してそうで、いや違う、だって水に透けない声なら重なるなんて言い直しの繰り返しだからね、で却ってその逆様に益益それだけは言い表せないのが暴かれるかにその声声の姿をその声の届かないその声の直ぐ裏側の姿に変えそうなら、吐き出したいものは吐き出せたんじゃないか、知りようもなく。って、自らの声を水の音の底は微かにでも聞いたかどうか。そう尋ねられる独り一つの水の震えなら、水の音の底を突き

抜けてよう。それとも突き抜けられるならそんなの水の音の底な筈無くて、なら水の音の底は、独り一つの水の震えの届かない遥か遠くとも見渡そうか、それとも同じ届かないにしても水の音の裏側を、とか。と、独り一つの水の震えは、水の音の底と水の音の裏側を貫く自らの姿に誘（いざな）われるかに、空を映す水の円い拡がりを拡がる先の失せて失せない色ばかりに染まりに行く、いや違う、その失せて失せない色が水の震えに染まりに来てて、その色が失せて失せないのは他の色の混じらない水色だったからって自らを晒しては他の色と幾らでも混ざり合い、水の色だけを透かして映す色の微かな傾きを煌めかせては空を映す水の円い拡がりに流し込み。ならその傾きの煌めきは、どう見ても水の色だけを映してようね。って、水に透ける声が、その声自らへ語り掛けるようなら、それは、空を映すように、空を映す水の円い拡がりの上を拡がり、空の下の水の上に独り一つで、独り一つの水の震えと一つと一つとに、一つと一つとなんて向き合える筈無しに向き合おうか。そうさ、そんな声が聞こえたなら必ず何時か聞いた声に違いなく、見知れる空なら力尽くで破ろう、見知れぬとも知れない水なら力も入れずに裂こう、でも空も水も何も変わらず凝っとその声を見詰めるように耳を澄ますようなら、空にも水にも、その声は届かないか、それとも届き過ぎて、破れる空も破られず、裂ける水も裂かれないか。それとも疾っくに、この空は破れた果ての空かも知れず、この水は裂けた果て

の水かも知れず、初めからそんな空と水を始めからの空と水としか知れないのかも知れずに、そうに違いないと思いたくてならないのは、その破れ目と裂け目に捩れて開いた境目が、空を映す、いやその開いた境目だけをたっぷり映す水の円い拡がりを、空より輝く獣の色が取り囲み、水に底が有ると水の上が言うなら水の底を、お喋りな草木に隠れるように黙り込んで、水の円い拡がりを一呑みに呑み込みたそうに覗き込んでそうで。その獣の色の、色は失せた色を刺し貫いて色な傾きったら。空より輝くせいで傾く儘に、その傾きようなんて色の濃さに溶かし、却ってその獣の色に映り込んで来る空の色を傾かせてるなら水の円い拡がりを取り囲んでの傾きって何？なんて何が何に尋ねられるのか、なら、その何がも何にもその何？の傾きを傾かせる傾きで、その傾きが、空より輝く獣の色から水の円い拡がりの真ん中へ向け、空の破れ目と水の裂け目に捩れて開いた境目の狭い奥行きの重なり合いの色合いの重なりの、獣の色より輝く失せても何も失せない色の自らの奥行きを蛇が身を拗らせ肉を盛り上げてそれでも身が抱えて仕舞う泥水臭い闇の隙間を脅すかに埋めて已まずに、それでも失せない奥行きを奥へ奥へと見せ掛けて手前へ食み出させずには置かない独り一つの色に、燃やされたか棄てられたかの森の更にその色に削られた痕からの、涎の匂いを延ばし延ばしに粘粘した涎を捏ねるように重ねて自ら起こって曲がりも傾きもしない風の向きに沿って、上滑りしそうにも酷く重く圧し出

されるなら、水の円い拡がりに真ん中なんて定められる筈はなく、って事は、拡がりも拡がりと見定められそうになく、ただ水の円いが、円みを痩せさせて水をその自らの重みで更に円ませ、その水と円いとを互いに探し合うようにして却って近寄り過ぎて探せも出来ず近寄り過ぎから身を躱そうと捩れも出来ず、圧し入って来た傾きを、必ず何時か聞いた声の声なんて空っぽと直ぐに分かるその響きの、森の痕を後ろに控えて脹れるだけの形の僅かに先の二つに分かれてその二つが濡れ始めた分かれ目の互いの裏へ回り込もうとする脹らみの先と見て取れば、そんな先なんて疾っくに空の破れ目と水の裂け目の境目から食み出す一つの色に食み出し返すように埋もれてて、いや違、違わないのかも知れないけど、埋もれるだけ、その脹れるだけの形の脹れが脹れながらに消えながらに境目の独り一つの色を、ほら、独りでも一つでも無くさせて。な訳ないよ、って、独りでも一つでも無い色が、独り一つの色を、独りでも一つでも無い色の奥行きを一つ一つ水の震えのように撫で、さも形を明らかにして行けば、その現れて来るさも形はどれも独り一つの色だけを隠し含んでるようで溢れ出る丸みを潰し潰しするかの動きを塗り重ねるような姿で。その塗り重ねるのも、塗り重ね過ぎと塗り足らなさが斑になって波打ちながら窪む窪みが並んでるようで、でもそんなの、風の向きが許さないよね、風は来ないけど、その向きだけは何処までも来るんだ、だって、水の円いに真ん中も拡がりも無さそうじゃ

ね。でもそれで見付かったのかな、水の円いに真ん中も拡がりも。そうして見付かり直されれば、水なんて嘘さ、って水の声かにその嘘を水にも呑み込めよう、真ん中の有る円い拡がりは水を弾いて真ん中を無くし、真ん中が無いのも無くなれば、その無いの無いがそれなりに水に違いなくに水は戻って、って何処に？風は来ないけど、延ばし延ばしに粘粘した涎を捏ねるような匂いは風の向きから噴き出しそうで、その匂いの膨らみの窪んだ影が硬く固まれば、その匂いの膨らみの一つに窮まりそうな裏へ回り込むようで、回り込むようなら回り込めてならいんだ、って影自らがそう決め込みたいけど、それを許さないなら、それが新しい水とは違って水で。その水は、水とは違わなければ水で居られないへと風が風を呼べば風の来ない代わりに、その匂いは、風なんて嘘に違いなくに音でも立てそうに粘粘して延ばし延ばしに捏ねられて涎に違いなくに、水で。あぁその、水で、だよ、遣り切れなくに円いのは。水でにで円いなら、水の円いなんて要らないものね、って水の円いが自らそれを分かって疾っくに硬く裏まで丸めて固まって、いや違う、硬く、な、な程に固まるかに水より溶けて拡がって、裏など知らず。で、その拡がりばかりは再び拡がり直すなんて事は無かろうね、って事は、森の痕さえ覆おうか、いやそれで却って森の痕だけは覆えないのが暴かれ、いや、そんなで何が暴かれるかって、それで、その何も無い何がに甦る水の円い拡がりが空だけはそれを犯せるかに静まるのを、

水でにで円いが聞き取れば、水でにで円いを、歙てられた耳の形と見て取るしかなかろうか、そこへ突き刺さるしかない必ず何時か聞いた声は贋物に違いなく。の、必ずが贋か何時かが贋か聞いたが贋か声が贋か、なんて謎でも無いのを謎に仕立てるのが贋か、の贋が贋なんだろうね、贋で無くたって少しも構わなくに。の、構わなくにが、水でにで円いの端を食い破ったかな、その裂け目から内へ入り込めば、その贋の姿を、幾ら痩せても骨なんて浮かない色の無い蛇の姿にして、いや違う、色の無い蛇の姿なら色の無い蛇の姿なんて無く、幾ら痩せても骨なんて浮かないだけが、水でにで円いの中を見る見る殖えて、そればかりに成って。の、それって、それだけはそれって何？って尋ねられないそれに違いなくに、それと違いそうに痩せる程に丸丸と円い姿を、丸と丸に並べ。いや並べるとは違うよね、きっと。でも丸と丸は良かったね、痩せる程に円い姿を二つ、互いを斜めに傾かせてすっかり翳ませ、翳む程に二つは二つだけで円く、その円いのって絶えず円いとは違って円く、その姿は何も変わらずに。あぁその円いの円さの二つ切りの裂け目の何て真っ直ぐなんだ、耳を二つ並べたにそっくりに。必ず何時か聞いた声でさえ、謎でしかなくに贋ではなくに聞こえてよう。聞こえてないならその聞こえたのを聞こえてないだけで、なので必ず何時か聞いたって聞こえるしかなくに、って、何も聞こえてないって聞こえて、なので聞こえるんだ、耳を二つ並べたにそっくりに真っ直ぐに、二

つ切りの円いの円さの裂け目に。その聞こえる裂け目の丸と丸を並べたなんてきっと嘘な円さを必ず何時か聞いたに違いない、って声って、絶えず声とは違って声で、その声だけは聞こえずに、なのでそれだけが声で、なのでそれだけが円いとは違って円くて、何も変わらずい、それだけはそれって何？って尋ねられないそれで。アハハ、って笑うならにそのそれが笑うんだろうかね、だってそんなそれなんてそれじゃなく。そんなの、色の無い蛇の姿なら色の無い蛇の姿なんて無いにだって、水を円く切るより直ぐに分かるよ。で遅れて円く切られた水は、その上に、痩せる程に円い姿を二つ、傾きも翳みもさせずに乗せて、だって、色の無い蛇の姿なら色の無い蛇の姿なんて無いが、その影に成って水の下に張り付いて、有りもしないって疾っくに知れてる水底へ向かって延びて行くものね。絶えず、色の無い蛇の姿なんて無いと違って、その姿は円の姿の変わり続けてだけ何も変わらずに。で、先を行ってた筈の二つ切りの円いの円さの裂け目は、その色の無い蛇の姿なんて無いと違う色の無い蛇の姿なら色の無い蛇の姿なんて無いの影に遅れ、何も変わらずに変わり続けるしかなくなるようなら、二つの内の一つは、そうでしかなくでもなくに円いの円さの二つ切りを裂き、それは裂け目を開くか、それとも円いの円さの裂け目を閉じるか、そこでまたそんな二つ切りを切り開いて仕舞うなら、色の無い蛇の姿なら色の無い蛇の姿なんて無いの影は遥か先へ遠ざかるようで、でも置き去りにさ

れた筈かその切り開かれの裏へと水垢のこびり付くみたいに冷たく回り込んでそうで、回り込んでそうなら回り込んでなく、いや違、違わないのかも知れないの何が知れないかへと先回りしてそうで、先回りしてそうならしてそうよりもっと先に先回りしてて、って、何が？遠ざかるも裏へ回り込むも、ここは水の中とは違うんじゃないか、なら、抑も影が影とは違うんで。いや、と影と違う影が、水の中と違ったって水の外じゃないのは確かで、だって水の外なんて無いからね何の違いに違いの外なんて無いと同じに、なんて言う声を聞きたいのって水しか無いものね、それだけの水さ、って見切って仕舞えば、自らの内を向き続けてだけ内だけは向けないかに円いの円さの裂け目は閉じに閉じられ、綴じ目から内向きの、でもその先を見れば果ても無さそうなら外向きに切り開けに切り開かれ、水の中と違う水の外じゃないが、その裂け続けて何も変わらない裂け目の奥に覗いているのを、その色は失せて輝くだけの色という色のどの色でも無さの仄かに見え隠れするのに惹かれて覗き見ようとし続けるしか無く、何も変わらずにだけは居ようと。でも何を覗き見られるだろう、なんて思うしかないなら、裂け目の奥に覗く筈の水の中と違う水の外じゃないなんて影と違う影の違いが頽（くずお）れでもするか疾っくに見失われ、って振り返ったのか振り戻ったのか返りも戻れも出来ず振っただけか、そのそっちに覗けそうな裂け目は、失せた色より輝いて色という色が犇めいてそうな裏返され

た裂け目の綴じ目を裂いた裂け目に違いなく、て事は、そこに覗くのは裂け目の奥じゃなく外なのでは。いやそんな裂け目なら裂け目が嘘。なんて口を滑らせて仕舞う嘘って何？嘘なら、水だよね、でも、水の中と違う水の外じゃない。が、振り返ったか振り戻ったかでもなさそうに振っただけかに引き裂かれそうに引き裂かれずにその身振りを捩らせれば、水の中と違う水の外じゃないは、自らは捩れて裂け、そこに、色の無い蛇の姿なら色の無い蛇の姿なんて無い姿を脱ぎ捨てて色の有るも無いも知らない蛇の姿を呼び込みたそうで呼び込めなくて、ならもうそこはそんな蛇の姿で埋まってそうで。どっちが奥か外か、どっちへもか、裂け目から溢れ出す粘粘した水そっくりに。それとも水が、色の有るも無いも知らない蛇の姿にそっくりとか。と、ここで「どっちも違うよ。」って、水の中と違う水の外じゃないなら、言わなくちゃいけないんじゃないのかな。いや何で黙（だんま）りを決め込んでるかなら知れに知れてるよ、なので何を言うも黙りにそっくりで。「どっちも違おうと何の違いに違いの何も無くに、どっちが奥か外か。そんなそれが、何にそっくりも無くに、そんな蛇の姿で。なのでその姿は、蛇の姿とはまるでそっくりじゃないに決まってる。に決まってろ、って声だけは聞き取れる姿で蛇で。なら、水の中と違う水の外じゃないの裂け目に埋まるも溢れるも無くに、な姿な蛇で。と、それが、自らの蛇を、姿な、な姿とは変わり続けて蛇で。いや違う、違いに違いなんて無くに、

が違って、変わり続けながら何も変わらずに、蛇でも無くに。蛇でも無くに？な筈無いさ、な姿だけは変えたくても変えられず、かとも。その姿の内へ水を呼び込もうにも、失われた粘粘の取り返しの付かなさへ身は足掻き込むだけで。見付けたぞ身を、の身は、呼び込みたい水より先に溶けてたに違いなくに、どっちが奥か外かの有りもしなさそうな縁にでもこびり付く、池の色を含んで澄ませたかに透けて艶やかに池とも水とも違う自らの色を穢れなく纏めて閉ざしてる水垢の煌めきかに、刮げ落とされたくて身を捩る、その身が蛇の脱ぎ捨てたクルクル回って楽しげな皮かとも、ウズウズと、の疼きでしかなくに見付けられた儘に見失われてないか。の答えなんて要らないなら身も要らないの要らない身なら要るって、何に？ほら見付けたぞ、そんな何になんて見付けられない、って。で、身に戻るけれどそんな身は通り過ぎられるしかなくに透けてそうで、そんな透けてそうで透けてなくてに通り過ぎられての身ならく穴でも開けられてようか、な穴でだけは無くに。ふん、穴でだけは無くに、なんて、決まってろなんて声も要らずに始めから決まってるよ、だって身は何処も閉じてなくて開けられるなんて無いからね。なので、疼きでしかなくに見付けられた儘に見失われてる、に戻るに決まってて、戻るに決まってれば戻れる筈は無く、に戻るそこなら、蛇でも無くに、な水の中と違う水の外じゃないで。そんなそこをそんなそこはそこにどうしようかって捩れて、いや違う、疼きでしかなく

にから違ってて違う、捩れも疼きもしないなんて始めから決まってるも要らずに蛇でも無くに、なのでそんな水の中と違う水の外じゃない、なんだけど、それって丸い骨を自らと見透かそうと縮んでも見えようか、のっぺりと拡がれば拡がりは窪みで、なら窪みの底には、水の中と違う水の外じゃないを裏返した、溶けて水より透けて骨の丸い色の、その丸さが、水の中と違う水の外じゃないへと傾いて凭り掛かり、水の中と違う水の外じゃないの円さを見付けてそれを撫で摩るなら、骨の色の丸さの骨か色か丸かは互いにその問いの贋なのに留まりたいかに溶けようと溶け損なえば、それらは丸ごと窪みの底の骨か色か丸さで、のっぺり拡がる。それも贋だって知ってようなら、その知ってようは贋の中へ潜り込んで鎌首を擡げよう蛇でしか無くに、な蛇でも無くにな蛇でも有るで、そのそれがそれをいや違う、って声を上げるなら、真上は見るからに贋にの果て知れないなら、贋じゃない池の水面にさも果て知れなく閉ざされ、そのさも果て知れなさに撃たれて幾ら見るからに贋で一呑みに出来そうでさえ果て知れなさを見失って落ちるなら鳥とか。いや、その鳥の、空の下の水の上と違うその外じゃないの何処を探しても居ない、その失せた鳥の姿を嘲笑う蛇でも無くにな蛇でも有るの、丸い小さな骨でしかない目に映る色とか。あぁ色は常に真下へ落ちるんだ、色だけがそう出来るかに、なので、その色は鳥としか、って声を上げようなら、忽ち声は、水の中と違う水の外じゃないの円さへ裏返

って逸れて消えようか。その消えようが色の鳥なんだよ嘘みたいなら嘘なんだけど、とか、そんな声は必ず聞こえて、それは、ここで聞いたに決まってようね、そうに決まってろって喧しくに黙りと。その黙りを呑むように呑まれるようにうに蛇でも無くにな蛇でも有るが、自らが黙りなんだって声を食い破って姿を見せての姿は裏返ってるって何が？なら、呑むように呑まれるように、に決まってる、円みさえ要らないかの。なら、円みだけは要らない筈は無いって分かる拡がりが、のっぺり拡がろうかと映ろうか、蛇でも無くにな蛇でも有るの丸い小さな骨を無くして虚ろを艶やかに裏返した目には。虚ろの裏返しなら、空の屍とも生身とも、な匂いをプンプンさせた鳥の姿で満ちてよう、どれも虚ろへ溶けて影しか無い、なので裏返えられたんだぞって誇らかに。も疾っくに決まってるのは、その呑むように呑まれるように、で、それをそう決めたのって円みの他に無いって円みが決め直せば決め損なうしか無くに、そう決められてたでしか無くに、呑むように呑まれるように、は、自らを自らを呑むように呑まれるように、鳥の何が鳥なのかを、その何がかごと見失いたくて、その鳥の姿と違う鳥の姿じゃない、へ消えようか。でも消えようかじゃ消えられない、って声は、その自らを消したい声で、あぁそんな声なんて、のっぺり過ぎて拡がり過ぎ、その過ぎてが過ぎて丸っきり丸裸の声でしかない。それでもその声を食い破るんだ、って、それをそう決めたのも円みの他に無いって声が来なく

ちゃいけないようだけど来るの？来るの？って声ばかりなら声なんて始めから頽れて、水の中と違う水の外じゃないに閉ざされてたとか。いや、だったらそれが何？何も無いに決まってるさなんて声さえ要らなくて、その声の要らならいなら何の声も要らなくて、その始めからかも要らなくて。」なら、要らなくても要らなくて、なら、何もかも要るに要るって言いたいのかな。「要るに要るなら蛇に違いない、円くに。要るでないなら間違いに。」あぁその円くにな蛇が欲しかったんだね、鳥の何が鳥なのかごと、要るなら要らないって振り捨てて。振り捨てたなら必ずそれを呑み込もうと、その為の捩れて疼いて疼き已んで円くに、で。なら疾っくに呑み込んでよう、いや呑み込んでようもいまいも呑み込もうとしてるなら呑み込んでて、もう何を呑み込むも無くに、蛇で。って、さて言えるのかな蛇でも無くに、って言いたいな、って、それ自らが声にするなら声でも無くに、の、声でも無くになんて、丸っきり丸裸の声よりもっと丸裸で、だって声でも無くになら声も纏えず、蛇なら何より先にその丸裸の暈けた柔らかさにでも取り憑かれて呑み込みたかろうけれど、その声でも無くに、は、もう蛇なんか敵いっこなく酷く脹れてて、いや違、違わないのかも知れないけど、脹れる酷さって、酷く小さくて狭過ぎて、そこへ入り込みようもない蛇の身は逸れて潰れ掛けようか、必ず円くに。なら蛇の身こそ丸裸、って、声でも無くに、に噬われてないか、が、必ず円くにを歪に僅かに傾かせよ

うか、って蛇は狼狽えても、その狼狽え方こそ狼狽えようもなく酷く狭過ぎるな、なんて身を振り返ろうなら蛇の身は、水の中と違う水の外じゃないの円さへと、遠い仄かな闇にでも懐かしげに溶かされたかな。なら蛇は、自らの円くに、と、水の中と違う水の外じゃないの円さとに架け渡された、ぇっと何かな、兎も角そんなそれで、そんなそれはそれでも蛇かって声は、その声自らが圧し殺すなら、序でに声でも無くに、も殺されて、ならそんなそれは声殺しのそれかななんて声も殺されて、それで。それでも蛇か、だけが、蛇で。なら蛇なんて要らない、って、自らの円くに、と、水の中と違う水の外じゃないの円さとが、どっちがどうにも必ず要らないんだけど、って互いの距たりを壊さないようにはしながら切り結んでそうで、いや違、違っても違わなくても構わないんだけど、円くにと円さが切り結べる筈ないよ、とも見えるなら、円くにも円さも、円くでだけは無く。だって、円くにとも円さとも、ただそれのそうと見えて仕舞ってはね。あぁ見えちゃいけなかったんだって悔やむべきかなんて要らないなら、円くでだけは無くが、その必ず見出す円くにも円さとも似た円くに円いそんなそれを見ようとするしかなく。の、ようとするしかなくはようとするしかなくで構わないけど、今更ながらにも、見る、って、さて何処から紛れ込んだのかな、なんてうっかりとも必ずかに振り返るしかないなら振り返っちゃいけなくて悔やむしかないなら悔やむなんて知らなくに振り返ってもなく

に、その何処からの何処を見るに見て見極め、見るなんて何処からも紛れ込まないなら無いって知れたか知れないか知れないを知れたなら何処を何処とも知れずに見て、いや違う、の、その違うが円くに。でもそんなそれの円くに、なんて、あぁ何が円いもんか、が欲しかったのかな。だって、何が円いもんか、なんて、声でも見るでも有り得よう筈は無く、その筈は無くは、水の中と違う水の外じゃないとの距たりを壊され、筈は無くも無くに、何が円いもんかに、円くに独り。ない独りなら、これもまた必ずに水の中と違う水の外じゃないとの距たりを壊されてて毀れて。その毀れた独りの円くにの、その何て毀れても独りでも無さったら、円くにさえ要らないに違いない。「で、円くに独りって事？要らないこそ要らなくに。」なんて、声でだけはない。「なんて、言っちゃいけなかったんだろうな。」なんて、言えてない、言えよう筈も無い。「言えてる、言えてる、」アハハ、そんなの何を繰り返すでさえ無いって、その、さえ無い、だけを晒してて。いや違う、晒されてないものなんて始めから無くて、に、晒し晒される、だけが無くに、虚ろを艶やかに裏返し。の、裏返しは返し返され裏も無さげに、なので、晒し晒されるも無くに。あぁその、円くに、って、声で言えないなら何？見付けたぞ、も声で言えてない内なんだけれど、その円くに、を。の、円くに、は、なので、毀れても独りでも無さに独り、その独りは毀されず。その独りだけが毀され続けて変わらずに、そのどっちが裏か外か外

にも裏とか、円くに、は、変わり続けて毀れずに。って、見るだけは見てよう
か、見るなんて無い、とは見えずにだけで、も見えずに。そんな円くになら酷
く尖ってもなくちゃいけない、って、そんなそれが必ずそんな円くにを自ら毀
そうとするしかないなら毀れるしかなしに毀れてよう、って、何が？尖ってな
くちゃいけない円くに、は、少しも毀れてなくて、なので、毀れるしかなしに
毀れてるそれを、また自ら毀そうとするしかなく、なので、酷く尖ってもなく
ちゃいけなくて。の、尖るのなんて幾ら立て続けに尖り続けようと疾っくに円
くに薙ぎ倒されたかとも、尖ると違う尖るの外じゃないへと円くにへ沿って円
くに順って水の動いて止まれば水でなくなるみたいに並び、でもそんなのって、
尖ってなくちゃいけないよりもっと酷く勢いだけでも円くにの外へでも尖り続
けるしかない、そんなそれなんだって、円くにを責め苛んでて、なので、円く
に、は、変わらず円くに、を、貫くしか無さそうで。しか無さそうなら貫けて
なくて、そうしててやっと、円くに、で。なら…、いや違う、なら、なんて無
いよ。その、ならを無くすのって、でも、円くに、を責め苛むそれとは違って
ようか。って、何を違えてるかって？あぁ、その違えようの、円くにと違う円
くにの外じゃない、の、何て円くに、ったら。だって、それこそ尖りに尖って
責め苛み返してよう。何が何を責め苛むなんて何処にも無くし、なので、責め
苛み返すのだけが責め苛み返され。そんなで、円くに、で。そんなそれの独り

でも無さに独りなら、その責め苛み返し返されるせいで、独りでも独りで無さでも無くなるしかなく、円くにを円くにへ消そうと消し続けて消し已まずに少しも消せずに、なんて、必ずそうでしかなく、そうでしかないと分かってたかに。分かってたかに、って、分かってたのかなかったのか、そのどっちでも無さだけが頼みみたいに。頼みみたいじゃ頼れないとも分かるしかなくに。尤も独りでも独りでも無さでも無くなるに、何の分かるも頼みも要らないけどね、って、円くにを円くにが、黙りを決め込んでたって、そうでしかなかろうか、って何に？見付け、いやこんなの見付けたぞ何もなしに、独りでも独りでも無さでも無くなるに、何に、なんて無く、いや違う、その無くなんて無くて、なので、そんなそれで。って、そんなそれがそんなそれかを確かめようとしてでしかそんなそれをそんなそれと見ようと出来ずに、円くにを円くにへ沿って、そんなそれのそんなそれの姿でも追いたくても、何の円くににも沿えずに、円くにと違う円くにの外じゃないの何て円くにへ傾きたかろうけれど、それにはきっと、円くにを円くにの円くにを、先ずどうにかしないでは始まらないって。の、何を始めたいの？なんて尋ねるも尋ねないも尋ねようもない、いや違う、も何も、何を始めたいの？って、何も尋ねてなくて、その何も尋ねてない、のだけは確かそうかな。いや違う。何も確かそうでも無く何も尋ねて無くて、いや違う、その無くなんて無くて、なので、そんなそれで。って、そんなそれは

そんなそれのそれを確かめようも無く、が無いなら、もう確かめたに違いなく、その違いなくって、円くにを円くにの円くにを図らずも、どうにかしたって事かな、なんて要らなくて、で、そんなそれで、か、そんなそれでと違うそんなそれの外じゃない、で。そのどっちか、も、必ず要らずに。その必ず要らない、そのどっちかが、あぁ何かが欲しいよ、って、そんな欲しがる何かが要るか要らないか、そのどっちかも要らずに欲しいのは、きっと、どうにかされた円くにを円くにの円くにへ向かう、きっとまた円くにしか無さそうなら、そっちには無く、その無くなんて無くて、なので、円くに、は、円くにを円くにの円くに、で、って、いや違う、に決まってそうだけど何が違うのかな。見付けたぞ、何が違うのかなを、いや違う、見付け損なったんだ、きっと取り返しようもなく。見付けたぞ、何が違うのかな、は、見付け損なうしかなく、なので、その見えてたかも知れない、その見え方を失ったのを。でも、その失われた何が違うのかな、は、必ず失われるに決まってたに違いなく、だってそれで初めて、円くに、は、円くにを円くにの円くに、の、円くにならずに、もう円くにでも無さそうで、に。それって、円くにと何が違うのかな、は失われる儘に。あぁそんなそのそれが欲しかったんだ、要るか要らないかも要らずに。いや違う、ここは必ず、いや違う、でなくちゃ、要るか要らないかも要る事になって仕舞うからね。で、何が違うんだっけ、が先ず要らないなら、円くに、は、円くにの儘、

円くにと違う円くにの外じゃないの何て円くに、へ傾けようか、円くにを失う
円くにを自らずっと欲しかったみたいに。その傾かれた円くにと違う円くにの
外じゃないの何て円くに、の、何て、必ず失われる円くに、ったら、その失わ
れるなんて必ず無く、その無くなんて無く、でも無くて。の、もう何の無くて
も要らないよ、って、必ず失われる円くに、は、黙りを決め込むかに、必ず失
われる円くにな儘、失われずに。でも決め込むかにだけでは決め込めなくて、
却って黙りが擦り切れるみたいに失われれば、失われるも失われないも円くに、
は、何の必ずも失って、その失うも失ったよね、って、そんな円くに、を欲し
かったとしたら、何が？それが、そんな円くに、じゃ無かったら、って、それ
で、毀されたから毀されなかったかしかない、円くにの外かも知れない、一つの
外かも知れない、独りの、変わり続けるしかなく独りへしか変われない、独りと
か。「アハハ、それはそうだね、だって始めに失われたのが独りだもの、どん
な独りだろうと、つまり、独りだらけで独りなんて有り得ず。なんて言っちゃ
いけなかったんで言っちゃうよね、なので言っても何にもならなくて。あぁそ
の言っても何にもならなくての、何て、円くにな独りな蛇の姿、直ぐにその姿
から自ら身を躱し、その姿を姿なら必ず予め失われてるよって確かめる為かに
失って楽しげな。それとも、予め失われて失われようのない、巫山戯てるに
も違いなく。どっちも違おうと何の違いに違いの何も無くに、どっちがどっち

の外じゃないのかは必ず知れてて、どっちもどっちの外な。あぁその必ず知れてるの、何て、予め失われてる楽しげに違いない姿、直ぐにその姿から自ら身を躱し、自ら自らを失って楽しげな。いや違、違わないもかも知れないけど、その楽しげなは、やっぱり楽しげなとは違って、ならきっと、楽しげの外で、って、円くにな独りな蛇の姿なら、そう言うのか言える筈ないさ、だって決まってるからね、って何が？それだけは必ずは知れてないかも、必ずかに巫山戯て、その何が？を揺らし揺らし、変わり続けるしかなく、その変わり続けるしかなくへしか変われない、独りの外なら独りの外の。でも独りの外なんて、その何が？で揺れに揺れて揺れてるだけの、独りでもその外でも無いなら、変わり続けるしかなくへしか変われないも怪しいもんで、って、円くにな独りな蛇の姿は、身を躱せも出来ず、つまり失せるしかなくに失せて再び戻らずに。でも、どうにも戻らないのは、独りな、だけで、円くになと蛇は、姿は失せた切りに、必ず離れ離れにそれぞれ巫山戯に巫山戯続け続けるしかなくに、静かに満ちるなら嘘でも水を、こっそり探す振りを匂わせ、その二つの匂いに挟まれて水の嘘が裂かれようなら、その嘘は匂いにすっかり侵され、水とは違う、何の裂け目に似てもない裂け目を隠し、その隠される儘では二つの匂いも絶えようと、円くになと蛇は、円くになの空色と蛇の水色の目と目を見交わし疾っくに潰し合って暗いかに、また図らずも互いの痕に沿うように、（二〇二一年三

月十五日）

（を知れたならもう…）

　を知れたならもう知れなくて、とは知れて。の、とは知れて、って、何も知れなくなってるのを知れてるだけで、知れるのって何かを知らないのを知れてる事にしてるって知ってるだけなんだけどな。もう、を知れたならの何を知れてもないのに、そんなそれを、知れて、だなんてまた嘯くのをあやふやに訳有りげにでも隠すかして、うっかりと、とか。ま、そのうっかりと、が、あやふやにさもうっかりなうっかりの振りだったにしても、を知れたなら、って、を知れたのかな。もう知れないなら、を知れたとも知れないとも知れなさそうで、知れなさそうなら知れてても知れなさそうを知れてるだけで、それを、を知れたならとか何とか知ったか振りするしかなく、そうは知ってての、その、を知れたなら、なのかも知れないけれどそうでないのかも知れなさそうで、なだけは確かだよな。とは知れるしかなくて、も、知れてるにしてる知ったか振りだろうけれど。いや、知ったか振りなんて知れた事で、それはそうと、を知れた

なら、を、その何を知れなくても、その知れたって知れるの知れるが何かは、知りたいもんだな。とは、これぞとばかりに知れるなら、知りたいもんだな、だけは、その儘にならそれはそう知れてるんだろうけれど、でも、知りたいもんだな、だけ知ってても、その儘じゃ知れた事で。で、知れるも知れないも、どっちもどっちでしかないさ、って、そこで、その先はもう何も無いみたいに止まって仕舞うよね、あやふやさを消せたのならだけどね、で、消せたのかな。知らない。で、その何が仕舞われたかは、知れようと知れまいと通り過ぎられるだけみたいに。で、にしろ、その、止まる、って、そう言えるならその知れてるようなのは、知ったか振りじゃ済まないよ。止まる儘でも無い限りは。でも、止まる儘でだけは居られないんだ、何故かは知れない儘に。とは知れるにしても、そんなの知ったところで、止まる、からしたら、知れた事で。って、その何が何を？なら知ってる、止まって止まる儘で居られない儘に、何が何を、って、その、それより知れない何が何を、だって事を。そんなでそんな、何が何を、さえ知れてるなら、他の何も要らないよね、違うも違わないもなくに、とも知れるなら知れると知れて。確かにそれなら、知れに知れるよ、でもそのせいで、止まる少し前までの知れに知れてたかも知れない、の、その知れてたって何かは、もう知れなくて、とは知れるしかなく。なのでそんなかなとは知れて、の、知れてなんて要らないよね。なら、何が何を、も、もう要らなくて。

の、何故要らないかは何となく知れてるにしろ、その知れてるのだけは、どうやら要るらしいね。それを要るのが、そこを高みにしてるからには。そこって、紛れもなく、ここだけど。の、ここは、それでもう、そこじゃない。だって、ここだけが高みで、そこが高みかどうかなんて、もう知れなくて構わなくては知りようもないだろうからね。で、何て低い高みなんだ！低みなんて何処にも有り得ずに、って、その周りまで見て見えて仕舞おうと知った事じゃない。反り返るように空なら空に果てがなさそうでも、息苦しそうに風なら風が遙かへ昇ろうとも、水さえ高くへ渦を巻いて空なら空や風なら風を押し流そうとも、それで空も風もなら空も風も水の重みに歪んで見る影も無く引き裂かれて影ばかりが水も顔負けに溢れ出そうとも、ここが高みなら、そんなそれらの抱えてる高さなんて低みの有り得ないのを良い事に取って付けたみたいに色と形にされただけの拡がりでしかなく。色と形は良かったね、如何にも嘘っぽくって、いや嘘なんて要らない、嘘なんて無いものね。嘘の無いのって、嘘さえ無くては色と形にされただけの拡がりの他には何も無いって事で。嘘だけど。その嘘だけどの僅かに有りそうなのを、色と形って言い直してれば、それで空回りしてればしてれば良いだけのもんで。そんな、殆ど何も無いな拡がりがここを見下ろそうと、なので、そんなの何でも無く、で、高みなら、ここにしか無いに決まってよう。その、この高みから、真下に高みを見下ろせてる。だって、こ

の高みは、見上げても殆ど何も無いな拡がりだけでは、高みしか見下ろせなくて高みで。その見下ろされる高みの、真下へだけの、闇でさえ無しな見通せ無さったら、見下ろそうなら見下ろしただけ深い筈の深ささえ真っ先に拒むかに。無いや違う、見通せ無さが違うんじゃなく、真下が違うんだろうな、きっと。取り敢えず、真下だけは見下ろせない、って事にして置こうか見下ろしてるけど。それより深入りして、真下はただ真下で、真下の真下はもう何の真下でも無くなる程の真下では、それってもう真下に呑まれて戻れないみたいなもんで、とか嘯いて。でも、ここから、真下に高みを見下ろせる、これは何も変わらないけれど。いや、変わらないなら変わってるかな、だって、さっきまで、ずっと変わってなかったっけ、って何が？きっと、真下も高みも見下ろせるも、それぞれ好きに変わってたさ、でもその変わってたって何？、ま、そんなの思い出せないし、なら思い出さなくて良い事にするしかなさそうで。いや、思い出せないなら何を措いても必ず思い出さなくちゃいけないよ、その為の、思い出せない、で。そのそうでしかないせいで却って思い出せないのなら、その思い出すのって何かまで忘れるしかない、忘れたとだけは忘れずに。いや、それさえ忘れられたら思い出せるのに、なんて思うから、忘れられずに。でも、そんな忘れられなさなんて、幾ら忘れられなくても忘れられない程、何を忘れたもれて何がどうともならないんだから、何の忘れられなさかも忘れられそうで、

それって、忘れたのと何が違うの？って、忘れられなさに尋ねたくなって尋ねられる筈も無いなら、真下も高みも見下ろせるも変わってた、って、何これ？さあね、さあねじゃ、思い出せないなら必ず思い出さなくちゃいけない、を忘れられる筈なんて無かろうに。って事なら、そんなのはすっかり忘れられ、で、真下に高みを見下ろせてるか、って、見下ろそうにも何もかも変わってるに違いなく、の、何が何もかもも知れずに。その、何が何もかもも知れずに、は、って見下ろせてそうかな、って、何の声だっけ、の声って何だっけ、って見ると、って、どっちを？どっちも無く、なら見るにしても知れない何もかもへ攫われるみたいに、何を見ようにも、何がその見るのかも知れないでは、見たところで見た儘が見た儘を見た儘に見て見られるのかも知れないけれど、その何も知れない儘で、抑もそれを見るのからしてさえ、どうだか。で、何の声だっけの声って何だっけ、なんだけど、それって、見えたのか見えてなかったのか、なんて荒っぽい言い草もなかろうけれど、でも、見えてなかったら、何の声だっけの声って何だっけ、だなんて、言えないよね。いやそれもそうかは知れない。何も見ない声自らが、何も見ないからこそ、何の声だっけの声って何だっけ、って声にしたのかも知れないし。それには、声は声を知ってなくちゃいけないかな。いや、声は声を知らないと知ってるに違いない。の、知ってるに違いない、が、高みなら高みなんだ。高みじゃ無いなら高みじゃ無くに。違うの？

それは違おうね、全て違ってるし違いが全てじゃ違いをどうにも出来ずに。ここには、それを変えられる何の目も無いし、そんな目の出そうな徴さえ見付かりそうに無く、いや違う、目だけが有って、その何も出来ず何の徴にもなれないせいで、何の目も無いここで有るしか無く、なので、ここには、そんな目しか生えないに違いないかな。ここに生える他に何も出来ない目が生えるしか無くにならないここでしか始めから無かったに違いなくに。あぁ目が生えてる、目が何かも生えてるが何かも知れようも知れなくも構わなくに。その知れようも無さが、独り、目が生えてる、に違いなくに。で、他に何か有るのかな、そりゃ、他の何もかもが有りに有るだろうね、知らないだけで、いや違う、有りに有るなら、その有る儘を疾っくにもう知れに知れてようよ。そうした知れようの独りがまた、目が生えてる、で。違うの？の違うの？だって独りで、目が生えてる、で、の何が違ったって。なら、そんな目なんて目とも知れないの知れないも知れなくて、なら、それを目って言うのから違ってるに違いなく、なら、違ってるに違いないに違いない、って、これより他に何を知れようかな。いや何だって知れてるよりそれはそれだけで何より知れに知れてるに違いないよ。の、違いない、だけが、いや違う、を斥けられるよね。いや違う、って、その斥けられてなんて直ぐに斥けられて仕舞うけれど、それが何？幾ら、いや違う、に斥けられても、斥けられるは、いや違う、を斥けられる儘さ。だって、違いないを斥

ける、いや違う、は、違いないに斥けられての、いや違う、だからね。なので、何より知れに知れてるに違いないは、違ってたって違って違いないんだ、だって必ず違うから。そうして斥けられた違いないで、必ず違ってに違いないで。そんな独りで、の何も知れようも無くに目が生えてる、の言い違いに違いなくに、その違うと違いないの斥け合いをさも斥けて。なる目にしても、やっぱり必ず真下を向くしかないけれど、そっちへ向く真下じゃない、いや違う、だって真下にどっちへ向くなんて無く、目は、もう一つの違う真下を見下ろし、いや違う、それは一つとさえ数えられない真下で、それで目は高みに留まれるんだから。でも目に目がそう見えて仕舞えば、真下で、独りその目からの、数えられない儘の、他に無ければ一つしか無い真下でしかなく、数えられなくての真下にも変わりはなく。でもその数えられないのなら、目はその真下は向けても、その向く下には高みは見下ろせないよね、だって高みは必ず一つと数えられて高みなので。でも見下ろせないだけで、真下に高みの有るのは間違いなく、だって高み無しの真下なんて、そんなの真下は数限りなくて一つの目ではとてもどれ一つ真下とは扱い切れないだろうし。いや、そう言うのなら、高み無しの真下は、何処かにもう一つ有るしかなく、それを一つと数えられるって事は、それは真下無しの高みでも無ければならなくて、でも、そんな高みなんて何の高みかな？って、その高みに、目が尋ねられたようなら、目はもう、真下に見下ろせる高みしか

見ようとしなくて見えなくて、なら、そんな目なんて目じゃないって目は目を潰そうか、確かに目に潰された目が見るなら、何だろうとそれは一つと数えられ、高みを見たいなら高みだけを見られようね。でもそれを真下と知れようか、真下と知れずにどうして高みを見られようか。って、誰が言うんだっけ、他に居ないなら、その誰が言うんだっけって言った誰かしかなく、独り。目は？知らない、潰れたかどうかも。いや、目は目に潰される為に目なんで、って、独りが言うなら、それって、そんな目を見てる目で。あぁその目は、真下に高みなんて見下ろさない、だって、真下なんて見下ろさなくたって、目に潰される目の潰れるのを見てるなら始めから高みでしかなく、それを高みへ押し上げ、いや違う、低みのない高みは押し上げられたりしないものね、それを独り高みへ放って嵌め込んで置き去りにしたのは、を知れたならの何を知れても無さに違いない、と目に知れたとしても、目はそれに見向きもしようもなく独り高みへ放られ嵌め込まれ置き去りにされてて、って、自ら知れれば、目なんて要らなくて自ら捨てて。で、その捨てられても目な目って、何て尖ってるとしか言えないんだ、高みな儘なら内へ縮む果てに凝り固まれば円くに鋭く黙りを決め込んで唸るように拡がるだけ拡がり、拡がり損なってるとも見え損ない、で円くを自らに晒して身動き取れないまで窮まるなら、その自らなんて、捨てられても目な目とさえ知れなくなって、ならきっと目でだけは無くに。替わりに知

れる自らは何か、は、えっと何だろう、何だって構わなくても何も見付からないなら、そんなそれで。その見付からなさを抱えての、身動き取れないまでの窮まりったら、何の窮まりも無しで、いや、違、違うも違いなくも、その窮まり無しが、円みへとだけは収まりそうで、なので尖ってるとしか言えなくに。尖ってるんだよ！あぁこれを音という音が擦り切れるまで幾ら擦り切れても音な音にし続けたい、でないと、円みは失われそうで、その怖くないのが怖くて、怖いのが怖いなら怖いから逃げて済むけど、怖くないのが怖いは、ずっとそうでしかなく。ならもう疾っくに音な音という音は、そのずっとな怖く、でしかなさそうで。なんて、うっかりな振りで、その怖く、へ逃げ込もうにも、怖く、なんて疾っくに円みに溶けてて、そのせいか、円みは円みの窮まり無しにも有りにも、有り無しなんて構わずに、ぐるりと止まって、円みの円みへだけは、見極められない窮まりなんて疾っくに色を奪われ続けて為す術もない怖くないのが怖さらの怖さ自らの怖くなさの真似事の繰り返しでは、さも窮まり無しに動いて行くよ。溶けた怖くないのが怖く、が、その色を欲しそうに音な音を次次尖り続かせては、色だけは要らないって身振りを振り撒く先は、どっち？って、誰が言わなくちゃいけないんだっけ、その誰が言わなくちゃいけないんだっけって言った誰かでだけは無く。なら知らない。の、なら知らない、が、言わなくちゃいけなかろうがでなかろうが、言うに違いない。で、言ったの？

知らない。あぁそっち？って、その知らないだよ、って、その知らないが言うなら言いっ放しな、その音な音だけは、幾ら言い直しても擦り切れたりしなさそうかな、どうかな？それを試したいんだ！が欲しかったのかな。でも、欲しかったなら欲しかっただけの事だし試したいんなら試せば良いだけならきっともう試してて、で、知らないが言いっ放しな音な音は、幾ら言い直されても擦り切れるも切れなくも無く言い直され続けるばかりで、そっちごとごろりと固く果ても無くかに縮み続けるばかりで、そんなのから放り投げられたどっち？は、裏返されたみ続けかに、どっちへでも延び拡がって。って何が？って尋ねて仕舞われれば何でも無いよ、の、何でも無いよ、の尖ってるのだけが、か細く微かに噴き出してるみたいなら噴き出して無くて、その噴き出して無さへ、そのか細く微かに、に消りたいかに誘われる目でだけは無くにな目は、目でだけは無くになな自らをせっせと目で無くし続けられては居て、えっとそうして何だろう、そうだ、きっと試してるんだ、そんなそれを、必ずそうでしか無くに。そんなそれは目にそっくりじゃないか、そっくりなら目じゃないけれど。なら何？に答える何？はその自らの何？を、その底が有るなら底までを必ず見下ろさなくちゃいけなくて、で高み。その見下ろすのも見下ろされるのも。で直ぐに底なんて無いって分かって、高みと高みがどっちが高いも低いもなしに限り限りまで距たって向き合って、いや向きなんて無いんだ、だって高いも低いも

ないからね、なら見下ろすも見下ろされるも有ろうが無さそうに有ったところで知れず、高みと高みは互いの高みを高みとだけさも間近にでも見て見られて、その間を、何でも無いよ、の尖ってるのだけが、か細く微かに噴き出してるみたいなら噴き出してて、その尖（とんが）りが輪に成りたげに連なる先は刃の唸るようで、円みを切り裂き切り裂き、で切り伏せても引き裂けは出来ず、円みの奥に円みの噴き出す裂け口を見付けるまでは、その儘ずっと何も変わるもんかって。なんて事の、変われずに居られる筈も無く、短い音がその音の中に丸まって溶けて消えて音の外を刺したげに尖っては、それは已むけれど、已む度に已み続けるなら已んでないのと同じでも已みに已んでるなら已み窮まって、自らを円みへと描き出そうと、その鋭さでその円みを狙い澄まして切り裂き、円みの鋭さを剥き立て曝け出し、でも裸には出来ず、唸らせ、その身動き一つしないの固い音って、円みの奥に円みの噴き出す裂け口の縁に違いなかろうな、なんて予め思う手前で、そう思うのを已めると、裂け口はその縁を端にして急いで閉じられて行くかで、でも、高みと高みは、その閉じられた中にそっくりない形に並んでふっくらと包み取られ、ふっくらと。の、ふっくらは形じゃ無いなら、身動き一つしない固い音を数え切れず纏めて脹らませた今にも浮き上がりそうな若葉ばかりの藪に覆われた小山を二つ並べたような音の響きの柔らかさで。で、そこまでが一続きに見渡され、それは直ぐに固く固まって音の柔ら

かさの影みたいに尖って、その先にその尖りの連なりを裸でも晒すみたいに見せたいらしいけれど見えるの？にしても、それを見ようとする目は？って探される目を探す動きをその目に擬えたくて、見渡された一続きを呑み込むように、上を向いて横たわるふっくらの闇から明るく浮かび出る円みは、その円みを探すかにその円みを切り裂こうと。と、で、それは已み。あぁそんなじゃ、上を向いたふっくらの闇が横たわるばかりに成って仕舞うよな、でも、向きなんて有る筈無いなら、その無い替わりに、そこに、ふっくらの闇が真ん中から真っ直ぐに裂かれて闇ごと仄赤く煌めくなら真っ直ぐなんてその自らの煌めきに呑まれて捩れて歪んで、が已まず。それでやっと、裂かれたと分かって自らの姿を見るふっくらの闇が、向きなんて無くに向き合う、二つの同じ目で、どっちも互いの高みを突き刺すような鋭さで、その危うさを慮れば態と鈍そうに覗き込んでるに違いなくに。そんなの二つの目じゃないなら一つの目なんかじゃもっと無く、数なんて追い付かない姿を連ね、それを目と見るのも要らなくなって、ふっくらと。ふっくらだけなら、闇は疾っくに何処へか切り離されてよう、な姿は、目でも無いなら、見て見られて見えるのとは違う、ふっくらで。って、何処かの闇が、それを呑み込みたげに恨めしそうに取り囲むようなら、ふっくらは、向きなんて無くに裏を向いて自らを引き裂きたげに捩れて歪んで已まず、かに。でもそれじゃ、引き裂きも捩れも歪みも出来ず、ただ裏向きのその裏へ

その裏へと回り込むのを已められないのを繰り返す内に、その音の柔らかさを、また浮き上がりそうな若葉ばかりの藪に覆われた小山を二つ並べるかに整えるしかなく。でも山も裏返っては二つには並ばないなって直ぐに分かり、裏へと回り込むのを已められないのを繰り返してるかも怪しいよなって、そんなの全て違ってるよって、取り囲む闇に妬ましそうに言って欲しそうで。いや闇は取り囲むようなだけで、何処へか切り離されるより更に疾っくに失われてよう、って、ふっくらに先に言われて仕舞うなら、その失せた闇を後追いで分からされるしかなくにそう聞かされて仕舞うのは何？何にしてもそれは、ふっくらを、向きなんて無くに、裏向きを裏返す向きに刺し貫いてないかな。その、ないかな、のせいで、尖ってる筈が、円くにでしかなくに。なんて思う手前で、そう思うのを已めなくちゃいけなかったんだ、って思えるなら、そう思ったのは捨てられて、そう思う手前まで疾っくに戻れてるに決まってたみたいで、その勢いで何を思うのを已めなくちゃいけなかったのかもあやふやに闇に溶けそうで、その闇って失せた筈の闇なのかの闇って何だっけもあやふやなら、あやふやはその儘に音の柔らかさに卵なら孵るようにでも小山を二つ並べたような響きを奏でようか。そんなのを聞かされて仕舞いそうになって、何とかふっくらを刺し貫けないかなって、円くでしかない自らのその円くでしかなさの危うさを怖じ、その怖じるのも序でにふっくらごと一衝きに貫けたなら、裂けない闇も裂いて

闇で無くせるのになって、焦るしか出来ないそれが、その焦りに爪でも立てるみたいにすれば、その風なら風を断つだけのような爪かの痕の向こうに、そうだ、きっと直ぐそこでも間違いなく向こうに、色は無く仄かに煌めく高みが、のっぺりした緩い限り緩く窪む低みに囚われるように取り囲まれ、その高みを二つにしたいけれど出来ないならきっと数は、そこへはもう届かなくて、なら、ここを高みに近付けるには数を捨てないと、って、ふっくらへの一衝きを已めよう、なんてしちゃいけなかったんだ、だってもうふっくらは怖じるごと一衝きに貫かれてて、そこから滑り落ちるしかないここは何処かって爪でも立てるみたいな、そんなそれは、その後ろに何かを匿ってそうだけれど、きっと数じゃ無いしな。あぁ数じゃ無いしなって思うしか無いそれって、って、それは、自らを数じゃ無いしなって思うしか無い、から匿えないのかな、なんて顧みたのかみなかったのか、そのあやふやさの危うさは、のっぺりした緩い限り緩く窪む低みみたいに果ては無さそうで。そんなそれなら、あやふやさの危うさに自らを捨てるかに落ちて行きたいけれど、緩い限り緩く窪む低みの何処が窪みか低いかも分かりようはなく、却って浮き上がってないかって低みの僅かな傾きへ身を添わせようとして、低みの裏を真下に覗き込んで仕舞ったなら、落ちるのさえ儘ならずに真っ逆様なら、まさか逆さ吊りとか、どう？って何が？そんなそれに、逆さ吊りにされる程の何の身を身に付けてられるかって。で、

失せた風なら風の丸く溶けた影に溶けるしかない己が身は失せ、ふっくらと怖じるを貫いたら一衝きの痕が、酷く数を欲しがってそうに捩れて。そりゃ痕は一つと数えられるなら、あやふやの危うさも拭い去られ、そんなそれの逆さ吊りの姿だって、ゆらゆらとも引き寄せられそうで。でも、でも数を欲しがってる限りは数から見放されてるに決まってて、なら欲しがるのを已めようの、その已めたのが、一つ。の、一つって何？って尋ね続けなくちゃ一つは失われそうなら尋ね続けなくちゃいけないけれど、それって、一つは一つに決まってるのから逃げる事でしかなくに、その事の、また一つ。でその一つをまた尋ね続けて、また一つなら、一つは切りがないけれどどうなんだろうなんて、あやふやの危うさの一つ切りにでも凭り掛かりたいんだよな、そしたら、逃げ腰なりかに一つって何？を振り捨てて。って振り捨てたのが何なのか、の、あやふやの危うさが猛猛しく突き立てられれば、却ってそんなそれが振り捨てられてそうで。その捨てられた向きに向きは無いなら、無い向きを並べて数を作れないかな、とか。で、作れた数かは知れないけれど数に数えられた一つが幾つか並べば、失せた風なら風の丸く溶けた影を呼び寄せるかに傾いて傾き已めば、数は定まってよう、丸く溶けた影それぞれに、異なる風なら風を固く固めて甦らせ。と、固く固まる程に、向きも無く緩い限り緩く傾き、異なる向きに延びて行く風なら風は、ふっくらと怖じるを貫いた一衝きの痕の影にそっくりで。いや、

そっくりなんて有り得ない、何が何とだって、そっくりなんて有り得ない、って頑なに、そのそっくりから逃げるしかないそんなそれは、その逃げる向きの無い向きに潜り込んだのか、その向かう向きは果てなく数えられそうで却って数は置き去りで、数の外に夥しい音が繰り返し失せ続けてる、その失せる数が数知れないなら、何が失せたも一つ切りで。それなら何も失せずに一つ切りにも違いなくに、でも、なら一つ切りだけは失せなくちゃいけないんじゃないの、って、裸に剥かれて一つ切りみたいな、そんなそれは、一つ切りに裸に剥かれる為に、そんなそれを已められずにここまで遣って来てたんだ、いや引き回されて来られたんだ、の、ここって何処？いやだからそれは、そんなここでしかなくにな、一つ切りなここだよ。な、ここがここじゃいけなかったんだ、でももう遅いのか遅いなんて知れた事でさえないのか、そんなここは一つ切りなら、ここさえここから逃げられないとか。いや、ここだけはここから逃げられるんじゃないの、って、ここがそうすればとっと逃げられてそうで、ここを逃げたここととここに逃げられたここが、でもやっぱり何も変わらずここなら、そんなここから逃げられないそんなそれは、殆ど一つ切りなここの少なくともその有り様そのものか、って身振りでも強いられそう、いや違う、そんなここでそんなここの何もかもと一つ切りに異なるそんなそれで決まりで、それで、ここもそんなここで。いや違う、一つ切りに異なるそんなそれでそんなここなんて

有り得なくて、ここはここじゃないなら、そことでも呼ぶしかなく。で、呼ばれたそこは、はい待ってましたって顔をするかしないか知らないけれど来て呉れたのかな。何やら一つ切りが、無い向きを押し分けてこちら向きへと延びては来るけれど、それがそのそこなのか、の他は、数の外で夥しい音が繰り返し失せ続けるしかないなら、それは、こちら向きへの一つ切りの音かも知れない、なんて望みは、その自らのあやふやの危うさを欠くのを苛みたくてうずうずしてそうで。でも、あやふやの危うさなんて幾つにでも好きに数に収まるだけのものさ、って、その望みの影が陰口でも叩きそうでは望みも凋みそうで、そこへ、失せた筈の夥しい音が一衝きに誇らかに傾れ込み、でも先が続かないならその望みごとその一衝きは自らを押し流してその自らを顧みれば、それは、こちら向きへの一つ切りの音かも知れない、にそっくりで。あぁそっくりなら何が何だって、ふっくらと怖じるを貫いた一衝きの痕の影に違いない、って、こちら向きとは異なる向きに延びて行く風なら風は、その風なら風の姿に向かって、向きなんて無いって思い込んで風なら風に少しも似ていない自らの姿を責め苛んで、風なら風で。なんて嘘に決まってる、そんなの風なら風じゃ無い、の一衝きが、怖じるをその嘘の風なら風へ放り捨て、ふっくらへとだけ届いて通じるなら、ふっくらはこちら向きへとだけ、ふっくらで。なら、ふっくらなんて頽れて、こちら向きの一つ切りが、音かも知れないも無くに、有りそうな

ら有ろうか、無くても有りそうに、でも有るかは危うくあやふやに。でもそんなあやふや程、はっきりした確かなものも無いよな、って見通されるこぢんまりした眺めはもう数の外なら、そのこぢんまりは責め苛まれたいみたいに繰り返し失せ続けるしかなく、眺めなんてどれも眺めなんて無かった事にされる為の眺めでしかなくての眺めの姿は裸に剥かれよう、ならもう数の外からも弾かれ、却って失せ続けるしかなくな紛れもない儘に続く眺めで。でもそれが一つ切りかどうかは知れない、いや、知れないなら必ず一つ切りとはまるで違う有りように違いなく、なので、失せ続けるしかなくなにも、紛れもないに違いなく。あぁぁそんな眺めなんて何処を探したってその痕の影さえ有るもんか、って、こちら向きの一つ切りが、何処を探したってを擦り抜け、高くな高みと低くな高みのどっちがどっちか知れない間で、さも、より高みを隠れて目指すかに張り詰めるように動きを止め、どっちの高みをも刺し貫きたいって、でも取り敢えず、どっちがどっちか知れない間をどうにか縮めないでは何も始まらないなって。え、何も始まらない？まさか、何だって何でなくたってさえ、疾っくに始まり捲って始まり続けて已まなくて、やっとそれを擦り抜けたかでのこちら向きの一つ切りも、また始まり捲りに猛猛しく立ち塞がれてそうで。ハッ、始まり捲りは良かったね、始まりはしたけれど何も始まってないしかないのを晒し捲りみたいで、でもそれで何も始まってないしかないも危うくあやふやに、

とか。で、その危うさに間を縮める縮めないも晒し捲られ、高みに高くなも低くなもあやふやに呑まれそうに褪せ、ったって、色が褪せるんじゃなく高く低くが褪せるんだけど、って色が、色では無くに、数の外から弾かれ失せ続ける眺めの痕を含み隠すかに、こちら向きの一つ切りと一揃いに並びたいのか寄り添うように、こぢんまりな振りで微かに滲んで、いや滲むに微かも微かでないもないよね、って、一揃いなら声も揃えなくちゃ、なんて言い立てる筈無いさ、って色が、色でも無くに、数の外で失せ続ける眺めの痕を晒し、こちら向きの一つ切りを脅すかに斬り込んで来て色では無くにな色で、色では無くになら色では無くに。いや色の色で無くにの無くになんて色でしか無くに、なので囚われたかに、色で無くに、は、高みと高みの間に吊り上げられ吊り下げられ裸に剥かれ、色で無くにな色を数の外で殖やし続けて、色という色を色の外で失せ続ける色で、剥かれた裸の内に、色で無くに、を含み隠し。それを、こちら向きの一つ切りは斬り込み返そうって構えだけを態と空回りさせ、裸は裸じゃ済まない裸の皮までさもぬるりかにギシギシとなんて知らぬげにギシギシと剥ごうかって、含み隠された色で無くにを誘き出そうと、いや、でも、構えだけが災いしたのかも、その重みを扱い兼ねるかに、こちら向きごと俯くしかなく、俯かれたこちら向きを立て直そうと一つ切りの儘に向きのこちらを投げ放ち、こちらの儘にこちらはどちらでも無くなってその儘に向き、その投げ放たれた

向きに投げ放たれ返された一つ切りは一つ切りでしかなければ、どちらでも無くなれずに、こちらの儘に転げ続けるこちらを向き続けるしかなく。で、あわよくば、含み隠された色で無くに、に斬り込み返してそこへ分け入ろうなんて事もちらちら浮かんで消えるけれど、それを消してるのが数の外から弾かれ失せ続けるら眺めの痕なんじゃないかって、その痕の数の外が一つ切りに斬り込み返し返して来てそうで、来てそうでって事は来てなくて、来てそうな辺りを擦り抜ければ数の外からも弾かれてそうなこちら向きは一つ切りかに転げ已んで。でも数の外から弾かれたとしたら行く先は外の外なのか、外の外って元の内へ戻るでもなしに外の外なりの内かも、それともそんな行き先なんて無しに弾かれてるだけかも、なんて何の一つ切りなのかな、と、転げ已んでもまだ転げ足らないかにゆらゆらと行方を定めたくもなさそうなこちら向きは、数の外からも弾かれたなら、何の一つ切りも無くに一つ切りでしか無くに一つ切りで有るしかないって思い込めばそれっ切り思い込めずに、そのそれっ切りだけが一つ切りで、の一つ切りなんて直ぐに失せ、その失せた向きを向けるならこちら向きで。でもそれで、一つ切りはもう取り返しようはなさそうで、そのこちら向きは、数の外から弾かれた儘に数の外を向き直って数の外に弾かれ直すしか無くに一つ切りは失せ続け、そこに吊り上げられ吊り下げられ、そうなればそうなるしかないように裸に剥かれてそうで。の、そこって何処？って、そう尋ね

る事が出来て姿を整えたかも知れないならかも知れないこちら向きの一つ切りに尋ねられれば、吊り上げられ吊り下げられるのは、数の外へ弾かれたそこで、裸に剥かれたそこは、数より数限りない数知れない眺めの痕を従え、それらの痕と合わされれば丸丸と柔らかく脹れて直ぐにも引き裂かれたそうに、その望みだけに浸される窪みでも急いで探さなければならないのかな。で、そんなそこはそんなそこを探せようか、って、その、そこって何処？って、尋ね直されるしかなさそうでも、そう尋ね直したのがどうやらこちら向きの一つ切りでなさそうなら、予めそう定められてた処にやっと辿り着けたかなって、こちら向きの一つ切りはもう何も尋ねずに居られるそこに、何の望みにも浸れる窪みにでも安らってられそうで、安らってられそうなら少しも安らってられずに、そこを離れ、そこを離れたそこへ。その、そこへ安らってられそうも安らってられそうを離れ、それとも離し、か。で離されそれとも離したか、な安らってられそうを、斜めから斜めに後ろを恋しいように反り返る跡を追うように振り返り続ければ、逆さ吊りにでもされた自らも自らの重みに強いられるかに真下にそれを見下ろして何時までもそれを見失えないなら、高み。他に無い、いや他に無いなんて思っちゃいけなかったんだ、で、高みなんて他に幾らでも見付かり過ぎれば過ぎただけ高みは動かず低みと変わらず、え、低みと変わらず？の、なら低みの何を知ってるのかな、って、低みが低みの身でも確かめるかに高みな

ど知り得よう筈も無くな様で舐め回そうとすれば、低みは低みから逃れて身をでも躱し続けて、低み。他に無い。他に無いなら他に無いに決まってる、って、他に無いが言うなら他に無いだろう。で言ったの？知らない。いや嘘だろ、必ずそれを知ってる筈だよ、その為の、逆さ吊りにでもされた、に違いなく。でも低みはそんな嘘なんて知り得よう筈も無くな有り様だよな、って、何の有り様？な、逆さ吊りにでもされた、なんだけれど、そんなこちら向きの一つ切りは、どちら向きでも無く、幾つ切りでも無しに、こちら向きの一つ切りの外へ自らを弾き出して、逆さ吊りにでもされたをそのまた逆さにでも吊せば、逆さは直り何処に吊られるも無しに、裏返るかに、でも必ず裏返るのとは違って。だって、何一つ裏返られなくて、高み。その高みからの低みなんて知れなくて構わないなら知り得よう筈も無く、知り得よう筈も無くに、に知れなくて構わない低み。だよね、違うの？って、何が何に尋ねられるかって、そんなそれって、こちら向きの一つ切りの外のそれには決まってても、それって何？なんて自らを顧みれば、って、でもどう遣って？だって、こちら向きの一つ切りの外でだよ。な、そんなそれだよ、って、こちら向きの一つ切りの外で必ずこちら向きの一つ切りとまるで違うそれがそれを、危うくあやふやとだけ自らのそのあやふやにな危うさを晒すかに、裸に剥くかに。その剥かれた裸の危うくあやふやに、何の外でも無い、それとも何の外でも無いの外で、そんな高みを思う

様、高くへだけ拡げられるようなら拡げられてなくて、の、拡げられてなくて、が欲しかったんだ、って低みの何処までも拡がるかの望みが、直ぐ近くに。あぁその直ぐ近くに、の、その遠くにの何てだけが、何て裏返ってられるんだ、裏返るって、その遠くにの何てでしかなさそうに。の、何て、なんて無いよ、なので裏返ってられるのさ、って、その裏返りが、水の流れを描き出す空なら空の乾きからも湿りからも独り切り離されたかの、裏なら必ず二手に分かれよう分かれたげな姿を朧に纏うかのどう裏返り直そうと表に行き着けない裏返りだけで、なので何も裏返らない拡がりを、拡げ狭め、拡がる儘狭まる儘をその儘に投げ放っての裏返り続けの何も裏返らなさを持て余すかに、拡げ狭め直し直し、その拡げと狭めを何処かで裏返せないかと、ふっくらと、これまでまるでそうと知れなかった、そうと知れればこれまでのふっくらはまるでふっくらじゃないと知れる、ふっくらと。と知れれば、そのふっくらの他に何が有るの？そりゃ、その他の何でも有るよ、なんて事にはならない、そんなそこに、独りふっくらと。と、そのふっくらとがふっくらとに向き合うしかなくなれば向き合える筈も無く、行き違ったりずれたりさえも出来ず、ふっくらはふっくらの外へ。の、外へって何処へ？なそこは拡がりも狭まりも為らず、その外の外へ。なんて筈も無いなら、こちら向きの一つ切りの外で必ずこちら向きの一つ切りとまるで違うそれが、ふっくらを、ふっくらの外から内へ刺し

貫いてるに違いなくて、の、何が違いないのかなって、その必ずこちら向きの一つ切りとまるで違うそれが、自らを揺さぶりでもするのか、その揺さぶられる自らの身を舐め回すかにして、その舐め回されたる柔らかく滑らかな傷みたいなる痕に、ふっくらとのふっくらと必ず違う肌触りを呼び込もうと、必ずこちら向きの一つ切りとまるで違うその違いを、自ら、何処へか放り捨て。な、何処へかなんて自らから外へ出られる筈は無いよね、って、見付けたぞ！って何を？知らない、それとも、知らないとは必ず違うんだ、って、一衝きは一衝きならさて一衝きなのか、違うに決まってる、その決まってる一衝きなんて、疾っくに数の外へでも弾かれて幾つもの衝きに空なら空を覆い尽くすかに殖えに殖え、いや違う、こんな違いなんて無い程に違い過ぎ、何が違うかなんて一つ切りでしか無くての一つ切りって一衝きでしかないだろうよ、って知れれば、一衝きは一衝きの痕の影の一つ切りでしかないのかな。って、何処からそう知れるの？って顧みられる、拡げ狭め直され已んだかの、空なら空の為の拡がりの狭まりなら、取り敢えず一衝きの痕の影の一つ切りを塞ぎに掛かってそうで、何の明るみも拒む為かに。あぁぁ拒まれた明るみの何て明るさ、いや違う、そんな明るさなんてまるで足らない、少しも明るさなんかじゃない、の、明るさの何て明るさ、いや違う、も、いや違う、って切りも無さそうなら、その、何て明るさ、いや違う、が、初めて、何かの明るさの来そうな向きへ明るさを求められ

そうで。なら、何て明るさ、いや違う、何て明るさ、いや違う、って繰り返したら良いのかな、な訳ないさ、って直ぐに知れるのは、そんな繰り返しなんて有り得ないなら直ぐにその失せた跡に、空なら空の為の拡がりの狭まりなんかとは取り違えようもない明るさを包み込んで自らの円みの内へ丸まり込む風なら風の温かくもない温さを、呑み込みたいなら呑み込みたそうで。で、呑み込みたいのかな、さあね、って風なら風に先に嘯かれて仕舞うのは、風なら風に包み込まれた明るさで、いや違う、かどうかの何が何の違いかって、円みの内へ丸まり込んでその明るさを風なら風の外へと明るみに出そうかって、その円みは、明るさを明るみに出さない儘に舐め回したそうで。いや、だったら円みなんて要らなくて舐め回したそうだけで行けるよね、って、何処へ？を待ち構えてたみたいに風なら風は呑み込むに違いなく、そんな眺めなんて珍しくも無さ過ぎて今やっと眺められたみたいなら、その眺めを眺めるの何て明るさ、って、明るさ自らが驚く振りを向けるのは、高み、それとも、低み、でもどっちも互いを互いに知らないせいか見付からないなら、その空振りめいた勢いで顧みたいのは、風なら風に収まる明るさ自らに違いないのかな。が、きっと円みに違いなく、だって顧みて掴み取れるのって他に無いから、なら円みは要るんだ、って改めて、舐め回したそうだけで行けるよね、は、円みに丸まり込み直すみたいに、風なら風の姿を明るみならみ明るみの姿に、休みなくせっせと造り

替えてそうで。ならまた、円みは要らないんだ、の、要らない円みは要り続けそうで。そんな円みの要る要らないをただ円みとだけ知れるのって、ふっくらと必ず違う肌触りの独りふっくらと、に違いなく、だってそんなふっくらとだけが、明るみなら明るみの姿を風なら風へと造り替え直せて、ふっくらと。な、ふっくらとなんて、円みの要る要らないが風なら風の姿と絡み続ける為の、何だろう、影なのか、影の縁に沿って闇の端でも衒えたげな光りの綾なのかな、とか、どっちでも有りそうならどっちでも有りそうな為に酷く細かく入り組むしかないせいで酷く輝くしかなさそうとかで、でも温かくもない温さは変わらずに。その温さのせいでの酷い輝きの何て温さ、それとも温さでさえ無いなら、影でも光りでも有り得ない、そんな明るさ、それとも明るさで無さ、ま、どっちも同じで違うようなものならどっちもどっちとかで。そんな明るさそれとも明るさで無さをこそ舐め回したくて堪らないよ、ってあぁそんな事をどうにも望んで仕舞うそんなそれって、こちら向きの一つ切りの外で必ずこちら向きの一つ切りとまるで違うそれに違いないよな。だって、それがそれを違いないって決め付けるしかなくに決め付けるのならね。で決め付けられたの？なんて尋ねられない、その温さだよ、って何が？の何がなんて要らない程の、そんな温さ。そんな温さが、きっと温かさも冷たさも知らない風なら風の外なら風なら風の外で風なら風の内なら風なら風の内で、そうでしか風なら風はそれをど

うとも出来ずに、ほらほら動いてるよね、円みの要る要らないでさえきっと見て見ぬ振りがやっとで。そんな温さだけが、その外を知らなくて、なら、その温さの他は何だってその外を知ってようか、数が数の外へ幾らでも弾かれるのもその為に違いないにしろ、でもそんな外が外なのは、ただ温さの外を知らない温さのお蔭でしかなく。そんな温さの、一つ切りの外で必ず一つ切りとまるで違うの、何てふっくらと、な、そんなそれだけが、こんな、風なら風との戯れに失われた時の失われようのない向こうで、眺めを眺めるの何て明るさ、の拡がりも狭まりも無い、だってそこって、こちら向きの一つ切りの外で必ずこちら向きの一つ切りとまるで違うからね、そんなそこに、満ち溢れてようよ。あぁ分かってたさ、欲しかったのが、その、そんなそれだけが満ち溢れてようよ、だって事は。ここが、その、必ず辿り着けるって分かってた、そのここだって事も。なんて事は直ぐに忘れて捨てて、欲しかったは裏返り裏返して返り直らずに裏も裏かはの裏も何か知れなくなれば、そんな事をしてる、その、ここだけが、一つ切りに必ず一つ切りとまるで違って、独りふっくらと、ふっくらと必ず違う肌触りに。なら、それをそんな必ず違う肌触りにしてるのが温さのせいだって直ぐに知れるけれど、何の温さだっけ？な、そんな温さの、必ずこちら向きの一つ切りとまるで違うこちら向きの一つ切りへと溶けて流れるのを装うかに走って行くのに誘われ、円みの要る要らないは、ふっくらとの中

へ斬り込んで行くみたいに、でも斬り込むんじゃなく始めからふっくらとに包み込まれて円みの要る要らないのどっちでも無さを舐め回してられた、そんな姿を、ふっくらとを切り裂いて自ら明るみに出して開け拡げてるんじゃないかって、さあね、だって温さから逃れられないのなら、さあね、がやっとだよな、って、そんな温さだけが頼りだってはっきり知れれば、温さは溶けるかにその真下へ滲んで殆ど失われ掛け、でも殆どで踏み止まって失われ掛けるなら微かに残る温さは少しも変わらずに温い、そんな温さが指し示してそうな、こちら向きと必ず違うこちら向き、とは違う向き、を誘き寄せたのか、そんなどんな向きとも異なるかの向きが、ふっくらとをすっかり取り囲んでないかって、それが、自らを開け拡げた円みの要る要らないの、微かなその微かなが自らを舐め回してその甘さを味わってそうな甘みの震えに違いなく、そんな震えにさえ纏わり付く温さを、どんな向きとも異なるかの向きが、穴でも開けて貫きたそうに凝っと見詰めてそうで、必ず見詰めるしか無くに。なら必ず凝っと見詰めてようね、でも必ず凝っと見詰められるなんて、それを見詰める必ず凝っとの他に無いさ、って、どんな向きとも異なるかの向きがそう顧みようにも、その他に無い向きたい向きを向けないに決まってるなら、円みの要る要らないに纏わり付く温さに潜り込み潜り抜けるかして、ふっくらとのふっくらと必ず違う肌触りに溶け込み、どんな向きとも異なるかの向きの、異なるかの、の異な

るかの異なりを異なる数に換え、その数を殖やしに殖やし、異なるかの、を数で染め上げるかに、いや違う、そんな数こそ数とも異なるかの数に違いないなら、って、そう顧みようにも、向きたい向きは向けないその向きは、さてどっち？って尋ねるのが、ふっくらとのふっくらと必ず違う肌触りなんじゃないかって、数とも異なるかの数がそんな数とも異なるかに、なら始めから数ではなくて数でしか有り得ない一つ切りの外の、有りもしない眺めでも幾らでも湧き出させるように掠めさせて、そんな数とも異なるか、で。な、どんな向きとも異なるかの向きの数は、必ず凝っと、数とも異なる数がそんな数とも異なって数で、な数なら、始めから数ではなくて数でしか有り得ない一つ切りの外に、それ一つ切りは、それ一つ切りの外の内に、一つ切りに外に、内から外へからのその外の内を内へと貫きながらその貫きを貫きへ貫き返すに違いなくに、一つ切りな姿さえ裸に晒せてそうに一つ切りで、何も、その一つ切りをいや違うなんて抗えさせず。いや、その何もそれを抗えさせず、は巧かったね、だって、どんな向きとも異なるかの向きは、それで、一つ切りの外にそれ一つ切りに、必ず凝っとしてれば良いに違いなくて。でもそれで、そんな必ず凝っと、だけは、一つ切りの外にそれ一つ切りには凝っとしてられずに、必ずには、失われた筈の時を裂いてその裂け口を晒して時を甦らせるかに急いで空なら空の果ても知らぬげに激しく撤き散らされ、数限りなく、でも、こんなの始めてなのか

な、必ず数の外へは出られずに、なんて。な数限りなくな数なんて限りだらけでやっと数で、な姿もひょっこり浮かびそうなら、そんな数限りなく描き損ないな姿を、時の裂け口なら舌舐めずりでもしそうに映し取りそうで、にしても失われた時を幾ら裂こうと、撒き散らされた必ず凝っと、に、時の裂け口は裂かれ直してその裂け口の奥の外まで弾き出されてよう、そこへも必ず凝っとは必ず追い打ちを掛けようなら、時でも無しのその無しの裏返りにでも突き刺さろうか、なんて尋ねられるのは必ず凝っとしかないって必ず凝っとが顧みれば、って、どっちを？の、どっちもが激しく撒き散らされてそうで、それを必ず凝っとが自らの裸を一眺めに舐め回すかに囲い込もうとするなら、そこは、どんな向きとも異なるかの向きで。いや違う、なんて何にも抗えさせず。が、拙かったんだ、だってその抗えさせなかった何が何でもでもあるみたいに、囲い込もうとするのをズタズタに切り裂いて、必ず凝っとは、失われた時の中へ必ず凝っと撒き散らされ直して時と共に失われ直され。な時が始めから嘘だけどねハッ、なんて、一つ切りの外にそれ一つ切りに嘲笑われれば、脱ぎ捨てられたかに残された裸の一眺めが、一つ切りの外にそれ一つ切りにの裸みたいに映って、って、映れば数限りなくな数なんて限りだらけでやっと数に映り損なう、の損なう、が違うんだ、って、一つ切りの外にそれ一つ切りにが、その違うんだを引き受けて遣り直さなくちゃいけないかな、あぁそんななら、撒き散らさん

れるのならそうされたい、って望む、そんな望みが欲しかったんだ。って何が？なそんな何が？なそれが、そんな望みに潜り込み損なうか潜り抜け損なって、そんな望みに呑み込まれ損なって、で？の、そんなそれらの、で？までを丸ごと呑み込んで直ぐに真下でだけはない真後ろへ吐き出すけれど幾らかは吐き出し損ねたらしいなって、吐き出した筈の、吐き出し損ねも幾らかこびり付いてよう筈の、そんな開いてる筈の口を探しても閉じてる口さえ探り当てられない辺りのあやふやさに忽ち呑み込まれ。いや違う。の、ぃや違うまで呑み込まれ、いや違う、呑まれたのは、いや違う、だけさ、って、開いてるか閉じてるかあやふやな口なら口の側で、その口なら口から真下へ垂れる酷く重く粘粘した涎なら涎を、この味は涎でだけは無さそうだけどって涎から疑いながら吸わずには居られない、そんなそれは、吐き出し幾らか吐き出し損ねた、撒き散らされるのならそうされたい、って望みを、望み直さなくちゃいけないかどうかを渦なら渦にでも巻き込まれるなら巻き込まれるかに持て余し、なら取り敢えず、って、吸ったものを確かめたいけれど、そんなの吸った端から何処かの真後ろでだけはない違う口に吸い取られてるみたいに跡形も無く、その跡形も無くな辺りへ、やっぱり涎なら涎も涎じゃ無かったかもな、って丸まり込んで、くるり。いや、な振りだけ、だって、涎なら涎は真下へ垂れる儘なら向きは変わってない筈、な向きの外で必ずその向きとまるで違う、な一つ切りに、くるりな

振りだけのそんなそれは、自らの円みの内へ丸まり込もうかな、ってするしかないのでは。な円みの、また要る要らないを、蒸し返すしかなさそうに蒸し返しようもなさそうに、あやふやにでも舐め回そうか、の、あやふやだけは舐め回してられそうで、だって、酷く重く粘粘してて、その涎なら涎だったんじゃないのかな、きっと、あやふやって。涎の味なんて構った事じゃ無く。な筈もなさそうにあやふやなのであやふやかな、なんて推し量っちゃいけなかったんだ、だって推し量られたあやふやがあやふやで居られる筈無くて。違うの？って、あやふやがあやふやを推し量るみたいなら、その推し量る辺りへあやふやはあやふやをあやふやに丸め込んで、くるり。で、それっ切りだよな、って、それをそう推し量ったに違いなくに、一つ切りな円みの要る要らないが、くるりから一つ外れて、一つ切りの外にそれ一つ切りに、その要る要らないを捩れさせ要るが要らないで要らないが要るな円みを、要る要らないから外せば、いや外したのは円みに違いない、いや、であろうとなかろうと円みが円みであるには他にない、って、撒き散らされるのならそうされたいって望むそんな望みが欲しかったんだって何が？なそんな何が？なそれが、そんな円みを取り囲んでるに違いなくて。その取り囲みも円みだろうな、って、円みだけを向くその取り囲みの少し距たるかの姿のその距たりを円みを端から崩し崩しその距たりへ滲み込ませるかに舐め回し、それを確かめようとすると、その取り囲みは円

みな程に、円みな為に円みで無い、円みを向いてなくて円みに食い付いて来る形なら形との距たりを見付け、その距たりだけは舐め回しようもないなって、その距たりを切り捨てたいけれど出来ないなら食い付き返そうかって思えば、円みから、その形なら形に食い付いてるに違いなく。ならそれって、形なら形にしても、形じゃ無いなら形じゃ無いが形なら形をすっかり食い破ってる、形なら形にしてもな形じゃ無いなら形じゃ無いで、でもそんなそれなら、円みはそれを思う様舐め回せそうで、舐め回せそうなら舐め回してて、舐め回してて に舐め回せてなくて、に、舐め回せてよう、の、舐め回せてよう、って、でも形なら形にしてもな形じゃ無いなら形じゃ無い、に絡む舐め回せてよう、でしかないよな、って円みが、そんなそれから身を逸らせたくなれば逸らせてて、くるり。いや違、違わないんだけど、そのくるりって、まるで円みじゃなく、円みはもう、そのくるりから遥か距たって、そのくるりの姿は遠く小さく眺められるばかりでは、果たしてそれを眺める円みは円みか？が、…円み。つい…高み、って言いそうになって。いや言いそうになんてなってないよ、円みと高みはすっかり同じだとしてもまるで違うんだから、って、うっかりと口を滑らせるでもすれば、もう必ずそうでしかないからには。で高みは何処からも失われ、じゃ円みは何処？の何処もが円みだろうならって円みを探し直せば、円みは何処にも見付からず。って、何が円みを見付けようとしてるのかな、何もして

ないよ、なら何が円みを見付けたいのかな、って自らを顧みるそんなそれは、て
すっかり撒き散らされてるなら撒き散らされてる姿を自らに擬えたくに追って
追い切れず見失えば、顧み見返って、自らを顧みようなんて無い処へ吸われて
落ちて行ってそうで粘粘と。確かに粘粘だけど何が何に粘ってるか知れずに。
いや知れる知れないじゃ無い、何だろうと、粘ってるって事にすれば、それが
どうにも粘るしかなくに粘ってるんだ、って知れるそんなそれは、その知れる
のから身を躱そうとすれば、何も知れてないよって嘯く事も出来そうに、吸わ
れて落ちたかなって粘粘に、もう一つの粘粘にでも成った積もりで絡めるには
絡めても、そのせいで粘粘なんて始めから無かったかに消え失せて。って、知
れるしかなくに知れれば、そうか、それって必ず消え失せちゃいけなかったん
だ、何も消え失せてないじゃないか、って知り直せた事にして甦った筈の粘粘
に斬り込むように巻き込まれるように、でもそんなような入り口も見付からな
いなら粘粘の端にも触れられず、粘粘と。の粘粘と、だけは粘粘してなくて、
くるり。いや違う、くるりと逆様の、逆様のくるりは始めのくるりの消え失せ
た痕から粉粉な影になって粘粘の何の面影も無くして撒き散らされるしかなく、
その面影の無さの何て、ふっくらと。な、ふっくらとになら触れられるかな、
って、却って身動き一つせずふっくらとにまるで触れようとしないそんなそれ
って、先回りしたかにふっくらとに入り込んでふっくらとを満たしてた、粉粉

に撒き散らされてる数を知らない円みしかない、って知れる円みは、粉粉に撒き散らされてる数を知らない、をあっさりくるりと裏返し、一つ切りの、で一つ切りの外で必ず一つ切りとまるで違いながらに、な、そんな円みな自らを自ら円みな円みへと圧し出して、それとも追い遣って、円みの面影をくるりと。で、それは少しも円みじゃないよな。見付けたぞ！円みの面影をくるりとな円みじゃない、を。なんて嘯くそれは、そんなそれである程、そんなそれを圧し出し追い遣って、って、何処へ？って尋ねて仕舞ったのなら酷く拙かったかな、だって何処が何処だろうと何処から？しか無くて、でも何処から？しか無いって知れたなら、拙くも無かったかな、こそもっと酷く拙くて何が拙いかも知れず。いや何が拙いかも知れないなら、そんなそれは何を嘯けも出来ず、何処へ？も無くに自らを圧し出し追い遣って、円みの面影をくるりとな円みじゃないを、くるり。って、円みの面影をくるりとな円みじゃないへ、くるり、へ、くるり、なので円みの面影をくるりとな円みじゃない、で。な、円みの面影をくるりとな円みじゃないなら、それはふっくらとに触れられようね。でも、ふっくらとに触れられるって、自らが触れられる限りのふっくらとでしかない、って、そんな触れ方に引き摺られ、その引き摺られるのこそ、ふっくらと。な筈無いさ、ってその触れ方とそれに引き摺られるのを撥ね付ければ、円みの面影をくるりとな円みじゃないは、円みもくるりとなも円みじゃないも失い掛け

るかに、面影だけに成りそうで、ふっくらと縋るかに。でもそんなじゃ、ふっくらとに撥ね付けられるに決まってて、そんなふっくらとの、どんなふっくらととも異なるかに、何て固く冷たく、ただ消え失せるようでしかなく。ようでしかないなら消え失せたりしないんだ、が確かかどうか手掛かりもなく揺れ動くしかない、そんなそれだけな、それは面影で。な面影なんて疾っくに、どんなふっくらととも異なるかなふっくらとに、面影の何の面影も残らないまでに切り裂かれてよう。でもそれで、面影は裸にされるかに、その始めから切り裂かれてる面影を、その何の面影も残らない辺りに晒せば、どんなふっくらととも異なるかなふっくらとに隠されていたどんなふっくらととも異なってただ一つのふつくらとが、どんなふっくらとをも切り裂いて突き上がり、その始めから切り裂かれてる面影を激しく求めて捩れれば、面影は、そのただ一つのふっくらとへと、そのふっくらとを覆うかに、始めから切り裂かれてる姿の裸を自ら晒し。で、覆われる程に裸に剥かれるそのただ一つのふっくらとは、さも絶え間なくに短い間かに切り裂かれるしかなく。切り裂いてるのは、その一つ切りの外で必ず一つ切りとまるで違う一つ切りな、何？あぁその何？が粘り着いて、何？は放って置かれるに違いなく、幾らでもその姿を自ら裸に剥いては変えられて切りがないなら、どんなふっくらとも失われて再び甦りはしない、って、変わる事のない、それがきっと元の姿に違いない、裸。もう震えるしか

なさそうに、でも震えてなんて無くて、それを裸って決め付けてるあちこちあやふやに散らばってるふっくらとの痕こそ一つ残らず手分けするみたいに微かに震えてて。違うの？って、裸は裸を裸に剥いて変わり続ける、そんな裸に怪しがられれば、その震えの微かにが自らを舐め回し、その必ず一つ切りな艶に、変わり続ける裸を映せば、裸は変わる筈なんて無く、なのできっと裸でも無く、静かに黙って為す術なく一つに映って、独り同じ震え方を繰り返し。いや同じ震え方を繰り返すって、そのきっと裸でも無くだけは独り震えてないんだよ、震えてるのは、それを裸に剥いた裸だよね、って、自らを舐め回してる震えの微かにが、その必ず一つ切りな艶を震わせれば、微かな甘み。いや違う、でも違うって分かってても、微かな甘み、としか。な微かな甘みなら、その微かな甘みこそそれは甘みじゃないって分かってよう、な甘みが、自らを舐め回してる震えの微かな、から、その艶を奪い取り、更に甘みの艶を晒せば、ま、甘みの艶なんて贋に決まってるけれど、どんな裸もその贋の艶を纏わせて覆い隠せそうで、隠せそうなら全く隠せてて、その隠す様は全く隠せず丸出しで甘みは深まるばかりで、深まる甘みって甘みをじわじわ殺すしかしなくて。でもじわじわなら甘みもじわじわ逃げられる、その浅みは何処までも浅さを少しずつ浅めて浅みで。それって、向きを斜めに回る側へ回せば、浅みを何処までも深めてるよね、って、その回されて変わった向きなら言おうか、なんて嘯く甘みは、

甘みのすっかり失せた甘みの残り滓みたいな甘みでも甘みで、そんな甘みでは溶けて頽れて苦みかとも、な、でも甘み、甘みのすっかり失せたのを取り返したかにその偽りを隠すかに誇らしげに態とかに苦苦しげに。で取り返せたの？って、甘みの失せたに静かに纏わり付くのは、そんな纏わり付く、で、そんな纏わり付きが甘みの失せたを味わい尽くすかにすっかり吸い取れば、その纏わり付きは、一つ切りに、その一つ切りの外で必ず一つ切りとまるで違う一つ切りな自らを、真後ろの必ず自らの姿を映せる筈と何故か思えてた艶に映し損ない、それで自らは引き裂かれてその幾つもの裂け口から重い艶を濃くたっぷりと噴き出させ。そんなでさえも、それともそんなでさえなので、その纏わり付きは、纏わり付きなのを已められないなら、その噴き出させた重い艶に纏わり付くしかなさそうで、しかなさそうなら、しかもその艶しか無いなら、何にも纏わり付けずに、な、纏わり付きで、なら、何にも纏わり付けずに、に纏わり付いてるに違いなく、そんなそれではそんなそれを纏わり付きとは知れても、その何が知れるかは何も無く、そんなそれがそんなそれに纏わり付けてるか怪しくなってその怪しさだけには纏わり付けようけれど、そうする程に怪しさに呑まれてないかって疑いへは確かに纏わり付けて、その疑いへの纏わり付きにまた引き裂かれ。いや、引き裂かれるのはもう疾っくにそれより引き裂かれようもなく引き裂かれてて、そんなそれが更に引き裂かれようとされるなら、そ

れは引き裂かれるのとは異なる引き裂かれで、重い艶をたっぷり噴き出させていた裂け口は、閉じないまでも歪むしかなく、艶もその歪みに拉がれるしかなく、それでも艶を失いたくないなら、失われようとされる艶は捨てて裂け口の縁へ纏わり付こうか、いや艶を捨てるなら裂け口はその儘有り続けようとも裂け口とも知れなくなり、で何に纏わり付けるかなら、失われようとされる艶の、艶を拉がせた裂け口を歪ませた、纏わり付きを引き裂くのとは異なる引き裂きの、その異なるしかなさそうで。が、纏わり付きと異なる纏わり付きしかなさそうか、そうでもなさそうか。でも、それを突き止めて何をどうしたいの？の、何をが異なるを丸呑みしそうで慌てて身を躱せたかどうか、その躱せたかどうかの身へと、纏わり付きと異なる纏わり付きが絡め込んでそうで。な筈も無いのは、身が丸きり嘘だからにしろ、嘘だからこそ、何をがに丸呑みされそうな異なるへと嘘の身を寄せ、異なるを嘘へ巻き込んで。いや嘘は何も巻き込めないよね、なら異なるは独り、身の嘘に剥がされて、きっと裸で。あぁその裸な異なるだけだよ、裂け口を歪ませられるのなんて。そう知れれば、纏わり付きはもう何に纏わり付くも無く纏わり付きで、纏わり付きと異なる裸に。いや、裸に、なんて何の事でも無い、嘘にさえ成らない、だって何だってその儘に裸になんて成れるだろ、って、異なるが裸にを吐くように捨てれば、纏わり付きも何の事でも無くなるかに異なるを離れ、独り異なるだけが、そこに異なる、

で。な、そこって何処？って質したいけれど違うよね、そこって何処から？って質し直さないと、いや違う、そこって何処から？なんて、そんなそこなんて何処にも無くて、なのでただ、何処から？で、異なる、で。そんな独り異なるが、知らず、何の事でも無いかの纏わり付きに纏われ付かれてるようなら、それっ切りかも。何なんて、顧みられる辺りを顧みられるのは、そんな独り異なると異なる異なるしかなく、そんな異なるは、独り異なると異なって独りでは有り得ず、えっとそれって、甘みの失せたでも甘みでも無く、高みでも円みでさえ無く、何の艶も届かないなら、歪んで行方を眩ました纏わり付きの裂け口位しか無さそうに、そうでも無さそうに、その無さそうに、だけが浮かんでは消えるようなら粘り着いてて、って、何処に？いやだから質したいなら、何処から？って質し直さなくちゃいけなくて。でも何処から？って質すここを何処に？って質せないなら、何処から？と有るかも知れないことは繋がりようも無く、何処から？なんて、何処へ何処が何処な何処から？な問いを放り捨てるみたいなもんで。うん、その放り捨てるは巧いね、だって、幾ら何を放り捨てたって、放り捨てられたそれはその放り捨てられた辺りに留まって放り捨てようも無いんだから、そんな放り捨てようも無さが、何処までも粘り着いて。何処までも、なんて、嘘だから何処までも、に。あぁそんな嘘な何処までもに粘り着きは粘り着いて已まないのかな、きっとふっくらとに、ふっくらとにと幾ら違っても

ふっくらとに、でだけは違わなくに。その粘り着いて已まないのかな、なきっとふっくらとに、って、きっと、その粘り着いて已まないのかなともきっとふっくらとにとも異なってそんなそれで、だって、で無かったら、その儘に、何にも粘り着けず、何からもふっくらとにでも有り得なくて。かどうかを知ろうとする、そんなそれと異なる粘り着きのふっくらとにが、何処から？かの、その何処、から、その異なる、を覗かせて無いか。見付けたぞ！何処から？って、異なりの覗かせなんだ、って、決めて掛かりたいな、って、粘り着きが、見付けたぞ！に絡み込めば、それはそれごと、見付けたぞぉ？へ吊り上げられ吊り下げられそうで。いや、そう有って欲しいもんだけれど、もう高みなんて遥か異なるの向こうに違いないなら、見付けたぞ！は、ただ捩れて歪んで、いや違う、その捩れも歪みも呑み込むから、きっと絡み込む粘り着きな粘り着きで、重い艶でも隠してるみたいに。なら、異なりの覗かせは、きっと、その粘り着きない粘り着きへ裂け口でも開けるのかな。それとも、粘り着きな粘り着きが、その裂け口を鏡に映すみたいに、異なりの覗かせへ向けて、その裂け口を開けさせるみたいにするのかな。の、するのかな、って、異なりの覗かせに何をする事なのかな。の、かな繋がりのかなとかなとの異なりが異なりを覗かせるなら、裂け口が…。いや何も裂けてない、いや裂けてばかりでもそれらを纏めて塞ぐ閉じ口が、閉じる儘で異なりを覗かせてようね。でなかったら、かなは繋

がらないからね。でも繋がれば、かな繋がりは直ぐに途絶え、それはその先をどのようにか裂くしかなかろうに裂けなくて、苦し紛れにか閉じ口を開けるでもするしかなさそうなら閉じ口に塞がれて隠されていた裂け口が揃って蠢き出そうか、先走るみたいに、粘り着きの粘り着きのふっくらとに、それとも、そんなそれと異なるふっくらとに。の、どっちかな？な、かと繋がりは断たれるなら、どっちかな？なふっくらとに、は、その儘に裂けるしかなく、そこに裂け目が口を開けると知れるでもないけれど、そこに、ふっくらとにの異なるを覗かせてるのからは逃れようがなく、って、何が？って尋ねられるのは異なりの覗かせるかないから、それで、それはそんなそれで、な、そんなそれは、そんなそれらしい間も少しも取れない儘、ふっくらとにの異なるを覗かせに、落ちるか吸い取られるかしてて、でも落ちると吸い取られるはまるで違って、どっちかな？な、かな繋がりなんて始めから無いなら、落ちると吸い取られるの間の、どうにかで。な、どうにかで、は、な、どうにかでさえあれば、どうにか成りそうで、成りそうって事は成れてなくて、どうにかにもどうにも成らないなら、それは、ふっくらとにの異なるを覗かせと二つ切りに互いを食い合おうか、の、それって何？なんて尋ねられるの？の、尋ねられるって何だっけ、って、そんなそれが、何だっけなんてそれが何だって知れるもんか、なんて嘯くしかなさそうなら、そんな二つ切り。あぁぁそんな二つ切りの何て、ふっく

らと。何の異なりもない、ただふっくらとだけふっくらと、だなんて、それこそ、嘯きの中の嘯きだろうさ惚けるなよって、ふっくらとにの異なるを覗かせが、その柔らかそうに蠢く裂け口に見せ掛けた鏡に映る影でも遣わすみたいに、ただふっくらとだけふっくらとに割って入らせるでもしたらしく、だって、ふっくらとにの異なるを覗かせが、その自らの遣わした影とだけ二つ切りな、そんな姿が有るなら姿を、何処かが有るなら何処かに、映してそうで。映してそうなら鏡かは知れないけれど、それは僅かでも艶の内へなら映ってようか、いや何処なんて何処にも無いんだよ、何処から？しか無いんだから、なので艶の内に見せ掛ける艶の外だろうけれどね。なんてまた嘯けば、それとも、何？って尋ねられるのって尋ねられたそれにすれば嘯かれれば、鏡かは知れないけれど、艶の外に何が映ろうと、二つ切りを、映し合うのとはあべこべの、互いを互いから距てる為の、鏡かは知れないけれど、で。ならそれは、二つ切りの内の一つにしても、もう疾っくに、ふっくらとにの異なるを覗かせに奪われるだけを奪われ、ただそれだけのそれでしか無く、な、それなら、却ってあべこべさえあべこべから引き剥がしに掛かれて、その裂け口に更に斬り込めば、一つ切りに艶の内へ自らを映し込めようか、な一つ切りの艶だよ、見付けなくちゃいけないのは、なんて勇んじゃいけなかったんだ、だってそんなのふっくらとにの異なるを覗かせの奥に幾らでも覗き込めて、こっちを艶艶と嘲笑ってよう

し。いや嘲笑うかは知れないけれど、艶艶じゃなく、数知れず滲み出す艶艶がそれぞれをギザギザに引き裂き、それで艶と異なる艶を真上へ向けて粗っぽく放り捨ててないか。ないよ！って、その見損なわれたかなギザギザが真上へ向けてを切り裂き、いや真上へ向けてなんて、どうにも切り裂かれるしかないならどうにも自らを切り裂いてて、ならギザギザ程艶艶でそれがまた切り裂かれて艶艶なら、一つ切りの艶の見付けなくちゃいけないには戻れる筈も無く、艶とはまるで異なるその艶艶は自らを引き裂けも出来ずギザギザも失って真上へ向けて。確かにそんな真上へなら、ただふっくらとだけふっくらとを探しに行けそうだけれど、の、行けそうだけれどのふっくらが伸し掛かってふっくらは潰し合うようで、円み。いや、かは知れないけれど、円みならば欲しいよな、って、何？って尋ねられるのって尋ねられたそしは、その欲しさの失せるのを止めようと円みを装えないかと丸まる振りなどてそうに、ふっくらの潰し合いへさもふっくらと溶け込むかに身を捩り。なんる捩っちゃいけないに決まってるって直ぐに分かっても手遅れで、欲しがられか円みは捩れて、円みを欲しがっても捩れた円みでしかなく、な円みって円みか？って捩れた円みの中の捩れが円みを捩れたごと呑み込むようならら呑み込んでて、な筈無いさ、いや仮に呑み込めたにしたって裏返せば吐き出してようさ、って、何？って尋ねられるのって尋ねられたそれが、そんな呑み込みの吐き出しを遣ってみせるみたいに、自

らの身の捩りの捩り損ないを、欲しい円みを呑み込み吐き出し損えば円みの幾らかを捩れから取り返せそうかに、ふっくらの潰し合いへ溶け込めはしなくても軽く触れられたかに、でも直ぐに重く真下へ捩れるしかなく、その、しかなく、に、僅かな円みの面影を放り捨てられたかに。なら、どうしてそれを放り捨てられたかって、そんなの尋ねられる筈無くてな面影に違いなく、違いなくな儘失せるにも違いなくに、その面影の内の僅かな円みの面影は、それを、僅かな、にしてる全てを呑み込むとかしてそうで。な筈無いさ、だって全てなんて嘘だからね、って、全てって事にされたそれがその全てに抗うなら、その抗いこそ真っ先にその面影に呑み込まれ吐き出され、で、そんな面影も自らを吐き出すけれど吐き出すばかりで後が続かずに、な面影の内で円みは、それをなぞるかに円みから円みを吐き出し、捩れようのない円みを円みと異ならせて、その円みを円みへ呑み込み、何の面影も跡形無く消し去り独り円みしかなく。を、何？って尋ねられるのって尋ねられたそれは、そのそれをそんなそれとして何処へともなく映したんだよな、いや違う、何処から？から映されたんだよな、で、その映されたのをきっと鏡みたいな自らの艶へでも映したかな。だって、そんな一つ切りの艶の他に何が有るの？って、そりゃ他なら何だって有りに有るだろうけれど、の有りに有るの他の何だってなら、円みと異なるでも纏おうか、な有りに有るへと噴き出す面影とかかな、なんてそんな面影の影でも

真下から傾いて何処へとも冴え渡ろうか、な冴えた影の真下を背くげな傾き返って延び逸れるて震えの、何て嘘臭さな嘘臭さとか。でもその臭さ臭さとかって真下からだよな、って傾き返りの傾き直しが、真下に沸き返るみたいに真下を消して消して消し損なえば、真下は消える替わりに消し損なわれた、円みと異なるでも纏った、きっと円みが臭さ臭さとかも突き抜けてれば、何の嘘もその円みに呑まれてようか、な円みなら、何処から？から映されたに違いないなって、それを映した一つ切りの艶が、自らを映す鏡でも覗き込んで確かめようとするようなら鏡なんて嘘丸出しに砕け、一つ切りの艶は円みを映すも無く自らの一つ切りへ躍り込み、円みを映した筈の何処から？へ擦り寄れるならそうしようかと。な艶こそ、砕けてよう、でも一つ切りだけは、そこから延び逸れて、何？って尋ねられるのって尋ねられたそれへ、戻れるならそうしようかって、それを真上へ見下ろし損なう円みと異なるなら欲しいよな、ってでもその一つ切りの一つ切りがそれを妨げるなら一つ切りだって砕こうか、なんて一つ切りは、さも円みに沿うかにギザギザとも艶と異なるを延ばし逸らして、態とかに円みを見失い、見失えば見失うも見失わないもなく円みは見えに見えて失われ、その失われを映す何処から？に円みの面影でも与えられるかのようなら、何処から？は、捩れて詰まった溝だったみたいに埋め戻されたかで、あぁそんな何処から？が、円みと異なるなら欲しいよな、って、何処から？から追い遣

られた独り円みが思えば、思う儘に、円みと異なるで。でも、思ったかどうか知れないなら、円みと異なるは欲しがられる程、円みと異なると異なって円みで無く。アハハ、円みで無く、は巧いね、円みで無くが円みで無くって思えば何だって円みで無く、で。の何だってなんて何でも無くて、な、無くてばかりが有りに有ろうからね、そんな有りに有る無いなら円みでしかなければ、だけど。でもきっと違おうね、違っても違わなくても違わなくに、とは異なって。その異なってが欲しかったんだ、それで独り円みから抜けられようからね。で、さっさと抜けて異なっても要らなくなれば、何？って尋ねられるのって尋ねられたそれが見上げるなら、独り、ふっくらとにの異なるを覗かせを見下ろせて。いや違う、見上げ下ろしてるのは、ふっくらとにの異なるを覗かせで、何？って尋ねられるのって尋ねられたそれは、それよりこっちがどっちか知れないこっちで伸び伸びと縮こまって、そっちって知れてるこっちでないへ延び逸れて、ぬるりは温い。いや違う、ぬるりは温いでだけはなく、ぬるりは温いと異なるでも無くに。な、無くにが口を開ければ、ぬるりと温く、ふっくらとにの異なるを覗かせにそっくりで。でもそっくりなだけじゃそっくりなだけが口を開ければぬるりと異なるに違いなくに、ぺろりと艶の裏返しかに、そっくりだけが奥へ拡がって何のそっくりでも無くなれば行き止まり、行き止まるなら必ず越えられよう、って、その先の光りでも迎えるかの勢いで、何？って尋ねられる

のって尋ねられたそれが身を乗り出そうか、な身こそ必ずかに、さも何処から？からって来た震える躍りにそっくりで、でもそっくりなだけじゃ躍りは躍れず震えも止まり、な、そんなそっくりばかりが噴き上がって全てを呑み込むようなら全てなんて窄んで歪んで隙間を閉じられない口みたいに一つ切りの消えた影に違いなく、そんなそれがそんなそれをそっくり真似るしかないなら何のそっくりも無くなるに巻き込まれて独りは消され、消されて独りで。そんな独りに光りを迎えに遣ろう、なんて思っちゃいけなかったんだ、だってもう、光りは、光りそっくりのまるで光りで無しに噴き上がれば凍るみたいに狭まって、独りなんて丸裸の裸も剥がされ裏返りも出来ず、光りで無しに切り摘まれ包まれ、その包まれは包まれそっくりに幾らでも行き止まりに組み敷かれ。で、光りで無しの噴き上がりも始めから行き止まりの影でしかなかったって晒されれば、その晒されの何て、ただ温さ、ぬるりなんて少しも許されず。そんな晒されの温さに成り行きを委ねるかに滲んで行くしかないよ、って何が？なら、光りで無しに切り摘まれ包まれた独りの丸裸の剥がされしか無かろうけれど、って、ふっくらとにの異なるを覗かせの奥の円みなら円みかに思わせたいけれど、そんなの間違いに決まってるって、何？って尋ねられるのって尋ねられたそれが、いや、そんななそれなんて疾っくに、どんななそれにも遅れを取って、何？とも尋ねようも無くに、何処から？に呑まれて、どのようにそれでも有り得ずにな

それでしか無くに、そのそれ自らだけを覗いて、その覗かれた自らにそっくりに、自らにそっくりとしか始められない始まりを何処から？の直ぐこっちへ晒してるだけで、な、こっちならこっちだけがそんなそれをそれにしてようとも、それって、それにそっくりなそれでしかないなら、それでも無く。なら、その、それでも無く、の後には何の無くも無かろうね、って、ふっくらとにの異なるを覗かせの奥の円みなら円みから思われてそうに。そんなそれ、いや違う、それでも無くなそんなそれは無くて、そんなそれとの異なりならそんなそれとの異なりが、ふっくらとにの異なるを覗いてるから、その奥の円みなら円みから、それでも無く、の後には何の無くも無かろう、って思われてそうに、って、そんなそれとの異なりが思ってようか。って、何が思うかなら、晒されの温さしか無さそうかなって思う、丸裸の裸も剥がされ、光りで無しに切り摘まれ包まれ、その包まれは包まれそっくりに幾らでも行き止まりに組み敷かれてる独りが、円みなら円みを欲しがるに違いないって自ら決めて掛からないでは、何の覗きも覗かせも失われそうで、失われそうなら失われてて、それを独りだけが独り抜けて独りな独りは、そう独りばかりでは自らを独りと知れずに、知れる自らを失い、ただ知れない自らな独りで。って、そんな独りが覗かれてないか、って、その覗きを晒されの温さが覗けば、何の晒されも要らなくなった温さだけが、何の替わりをしてるのかも知れずに、円みなら円みを欲しがるなら欲し

がるしかなく。いや、欲しがるしかないなんて欲しがってないと何が違うのか
な、って、独りが、その温さをそっと窺えば、その温さに自らが覗かれてると
知れて、独り。いや違、違わないのかも知れないけれど、例えば温さに覗かれ
独りじゃ無くに独り、とか。な独りなんて要らないよな、ってその丸裸の裸も
剥がされた姿でも探すかな身振りの面影でも光りで無しの噴き上がりの痕に追
うように、独りが独り躍ろうと震えるその震えの裂け口を開け、どっちからも
こっちからも引き剥がされた、何処から？が覗くなら覗こうか、でも何がそれ
を覗くのかな、それは何処から？しか無いよ、って何処から？が何処から？を
そう覗くのなら、何を覗けたのやら、って、そんな覗きかも怪しい覗きに覗き
返されたに違いない、違いないって言わなくちゃいけないって違うかも知れな
い何処から？は、何処から？って尋ねられるしかないのかな。でも、そんなの
知らないさ。いや知らないって何かも知らない知らないに何を知らないも無く、
替わりにその知らないを引き受けるしか無く、に、何処から？それとも独り。
な、それとも、って、何処から？も独りも置き去りにして、何処へ？へ消える
かの身振りの身を裂けば、その尖ってそうな砕けて煌めく、円みの届かない向
きを幾つかあれこれ引き受けて奥へ流し出す震えを、その先へ満たしに掛かっ
て、それとも自らの裂け口を開き、閉じ、それともを成し遂げようとするかに、
円みの届かない小ささを試すかな固められた光り、それとも光りとの異なりを、

それとも自ら、へと溶かし込んで消え。で、消えられたそれともに置き去りにされるのは、何処から？でも独りでも無く、だってどちらも開き閉じた裂け口から弾かれてきっと砕けて互いを覗き覗かれ合う楽しみに取り憑かれてそうで、何処へ？の独りとの異なりだけが置き去りにされてて、いや違う、置き去りとの異なりだけが、何処へ？を包み隠して、ふっくらとにの異なりを静かに欲しがるようで、あぁその静けさの指し示す先の向きの何て奥の浅さ、でも奥は脹らみも裏返りもせず頑なに奥な儘で、ふっくらとにの異なりを映せそうな艶を借りて来たらしいけれど、何処から？いや違う、そんな何処から？の使い方なんて無いよ、って、何処から？が口を開ければ、まやかしっぽく深そうなその奥に包み隠された何処へ？が覗いてそうで。でもまやかしっぽさは直ぐに剥がれて深そうって少しも深くないって分かれば、覗いてそうの嘘は直ぐに暴かれ、何処から？と何処へ？は口付けでも交わすみたいに、アハハ、いやその嘘だけは吐いちゃいけないよ、って、静けさが黙り込んで震えて訴えるようなら、何処から？と何処へ？は、そんな黙（だんま）りの震えを恨んで殺し合うしかなく、どちらも失せれば、その失せた後の恨みの痕のふっくらとにの異なりは映されるしか無かろうに、艶に辿り着けずに映されようも無く。な艶なら、裂け口を取り囲んでようね、でも何の裂け口？それともその何らが何だろうと構わずに、艶の裂け口を取り囲んでようか。それともその裂け口が艶なんだ、って、

それともが身を捩って裂け口と艶を繋ごうとして口は閉じられ艶も流れ。そんな流れの何て流れ無さ、って、流れと流れ無さの異なりが黙りを決め込むなら替わりに叫ばされるのは、艶を覗き込んでその映された覗きを覗かれる覗かれで、それとも覗かせで、それとも覗かれと覗かせの異なりで、それともその異なりと異なるなら覗き覗かれる互いを映し合って却って何も映せない艶の震えなりで、いや違う、何も映せず震えられる筈も無くに、そんな震えと震えられないの異なりなそれで。な、それらどれもがどれとも異なりそうに、その異なりに溶かされてようか、それとも切り裂かれてようか。どっちでも無さそうならどっちでも良さそうに、それらどれもがそれぞれに、その何処から？と何処へ？を映し合って、で、その映し合いの向きがややこしく入り組んで、それらの何処から？と何処へ？は繋がり捲って何処からも何処へも無くなろうかって、そんなそれを覗き込めるのは、何処から？しかなく。見付けたぞ！って黙り込んで、そんな覗き込む何処から？へ映り込むのは、小さいだけ小さいその小ささのきっと面影で、いや違う、なら、小ささとその面影は傷付け合って固まって、そんな塊なら幾らでも先に見付かろう、って、見付けて仕舞えば一つも見付からなかったに違いなくかに、纏めて押し詰められて包み隠され。その包み隠されの爆ぜて千切れるような柔らかさは、先へ先へ、首を振り下ろすように躍って静かに消え続けるかに、向きを変えられない儘に延びては向きの他は変

わりに変わる姿を切り刻まれ。きっと、そんな向きの変えられなさのせいで、何処何処へ？は凡ゆる向きへ行き過ぎて再び戻らないに違いないかな、って、何処から？が、そんな何処へ？を追い抜くなら、何処から？を何処から？と振り返り、その何処から？を探す何処から？は何処からも見付からないって見付けて、何処から？は再び戻れなくて失われ。戻れないって何処へ？ともう再び尋ねられずに。で、包み隠された、傷付け合う小ささとその面影の固まった塊だけが、残されたか残されなかったかな柔らかさが、変えられない向きまできっと失ってれば、柔らかさのどうにもならなさを受け容れ、そのならなさを失せた甘みと味わうその甘みの失せたは柔らかさを受け容れず、柔らかさも甘みの失せたを受け容れず、甘みの失せただけで食み出して行く苦みの失せたとも微かな違いもなく入れ替われる甘みの失せたには、その外を見出せず、なら内も見出せず、失せたでさえ有ればどうとも異なる味になって、傷付け合う小ささとその面影の包み隠されへ戻りたかろうな、って、包み隠されから辛うじて漏れて外へ滲み出られるなら小ささの面影が、その味の失せたを味わおうと面影なりの光りでも恵み注ぐように、いや違う、って抗うのは包まれた儘の小ささで、それは、包まれの内の真ん中へ自らを消し去るみたいに、小ささなんて始めから有りもしないのになって、暗さを知らない儘に微かに光っては有りもしなかったせいで輝けた煌めきを失い果てては甦り、煌めきは諦めるしか無くに。な、

小ささ、それとも小ささとの異なり、それともその異なりとの異なりな失せた小ささの小ささの失われよう。な、小ささ、なので何にも包み隠されず、円みをも円みに随う裂け口をもその覗かせをも斥ける、裸にもこうにも裸を剥ごうにも裸を知らない、知らないなら裸なんて無い、そんなそれが、その失われようにに囚われて失われようを失えば、小ささはその有る無しに拘わらず小ささとだけは必ず異なる、その異なりようの異なりようと異なり続けて独りな、その独りなを連ねて遂に小ささを抜け出せたかなって見通しだけなら幾らでも連ねられた独りなを切り刻むかに、独りなとの異なりの断たれてはまた異なり続けを有る筈も無い小ささへ向け。え、何が何へ向けられたって？の光りの面影かな、その一つ切りの向きを包むふっくらが、有ってても構わない小ささへ向かうなら、何の異なりも異なりとだけしか異なりようは無くその異なりようへ失せ、ふっくらが小ささを照らし包むのを向かわれた小ささと異なる小ささへ映されるのを促そうか。予めその拒まれるのを知ってたかに柔らかく、それとも柔らかくだけは無くに柔らかさを固く尖らせてはその柔らかさな儘を貫き通し、その貫き通しに付き纏う光りを恋い求めるのか濃く刻まれる影に傷付けられて同じ痛みを数しも知られず並べて。あぁその数の知れなさだけは、小ささを何に映すも無しに小ささの儘に数えられよう。小ささだけは必ず数えられて小ささなように。なので柔らかさなんて要らないんだって、柔らかさは自らその尖らせ

た固さを解そうと自らの含む光りを探って探り損なって、ふっくらを遥か遠くを口に含むかに舐め回すかに、固く尖らせ。いや、そんなのずっと先から後まで違おうね、予め違おうなって知れてなくちゃいけなかったに違いなくに、って見通せて数えられ続ける小ささに小ささの先も後も知れる筈も無いなら、小ささとさえ異なれずに、小ささは小ささへとだけ小ささの外から弾かれ、小ささを逸れれば逸れた儘に追われるように必ず数からも弾かれ、そんな何に映るも無しな、それとも映ろうか、な、一つ切りと異なる向きの変えようを、（二〇二一年六月二一日）

（を知らされてた儘でしか…）

　を知らされてた儘でしかなかったなんて、に二つな、その繋がりは、二つなりに独りなそんなで、そう知れればどうやら前からずっとそんなで、にしてもその二つなりが、知らされてた儘に、独りなを独りなでさえ無くさせようかって、そんなそれ、いや、何がそれかを見通せる、風の音色の厚い刃を連ねたような重い溜まりやらそんな風の溜まりに侵されたかそれとも風さえ掠りもしな

いかの遠過ぎてうっかり噎せ返らされて仕舞う水の憶えやらは、失われたか少なくとも失われてそうで、に失われるより、もっとその妨げになるかにその儘なようで動かずに、それで、そのそんなそれをそれとも見通せないのなら、知らされてた儘なんて必ず通らなければ済まないながらにほんの一通りかとも、でもほんの一通りで却って他の何も通せなくなろうね、有り得たかも知れない無くした儘のそれらを取り戻しようも無く、なんて重ね重ねにも重ねようも無くに酷く薄っすらと酷くに定められ。な定められなんて見向きもしないさって、真上へ拡がって已まない虚ろな円みに映る定められの有りもしない影と渡り合うかに、息のざらりと挑み掛かって来るような乾いた硬さを一通りに重く磨かれてそれを呑んで嘯いて、唯一つさっきまでならまだ手に取れたか口にも含めただろうかな古馴染みの高みのざわめきには背を向けるしかないなら、それらざわめきに限ればそれまでと変わらずにも、二つなりに独りなを振り返られる向きを切り剥がされ、低みへ延び逸れる何のざわめきも根刮ぎ変えられて、に、断ち切られ。そっと。断ち切られ？　断ち切られ、って何だっけ、とだけなら言えるかな、だって何だっけは何だっけの言い始めから放って置かれてようかららね、何だっけの他は断ち切られて尽きて仕舞ったようなら忘れる事にしようかなって、そっと、は、踏み躙りたくても叶わず。その踏む足も古くから知ってる高みのざわめきの青青と思い違われてよう瑞瑞しいのが痛そうな傾きは、

高みの高みに抑えられるからか直らなくて、整う程に酷い燃え方の燃える姿を隠す火に苛まれるかに苦いよね、然もその傾きだけがその傾きの刃で自らを切り刻んでて、なら背を向けてさえそんなように苦さが、風の音色の厚い刃を連ねたような重い溜まりをぐずぐずと透ける筈も無さそうに、透けた一息に透けて見通せて、目を背けたいけれど、背ける目だって傾くしかなければ痛いに決まってよう、に、痛みなど吹き消されてるのが何？知らない、知るなんてほんの詰まらない痛みでしかないみたいに、でも詰まらなさ過ぎて消すに消せなん痛み、でもそれもきっと火を青くばかり見るような小さな事さ、って、ざわめき改まる高みのざわめきから身を逸らせるならきっと逸らしてようね、それでも水の憶えばかりは、その手前に切り出された幾つかどれとも違う形の上っ面ばかりザラザラとも常に水を含むだけ含む石が、繰り返し凍りもしたろうそれとなく目立つ砂の固く敷かれた隅に真っ先に積まれ、その遠い程に必ず真っ直ぐに見通せてそうで、低く吊られて重そうに、傾くからも傾かないからも見放されて行き泥める処さえ無くに。そんな水の憶えなら二つなりをまた一刺しに貫き直そうし、そうでだけまだ二つなりかなとも真つ直ぐな筈な見通しは揺らぐけれど、って、潰したくに目を高みのざわめきへかと向けるしかなく、風の音色の厚い刃を連ねたような重い溜まりの削り淬でも硬く盛ったに違いない棘棘と隙間のない脹らみに遮られ、そっちは断ち切られ、いや、そんなの断ち切

られとまるで異なる成り行きの果ての行き倒れた凍る刃のような円みの骸かな、ここへ至っては円みとだけは必ず異なる。だって、その円みからして違ってて、その違いの果ての円みの骸だものね、なので目を潰したくに目を逸らそうかなって、な目も潰れる先に失せたかと、そんな目を覆うかしたろうか、動いた事もない癖に常に新たに見知らぬげな低い空から遣わされたかな何時見ても見知らぬげをこれ見よがしな風こそ、味は拒む白い泥の混ざった水を含み直して棘棘も過ぎれば円みを帯びるかと帯びずに脹らんで固まるようで、高みのざわめきなどはすっかり枯らして来たぞ、そんなの容易い事さ、って嘘丸出しに、また硬みを脹らませ、な姿にも風は吹き已むか吹く儘かに、な、そんな眺めに立ち向かえようか、なんて思い倦ねるなら、切っ先の影を硬く延ばす儘なら身を波打たせて見た事もない円みの骸かに踏ん張りでもして立ち向かってるに違いなくに、な身はじりじりと後ろへ、荒い造りの隙間が頼りの空箱のように強張る背中にひやりとぴたりな窪みでも探すかに、で。いや、そんな窪みはもうきっと青黒く青く透けて果ては抜けた水の底の青より透ける黒さに届いて背中をぴたり捉えて窪まっててひやり、なので立ち向かわされて仕舞おうかな、な傾きに、身は窪みに背中の痕を残してすっかり溶け、なんて溶けてなくても、硬みを脹らませる風に、身を解しもする柔らかな時ばかりか吸う息までも奪われ。でも微かな吐く息だけで、傾きにどう風が棘棘と立ち塞って眺めを汚そうと汚

す程に汚し返して已まず、低い空から袋のように吊り下げられて醜く脹れただらりと幅ばかり利かす、どっちへとさえ狡賢そうに回り込みたそうな眺めを、切り裂く振りで先行きを切り開けるのなら、その眺めの汚れ切った腹の中を、奪われた息の替わりに、湧き出て已まない泥でも吸うように渇いて乾いた喉に圧し込むしか無く。なら身こそ一つ切りな傾き、いや違う、いや違わないかな、に、いや違う、だって一つ切りな筈が無いものね、傾きなら水の憶えに噎せ返らされるように傾き返されようと傾きでも。でも一つ切りと異ならなければ影さえ掴めなかろうな二つなりな傾き、でも何でそんな傾きをこの声へ継げようか、思い付きの俄仕立てにも程があろうに、な、二つなりな傾きを捨てて縋れる響きの高みでも掠めるにしろそれは、独りな、と、どれ程に異なれようか。その独りな、が、避けようもなく二つなりな傾きを二つなりな傾きと異ならせ、その異ならされた異なりを追いたくても、傾きは傾きに抗って傾きの妨げとなるようでは、独りな、は、独りな、の儘に独りな、とは異なりようは無く。な、継げようもなかろう声の傾きかを継いで仕舞ったかな、それとも、し損なったかなようなら、ぁじゃ、もう良いよ、に、独りな、は、きっと何の独りなでも無く。その、きっと何の独りなでも無くだけが、流れて行こうね。いや違う、流して行くよ、それ独りだけの力で、それが流せるものを流せる限りに。その切っ先は必ず傾きに色めこう、他の色はどれも流れに振り払われて身軽に。その

んな色めきの軽みなら独り二つなりに、傾きに抗う傾きなんてつるりと置き去り、傾き自らに傾きを激しく傾れ落とさせて行こうか。流れは変わらず、きっと何の独りなでも無くな儘に。って、その色めきの軽みが、流れの切っ先から振り返ったのかな、なんて、うっかりそれを高く放るような目で追うみたいに振り向いちゃいけなかったんだ、だって振り向ける向きなんて無いよ、って嘲笑ってそうな斜め仰向けな窪みが、窄まって薄い青みを隠す振りで隠しもしないで含んで今にも冷たい背をつるりと重みを含んで凍るように向けそうで、その窪みの低みに放られるような色めきの軽みは、その傾き自らに傾きを激しく傾れ落とさせるその勢い任せかに、その窪みを動かそうと、何処へか突っ込んで行ってそうで。なら、色めきの軽みは疾っくに跡形も無く、でも、色めきだけそれとも軽みだけのどちらか一つの跡形なら、流れの傾きに薄っすらとでも、色めきだけと軽みだけとが互いを打ち消し、色めきならその軽みを軽みならその色めきを酷く弛く揺らめかせてようかな。そんな揺らめかせが、きっと何の独りなでも無くな、それ独りだけの力の姿の端を捉え、独り二つなりに、独り二つなりにと異なって、そんな二つなりに独りな、に、揺らめかせの先へ、それ独りだけの力で流れの切っ先を傾れ落として行くしかなく。いや、そんなのは、もっとずっと先に初めて見通されなくちゃいけなくて、でも何で何事も無かったかに先走らされるんだろう、なんてうっかり訝る、二つなりに独りなは、

その訝りに、二つなりに独りな自らの姿を小さく映し、それは遠く近く何の傾きにも心を響かせて弾む剥き出しの円みのようで、のようならそんな円みで、でもそれ、のようでないのならでなくもあるしかない訳で、それが嫌さに剥き出しの円みは、その剥き出しの中へ吸い取られて行くよ、って、じゃ何が吸い取ったのかな？なんて訝るしかなくに訝っちゃいけなかったんだ、その何がをうろうろ探ろうとして、剥き出しの中の明るさの円みに包まれた仄温かみの中に、身を延び逸らしてる、そんな二つなりに独りなの、唯通り過ぎられる異なりの虚ろな拡がりしか他には見当たらない、唯一つな自らを唯一つなとだけ見付け、見付けたからには直ぐに始めから見付け損ねて見付け直そうとすれば、剥き出しの中の明るさの円みに包まれてるのは、その仄温かみの直ぐ外でに違いなく。いや、その外でに、は直ぐにも違おうね、でも違ってたって構わないなら違ってないのかな、な、そんな外でか外とは異なるかにでは、二つなりに独りなは、剥き出しの中の明るさの円みの剥き出しを裸に剥いて、その剥がされたり裏返しの裸を被って自らを包み直し、円みに包まれ孰れは眠り込まされようか、から抜け出すしかなくに、その外へ繋がろうとするしかなく。なら疾っくにそうしてて、って事にして、にしても、外が外とは異なるかでは何をどうしたやら、二つなりに独りなも、二つなりに独りなと異なる何をどうしたやら、って、二つなりも独りなも取り敢えずみたいに、さっさと外とは異なるな外へ

だって飛び出そうかって、あっさり砕けてばらけ、その一欠片一欠片はまるで粘りを欠けばどれも直ぐ様何とでも繋がって独りで無くなろうな独りに決まってようか、そんなで、失われた二つなりを求めてそうで。求めてそうなら求めてそうなだけで求めてなんて無いのかな、って、失われたか失われてないかあやふやな二つなりは、そのあやふやなに擦り寄り縒られるように、でも縒られたりせずに、一つと一つにならニつなりに、でもそれって二つなりか、って疑いは拭えずに、な、そんなそれって、のそれがそれをそれと顧みるなら、そのそれって、顧みたのか顧みられたのか、に、なそれなのかな。でも、でないのかも知れない、ってまた疑いは拭えずに、な、疑いからして真っ先に怪しいよな、って、その真っ先を向くと、あぁそんな真っ先だけは向けたんだって、裸に剥かれた裸を剥いて裏返された裸の円円しさを笑える楽しさに久し振りに巡り合えたみたいで。みたいなら全く巡り合えてるよ、って勇んだのが拙かったようで、あやふやなりにも二つなりは、あやふやをどう捏ねくり回しても失われてるとしか、でも失われてるって失われてないと間違いなく繋がってるとも真っ先の向きは色めいてる、その色めきの中に二つなりを追い求められてそうで。でも、な、そんなそれでは、それは二つなりじゃないし、二つなりとは距てられてるに決まってて、裸に剥かれ。って事にしたいけれど、その裸が先に剥かれて仕舞ってるんじゃ裸こそ失われてて。でも裸が剥かれたならたっぷり

と乾いた肉とじめじめと粉でも噴きそうな骨とざわざわしげに薄っぺらく暗い腹の中を剥き出してる筈が、それらしい辺りを覗いてもそれらしい何も見付からず、いや構わないよ、そんな裸に剥かれた裸が剥かれた、な、そんなそれで。だって裸に剥くも裸を剥くも、それは何でも剥けようけれど、裸なんて始めから裸で、きっと裸にだけは剥けなくて裸で。そんな裸を剥けようか、剥けたとして剥かれた裸で無くなるだけで。って、まるで裸に挑み掛かられてるみたいなあやふやな二つなりは、あやふやなって裸の事だっけハッ、とか巫山戯て躍りたいけれど、二つなりが失われてるかも知れないのでは、真っ先から真っ先にその躍りへのほんの動き始めへ斬り込まれそうで。いや却ってそれで、それともそれでなくても、幾らでも躍れてるんだ、だって斬り込んで来る真っ先からして先に深深しげに躍ってて、って、誰がそんな躍りに心を躍らせてるだろう、って、誰かを顧みるその誰らとは異なって独りなそんなそれは、深深しげが目障りで少しも躍れてなんて無く、に、独り、きっと裸に、って言いたい、ながら求めてたのは、そんな裸なら、裸で。あぁ違うよ、そんな裸って裸でだけは無いんだ、なので裸が求められるしか無いんだな、って分かれば、裸なんて始めから裸で、きっと裸にだけは剥けなくて裸で、へ戻らされて仕舞うよな。いや、戻らされて仕舞いそうなだけさ。その仕舞いそうな傾きにもう身を傾けて居られるなら、裸に剥くも裸を剥くも、何の裸も、丸まる石ころに成りたく

て成ったた血に滑るようにつるりと抜けて、独りな、かも知れなくに、きっと失われようもなく微かには必ず二つなりに、そうしてて。え、そうしててって、どうしてても無かろうにどうしてるって？って訝るなら、その訝りからして訝らなくちゃいけないのに訝れなくて、なのでそうしてるんだね、って、二つなりに独りな、がそう思うなら、二つなりに独りなだけが残り。でも、そう思ったのかな、とはどれ程訝っても訝り足らない位訝れて、それは二つなりにの間に深く傾れ込んで来てようね。でもそんなの少しも怖くないよね、何でも傾れ込んで来るんで二つなりで、いやまるで違う、何でこんな間違いが犯せるんだろう、な二つなりにしろ間に傾れ込む何だろうと見ちゃいけないんだ硬く打たれて繰り出される火の白赤い分厚さかとも見てようけれど、なってそんなで二つなりにしてられるのかって訝るどころじゃなく、二つなりの二つからして分厚く引き裂かれようしね、それともそう思うだけで二つは分厚さの先まで引き裂かれようかな。でも引き裂かれてだって引き裂かれたからにはやっぱり二つ、なんて間違いでさえ無く何の事でも無くなり、怖くないなら怖いは通り抜けられたかで、独りな。いやまるで違うけれど何が違うのかな、知らない、その知らないは知れて、きっと怖いも独りなも始めから知れてたと知れたなら、どっちも無かったかも知れなくに要らずに、要らないなら要らないとは要るにしても、そんな要る儘に遥か要らない辺りへ距てられ、どうとも知れなくて。な、

知れなくて、が、硬く打たれて繰り出される火の白赤い分厚さの憶えにでも圧されるからかな、だって他に無く、に捨てられるしかなくなれば、尖る切っ先のれっ先を向く、そんなその向きに真っ向向かって来るのって、そんな向きには必ず向かって来よう筈も無い何？なんて尋ねる積もりもなくに、その真っ向へ渡りを付けたいかにそれを探して仕舞うそんな切っ先は、いや違、違わないのかも知れないけれど、きっと切っ先なんだろうけれど切っ先にしては遠く微かな横から硬いけみにやんわりと磨り減らされて嫌という程ギザギザに削り出されたみたいにあやふやにぶれてるようでだその何が異なるかはっきりしないそんな切っ先、ならその切っ先との異なりばかりが切っ先など圧し潰したかに一つの眺めみたいに拡がり、でもみたいなだけなら眺めじゃないって眺めてせば、って誰が、そんて尋ねるのは嫌でも切っ先しかなさそうだけれど、って切っ先を顧みる、そんな誰かに違いないかなウン違いない、って思うそんな誰かとか、な誰かなんて見付かる筈も無しに、な無しに、を見付けられるのは、切っ先との異なりしか無くに、でもそんなの嫌さに、その異なりが異なり自らを裏返すみたいにその裏返しの動きの中へ逃げ込もうなら自らへ逃げ込めたのかな、でも自らが異なりじゃ、逃げ込めたそこは逃げ込めたそこと異なるしか無くに、その異なりの裏返しの動きばかりが空回りする中で、異なりを裏返し返せないなら異なりの儘な、な異なりと異なるそんなそれで。なそれなんて見付

かる箸も無い替わりに、それは、眺め直され直されるる眺めで、そう眺められる度に眺め直され直さるる眺めへと眺め渡って、そんな先へ先へな向きへ眺め渡してて、でも、な眺めはどれも眺めと眺めを繋げられる色も味も色と味を混ぜた粘りも働かせられないでは、先へな向きの先へは少しも向かえずに、なら、先へ先への先なんて始めから眺め渡され損なってたに違いなくに、どっち向きからも拒まれるかに潰さるかに潰されてて。って何に？ならなら知ってる。その知ってるそれだよ、ってそれが言うなら、硬い円みに捻曲げられた果ての蜷局も巻けそうにないひょろりと頼りなげな譫言かも知れないけれど、な譫言の何がいけないのかな、って譫言にきっぱり言われて仕舞っては、眺めなんてどう眺め直されようと、直されようもなくそれっ切りで。ああ、な、それっ切りな眺めの何てそれっ切りな眺め、が、もう円みにさえ捻曲げられようもない浮ついいた譫言なら、他にどう言うも言えるかも知れず、も言う事なんて要らなくて少しも構わないんだけれど、そんな眺めだけがそんな眺めに眺められ、その眺められに埋もれ、切っ先との異なりと異なるそんなそれは、眺められを眺め返して独り、でもその独りって、必ず二つなりに独りなな、独りなに違いなく、だってその二つなりは引き裂かれようと裂かれまいと間に硬く打たれた火の白赤い分厚さの酷さよりも思いも寄らない何が傾れ込もうと、切っ先との異なりと異なるそんなそれが向き合う眺めの眺められがそれっ切りなら、二つなりな切

りに、一つと一つとにはもう、離された憶えも消されてようかに離されたりしないからね。な事は始めからずっと知れてて、知れ直されると始めからは忘れられ、それは知れなくもなって、って何が？だから離される一つと二つでしょ、な、一つと一つなんて離された憶えも消されてようかでもしたら始めから知らないし始めから知れない事をどうして知れなくなるかって、あぁぁこんな疑いが傾れ込んじゃいけなかったんだ、でも何処に？って眺め渡してもその眺めの眺められの何処にも何も傾れ込んでなくて、なら何処から？なんて眺められに抗うような身振りこそしちゃいけなかったんだ、だって、何処から？の、何処、はまだしも、から？は、切っ先との異なりと異なりへなんて向ける筈は無く、だって、その異なりと異なりな程にそれへ向けるのはやっと、何処へ？でしかなく。いや違う、こんなのは遠く微かな太太しげな直ぐ横へ要らなくなって帰らされるかに取り消された譫言でさえ無く、寧ろ、眺められに抗う何処から？が、譫言も何の何との異なりも丸ごと弾き消し、二つなりな切りだけが、その切りな切っ先を、何処から？に真っ直ぐに沿う向きに、その何処から？の真ん中を突っ切って突き抜けられるかに延ばすしか無くなって、でも突き抜けられないから切っ先なんだって直ぐに知れれば、その知れたは忘れて知れた憶えだけが切っ先を尖らせるようで、ようなだけでは少しも尖らせてなく、でも替わりに嫌でも傾かせるしかないその傾きには切っ先なんて有る筈無くに傾きで、

だって傾きはその向く先へ傾れ込んで傾きで、切っ先は常にその傾れ込みに呑まれて傾きの傾れは勢いを失わずにその流れの姿だって自ら見晴るかせようかね、なので流れは流れるって事で、きっと。いや流れは巧いね、巧過ぎて拙いんだけれど。でもその拙さを分かって敵えてそれに乗っかる手も有るかな。無いよ。の無いよ、が少し先を行く流れを追ってるにかないようで、なら、しかないような中では間違いなく追ってて、その、その中での間違いなさの向きは、間違いなく傾いてようか、せめて間違いかも知れなくには傾いてようか、な傾きって何？って尋ねられるのが傾きしか無い、って決め付けてるのは、もうそれに遅れを取って仕舞ったに違いないし少しも尖らせてない切っ先しかなさそうなら、そうでないに違いなく、だって切っ先しかなさそうな切っ先は、切っ先との異なりと異なりに更に遅れ遅れに呑まれてるしか無く。の呑まれてるを呑むのって、何処から？そう、見付けたぞ！ここでなら、何処から？って身振りだけなら、その虚しい微かさばかりに明るく眺めの眺められに抗えそうで。アハハ、な、眺めの眺められこそ、それで虚しい微かさの何処やらへ遠く沈んでて、そんなのに抗うもらかろうさ、なんて誰いそれを嗤えない、遠く微かにばかり続く眺めの眺めら無、を拒むなら、眺めも眺められとの異なりを眺めさせようかに眺めも眺められも消され、ならその何の異なりとも異なる異なりが、さも眺めの眺められかに渡って行く円み、いや違う、でも円みと異なる

でもないなら、円み擬きかの、そんなそれの拡がる姿が、眺めも眺められもその異なりとも異なりをも、水の重さでも量るかにこっそり呑もうとして、そのあやふやな端の揺れる影に微かに確り吸い付いてそう、な、そんな上っ面っぽい事でも何故か凝っと見詰めさせられる、な円み擬きかなど醜過ぎて耐え難いよな直ぐにも削り取らないとって構えてそうな静けさが、何処から？のから？を、もう硬く塞いで仕舞ったに違いなく、いや静けさは拙いよ、ざわざわし過ぎてるからね、でも拙過ぎて巧いかも、そんなざわざわの静けさなんて磨り潰された先のざわざわとも異なり、いや、異なりなんて何の異なりだって異なりと異なる贋の異なりで、とも分からせて呉れるざわめきを、何の異なりも裂いてその先を微かに開いた口の奥に覗かせようからね。いや、微かに、はまるで違ってたな、微かになんて事は上っ面っぽいともどうとも何処にも無く、その無く、のせいで抑も何処もが何処もで、その延び逸れて行く先に先なんて微かにも無く、で何？って。あぁぁその、何？な切りが欲しかったんだ、の違ってたってその違うのなんて少しも構わずに、なので、何？なんて何だって構わなくて、な切り、が、それはきっと二つなりな切りだろうけれど、どうにもその二つなりなの微かな徴さえ無くに、いやだから微かななんて無いんだ、でも、なら、徴さえ無くに、って、何処の何？な何？なんて要らないんだけれど、要らないようには要るみたいに、その微かななんて無い徴さえ無くに、が、二つ

ざわめきの静まりの真ん中を腹を裂くように円みの円みを失い損ないがその切りが、その先の自らの確かなざわめきを聞き取るならざわめきは静まり、その一つ切りの切っ先に何時でも姿を変えられるって思えてならないな二つなりな切みを失うかに失い損ない。な、円みの円みを失い損ないが二つなりな静けさの静けさに見透かされるなら、二つなりな静けさの望み通りかに円みは透けて円いや違う、なら円みとの異なり、な異なりなんて贋の異なりって、二つなりなきかを振り払い、二つなりな静けさの他なら何でも輪切りに出来そうな円み。きかな円みを、隠された唇でその端を吸うように歪ませると、円みは却って擬れるに決まってよう、って、先回りするみたいに二つなりな静けさが、その擬含み込んでるに違いなく、でもそんなの硬い塞ぎ口には一昨日お出でって弾か口から幾らでも甦るかに延び逸れて、逸れる儘に戻るなら擬きかにでも円みをっとその為に二つなりな静けさが、何処から？のから？を硬く塞いだその塞ぎりな切りならざわめこうか、って、そのまだ有るとも知れないざわめきへ、きそれっ切りで徴さえ無いのでは、でしかなくに、二つなりな切りで。な二つなり込みたそうなら斬り込んでて、にしろその何の事にも成らないのは、それがりで、そのそれっ切りが二つなりな切りを切り裂こうと斬り込みたそうで、斬そうってどうなんだろう、って、な切りが欲しかったそんなそれは、それっ切なりな、へ染み込んで来てるかで、で、二つなりな切り、へしか行き着けなさ

れ味を試したいのかな、真っ直ぐ縦に高くにも低くにも縦を貫くなら遠くへまで行けそうな明るさで拡がると、円みの失い損ないは溶けるように損なわれて浮き立つように円みが甦り、でもそれは円みの円みでしかないなら、ざわめきの静まりには、その円みの拡がりは二つなりな静けさに塞がれた何処か？のから？の有りもしない続きかに硬く脹れるばかりで、それに圧され続ければ静まり切れずにざわめきの中から聞き慣れない呻き声も聞こえそうに圧すも圧されるも歪もうけれど、圧す圧されるの境目はツンと澄ますように歪まずに、遠くへ行けそうな明るさの先のその明るさの越えられない明るさへ放り投げられるようなきっちり縦を貫く円みが架け渡され、いや、それは縦を貫く振りだけで圧す圧されるの境目の僅かにでもはっきりと綻びる側の端の斜め仰向けに下る程に激しく窪む向きへどうにも傾いて、そんなで円みかは酷く怪しいなら架け渡されてるのも怪しいかな、でもそれでも円みは震えてだって円みをと縦をとを貫こうと、それとも震えられるなら円みをと縦をとを貫けようかって、な、それでしかないなら、それは何時しか全く円みに違いなく、違うかも知れなくに、な円みの、違うかも知れなくにこそ、円みを縦に貫いてそうで、貫いてそうなら貫いてるか貫いてないか分からなくには少しも震えてなくて。その震えてなくてなら縦に貫いてようね、円みなど構わずに。でも円みを構わないんじゃ、二つなりな静けさに塞がれた何処から？のから？の塞ぎ口の後ろから為す

術無く丸呑みにされ、でもそれで塞ぎ口って塞がれてないよなって暴けたなら、縦を貫くに震えてなくては、その口の奥で溶けたにしても、塞がれてない塞ぎ口から甦る二つなりな静けさに、それなりな縦を貫くな高みと低みを帯びさせてそうで。帯びさせてそうなら帯びてなくて、な、縦を貫くな高みと低みが頑なに却って二つなりな静けさの間に打ち込まれるようなら、もう静けさは二つなりなでは有り得ずに、でも静けさを離れた二つなりながら静けさを斥ければ、静けさは静けさでさえ無く静まって、二つなりな、に。な、二つなりな静けさでも無くな静まりなら、その打ち込まれるような勢いの儘くるりと向き直るしかない縦を貫くな高みと低みは、塞がれてない塞ぎ口の奥の艶めきに、そんな自らの姿でも覗き込むしかなく、覗き込まれた縦を貫くな高みと低みが互いを噛み砕く様の二つなりなは、その何が二つなりなかって二つなりなに、それを覗き込むものを呑み込まずには居られずに。で、さて、縦を貫くな高みと低みは、自ら覗く自らの姿へと呑まれたかって、知らない、だって塞がれてない塞ぎ口の奥なんて、他の何も覗き込めないからね嘘だけど、だって嘘なら常に艶めけようからね、って、その塞ぎ口の奥が自らを覗けば、覗いてるのは、そんな口の奥などさっさと塞いでその勢いに力を余らせる、二つなりな静けさでも無くな静まりで、その力が縦を貫く円みを確り必ず何を措いても架け渡すしかないなら、その円みの端を、塞がれてない塞ぎ口に突き立て、疾っくにそうし

てたようにもう架け渡してて。って、遠くへ行けそうな明るさの先のその明るさの越えられない明るさへ放り投げられるようにだよね、が、どうにもあやふやで、そのあやふやの明るさのあやふやさには、明るさの先のその明るさの越えられない明るさなんて、あやふやさの影みたいな暗さでしかなく。いや違う、あやふやの明るさにあやふやさなんて無く、その明るさはあやふやを貫くばかりで明るくて、なら明るさは暗さでも有るみたいに、明るさと暗さの先へ架け渡されて行く円みを導いて、嘘だけど、って言えるのが塞がれてない塞ぎ口だけなら、その口がゆるゆると嘘で、またその塞がれてない口の奥を瑞瑞しげにだらしなく艶めかせ。見付けたぞ！そんな艶めかせが欲しかったんだ、なんて、嘘に乗っかる嘘みたいな真似はしちゃいけなかったんだ、って誰が言うんだっけ、の誰がなんて程に嘘な言い草も無いよな、って、口の奥の艶めかせにあんぐり呆れられ、で口の奥はきっと閉じたんだ、って、誰が言うんだっけって言いたさだけが、嘘を突き破り、架け渡されて行く円みに沿って延び逸れて行けてそうで、そんななら円みだって自ずから艶めけようか、って、その艶めかせに艶めかされた艶めきが、その艶めかせの艶めかされの艶めきを、円みの内へ重く溜め込むようなら、円みは、明るさと暗さの先へではなく、その自らかの内の重みへと架け渡されて行く、いやそんなならなら架け渡されるとまるで違ってようねって、違ってよう、に言うなら言わせて、架け渡されはその円みの

内の艶めかせの艶めかされの艶めきの溜め込んだ重みへ、架け渡され渡され、それとも、その渡され渡されしてる内に、架け渡されは架け渡しへその架け渡しを架け渡し。な確かそうな架け渡しなんて、確かそうなに溶けて渡しも渡されも架けようは無くそうかな、で艶めかせの艶めかされの艶めきの円みの溜め込みを円みが縁取ってようかな、円みに内なんて無しに、って、そんなそれを覗き込む二つなりな静けさでも無くな静まりが、その円みの縁取りにざわめかされそうなら、きっとそんなざわめかされを嫌さに、静けさでも無くな静まりは急いで自ずから砕けて何の静まりも斥け、それで何のざわめきも拒むかすれば、静けさでも無くな静まりは、ざわめきの先へでも逃れられようか、な求められた静けさに裏切られるかに、ざわめきから先に静まって、静けさでも無くな静まりを刺し貫いた静まったざわめきが静まりをざわめかせ始め。そんな、ざわめきの静まりのざわめきって、唯のざわめきとも静まりとも変わらないのさ、って、もうそのどちらとも係わらずに済み始めそうにゆったりと二つなりな切りが、その、な切りを裂きたいかの切っ先をその切っ先が見付けられない、な見付けられ無さに、ざわめきと静まりの狭間なら見付けられて仕舞ったかにこっそりと、な切りを傷付けられたろうか。それとも、な切りは、切っ先の見付けられ無さに生生しげに疼くばかりで、傷付けられたのは二つなりなかも知れない、って、二つなりなが、他には何が傷付けられたろうかって、二つなり

なに一つな、傷だけは見付かりそうにない眺めに、そっと切り分けられてそうで。でも、そっと過ぎて切り分けられてるか分けられてないかあやふやでは、眺めが二つなりなに一つなかもあやふやで、いや違、違わないのかも知れないけれど、だってあやふやがただあやふやならあやふやのあやふやさ程あやふやで無くにあやふやで、それって少しもあやふやじゃないのと何も変わらないよね、なんて、二つなりなに一つなが、うっかりそれを確かめようなんてしちゃいけなかったんだ、だって、その、あやふや程あやふやで無くにに、二つなりなに一つなは、二つなりなにとも一つなとも無くなって、あやふやの欠片も無しに切り分けられ。って、何を切り分けられたのかな、って、あやふやの欠片も無しにな辺りに、そんなそれを探そうとして仕舞うそんなそれは、傷だけは見付かりそうに無くに傷付けるしか無くになそんなそれの切っ先を見付けられない中に必ず見付けて仕舞うに違いなくに、その唯切っ先の見知らぬ姿でも追うに追えない、そのそんなそれの見知らぬ姿かの自らかの内から追われ、切っ先を脱ぎ捨てられて身軽な身の軽過ぎて何て重みへと切っ先を向けるしかないんだ、って、呟けるなら呟きたいけれど黙るしかないなら必ず黙れずに、その為の口を切っ先の奥に隠し持ってる筈だろ、って自らを恃める黙りだけは、そっと守るように呑み込めてそうで。で呑み込めたかって確かめようも無いよ、だって口は隠された儘ではね、な口なんて直ぐに嘘だって知れるよ、だって、

口なんて知らずに、こうして黙れてないからね。でも黙れてないって全く黙りでしか無さそうで、って、そんな黙り黙る黙れないの切っ先を追うに追えない、でもその見知らぬ姿だからじゃない、見知らぬ姿程嘘なものも無さ過ぎて、のろのろと縦に重く揺れ。って、そんな揺れも嘘で嘘の揺れが剥がれれば、揺れて無さが弛い斜めに薄く透けて眺めの何のあやふやさも、あやふやさを覆い隠してた薄みを薄い通りな儘に剥ぐかに覆い隠し、それってその覆い隠しを明るく平たくに丸く、さも余す処無さそうにふわりと暴いてようかな、なら、斜めに酷く縦に押し迫って来る窪みの底辺りのその裏からしか見付からなさそうな染みのような小ささな暗さは透けるしかなく、窪みの裏から窪みの向かう先を覗けて、その覗ける先を幾らでも拡げられて行けてそうで。行けてそうなら行けてるんだ、いや行けてないんだ、って、それ、二つなりな、と何となく重なるんじゃないか、って思えたか思えなかったか重そうに、な、一つな、いや違う、何が一つなもんか、な、覗ける先を覗けは狼狽えて、狼狽える程に覗けるは定まって覗けるなんて要らなくなって、覗かれた先も先でも無くなってそれだけになって、な、何がそれだけかなんて尋ねられる筈も無くにな、それだけにで。で、そのそれだけにが、何がそれだけかさえ尋ねられ無さに、このそのそれだけに至るまでだって何を尋ねようも無かったなって思い知るしかなく、って何が？って、これも尋ねようも無いなら、そんな何が？なんて有る筈無く

に、でも有る筈無くには有ろうか、って、これも尋ねてるけれど、それとも尋ねたくて尋ねてる振りだけで、何も尋ねられてないのかな、知らない、そうさ、知らない、で済むよね、でもそれも知らない。いや、知らないを連ねて済まそうって程に知らないから遠ざかって、唯知り尽くされるしかない知らないが、それぞれにそれだけの色と形にでも凝り固まって隣り合ってるんじゃないかな、なんて言うだけなら言えようか。も、知らない。でも、この知らないは何一つ済ませられなくて知らないで、そんな知らないなんて知るも知らないも無かろうなら、知らない切りで、尋ねるも尋ねられないも尋ねようが尋ねまいがそれっ切りかな。な、それだけなそれだけだけれど、それじゃ、それだけだけでふらつき回るしかないみたいに、ならふらつき回ってなんて無くに何もしないで。いやまさか、何もしない為には必ず何かをしてようね、でも、なら、その何かするって何でもしてようね、の、何でもなんて無いなら、でも何も無い訳じゃ無いその無いへの傾きが、って、それらしい黴を傾きって言えて仕舞えるなら円みでも構わなくに、な、そんな黴はどうやらさっきから傾きに順うように食べられ食べ尽くされでもしたかなって、でも食べ尽くされでもしたかなも黴でしかないなら、そんな黴の黴は、空っぽな腹の中の傾きをも円みをも払い除け、何の黴をも溶かす辺りにまで身を放り捨てたみたいで、その黴の、黴の黴な、そんなそれは、何が何の黴をも溶かすのかへ向くしか無くに、どちらを向こう

にも何の向きも見分けられず、でもその向くしか無くにな儘に溶けた徴の溶けた徴かにそんな自らを溶かしてられる時など望んで、得られるのはその時を望む時ばかりでは、そんな時に何の徴も溶けようかな、って、その時が何の徴も溶かしてたって見付けられたかな。まさか、そんな時こそ真っ先に溶かされてようね。見付けたぞ！その真っ先を真っ先にしてる向きを、って、その向きへ向こうとしちゃいけなかったんだ、だってそのせいで真っ先も溶ければ、何の時も再び甦れずに失われ、もう何の時も無い処に居るって知らされ、いや、何の時も無いなら、そう知らされようもなかろうか、って尋ねさせる時だけは何処かに有りそうでも、それを何処かなって、どっちを向けばその何処かが見付かりそうな身の熟しなんてしちゃいけなかったんだ、って何が？って、その何がは知らないけれど何が尋ねてるかなら知ってるよね、知ってると知れてる他に知りようも無くに、な、そんなそれ、いやそんなそれとも知りようも無くに、な、そう知れてるだけな、その知れようだけは、その向きを向けてるに違いなくに有りそうな時も突き抜けようかと、縮めるだけ柔らかく縮んで縮む程に硬く尖って硬い程に溶けて薄く拡がって小さいだけ小さい影が揺れる音に沿うように姿を変え続けたいのか、深みへと伸び下る傾きを追って少しも追えず、だって深みなんて有ったら必ず何処もが深みで、そんなそこでそこを傾かせようとする傾きが、何が？の知れなさを深みに擦り替えたいみたいに、ふらつき回

りたがってそうで、でも少しもふらつけず、柔らかくに、その柔らかさを柔らかくするのに硬くに小さいだけ小さくさえ無くに、せめて小さくは有ろうと、有りもしない円みを探してそうで、な唯徴ばかりかなそんなそれは、徴に深みを自ら欺き見て見えず、その見えなさへなら易易と明るくくっきりした傾きを傾れ込ませられそうで。な傾きなんて知らならない、けれど傾れ込ませられそうも何も、傾れ込みしか無くになそんなそこに、そんなそこを覗き込むそんなそれは、何を覗き込めてるのかな、知らない、いや知らないじゃ済まなかろうけれど知らないしか無くに、いや知らないも無くになので知らないのかも知れなくに、きっと知らない、で。なら、そんなでそんなそれが傾れ込みに違いなくに、それだけが知る傾きを産み出してそうで。失われた時も有りそうな時も、その傾きの産み出されに必ず殺されてよう、に。時にしても、何の時も必ず殺される為にだけ時で、でもそれも、その傾きの産み出されまでで、この先には殺される為の時も要らなくて、あぁ時なんてもう何処にも入って来られないなら、何の何が？もすっかり変わろうね、なんて思っちゃいけなかったんだ、だってそうして、要らない筈の時を要るかに費やしてるなら、時を何処からか引っ張り出して来てるかも知れない訳で、とも思っちゃいけなかったかどうかは知らないけれど、って、何が？いや違う、何が？じゃ無く、何に？なんじゃないか、だって何が？が質されるなら、その何が？の何？の為の時が要らない儘に甦る

筈無くに甦った事にでもするしか無いのでは。でもそんな事はもう無いからね。でも、何に？って何が何を何に尋ねてるのかな、いやその何が何をに時が必ず無くちゃならないなら、そう尋ねるのも要らない訳で、その、何に？だけが、その何にに尋ねられ続けるしか無さそうに、でもそれらしい徴も見付からなさそうだな、って、そんな何に、は、何でも無くに、そんな何に、の、他の何かかに行き成り襲い掛かられるようでは、唯一つ頼みかの傾きの産み出されもその根刮ぎに奪い去られるみたいで。いや、その奪い去られる、は、嘘みたいに凄く良いよ、凄く良過ぎるからには嘘に違いなくに、嘘でないかも知れなくに、なんて嘘丸出し擬きかに。そこはきっと、何処も彼処も産み出されて已まない傾きにびっしり埋め尽くされてようか、その何に？さえもさも改まるかに、あぁそんな傾きだけで出来た端も向きも行く先も明かさない平べった過ぎて窪んでるようでしかなくて薄っすら円みを塗そうかって窪みへ向かって滑り降りてでも行けたらな、なんて望んじゃいけないかどうか知るも知らないも無しに望むしかないけれど、何に？って、そりゃそんな窪みを窪ませるそんなそれに違いなく、って取り敢えず決め付けるしかなくに、産み出されて已まない傾きの一つにでも収まったかな一つでも無しな徴、いや徴な確かさにまで至れない小ささが、産み出されるとは異なるなら産み出されるまでもなく紛れ込むかして、でも小ささはどんな僅かな徴より確かだよなって、その確かさが自らと

比べられる徴を探したいようなら探せてなくて、そのせいで小ささの確かさも何処をともなくふらつき回るしかなく。いや何処をともなくは無いよね、そのふらつき回れるそらしかなくて。な、そこやんて時と共に疾っくに失われてそこんだけど、って、そんなそこの徴がそんなそこをその徴へ引き摺り込んでそうで、引き摺り込んでそうなら引き摺り込んでて、そんなでそこはそこの徴に殺されたかな、で徴も自らの行いの巻き添えで徴でもなくなり、ただ殺し殺されるだけが小ささに残れば、それでふらつき回るのも収まるか、って小ささ小ささを覗き込んだかは知らないけれど、覗き損なったにしろ、その覗きか覗き損ないの少しだけ向こうに小ささと繋がる二つなりな、色を着けようとするなら色は弾かれ滑るばかりかに着けられそうな、試しに着けてみた色が、燃やされる悉くが燃やされた後に炎は白いのかな炎の白と赤いのかな炎の赤の、それとも青いのかな炎の青と黒いのかな炎の黒の、いやどっちも違う、きっと一つは、どんな色も着けられて色は定まらずに透けた闇を砕く程に砕けない岩を殖やすみたいに抱えるばかりで、もう一つは、どんな色も着けられなくて凡ゆる色を纏って纏い重ねても重ねられなく煌めいて、いやどっちも違う、抑も色が違う、着けられるのは色との異なりで、色を全て食べ尽くしてもとの異なりかにまだ食い足らないかに硬く細かく震えて鋭く、いや違う、抑も色が違うなら色との異なりが違おうね、でも震えて鋭いだけは、違うも違わないも、そ

れに傷付けられて二つなりななら、震えて鋭いとは異ならずに、でもそれに傷付けられた二つなりなは、傷付けたそれを異ならせ、その震えて鋭いとの異なりが、覗きか覗き損ないの少しだけ向こうへ斬り込むかしたろうか、なんて思っちゃいけなかったかどうかも、そのいけなかったかどうかとの異なりを持て余すかに自らの身を断つかに振り翳し出しの翳された姿を鏡なら鏡に映してその異なりとの異なりを異なり自らが見出したなら見出したに違いない異なりって、どうやら鏡そっくりなんじゃないかな、なんて鏡なんて探しちゃいけなかったんだ、ああ鏡だけは拙いよね、って、何に向かって糾さなくちゃいけなかったんだっけ、知らない、いや知らないなら凄く巧いよ、知らないが知らないで終わるみたいに、殺し殺されるだけが残るのさえ殺すみたいに。で、そんな事がそんな儘に済まされるようなら、二つなりなを少しだけ向こうに繋げる小ささに戻れたろうか、なんて思っちゃいけなかったんだなんて思うも思わないも小ささに攫われるみたいに掻き消され、覗きか覗き損ないかも静かにその後を追ったようで、残されたその覗かれか覗かれ損ないかは小ささより嫌でも大きくなるしかなさそうかに、でも大きさの入り込める大きさなんて有る筈も無ければ、それは小ささをじわりと囲んで傷付け潰しに掛かるもう一つの小ささ、それとも小ささとの異なりの姿を鏡の中だけにこっそり浮いて出た泡の影みたいに、つるつると小ささを脅してそうで。でも小ささには、つるつるって、つ

るつるを影で覆えば酷くざらざらなんだって直ぐに知れ、つるつるに何処からか操るみたいに鏡が係わってるならきっとその鏡はその操りが暴くざらざらを耐え難いだろうなって、鏡が身を捩って自らを粉粉に叩き割る様なんてうっかり思い浮かべるのってどうなんだろう、それこそ鏡の思う壺かも知れないぞ、な思う壺が平べったく薄く果ても無さそうに拡がって行くみたいなら、そんなの微かに過ぎて何処にも無いに等しいかな、でも無いに等しいかなは無い訳じゃ無いんだから全く有りに有ろうね、なんて見通して仕舞うのって、何処もを鏡かにを頼みに覗き込むしかなさそうで。でも鏡かになら鏡じゃ無いよねって覗き込める先は、裏を掻くみたいに何処もがどうにも鏡でしかなさそうで、でもそんな鏡こそそれを耐え難くて自らを疾っくに隠れてそっと叩き割ってたようで、でも幾ら割ったところで鏡の欠片が何処をも散らかるばかりなら欠片は欠片な儘に互いに隣と溶け合うみたいに接ぎ目も見せずにつるつると鏡で、でもそれって少しも覗き込めなくて、寧ろその鏡から、覗き込みが覗かれてるに違いなく、なら、それって鏡にしろ何も映せない鏡で、映せないが替わりに、何も映せない鏡の姿を鏡として映し込んで来るにしろ、その映り込めるのは、その鏡への覗き込みしかないなら、その覗き込みはすっかり何も映さない鏡の姿を纏わされ、何も映せず、何も映せない鏡を覗き込むしかなく。な鏡って鏡なのか、なんて疑いが兆すだけで、覗き込みが覗き込める辺りは覗き込みから逸れ

るかにぼやけて行きそうで、でもその儘そんなぼやけへ沿って行けないのは、な鏡って鏡なのか、なそれに、それに相応しい呼び名でも欲しくてそれが出て来ないからで、でも呼び名は余所から飛び出て来たのを貼り付けるんじゃなく、それ自らが独りで呼び出し、何も呼び出してなくて始めからそんな呼び名だったよって顔をして声も無く名乗るしかなさそうなら、でも、な自らなんて自らを叩き割り続けてないか、知らない、の知らないって何が何に何を知らないのかも知らない知らないで、だって、な鏡って鏡なのかな鏡は、何処にもそれを映せないんじゃね、で、ならそんな知らないが知らないへ向かってその呼び名を呼んだって事にでもして置こうか、って、な鏡って鏡なのかな疑いの兆しが、疎かにそんな呼び名の名乗りを何処へか貼り付けようとして貼り付けられないなら、それを貼り付ける為かに境がぼやけて酷く小さく見えての小ささでも拵えようとして、拵え損なって浮き出て来る大きさ、あぁ無い筈の大きさも有るなら有るんだ、って、その大きさが大きさを顧みて見分けられる大きさは怪しい儘に直ぐに小ささに呑まれ、でもその呑んだ小ささも小ささに呑まれてないか、な小ささなら自らを小ささって名乗ったって何にも奪われなかろうなその呼び名を、な鏡って鏡なのかな疑いの兆しに貼り付けようなんてしちゃいけなかったんだ、だって、な鏡って鏡なのかな疑いの兆しは、そうしてそっくりその小ささに収まってるからね。な鏡って鏡なのかな疑いの兆しも小ささも酷く

居心悪そうに。いや却って居心悪そうは巧いかも、唯そんな事だけが有りそうかに。その有りそうかにが、喉の奥から出て来た手に掴まれたみたいにぐしゃりと潰れたようなら、疑いの兆しもそんなで潰れてようね、って、小ささが小ささを覗き込もうとして覗けたか覗き損なったかな疑いの兆しを、覗く小ささがぐしゃりとも無くに潰すなら、覗かれる筈の小ささは、ぐるりと裏へ大きく回り込んで覗く小ささを大きく包み込む大きさに姿を変え、でも姿なんて小ささには何の事でも無く、直ぐにその失われた大きさの痕が、小ささでさえ無い小ささの姿に成って、小ささに向き合おうとしようにも、やっぱり姿なんて小ささには何の事でも無ければ、それらは、それらの儘にそこに小ささに放り捨てられるしかなく。いや違うよね、小ささは、小ささだけが放り捨てられなくて小ささで、放り捨てられるのは小ささと異なる悉くで、の悉くなんて見付けられる筈も無いなら、悉くは悉くとの異なりで、その小ささと異なる悉くとの異なりは、きっと放り捨てられるも捨てられないも無く、小ささと異なるでも異ならないでも無いなら何？なんて何が何に尋ねようも無くに、その無くにの真ん中を通り過ぎるみたいに、自らを小ささと知れるだけの小ささが、小ささと異なるでも異ならないでも無いへ向かって、自ら知る小ささと異なって行こうとするようなら、それで、何？の答えは答えなんて要らないよって見付かって見失われたみたいにきっと見付かった事に出来ても出来る事なんて何も無く、

なら小ささも小ささと異なるでも異ならないでも無いへ向かえずに小ささでも無くなれば、そのそう、無くなってそれは小ささで、でもそんな小さはそれで自らの小ささを見失い、それとも見失うと分かって放り捨て、そんな小ささを失った小ささが、それでも小ささと異なるでも異ならないでも無いへ向かえずに居るなら向かって行くしか無くに、きっと身を削ってようか。な身こそ疾っくに失ってるって直ぐに分かれば、その身に替わる闇に光る姿か光りを拒む闇な姿かにでも縋れないかって、そんな縋る姿が光と闇を絢い交ぜるかな小ささと異なる姿を呼び寄せてるようなら呼び寄せられず、そんな呼び寄せられない姿の言いなりになるかに、小ささは小ささをその姿に捧げて何とか持ち堪えてようか、なんて、小ささに考え及ぶとも思えないなって思うのは、小ささとの異なりしかなさそうでも、小ささが疾っくに身を削って痕も残してなさそうなら、小ささとの異なりって何？って、そんなそれは、小ささと異なるでも異ならないでも無いへ向かうしかなさそうで、向かうしかなさそうなら向かって、って、でもその向かうだけが、そこに、小ささとも小ささと異なるでも異ならないでも無いとも係われずに。な、係われず、なら、小ささだろうと小ささと異なるでも異ならないでも無いだろうと好きに纏えるかな、その纏えが風でも呼ぶように何処へでも飛んで流れて行けてそうに。行けてそうなら行けてるんだって、その勢い任せかに行けてるそんなそれは、そんなそれだもの、きっと

高みだよ、って、自らを自らの下を、自らの下を見下ろせるから自らなんだって、見下ろす振りで顧みると、確かに高みだっかも知れなくにも、唯一つ見晴るかせる広広と平べったい、それを大きいと思うなら大きい、でも思わないなら酷く見窄らしく大きいと思われかばかりに歪んだ、弛くゆったり傾く窪みへと、今もこうして滑り落ちてる最中なんじゃないかって、その窪みに、そんなそれの影がふわりと沈み掛けて浮かんで流れてそうで。流れてそうなら流れてるかって、それがあやふやなのは、流れる身を失ってるからかもあやふやならあやふやだけが流れてようかな、でもあやふやだけが流れるなら少しもあやふやじゃ無いよなって、高みだったかも知れない辺りを見上げようとする窪みを下り流れる影が流いや、そんな影に何処を見上げられるもんか、って、その影の下を影より速く流れてるのを誇って光りと闇を絢い交ぜてるみたいな水が圧し合い、叫んだか呟いたか、でもそんな水の声は水自らが沈め、重みを捨てられないなら水底へ向かってようね、って、水の重みなら思うかも、な思うかもへ砕け散るしか無さそうな窪みを下り流れる影なら、その影から、光りを求める闇の戯けた姿みたいに自ら抜け出して尖ろうかと、水の流れの傾きから浮かんで躍り、水の重みも深みも蔑むように見下ろしてそうで。ん確かに、なのかも知れないけれど、水の重みも深みも知らない内に逆さを向いて、確かにしても確かで無くに確かになだけかも、いや違うな、それともその違うなが違って

違わないへは戻れず、その戻れ無さに水は水からも見捨てられるみたいに疾っくに直ぐそこかに遥かに低い水底へまで落ち切り、その逆さの重みと深みを堪えるか安らうかして再びに動きたくも無さそうなら、水を蔑んだところでその蔑みはきっと水底に吸い取られるばかりで、それって、蔑みが水から遙かに蔑み返されて蔑む程に自らを蔑んでるみたいで、蔑みが浮き上がれるなら取り返せそうにしろ水底は水を覆う空の低さより低くて浮き上がれる筈も無いし、なら、それも出来ず。でも水にはそんなの少しも知ったこっちゃ無いだろうな、な、そんな水への思いも、水の逆さの重みと深みに直ぐに呑まれ、でもそうして呑んで仕舞えば呑んだ水の逆さの重みと深みにしてもそれは自らを呑んで砕け散らせたに違いなく。にしろ、そんなのは何処か知らない処で済まされてるなって、どっちも向けずに居るようなら、それが小ささに違いないかな、って、その違いなさを測るかしてそうで小ささは、その測れ無さに、空の下の水を集めるだけ集めて傾く窪みの大き過ぎるかも知れない姿を受け容れられずに切り裂くみたいに自らを切り裂こうとして切り裂けずに、なら、その測れ無さのどうにもなら無さが、小ささの先を切り開こうか、って、小ささからは有らぬ向きへ逸れて逸れ損ね、ぐるりとも回れず、小ささの直ぐ先に吸い取られ囚われながら行方を眩ます振りで立ち塞がるかしてようかなどうにもならなさなら、そんなそれは殖えに殖え、殖える程にその殖えようは測れに測れ、測れたどれ

もが小ささに纏わり付いて小ささは小ささに違いなさを、より確かにしてそう
で。な、してそうならしてないかな、なんて小ささの姿を探そうとする、小さ
さとの異なりに違いない、水の匂いを嗅ぎたくてズキズキ身を痛めてそうな、
小ささの姿を真似る傾いて滑る影、いや影なんて見付かる筈無いよ、そんな見
付からない影を操ろうと水の水との異なりを匂わせたげな水底まで落ちて跳ね
返った暗い空の遥か奥から滲み落ちた光りを操ろうとする望みが、あぁなんて
形をしてるんだろう、形ってどんなでも、あぁなんて形をしてるんだろうって
形しかしてないにしても、水の望みなどが形の姿にぴたり嵌まれば、そんな形
に弥増してそんな形で、なんて形に係われなくて小ささで小ささは、せめて自
らを逆さにして、で、水も逆さにされた事にして、な訳ないよね水に逆さも逆
さで無いも有るもんか、って、誰が言うんだっけ、小ささはずっとそいつを探
してなかったっけ、なんてそんな誰かを向こうとしちゃいけなかったんだ、だ
って、いや、だって、から違おうね、なので、しちゃいけないんだ、って、な
事が見えるようじゃ手遅れかな、遅れてさえなければきっとどんな手だって有
ったろうに、な眺めが、小ささとの異なりに取り囲まれた小ささを取り囲んで
そうに。で、それで小ささなんて埋もれて仕舞ったよ、って必ず誰かが言うん
だろうよ、なんてそんな誰かを拵える小賢しい眺めが自らを呑んで、その呑ん
だ眺めまで失われた眺めの失われた痕が傾くなら、そして傾きながら必ず傾く

と異なるなら、傾きと傾きとの異なりは、異ならないと異なりとの異なりを消
し、それともその消された為にその異なりだけを残して一つに成って、眺めの
失われた痕を裏から支える円みに圧し付けられて円みの真ん中の薄い翳りにそ
の一つは消え、いやその薄い翳りが円みなんだって、眺めの失われた痕に知れ
れば、その痕は狼狽えて円みを見失い、その円みを見失った痕が円みで。な円
みの何処が円みなのかなって、円みは自らを消せば薄い翳りだけが残るかな、
で、それは何かの痕だろうかって、それが思うならその思った痕で、でもそん
なそれは薄い翳りを仄かにも纏えずに、でも薄い翳りは薄さも無くし、そんな
それに重なるかに仄かに翳り、円みとの異なりで。いや違う、円みなんて知っ
たこっちゃないけれど、異なりが違うよね。異なりなんて、異なりと異なるし
かなく、なので異なりなんだけど、異なりと異なるしかないんじゃ異なりでも
なく、異なりなら、異なりも知ったこっちゃないって事かな、って甦る円み
は、円みとの異なりと異なるにしても、異なりが異なりじゃないなら、唯の円
みかって。さあね、でも唯の円みは巧いね、唯ので居られるものなんて有る筈
無いに決まってるもんね。有る筈無いに決まってたって有るなら有ろうさ、違
うの？の何が違うも無くての、唯の、なら、唯の、だけが有れば何でも有りで
巧いんだろうけれど巧過ぎて拙くて、それで、な円みなんて、疾っくに頽れて
ようかに見直せば見直しただけ激しく落ちる水に変わって行く、そうして疵一

つなく甦る傾きと傾きとの異なりに、呑まれて粉粉に砕けたそうに、限り限り呑まれずに頽れも立て直すかに、落ちる水の激しさに沿って身を拡げ、え、拡げられた円みって、どう円みなの？って小さささが、いや小さささでさえ無いかも知れないなら何でも無かったかも知れないそんなそれが、その拡げられた円みに描き出された、拡げられた円みとは似ても似つかなそうな痕に入り込みたそうに確かな小ささを欲しがってそうで、な、欲しがってそうが、拡げられた円みを更に拡げてそうで、でもその拡がりはもう円みの外に違いない、な、違いないがきっと小ささで、でも円みの外へ向くなら小ささとの異なりかなそんなそれは、そんなそれへ自らを斬り込ませるしか無くにそんなそれなら、小さとの異なりなんてほんの上っ面かに剥いで、剥き出された自らを、いやそれはそんな自らとの異なりに違いないなって、その違いないを延べ拡げて行けそうな先なんて探しちゃいけなかったんだ、なんて事はもう高が知れてて、なら何が剥き出されたかも知れてるそんなそれは、その儘にそんなそれとの異なりにしろ、そうで有ってそんなそれなんだつて、そんなそれをそんなそれの外へ向け、そんな外が粉粉に砕けそうに却って粘ってその粘りが砕けるなら更に粘って粘りを通り過ぎて粘りさえ失い、その失われに望みを繋ぐしかないその望みは始めから砕けに砕けて何処へとも無くに煌めこうか、あぁその煌めきこそ望みの形で有って欲しいって望みが、また違う望みの姿を纏おうとする、そん

な纏いへの望みは、水の傾きの暗いばかりな煌めきへと身を隠したそうで、でも水は暗くも暗くなくも無ければ煌めきなど弾くばかりなそのの水の重みの溜め込まれたきっと見せ掛けの窮みは、窮まり無い骸のように変わらない空の光りが平べったく押し被さって射して煌めいて酷く軽やかで、その軽やかさのせいで幾つにも砕けて沈んで、何処へとも無くにを一息にきっぱりと切り捨て却って何処へとも無くにから距てられ、その距てられを、唯一つ落ちて行ける凡ゆる妨げを斥けて煌めきそのもののような窪みの姿に見下ろして仕舞うそんなそれの、水の重みに沿いたい望みが接がれに接がれ、切っ先だけの姿に成ったろうかなその向かう先は、逆さで。って、何の逆さ？って、きっと水が鋭く斜そうかな、な、そんな向かう先なら向かう先とは異なろうか、いや違う、向かう先が、じゃなく、異なろうかが違うんだ、な、違う異なろうかが、円み無しに遣って行けない程に円みを欲しがって却って円みを失うばかりに砕け散った煌めきの痕を求めて求められない、その求められ無さに捩る身が円みで有ればと望むそんなそれが、そんなそれの有り得なさを繰り返し確かめさせられるしか無くに、どちら向きでも無い平べったい窪みを隅まで全て映す鏡のように立ち竦み、その立ち竦みがどちら向きにも円みでしか無く裏返しの平べったい窪みそっくりな姿を磨り減らして磨り減らす程に煌めいて煌めく程に燻んで燻みに紛れるかに消え、何も映さないきっと青ざめてそうな、拡がって止め処ない鏡

みたいに裏返しの筈が返し損ねた裏を平べったく丸丸と剥き出し円みの妨げになってそうなら、その妨げに縋るしかなく。って何が？な、そんなそれがそんなそれをそれと分かるならそれは、はち切れそうに閉ざされた円みに違いない、まるで違うかも知れなくに。でもその違うかも知れなくに、は、円みとの異なりじゃないよな、って、円みとの異なりが先に円みを刺し貫いてその向こうへまで抜けていて消え失せようか、後にはそんな痕みたいな丸い穴が残ろうかな、って、円みとの異なりへの遅れが、はち切れそうに閉ざされた円みに、どうにか係わらなくちゃいけないけれど、でもどう遣って？って、元に戻せる限りは戻したそうに躊躇い、その限りが限りなく戻される後には躊躇いの前まで戻った躊躇いしか残らないならそんなの躊躇いでも無いかなって、でもそんなじゃや、戻される限りに限りが無くなって仕舞おうかなって躊躇うのだけは、それに縋るしか無くに躊躇われようかな。な、躊躇いなんて失せるしかないなら、いや違う、失せるの躊躇いへの躊躇いで、煌めく丸さを秘めて隠す影のような酷く薄っすらとしたその失せた痕に、躊躇われない躊躇いが静かにささやかに引き摺り回されてそうで、って、何に？なんて、その知りたい何に向かって尋ねて何も起きそうに無いなら、その起きそうに無いって事が土から湧いたように初めて起こって仕舞おうね、で、その取り返しの付かなさに躊躇われない躊躇いさえ掻き消され、でも、その掻き消されで却って掻き現されても居ようか、

って、何に？なんて、その知りたい何に向かって尋ねて何も起きそうに無いなら、そんな事が繰り返されそうかな、な、そんな事こそ掻き消される前に現れも出来ず予め潰されてるのさ、って言いたいそんなそれが、自らをそれ一つだけと数えられて独り残され、それとも残され過ぎて先走り、それとも残されると異なって先走るとも異なって、その異なった残されと先走らされに優しく股裂きにされるみたいに、どうでも必ず独りな儘に独りと独りでしかないなら、その独りと独りによる独りは、一つとなど数えられる筈も無く数知れず、いや違う、知れる知れないじゃなく、数も無しに始めから殖えるも無しに尽きない数と戯れるかに、独り。いや違う、何が違うも無しに、唯、いや違うでしか必ず無くに、な、必ずに独りと独りな独りなら、自ら望むだけでその望みを望めてそうで、あぁこれも初めて起こる事だろうね、望みを望もうにも少しも望められなかったから、だなんて、どっちを顧みてるの？って、空耳に尋ねられたらしくに空っぽなら空耳だけが望みだったのか、なる空耳が嬉しそうにくるりと消え、それに続いて消えたくても、唯独りなら続けそうでも独りと独りに妨げられては消えられず、独りと独りによる独りは、独りと独りの重なりもする姿を借りたかな独りと独りとの異なりに今にも成りそうで。成りそうなら成らないよな、って、独りと独りによる独りがそれに抗い、その抗いだけが逆さに沈んで行きそう、って何処へ？なんて尋ねるまでもない、その上っ面しか知らなかん

ったのに行き成り馴染み深い深みへ。あぁ深みの何て浅さ！浅みと深みが臭さを競うみたいに、って、何が嘆くんだっけ？いや何でも良いよ、それを嘆くそんなそれが、落ちるなら落ちて行ける限りの水の重みを支えてるらしいかな、嘘だけどフン、必ずここで馴れ馴れしげに薄っぺらな嘘に出て来て貰わなくちゃ困るかに、な嘘なら嘘が嘘かも、なんて嘯くには無くてはならないそんなそれ、いや、そんなそれとも異なる、でもそんなそれとの異なりなんてもう呼んで来られないさ、なら何だろうか、な、円みとも傾きともそれらとの異なりとも異なる、で、でも異ならない、な事なら、見付けたぞ！独りと独りによる独りとの異なりを、この異なりだけは何へとも異なれず、だって、独りと独りで独りじゃないなら、独りと独りとの異なりは、何への異なりも要らずに唯異なりで。違うの？なんて尋ねられるとしたら、独りと独りで独りじゃない、の、その有りもしない、じゃないな独りしか無さそうで。でも無さそうって、他に有りそうなら有るんじゃないのかな、な、じゃないのかな、が、幾つか落ち着き処を見付けたげにヒラヒラと舞って舞っただけ奥行きを拓けたようなら、直ぐ様潰される幾つかのその奥行きを散らした眺めが急いで潰れ、その潰されの散らされが、じゃないのかな、の落ち着き処かに何処となくその姿を一束ねにした眺めが、その後ろへ後ろへばかり揺れて却ってぼやけて大きそうに前へのめって、そんなじゃその眺められる向きには眺めようも無くなろうかな、って

激しく水に圧し迫られ、いや水が斜めから圧し迫れるもんか、って、呟きでも
水の呟きじゃないなら呟きでも無くに、何でも無くに水から弾かれ、斜めから
も無い水を向けてようかな、で前も後ろも無い呟きかな、って、そんな呟きも
きは水の呟きじゃ無いなら呟きでも無いよ、って、呟きだけは上を下も下を上
も知れないけれど、それって水の呟きにでも付き合わされてるだけで、な、呟
んて、ええっと何だろう、な何だろうも疾っくに潰れ。いや違、違わないのか
傾くしかない傾きが唯傾いて下から圧し迫ろうからね、その圧、迫りに敵うな
は身なら身でしか無くに身なら何でも無く、だって水を見下ろしるなら、必ず
たいにふわふわ波にでも揺れて舞い綻ぶようで。な、何が舞っせるかなんて身
尖ってようかなんて慌てて顧みる身なら身は、水の温みを見下てせば酔ったみ
と急いでまた磨きを掛けるれたいにその逆さを逆さの逆さにしろ、ならきっと
り捨てなくちゃいけないんだろ、なんて言い草が逆さで、そのてさだけが頼み
放り捨てられたよね、って、ハッまさか、そんなの逆さだよ、てんなそれがと
たそうにしててだけ、そんなそれでもで、そんなそれなんて逆さへか疾っくみ
ずに取り残されるしか無くに、有りもせずにな儘、何かを呑何そ何かに呑ま放
呑んだそれに呑み返され、独りと独りで独りじゃないな独りむ処が、有りもに
たみたいに旨そうに一呑みだろうかなきっと、なら、そのじだかいのかな、れ
何に？な何、を、他に有りそうなら有るんじゃないのかな、が、ずっと狙って

無くにな儘に呟き返そうなんてしちゃいけなかったんだろうけれど必ずそうして仕舞おうなら、その怪しい圧し迫りと呟き返しの境を境にする辺りを、激しい斜めだけが反り返ってそこを引き裂いて切り分け、でもその分かれ目は引かれず、斜めだけがそこを拡がって何と何が切り分けられたかも分からないなら、斜めの激しさって同じ過ぎて切り分けられないものを分ける激しさなんだって分かったようでも何を分かったのかな、って、見ると、見付けたぞ！あぁ見るんだよ、その見るを見てその見るが見られたって見付けたんだ、の、見付けたんだ、は付け足しにしろ、その、見ると、が見て見られると、その見て見られた見ると、は、そんな、見ると、としか見えてなくて、で、そうとさえ見えなくなって、な、見ると、が、そんな自らが斜めを激しくしてるんだな、ってその見えなくなったのを振り翳すみたいに晒すと、斜めも激しさも失せ、裂け目の拡がりも遠く微かな水の匂いの小ささへと翼でも生やして去って遂には落ちて沈んでようね。な翼なら、水の匂いの小ささよりもっと小さかろうね、あぁそんな翼を欲しいなって、そんな翼を欲しがるのって、同じ過ぎて切り分けられない儘に分けられた、何への異なりも要らずに唯異なりな、独りと独りとの異なりかな。違うの？さあね、でも、違うの？さあね、だなんて、尋ねられたりはぐらかせられるなら、そんなそれで。いや違うよね、そんなならそれは、そんなそれとの異なりに違いなく、その違いなくが如何にも違いそうにふらふ

ら揺れるようなら、そのような儘に動けない中に嵌められたかに少しも揺れて無くて、でもその揺れて無さって、それに触れて来よう幾つもの互いに少しも似てない揺れて無さと触れるか触れないかに微かに擦れ合ってだけの揺れて無さかな、なら、それらの幾つかごと激しく潰し合うかに酷く揺れてるかも、な、そんな、独りと独りとの異なりかな、違うの？さあね、が、そんな儘に、その独りを独りで自らを凝っと見るように、なら、見て、跡形無く消したそうで。って、見て見られたのは何？なんて、尋ねられるか尋ねられないかを尋ねられるか尋ねられないかが、さっきとあべこべを誇るかに優しく斜めに流れ込んで来てるよ、って、その流れ込まれが、今そんなそこで産まれたみたいに斜めを真似るほっそりした窪みでも窪ませたげに捩らされたげで。で、何に捩らされたいの？なんて尋ねちゃいけなかったんだ、だってそんな真っ直ぐな尋ねは少しも捩られないから、な、その隙を突かれるみたいにまた流れ込む、唯流れ込まれへの流れ込みが流れ込むと、そんな流れ込みなんて流れ込みとあべこべだろうよ、って、独りと独りとの異なりかな、違うの？さあね、が、待ってましたって流れるようにスラスラと応えてそうで。で、応えたの？の、応えたの？が、その応えに違いないなら違うかも知れずに、いや違う、の、何が違うの？な流れ込みを装う嘘のぷんぷん匂う流れ込みが、なのですっかり固まって、固まるばかりに激しく流れ込まれを突き破るかに、突き破られたかな流れ込まれ

はもっと固まるかに弾き飛ばされ、流れ込まれからきっぱり切り離された流れ込みは自らの固まりを溶かして改めて流れ込もうかって、でも何処から？いや違う、何処から？で無くちゃいけないんだ、って、その、何処へ？を欲しがるそんなそれが、独りと独りとの異なりかな、違うの？さあね、を、何処から？のぽつんと見知らぬげなその何処の辺りをぼんやりでも向こうとして、そこに見付かりそうも向こうったって向けず、いや、その向けず、は巧いよね、必ず、向けず、でなくちゃいけないよ、な、その必ず、って、向きは決まってようかな、さあね、な、どっち付かずな向きなら向けようか、って、その向きがそっちかを向きそうなら、必ずは必ず必ずじゃ無くなろうかって必ず自らに知れるなら、必ずは何も知れなくなって必ずを必ず失って必ずで、いやずっとそんな必ずなのさ、って必ずは必ずそんな必ずを予め知ってた振りをしなくちゃいけなくて、必ずで。それともそんななら、あっさり必ずとの異なりかな。で必ず、違うの？さあね、が、また出しゃばるかって待つだけ虚しく、その虚しさと向き合い損ねるなら必ずは、自らをもう要らないんだって分かって、必ずでも無くに消えたいなら消えたかな、違うの？さあね。に応えられるのって、独りと独りとの異なりかな、違うの？さあね、しか無さそうだけれど、な、だけれど、が、違うの？さあね、を突き破って渦巻きを拡げ重ねては果てなく昇って行く、空を向いて空を一呑みにしたそうな窪みに成るにしろ窪みの窪んだ底の水から

浮く火の走るような薄さが災いして空に少しも触れられず、硬く細かに砕かれて已まない渦を数知れず撒いて散る光りかに果てるなら、その窪みの痕を埋めるのは、何を埋めようもない虚しさとでも定まろうにも定まれずに、手垢の付いた必ずがまた呼び出されるしかなさそうに、なそれらとまるで異なろう、その異なりを斥けて異なりとの異なりが、何との異なりでもなくなり、ぅっかり、その何と、を、手玉に取ろうなんてしてし損ない、その何とが何ととの異なりになるのをどうにも出来ず、なんて眺めの見知らぬげな微かに窪む冷たさと疎さの裏表な重なりは平べったくも眩く、独りと独りとの異なりだけにそれは描けそうな形を隙なく並べて薄っぺらな光りを塗る端から光りは褪せて却って輝くように粘粘と少しでも狭くに立ち塞がって繰り広げられてる、な、あぁ形、って、そのあぁって褒めるでも嘆くでも無くに、冷たさと疎さに形のあぁが形は犯されるに決まってるのを惜しんでそうで激しさも失せる程に激しく嬉しがってて、形のあぁはいたぶられ、されるが儘で、なんて眺めの更に見知らぬげは見知らぬげへの嬉しがりだけを残して他は放り捨てて円みに委ねようと冷たさと疎さえ態とらしく隠し、な円みが何処で待ち構えてられようか、知らない、な、知らない徴を深く細かく隅隅まで刻んだ円みが、円みの何の徴も纏えずに、ならと、自ら円みを放り捨てる構えで、え？円みが構えたら角角し過ぎて円みの円みを潰してて、な、それでも円みなら円みは、円みで無いなら円み

で無かろうと、変わり続け繰り広げられる眺めの見知らぬげの縁を辿って円みを彫り出してそうでしてなくて円みで。な円みなんて唯円みと異なれなくて円みに決まってそうで、なら円みを象った円み擬きとか。でも放り捨てたものを委ねるにはそんなで済もうかな、いやそんなじゃ何を委ねるも儘ならずに委ね損ねてて放り捨てた筈のものをどうしようか、なんて眺めならそんな眺めの更に見知らぬげは見知らぬげへの嬉しがりも放り捨てててようか、って、そんな眺めならそんな眺めへ自らを逃げ込ませてようか、あべこべに、眺めの見知らぬげへの嬉しがりに眺めが放り捨てられるみたいに、みたいなら放り捨てられてようね、な、あべこべな放り捨てって何？あべこべなら放り捨てる程に、放り捨てた筈のものを抱え込んでそうとか、でも、で何が拙いのかな、あべこべでも行けるなら何でも有りかもね、なんて眺めなんて眺められず、いやその眺めが果てなく繰り広げられて行くのを追うだけなら、見知らぬげな微かに窪む冷たさと疎さの裏表な重なりが遠くへぼやけて掠れて行くのを具に明明と映し取れてて、って、寧ろそれを眺められてだけの眺めかもね、なんて騙されそうならそう分かってて進んで騙されよう、な眺めかもな騙されが頽れて落ちて行く眺めなら眺められ、あべこべでも無いのに眺められずに、な、あべこべで無さにあべこべにされる眺めなら、眺められずに、その眺められずに果てなく眺められ、な果てなさこそ疾っくに失われてたさ、って、そんなあべこべにされた徴

が徴との異なりとの境のあべこべを逆さに眺めれば、そんな徴のあべこべと異なりの絡み合いに、逆さも逆さで無いも眺めは眺めを放り捨てて巻き込まれ、いや違う、その巻き込まれこそ真っ先に放り捨てられたんだ、で、もう疾っくに、あべこべとも異なりとも眺めは再び甦れずに、な、そんな…何？って、それを何とか言いたい、だから何が？って、その何だけに獅噛み付きたげなそんなそれが、その何に獅噛み付き損なって、窪み。それとも窪みの徴。それも少しも窪みでも窪みの徴で無くても構わなくに。な、そんなそれをどうしたいの？な眺めかもな騙されが頽れるか頽れないか、あぁ、それがどっちかで、変わらないものなんて無いなら、すっかり何も変わらずに、どっちかな儘どっちもで、でもどっちもでな儘どっちかな儘なのも変わらないなら、きっと何もが変わってようか、なんて、少しも変わらず何も変えられず、な、窪みでも窪みの徴で無くても構わなくになく窪みそれとも窪みの徴なんじゃないのかな、って、何が？いや違う、なら、あべこべの何が？な何が？のあべこべって何？って、その何？が何？に尋ねたそうな、そんなそれ、それともそんなそれのあべこべが、な、あべこべなんて疾っくに踏ん付けられ、そんなそれなそんながそんななだけな儘に縮まろうかもっと縮まる為に酷く脹れようか迷い続けるしかないのを、嗤いたくて嗤いたいだけで嗤ってて、でもそうして嗤えるのって、踏ん付けられたい自らを嗤えてるから嗤えてるんだ、って、あぁ、なのであべこべなのかな、

とか、何があべこべか、あべこべにさえ分からなくなりそうでなり損ね、な、そんなそれの、それなそんなを際立たせたいんだね、だって他にそれなそんなは有り得なくて、な、有り得なさにあべこべは無いぞなんて粋がればその粋がりがあべこべとも分からないんだよなとは知れ、って何が？いや違う、何が？なら答えはどう捏ねくり回してもあべこべなそれなそんなで、なので、何に？を尋ねなくちゃね、だって、有り得るなら、そんな何に？だけじゃないのかな、違うの？あぁその違うの？って唯嗤いを嗤うのでしか無いって知れるしか無いのか知らなくてさえ知らなくちゃいけないのか、って何に？見付けたぞ！見付け損ねたかも知れなくにに見付け損ねも出来ずに、その、何に知らなくちゃいけないのか、な、何に、と、知らなくちゃいけない、を繋がりもしないのに並べられる、そんなそれなそれなそんなを。いやいや、そんなの、見付けたも見付け損ねたも損ねも出来ずも無くに、疾っくにそんなを見付けて見付け損ないもしてて、で、それなそんなで。な、そんななのでそんなな儘にそんなで無くに、かな。だなんて、何に、に向かって尋ねられるもんか、それともそんな尋ねられるもんか、が違ってるかな、違ってる事にしたい、って、何に、へ向かって望んで仕舞うなら、その望みはきっと、その望みに向かってしか望み直せないのを望んで望み損ない、その望み損ないを糧にでもして望みへ望みを繋ごうって、そんな望めそうにない浅ましさを、何に、が許そう筈も無くに、その

鋭い影でも望みの浅ましさに斬り込んで来ようなら楽しいな。なら先にそんな楽しみを呼び込んではどうか、なんて呼び込もうとする振りさえしちゃいけなかったのかな、いやそんな振りはしてないよ、は更にいけなくて、きっと望みは切り裂かれ砕かれたか、それとも始めから望みを望みも出来ない程に砕かれてるのを暴かれたかで、でも、な、望みの望みとの異なりなら却って喜んで楽しみに呼び込めそうじゃないかって事ならもう呼び込めてようか、な楽しみなら、望みの望みとの異なりをたっぷり舐めて舐め尽くすかな楽しみで、なのに、でも無さそうなのは、望みとの異なりが、その望みとの異なりとも異なる眺めが楽しみの先で楽しみとの異なりと異なってそうな幾らにも殖えようって構えで一つに閉ざされて尽きない数な小ささを溜め込んだ果ての見えない塊の中に切り分けられ撒き散らされるのを、とても追い掛けられなくて舐めて舐めては舐めるのを已められない儘何処かへ迷ってようからで、その撒き散らされた眺めの数知れなげな数数を数と数えられようも無くに数えようとして数え損ない、その数え損ないの確かさを頼みに、それでもまだ望みとの異なりが楽しみの先に甦るとしたら、そんな甦るとしたらな黴が犇めいてそうな、尽きない数を削ぎ落として一つでも無くに数の外へ開かれた小ささが有るに決まってるんだけれど、間違っても何処に？とか尋ねてはならなくに、って尋ねてるようなもので、そんな尋ねられただけの何処にが小ささを傷付けてようって小ささが顧み

られるのは然して小さくも無くに見窄らしいきっと小ささのただ脱け殻みたいで、その掠れた濁りを艶めかせる内側に映って移る望みとの異なりなら望みとの異なりとも異なり、その異なりが、掠れた濁りを艶めかせる艶めかせに異なり返され、それに圧されるようにもうそれより異なれない異なりを危うい刃を手放すかに慌てて捨てようか、でも切れ味が凄そうで怖くて捨てられずかに、な自らを疾っくに傷付けて仕舞って後戻り出来ないよって悩みは、小さ過ぎて潰したくても掴み取れずに泳ぎ回るようなら、遥か外から遣って来て偶偶その悩みに絡み付いたみたいな乾く程に水の細かな揺れを練り上げて粘粘と粘り窮まるかな異なりを恐れる異なりが、小ささの脱け殻の小ささを、これでもかって切り裂けるだけ裂いてて、裂け口が有るとしたら裂け口から逃げて逃げて逃げ切ってな覗き込めない裂け口にしても粘粘と、なら水の細かな揺れを練り上げ粘り窮めてるに違いなく、な違いなくは違ってるに違いなく、だって違ってなくちゃ違いなくでもないに決まってて、なんて決まりがまた違う決まりに粘粘と呑まれるなら粘り窮まりも窮まりを呑んだのかな、もう粘ろうにも粘れそうにない異なりを恐れる異なりが、小ささの脱け殻の小ささなんかと比べられない程な小ささに縮み窮まり損ねて、小ささの外でまた小ささの、な外でまた小ささの繰り返し窮まる、その外との異なりに向かって向かい損ね、きっと外との異なり、それとも、外との異なりを恐れる異なりかも知れないけれど、な、

そんなそれと、自らのそんなそれとを照らし合い損ねる、その損ねに付け込ん
で射す、粘り窮まってドロドロな濁り水より濁った、円みの欠片だけを酷く圧
し詰めその圧し詰め窮まりが窮まらせる濁りが次次にぶつ切りにされ、その欠
片が隣り合う互いを擦り合い磨り潰し合い欠片でも無くなってなぶつ切りにさ
れようもない欠片で、いやそれってすっかり円みだよ、なんて、それの中の円
みを円みと知る円みが、なのでまるで、まるで円みと異なりもしそうに、な円
みを活かすかに決めて掛かれば、そんな、それってすっかり円みだよ、の、そ
れ、が行方を眩ましてそうで、眩ましてそうなら眩ましてないんだ、なんて事
にしたそうな、それってすっかり円みだよとの異なりが、その異なりの向ける
なら外を、向けないならその向けなくてに外を向いて、その外が独りで円みと
異ならなくちゃ円みにならない円み、それはもう円みとの異なりにならない、
そんな円みを、それってすっかり円みだよとの異なりの外にしか無い異なりの
円みを円まらせずに円ませて生み出してよう、な、生み出してようから滲む、
予め明るさとの異なりな尽きない光りを溢れさせる明るさが、疾っくに消えて
て消えてればそんな明るさで有るしか無くにな、そんな有るしか無くになそん
なそれは、必ずそれが欲しがらなくちゃいけないものを初めて欲しがってそん
なそれで、な、そんなものなんて始めから円みならどの円みの中にも円み損な
ってる、を、異ならせてて、って何が？じゃなく、何に？、なら、その異なら

せでしか無くに異なり損なって、いや違う、異なりなんてもうすっかり利かないよ、な、そんな唯損ないだけが独りと異なり異なって、独りより独りな独りの外に独りと異なれずに、な、独りと異なれずな程に、何に？の外へ放り捨てられる、そんなそれなそれがそれにそんなを刺し貫き損ねてようか、な、損ねてよう、が放つ明るさなら暗さで、って、そんなそれが、それってそんなそれな筈無いよね、なんて呟けずに暗さを増して明るさなら、そんなそれな筈無いなそれに喰らい付きたい細か過ぎて棘棘し過ぎな数え切れなん円み損ないが、それの周りに湧き出そうか、でもその為には明るさが要るんだ、先んて言い草の明るさの要らなさが薄いだけ薄く輝き、その薄過ぎてぼやけたそを果てなく延ばし損ねて裂けて果て、その果ててもう無いの僅かな匂いにこそ喰らい付きたい円み損ないに直ぐに囲まれる間もなく匂いは喰らい尽くされ、なら勝ち誇るのは明るさに違いなかろう、な、喰らい尽くされた匂いの恨みなら尾を引きそうに絶え、あぁ何が絶えるも有るもんか、絶えられずにの恨みなら恨みで恨みで無いなら恨みで無く、な、絶えようも無い恨みなら恨みで有るまでも無くに、何にへも有ろうね。その、何に、は巧いね、なんて言い草の明るさこそ要らなくて、それだけは絶やさなくちゃなんて事なんて疾っくに明るさも暗さもふっと消して済まされてるよとか、って、何に？見付け損なったぞ！な、そんな何にへのそんなそれは、そんなそれで有ろうと無かろうとそんなそれな儘の

酷くに酷くて、すっかりそんなそれでしか無くに、そんなそれとの異なりとの異なりで、だなんてまた異なりが甦る目は直ぐに潰され、その潰されの細切れを舐め回したい望みは、独り、な独りじゃ無い、で。な独りじゃ無い、って、何に？見付けたぞ！見付け損なおうとその損ないだって見付けに見付けて。な勢いで、な損ないも損なえば、そんな損ない損ないなんて損なわせ、何にへ独りじゃ無い、の、じゃない、は擦り切れ、何にへ独りだけが、独り。アハ、そんな独りが有ろうなら有るまでも無く、恨みであるまでも無くに、に、喰らい尽くされてようね、な、何にへの笑いならきっと、何に、も要らなくて、への笑いがその笑いを笑おうか、って、何に？の要らなさの、要らなさの外への望めようも無い望みの、何て有り触れた望まれよう、な言い草が有り触れてようなら望みは、望みの外へでも無くに望みを擦り抜けさせ、何に望みの外を喰らい尽くさせようかと、そんなそれな何に？を舐め回し、（二〇二一年八月二十八日）

（な事でもなそれでも…）

　な事でもなそれでもないんだけれど、独りでに遣って来られるでもないなら、それは何処から何処へのそれなのかだよ、そんな為の何処かに隠れてられるでも無かろうに、なのに、それの儘ずっとそんなそれでしか無かったかなそれで、な儘じゃそんなそれで有り得よう筈も無くにもそれで、それで、なそれの事なんて疾っくに終わってるようなら必ず始まらなくちゃいけなくて、始まり直すんじゃ無く、それっ切りの終わりを真っ直ぐ目指し直し、なそれがまだ始まりをも終わりをもどうしたって事でも無くに。だって苦し紛れに石を真上へ向けて投げて成るように成る事が始まったにしろ、そんな巡り合わせが間違いと間違いとは丸っきり逆さの元で、それもこれも生えっ放しの草を食い過ぎた草の根の匂いぷんぷんの丸丸太った鳥が空を低くうろうろ煩く囀り回ってたからだし、なんて事らはそれなりに小さな事でもなかろうけれど、いや事に依ったら、この身とさえ替え難い大事かも知れなくて、だってこの身はひょろひょろとさっきまで種を撒いてなかったっけ、土も耕しちゃんと種を撒かなきゃ成るように成る事だってちゃんと成ろうか、とか、余所事かに構えてた訳でも無いけれど、ならやっぱり、あの憎たらしい太った鳥のせいだ、なんて鳥は疾っくに雲の向こうで、避けて通れないのは唯一つ、投げた石が真下へ向かって落ちて来たって事なんだけれど、それだって何の事でもなさそうなのに、唯一つってのが曲者いや曲者なんてもんじゃない、こんな行く先も惨めに定まらない事なん

てこの先起こる筈も無かろうね、に唯一つ、真上へ投げた石が真下へ落ちて来
る、真上へから真下への間に何が有ったんだ！石だったら鳥を追って雲の向こ
うまで飛んでけよ！って今更叫んでみたって手遅れの手すらつるりと行方知れ
ずかで、な事なんてさっさと忘れよう、も殆ど忘れられないばかりに、少しだ
け忘れられた隙間に思い出され捩込まれて仕舞うさも悉くが噴き上がってそれ
に襲われ叩きのめされるみたいに却って確り忘れられずに振り返ると、って、
どっちを？って、石の真下へ落ちた処に決まってように、じゃ何故どっちを？
なのかって、その何故どっちを？を振り返れてるか振り返り損ねてるか、なん
てどっちでも構わなくに、だって成るように成る事が始まってるからにはそん
な事で、で済まなくにもそんな事だし、なそんな事なので何かも、始まってる
のって何かさえもあやふやで、いやあやふやは良いよ、あやふやで済ませられ
そうに無い儘に居られそうじゃないか。なんてのんびり構えられるのもそんな
巡り合わせかなって。にしろ、もう巡り合わせのんかを見てたって楽しめるな
ら楽しいだけ楽しめないなら楽しくないだけでこの先何もどうもならないに決
まってようし、なら態態何を振り返るのも煩わしいなって、それでふと逃げよ
うとしてた時が固められたみたいな、ええっと音でも無いんだけれど、なら音
の影の陰に音に肖って角角しげに潜んでそうな、その、ふと、の中へ転げ落ち
ちゃいけないものが転げ落ちたみたいな、音なんて空っぽな造り物さって直ぐ

に見抜いて聞き抜いて擦り抜けて仕舞おう、固められたみたいに失われる儘で失えない時にだけほんの微かにそれは擦り付けられ、微か過ぎて傷付けられる筈の無い時が甚く傷付けられ、そのせいで時は巡り合わせから遥か距たるまで切り離され、時も固められたみたいな時だけなら時じゃ無かろうな時を残して時から失われ、なんて時が時かもあやふやに、なら固められたみたいだけがあやふやじゃないのかな確かなあやふやがあやふやを打ち消そうとして打ち消せなくて、その焦りを焦らせるなら時が甦るかもね、なんて望みは望みの儘に放り捨てられ、でも放り捨てられたにしろ、その望みが望んで望みを放り捨てたに違いないなら、だって望みなんて抱え込んでたらもっと痛い目に遭って来たよって忘れられる筈も無くになな望みをしか望みには望まれなくて痛みなんて何時かしら温温した嘘で、で、もう再び甦ったりしないって定めないでは時は始めから時じゃ無かったとしか無くに定め切れないなら、時を時との異なりに呑み込ませ、その呑み込ませに時の面影を追う振りなら出来そうだぞ、それが出来ての振りなんだ、そんな振りが全てさって振りだって出来る振りを何が打ち負かせようか、なんて思い上がりが災いの元かは知れない儘に、その有るか無いかの時の面影の揺れる綾にでも足を取られ、そんな巡り合わせと歩みを揃えるしかないかなあれこれな企みに絡んで来るあれやこれやに輪を掛けたかに尽きない巡り合わせが合わさり巡って悉く溶けて消えて行くぬるりとした冷たさ

が拡がろうか、あぁ何なんだこの拡がりって、その外へか、この身を圧し出し
てそうで。圧し出してそうなら身は圧し出された振りをしなくちゃいけないの
かな振りをさせて貰える巡り合わせの外を見付けた振りをしてやっと、何処か
へ吹き飛ばされてうに怯えるその怯えを呼び込んで怯りをかめ込みたいかに先
走って丸まるみたいで。って何が？より先に、身は身の何かから身の何かへず
れたのかなるな身なんて圧し出されもしなかったさ、ならきっと潰されたんだ
アハハって、何の外でも無くて外な拡がりめいた、始めから失われてた時へ残
して来た凡ゆる巡り合わせの骸を積み上げた小山の影の僅かに懸かる、如何に
も腐ったように震えたがってそうなふわりとした粒と尖った窪みとの二つに見
えて一つなそんなそれに嗤われてそうで、嗤われてそうなら嗤われてるって決
め付けなくちゃどうにもならないかなって決め付けられもせず、ここは怯えへ
ちゃんと丸まり込もうって焦って怯えを丸めて仕舞えば、何処へとも丸まり損
なうしかなくに、もう、ふわりとした粒と尖った窪みとの二つに挟み取られて
そうで。でも挟み取られるは巧いよ、二つに捉えられたなら、そんな二つが怯
えを弾き除けて呉れてそうで、一つな事に。いやまさか、怯えを弾き除けるっ
て。弾かれたのは高高割られた怯えの殻なら怯えは実を剥き出してようけれど
そんな儘でも居られないなら、脹れに脹れる実は大き過ぎて見えない新しい殻
を被ってるとか、な怯えって何？な何も無さそうなのが怯えの元に違いなく、

その元に根を生やして伸びる、ええっとそんな根を生やせようにないそんなそれが、伸びたにしても、そんな伸びてられる処なんてやっぱり大き過ぎて見えないかで無いと変わらず、それで、ふと、そんなそれが固められたみたいな、その、ふと、の中を覗き込むと、覗かれた奥は空っぽが空っぽを空っぽにしないでは済まさないみたいに脹れに脹れながらその脹れに脹れとの異なりに脹れ果て、あぁ、ふと、へ落ちた固められた覗きが、ふと、との異なりに囚われたかな、なんて余所事みたいに推し量る心は空っぽの脹れ果てに引き裂かれ、ふと、と何の異なりもない、ふと、が、そうして固まった儘に凍り付いたか、凍り付いたなら何時か溶けそうだけれど、見回してもそんな凍っては溶けそうな成り行きは拒まれるばかりかに、そんな事と距てられたその外しか見当たらず、なんて何処を見られるでも無いのも、還ろうにも始めから根を生やせなかったなら還れる処が無いからで、ならこの先何処も還れる処なんだとか逆さに考えれば前向き処も何も嫌でも前を向くしかなかろうかな致し方無しの前向きじゃないか、の、じゃないか、は中中に後ろ向きかもな、と、前も後ろもくるりと失うのかな、失おうよって、どっちも向けずに根も望めないそんな、なら、まるで行き成り移し植えられたかな宿り木かもなとか、ふと、その姿を、前も後ろも失ったくりに重ねられるなら重ねたいって望みなんて抱いちゃいけなかったんだ、だってそれで、生えてもない根の匂いだけは光りみたいに身に降

り注いでる逆さにされた宿り木の、翼でも拡げてるかな姿が、何処を何処と見
られるも見失われるも無くに、浮かんでは直ぐに消えて行くしかないそっちへ
消えて行きそうじゃないか、の、じゃないかも疎かに、どっち向きも無しに。
な、どっち向きも無しにって、空っぽかは知れないにしろ向きの脹れ果てみた
いにどっち向きでも有ろうかって、推し量る心は空っぽの脹れ果ての引き裂か
れの先を読んで慣れたもんで、な心なんて、な心からしても自らに疎かなんだ
けれど、疾っくに置き去りにされてようなに背を向ける向きしか向けないなら
それも向けずに、な向けずにを縁（よすが）にでもあざとく抜け道でも辿って
紛れ込んだか、これ見よがしで物欲しげな逆さにされた宿り木の姿を、その翼
を拡げてるかな音自らさえ聴きそびれた音を短く響き直したその響きに象られ
たコロコロ転がり逸れる程に生えてもない根の匂いな光りの降り注ぎを慕った
に違いない痕に搦め捕られる寄る辺ない小さ過ぎる影みたいに纏った、小石に
しか見えない限りになきっと小石を嵌めて小石にする為の、周りを狭く脹らま
せた隠れた窪みと重ねようって、そんな望みに苛まれ、苛まれはきっと切り刻
まれ愈愈盛んに喜んでるみたいに砕け散り、生えてもない根の匂いの光りを降
り注がれ続けて宿り木の姿も溶かした姿へ混ざり込んでその光りを浴びるばか
りな姿を内から裏返せば、裏返された光り塗れの姿は、その追い付けない先に、
まだ何にも触れてない小石の為の窪みな形が独り、あぁ形なら何だって独りと

は程遠い程に独りなんだなんて嘆いてだけ独りかに、その向くしかない向きを向いて、窪みなそれとも異なる、小さ過ぎて小さ過ぎる自らを行き過ぎては、小さくも無くに少しも尖ってなく、小さく酷く尖り、それってきっと裏返された光り塗れの姿から逃げたいからにしろ却って逃げたい向きに塞がる光り塗れの姿に抱き込まれるみたいで、でも尖ってれば抱き込まれずに留まって留まる程に溶けて溶ける程に柔らかく丸まって水蛇が匂いだけで蜷局を巻いてるようで、その中に、そんな水蛇に呑まれもせずずっと襲われた切りに凍り付いた匂いのような、その姿の、光りも影も他の何より少なくてその姿で居られようかな、その居られようかなに染め抜かれた何の怯えからも怯え塗れに剥き出されてまだ何にも触れられてないそんな色形を、直ぐにも明るいだけの空っぽに換えたがってそうな、きっちり閉じて顕わな自らを少なさとだけ知れる、そんな窪みに嵌まってな小石に違いない少なさの匂いが、小石の面影も無くに小石よりずっと硬く縮こまって固まってて自らの匂いも殺し。な、少なさの望みは光りを欲しがる事だけれど欲しがれずにその欲しがれずに、で少なさで、な望みならそれは少なさには光りかも知れないって、光りの少なさを覗き込むように自らを覗き損なう少なさは、光りを失うしか無くに確かな光りを遠くへ追えてそうに、捩れる身なら捩って、な身なんて有るにしても少な過ぎて、少なさで。な少なさでは、先ずはと光りよりも、独りとは程遠い程に独りな形を欲しがるのは痛

い程でも、窪みな形が何の独りかも黙り込んで独り、まだ何にも触れてないのを驕るかに周りを狭く脹らませ幅を利かせるばかりでは、光りへの足掛かりになりそうな形を見付けるなんて叶う筈も無くに少なさで、にしろ、そんな少なさじゃ行くも戻るも儘ならず次へ繋がる少なさも塞がれようかって開き直るしかないみたいに、窪みな形の上に仄かに暗い程に明明と、窪みな形との異なりを掴み取るかに敢えて危なさを欲しがってそうに立ち昇って、これもやっぱり少なさでしか無かろうかな、いや、それってもううっかりこれかも、とか見えてれば、少なさとの異なりかなって、そんな立ち昇りなら重たげに自らを堕とそう先を知ろうと、先に来てたのに後から来たみたいな匂いを振り撒く干涸らびてもぬらりと生き延びるしかない、逆さを突き出すような小振りな宿り木の逆さの枝は殆ど腐らせて独楽みたいに回る、でも酷くゆっくりで回ってるとも見えない、薄い影を重ねる煌めきを丸めて放たれる鈍い光り、でも鈍過ぎて光りとも見えない、それをそうとしか見せない透けるばかりに際立ち暈ける徴が宿り木の面影もなく象られた、小さ過ぎて硬く明明と消え掛かる後ろ向きには空っぽを呑んだみたいにたっぷりと深げな前向きには見える通りに擦り切れ果てた染みが、その一つ有るか無いかも知れない色を様様に練り上げ続けて固まる程に自らを拡げて已まずに、すっかりそんなそれで無くなるに任せてるのを見過ごせない、そんなそれとは明らかに違って直ぐ側にそれそっくりに張り付

いて直ぐに離れて回り込みたい裏を探そうとして斜め下へ曲がって仕舞う、そんな差し迫る曲がりがそれでへたりと音を上げるなら、その裏へ回れて透き通る音の根が更に差し迫って曲がる、そんな曲がりに抗い切れずに、いっそ態と出鱈目な取り敢えずにやむなく色と色が殺し合うような絵に画いた宿り木の姿を晒そうかと色めく処を探し始めそうなら小さ過ぎる染みの姿を脱ぎ捨てるしか無くに染みとの異なりになって有りもしない真上へと消えたそうで、消えたそうなら消えてなくて、でも染みとの異なりじゃ染みは消えたんだよ、ってその異なりが嘘丸出しの独りな振りで叫ぶようなら、そんな独りな真似の出来る異なりこそ異なりとの異なりだろうって、その異なりとは異ならない異なりがその異なる儘を色めかせれば、そんな色なんて有る筈無くてな色で、そんな色なら確かに小さ過ぎる染みにその儘自らを映して行けてそうで。でも行けてそうで行けてないかは知れないなって、何をどう知ろうとして知れないの？の何をどう、も、その映してをどう映すかの事に違いなく、にどうにでも映されてなければ、どうもこうも無くなる色は色には留まれず、ならきっと色の失せたその失せたの例えば匂いかなとかな、その色で居られない艶めきが、映ったその先の向きを定めたそうに斜め下へ曲がれるなら曲がりたそうに、それとは逆さの向きとの間に挟まれて横へその先の向きを抱え込むかに拡がると、抱え込めるのは空っぽの中を爆ぜるその確かさの証しのように爆ぜるように酷く丸っ

こくな穢げにつるりと柔らかく固まって脹れる闇しか無さそうに、そこは思い掛けず淫らな科でも作るかに静まり返ってて静まり返ったりしちゃいけなかったんだ、って、もう取り返しの付かないのを取り返すかに淫らな科だけが、その静けさをのっそり掻き分けその狭い分け目の先へ一つ頭を反り出すにしろ、それに直ぐ迫る、その上に張り付いて待ち構えてる空っぽの中の闇を呑んで空っぽを空っぽで無くせば淫らな科が空っぽで、いや違うよね、って呑まれた筈の闇が、小さな染みの染みでも無さそうならそんな染みの徴になって、淫らな科に乗り移ったかに染みなんかよりずっと拡がってて、ならもう何の染みも空っぽも無さそうかなって、そんな徴が斜め下へ曲がるのを妨げられないでただ指を唖えてるだけみたいなそんなそれが、その遅れに遅れたのを取り戻すみたいに、姿を眩まして遅れを眩まそうって企むのか、それって、な遅れが何に遅れたかを初めて考えるに違いないなら遅れるどころか進み過ぎかなとか、さもうっかりとでも遅れを置き去りに出来そうかも、なんてうんざりもしそうな望みに隠れようって企んでるに違いないかな、なんて事が何処から見知れて仕舞おうか、を訝るそんなそれがそんなそれで居られそうに無いなって、そんなそれとの異なりしか顧みられずに、あわよくば、もう何の染みも空っぽも無さそうかな徴を真似て斜め下へ曲がれようかなとか、その、かな、を向けてそうなら向けてて、に、斜め下へは曲がれてなくて、なそんなでな、そんなそれが、

いや違う、そんなそれなら、そんなそれが、だなんて、そんなそれで無い何かを見下すかなそんなそれになれる筈も無く、じゃ何？って、そんなそれで無いが尋ねようにもそんなそれで無いが答えるしかなさそうなら諦め、その諦めを、じゃ何？に凭り掛からせ擦り付けたいのは、他に無いなら、すっかり斜め下へ曲がった、もう何の染みも空っぽも無さそうかな徴しか無さそうかな、とか、そんな徴を、その徴よりもっと斜めなもっと下なもっと曲がってて、その徴を一呑みの、徴との異なりにしても徴を一呑みなら徴との異なりと異なろうかって揺れて仕舞う、ならやっぱり徴かな、でだけに徴は、それでも揺れが収まらないなら、そんな自らを一呑みな、徴とも徴との異なりとも異なる、徴を一呑みに出会したそうで出会せず、そのせいで、そのそんなそれを見下す、徴を一呑みが嫌でも際立とうけれど、そうさ、見付けたぞ！嫌でも際立つんだな、何の何が何だろうと、なんて先走っちゃいけなかったんだ、だって際立とうけれどきっと骨を抜かれて却って強張るしかないみたいに立ちっ放しで、そんなの、ほったらかしにされっ放ししか無くに却って他の妨げになるなら、救いようも無く際立つしか無くなってて、な、救いこそほったらかしで済みそうか知れないにしろ、徴の一呑みは、それが他の妨げになるって何？って、徴の一呑みの徴は徴と異なって一呑みは一呑みと異なって徴の一呑みと異なりようの無い徴の一呑みな自らを顧み損ね、その損ねた自らを一呑みな徴が、徴も無くその無

はへり上まと異け向思あるな辺り覗つい
、尖よがれのながきっぁのいりよきても
巻りりるに異る向もち向をかへうに、一
きた光、圧な暴か切ゃき微し溶の吸徴呑
込そる生しりれれりいっかてけ無いのみ
みう影え係まる、裂けてにるてい込一に
巻なをてるでよそくな変見の消徴ま呑も
き窪円も、巻りのかかえ知はえにれみ出
込みくな逆きも微にってれ消てまてと来
まだ描いさ込っか向た仕るえそで徴異ず
れろき宿のんとさきん舞、なう覗のな、
をう出り宿で渦はをだえそいなき一りそ
全けし木りそでも定けばのんらが呑よの
てれての木うもうめれ他微だ消行みう出
剥どよ匂なで巻暴てどのかっえきのの来
が、ういん。くれ失思何さてる着失無な
さそかのかなよたせうにが、かけわいい
れの、光とんうそ、しも渦の消たれがの
、真そり少てなうでか先で、えなよ、っ
丸下んをし知渦で何な駆も消ならう覗て
くにな塗でれのものいけ巻えいなもけ、
閉き影りもる只無向なていなか、無るも
じっに込距の中いきら向ていしなさなう
たち促めたはになも、き暴んてんそら徴
鏡りさてり、巻ら失勢なれだててう何も
に据れ如たそき、せいんた、、微な処一
閉える何いん込暴れ任だそがなか、を呑
ざらかにのなまればせ、う、らな徴覗み
されにもか巻れる、のなに真、望のきも
れて尚空なき、とそ前ん向っ消み一込失
たそもっ逆込そはん向てき先えが呑めわ
中のそぽさみのすなきうをにる淀みるれ
で微のなに巻微っ向がっ変消かんとのた
丸か真、突きかかき何かええ消で異かか
くさ上光き込さりだのり、てえるななな

としか有り得なくに裸な姿を晒すにしても、鏡に閉ざされるせいでその微かさは幾重にも微かさを纏い尽くして裸とはまるで異なる姿に微かさを傾けさせて儚く消えるかにほんの微かにな微かさで、に、その微かさはその微かさのほんの微かさなんて知れなくて、それとは少しも相容れないんだって、その微かさのほんの微かさに背くしか無くに、その微かさを、その微かさのほんの微かさに投げ与えるように斜め下へ曲がれるうなら曲がれずに、でも投げ与えた微かさは取り戻せないなら、何を残せてるのかな自ら、いや自らなんて残せてるか残せてないかどころか有ったどうかも知れないなんて言い草もきっと嘘な、そんな、ついさっきまでだけな微かさが、でも微かさなんて失って微かさの様も知れなくなってれば、そんなそれでも無くにな、そんなそれが、それでもまだ丸く閉じた鏡に閉ざされた儘かどうかは、きっと初めて出会す必ず考えなくちゃいけない事に違いなくに考えられなくなりそうで、でもまるで考えるを失うでも無いなら微かには考えてようか、な微かさはきっと、ついさっきまでな微かさとはまるで異なってな微かさで、だって唯の微かさじゃ無く、考えが微かにな微かなだから、なんて考えに嵌まれば考えは唯の微かさの欠片みたいで微かさを突き破るかに何処へか舞い散ったに違いなくにな、その舞い散ろう姿を追う微かさで、いやまるで違う、抑も考えると微かさは背き合うしか無いよ、だって、考えが考えようとするって、唯の微かさにしろ微かさとはまるで異なっ

てな微かさにしろ、そのどちらの微かさとも異なる、なら仮に微かさで無くにな微かかどうか知れなさにしろ、それらとの距たりが距たろうとする事でしかなく、なので嫌でも考えは、その距たりが距たろうとする、に妨げられ、その距たりが距たろうとする、を考える事しか出来なくて、考える、で。でも、な事を、考えが考えてるとしたら、それとも、考えてるようなだけで考えてないのかも知れなくても、その、かも、だけででも考える、は、距たりが距たろうとする、と距たって、それってきっと考えるがそれだけの重みでも纏い、でもその重みって距たりが距たろうとするの重みとも重なってな重みで、そのせいで、距たりが距たろうとするのを歪められるなら歪め、歪められないなら考えるが替わりに歪むかして、距たりが距たろうとするとの距たりを、切れ目も距たり目もなく取り込んでは、でも吸い取らずに棄ててそうで。でもそうする程に、な考えは、距たりが距たろうとするとの距たりの距たり目に目を凝らすでもするしかなく、考える、で。でも、な考えを果たして考えが考えられるかなって、な考えしか考えられなくなってな考えかも知れないって考えが考えるなら、その考えられた考えはもう考えから剥がれ落ちてそうで、落ちてそうなら全く落ちてて、そう考えた考えもそれに釣られて落ちるしかないなら考えるは考えるを失って考えを考えられなくなり、その纏ってた重みだけが、逆さに突き上がる窪みの真下を突き抜けて更にその下へ刺さって行くのか呑まれて行

くのか、きっとどっちでも無さそうなら、その重みがすっかり窪みの真下で、その重みに見上げられ支えられてに窪みは逆さに突き上がれてる、って事らしいかな、なんて呟けるのは、真下の直ぐ上に独り、ふわりとした粒がふわりと消えたらしい痕に僅かに留められた重み、それとも、明るみ、それとも、そのどちらかに見えるならそのどちらでも無い、ふわりなふわりさの現れめいた徴、いや、徴だけは違おうね、だって徴だから、な、徴だから徴と異なろう、が、浮く重みと沈む明るみに挟み込まれてその二つを緊く纏うみたいで、に、その痕も残さず行方を眩まし。で、ならその眩まされたのは何？って、その眩まされた痕なら残るしかないよな、って、その痕がその痕を探してそうな辺りに見付けてしまう、徴だから徴と異なろうが痕も残さず行方を眩ました痕に肖ろうとするかの徴の痕に似せた、ふわりとした粒がふわりと消えたらしい徴、いや徴じゃ無い、だって徴だから、な、徴だから徴と異なろう、が、何の行方を眩ました痕も痕らしい徴も押し並べて掻き消し、徴だから徴と異なろうな眺めばかりを眺めてその眺めに溶け、いや溶けるのはその眺めで、眺めを溶かし込む徴だから徴と異なろうは眺めの先へも向かおうか、な、先なんて何処にも先めきも現れても来ないなら、その先の現れ無さに、徴だから徴と異なろうは食い込んで行くしか無くに僅かしか食い込めずに歪んで殆ど裏向きな姿を晒せば、でもその晒してる他に何も無いなら晒してないと同じで、いや何に向かって晒

すでなくても唯晒すだけで晒せるんだ、それともそうしてそれだけでそれを晒してその晒した先に何に向かって晒されたかが晒されて来そうじゃないか、ってその晒されて来そうなのは何？って、徴だから徴と異なろうの殆ど裏向きな姿が、裏も表も磨り減らしながらにその磨り減らしただけ裏は表に表は裏に裏返って、いや裏返るにしろその儘の返りで表へも返ろうかって甦って裏返ると表返るを捻り放つように磨り減らし、その晒されて来そうな晒されに向き合うように自らを晒したかどうか知らない儘に、眺めの先の現れ無さに僅かに食い込んだ辺りにすんなり逸れ、それでも徴だから徴と異なろうで居られるか、も何の事はない、ずっとそれを試してたみたいな心持ちに襲われるのに耐えられないかに、徴だから徴と異なろう、と異なろうと、そんなそれを自ずと異ならせ、いやそんな異ならせがどう遣ったら叶おうかとウロウロするのがやっとじゃないか、でもそのウロウロするで異ならせてそうで、異ならせてそうなら異ならせてようその異ならせがそれに相応しい徴を望んでるって思えてならなくて、その思えてならない徴が仮の徴の振りをするみたいに、な、徴で。いや必ず違おうね、だって仮の徴の振りが、その儘その徴じゃないか、って、その仮の徴の振りを後ろへ転げ落としたそうな斜め下への曲がりが、その為に、曲がりを裏返し反り返らせて益益斜め下を斜め下にして斜め下でも無くなる程に薄っぺらに斜め下を見上げられるなら見上げようかって見上げられずに、な、そ

んなそれかを装うかに沈みながら、徴だから徴と異なろうと異なろうとした異ならせを磨り潰しながら自らの沈みへ引っ張り込んで浮き上がらせ、って何を？そりゃ浮き上がるそれだろうけれど、な、そんなそれが、斜め下への曲がりをずっと斜めへ下へ曲げてたみたいな捩れ方で沈みを沈ませながら、そんなそれらに覆い被さって、な、そんなそれへと、そんなそれを覆い被さりな儘に少しばかり移せる処まで移せたかなって、その痕を映そうとする、それを映せる艶は、ふわりと消えたらしいふわりとした粒の上っ面で円みを誇ってるなんて中中な眺めじゃないかな。な、かな、って何？って顧みられるのは、かな、だけかなって、な、かな、がふらふら揺れて粒の艶の円みに吸われて呑まれようか、円みはきっと艶が失せても円みに違いない、なんて思っちゃいけなかったかどうか、円みは酷くゴツゴツとすっかり円みと異なり、でもゴツゴツを無かった事にすれば、そんなの直ぐにでも出来そうで、全く円みで、な、円みに触れたくて触れようと出来てるか知れなくて触れられない、常に低く潜められてそうに流れる薄さが薄さを薄くして薄く、でもそのせいで時など擦り抜けて確かな円みをこっそり帯び続けられる、あちこちに狭苦しそうにぼんやり分かれて、は、行く先を隠したそうに湧き上がり、その湧き上がりの影を呑んでは、その呑んだ口の姿を探してその口の奥へ還りたそうに、確かな円みの殆ど果ての無さに自ら背こうと却って円みで円みを円くするかに磨きを掛けては、その口の

奥を裏返らせられそうなまでに剥き出し、にしろ湧き上がりも分かれてたらしくてその影の一つ一つに呑まれたようなら口もぼんやり分かれてそうにしろそんな一つ一つなんて有りそうに無く、だって円みは数なんて溶かして仕舞うだろうから、ぼんやり分かれる口もどう分かれるやら分かり難く、な、にしてもどのようにか一つ一つなのにしろ、そんな口の奥では裏返らせられそうも無さそうな儘にどう剥き出されようか、としか剥き出されようは無くの剥き出されの他に無いなら、それに順って還れるなら還れる奥を、ぼんやりかに、いやそんな剥き出されのせいでぼんやりは振り捨てられ、ぼんやりは微かにも許されずくっきりとかに、少しだけ覗く振りでも出来たようなら、その覗き返しが尽きせず沸き返って少しだけの覗く振りなど忽ち呑まれるかに真上へ湧き上がり、でも瞬く間も惜しむ微かな光りが激しく透け、より拡がる真上へ弾け細かく砕けるようにそれが過ぎれば、少しだけと振りとが削り落とされて、奥への覗きだけが、ぼんやり分かれるって何だっけ、と一つ切りに置き去られたみたいに恥ずかしげにその恥ずかしげだけの上っ面の下に隠れたそうに、な、何が隠れたそうかならきっと知れに知れてようかにすっかり消え、覗かれる奥に覗かれる筈な、円みの無さのその無さに肖って円みをなぞって円みのなぞりを象る姿を、一雫のほんの始まりの薄い脹らみみたいに真下へ僅かに脹らませ、その透ける事で、その透けを更に脹らませて零したそうに、で、覗けてる奥を

揺らし揺らし引き揚げる程に、失われた円みへの鋭さを円みの重みへ突き刺し、奥の奥へ降りたいんだって望みを限りなくささやかに繋いでいたそうで。などらは、それと係わりもなく距てられてるに違いないそんなそれがそれなら、その距たりも失せ、その失せた痕だけが有る中にそれだけが有るしかないそんなそれを、それがそれを映すばかりなどちらへとも脹れに脹れた鏡の拡がり続ける眺めだけが透け、その透けはどちらかだけを圧すに違いなさそうにその透けを見る見る薄くして、薄ければ薄い程透けように薄過ぎて透けるも無くなって硬い殻を被せる、いや違う、殻にしても被せるとは逆さの、裏返しの殻を逆さに引き剥いて被せるようで殻な、そんな殻をただ食い込まされ、その圧しの強さに反り返る窪みのような形の力を噴き上がらせるしか無くに、透けの薄さの届かないまでに薄くに、闇が見当たらないなら闇だろうその闇から光りが捻り出されないなら光りだろう、それなら闇と光りは異ならないだろう、との異なりへと、始めから重なってたに違いなくに一つに重なり、その一つに含まれる光りと闇と光りと闇との異なりとの異なりが展げる距たりへ墜ちるか舞い飛ぶかするならどちらとも異なるに違いなくに距たりに架け渡され。って何が？なんて尋ねようもないそんなそれが、そんなそれとの異なりとも係わりのない距たりを見付けたかに、見付けたぞ！とか言いそうになりながら、黙るって何かも忘れて空耳を掠めたかの声を止め、そんな距たりへ、その距たりの姿へ傾れ

込むかに己の姿を見付けようとして何も見付からない傾きに肖って自らの姿を描き出せそうに伸び上がれば、あぁ伸び上がってだけはいけなかったんだ、な嘆きにもならない小さな息は殺されたくて殺してよって呟いて殺され、その殺されの必ずそこで殺されるにまで辿り着けたんだって喜びが引き裂かれて裂け口から湧き上がる更に強い喜びが引き裂かれて裂け口から湧き上がる更に強い、でもそれはきっと喜びでも無くなり、なら裂け口は喜びとの距たりにそっくりだろうか、な、引き裂かれる喜びとの異なりが、必ず独りで無くに独りに、その必ずと独りで無くと独りとへ独りなりなそれを架け渡せないかな小さな艶のような震えそれとも震えるように消される艶、きっとどちらでも有りそうならどちらとも異なってその異なりと異なろう、それが姿を留めるとしたら小さ過ぎてだけ粒の痕な見掛けをおづおづと自ら消してはその消しを顕して小さいだけ小さい影を残してそうに、そこに何処からともなく行き成り置き去られたかに有るしかないか、それは進める限り進むしかなくに少しも進めずに、その有る儘でも居られないなら、有ると無いとの潰れた裂け口にでも磨り潰されるかに、な、そんなそれで有るしか無くにそれとも無くしか無くにそれとも無くしか無くにに有るしか無くに、に、な、に、も違うに決まってるって躱し、有るか無いか知れずに、と、有るとか無いとかをあっさり消して知れに知れ、な、そんなそれな儘に、引き裂かれる喜びをもその有る無しに巻き込んで消し、そ

れとの異なりだけで、磨り潰されるかに、を圧し返して脹れ。で、それって何との異なりかな、が知れない儘に、その知れなさこそ欲しくてやっと遣って来て呉れたみたいに脹れは満たされ、満たされれば脹れは、それを包んでいたらしいもっと大きな脹れに脹れながら惨たらしげに吸われ潰され更に脹れる艶を拡げ残したにしても、拡げ残されたら艶にしたら、そんなの拡げられても残されても艶でも無く、唯脹れに脹れ続けたいと焦がれても叶わない、その焦がれが凋み続け、その続く限りに続くしか無くに見窄らしく、いや、でも見窄らしいって、どっちへ向かってだって、その見窄らしさを酷く光り輝かせてようし、どっちへ向かわずにも見窄らしさなど、放り棄てて光り輝いてようし、その二つの輝きが焦がれるように一つに重なる、それとも始めから一つに重なって尚もその重なりに焦がれて重なりから重なりを剥き出して重なりとの異なりに焦がれを破り捨てて欲しそうに、そんなそれらが打ち消し合って重なりも焦がれも擦り抜けた一つなら一つで、なら一つでないなら一つでないか、な、一つなんて始めから無くに、の、始めからって何からだっけ、に、一つなんて無くになんて無い一つなら一つで有るだけの、なら一つとも異なろう、な異なりの置き処に困るしか無くに、その異なりを異なりと異ならせようと何が出来るかって。いやそりゃ何も出来ないよね、だって異なりが始めから違うから。違う異なりさえ、その異なりと異なるも無くに違って。つまりもう、異なりって何だっけ？

なんて問いも有り得ずに。良いよ、その異なりがどうとかじゃなく、問いが有り得ないのが良いね、なんて誰が言うんだっけ、は、予め磨り潰されてたみたいに光り輝いて直ぐに燃え尽き、それがお終いでもう何の問いも有り得ない処に見窄らしく放り棄てられてて、って、何が？って、ほらまた有り得ない問いに縋り付こうなんて企みは見え透いてて、その企みだけが見えて透けて、その見え透きの他は何も見えも透けも為らずに、な事では企みも、見えて透ける他のものでは無くなりそうかな、とか、の、とか、こそ企みを全て引き受けてそうに窪むか窪みを窪ませるかな裏返りな様を窪ませてるか、なだけな姿を現しそうに僅かにぶれるようなら、企みは、その企みとは異なる、きっと企みだけの為の企みへでも自らの居処を移すかに見えも透けもせず、何の見え透けとも僅かに距たる薄く窪んで窪む程に鋭く立ち上がって立ち上がる程に、その自らの立ち上がりに自ら伸し掛かって拡がる、でも重なるようにでは無くに、なのでずっと一つな。な一つな、は、何の為の一つななのかな、なら、その、かな、が企みを引き受けるしか無くに引き受けてよう、いや引き受け損なうしか無くに引き受け損なって、そうする事から始まる企みを企み直してよう、そんな始まりが、企みか企みの先の企み、な先には企みを企ませた、何も企んでない企ませが、その企ませた企みに真っ直ぐな根をすらりと食い込ませて企みから命を吸い取ってそうで、な命は始めから空っぽ過ぎて始まりでしか無くに始まり

でさえ無いと分かってよう、に真っ直ぐな根は益益その企ませた企みを圧して迫って苛んで遂には破って、その企みの破れが企みの行き着きたかった処なら根も行き着くに違いなくに空っぽ過ぎに脹れるのかな、な、かな、なんて無いならて脹れてるか脹れてないかのどちらかかどちらもかどちらでも無いかで、それでも根なら何を何処へ吸い取ろうとしてるのよ、何処へそは知れないけれど、何を、なら、あぁそれって凄く知れに知れるよ、って、その知れに知れるを、知れないばかりに知れに知れる何を共に愛おしみたくて堪らなくて、その、愛おしみたくて堪らなくてのせいできっと知れに知れるんだろうけれど、その知れに知れるは知れずに、なら、その愛おしみこそ真っ先に憎むべき、って、その真っ先も知れに知れてて、その真っ先の向かう先にならら知れに知れる根が吸い取るその何筈の姿も描けそうで。な筈無いよ、ひょっとして知れに知れるって、その、な筈無いよ、の事だったとか、いや、だとしたら思いも掛けず巧い成り行きへ赴いてそうなのでは、だって、な筈無いよ、が知れに知れるなら、それを裏返すのだって難しくなさそうで、な、難しくなさそうが、裏表も無くに何かまるで知れなくて、なんて知れる知れないにだらだらと手間取ってたりしてちゃいけなかったんだ、だってそうしてる内に、根は、脹れてるか脹れてないかのどちらかかどちらもかどちらでも無いかに、そんなそれで至る処に根を張ってて。違うの？なんて言えるなら言いたいのはもうその根だけに

違いなくに、根も、根で無い何かがまだ有るなら有るで空っぽ過ぎで。な空っぽなんて直ぐにも毀せるさ、って知れに知れ、ならもう毀すもなく毀れてるのってどうなのかな、どうなのかなこそ自ら姿を現したそうな根の姿に見えるなら何も見えてないかな、の、かな、なんて吹っ飛ばし、あぁその見えてなさは良いよ、見えてなさを裏返すのだって難しくなさそうも何も幾らでも裏返せて、だけど裏の裏のその裏までも見えてなさは見えてなさを窮めて行きそうなばかりで、その見えてなさの窮めっぷりが見えに見え、だって見えに見えなきゃ何の窮めも無い訳で、なんて見えに見えの窮めっぷりを窮み見て仕舞うそんなそれが、そんなそれの何処の何がそんなそれなのかな、なんて嘯くように呟いたなら空耳で、って聴き取れたらしいそのそんなそれと異なるそんなそれが、いや違う、そんなそれ、までは間違って無いにしても、が、が違うよね。じゃ、そんなそれをなのかそんなそれになのかそんなそれのなのかそんなそれとなのか、なんてどれとも違って、な、そんなそれ、とも違うかも知れなくに、な、そんなそれ、それともそんなそれとの異なりを、いや違う、そんなそれとも異なり、までは間違ってないにしても、を、が違うよね。いや何故違うよねなんて言えるのかな、違うよねこそ違ってそうなら違ってて、なら、そんなそれそれともそんなそれとの異なりをもそんなそれそれともそんなそれとの異なりにもそんなそれそれともそんなそれとの異なりのもそんなそれそれともそん

なそれとの異なりとも、一つも違って無くて、な、そんなそれ、だけど、そんなそんなそれ、って、そんなそれ、なのかな。な、そんなそれってそんなそれなのか、な、に、いや違う、そんなそんなそれってそんなそれなのか、な、までは間違って無いにしても、に、が違うよね、の、違うよね、が違ってるか違ってないかは、そんなそんなそれってそんなそれなのか、な、が、どう、な、なのかに懸かってるとは知れるけれど、って、何に？と問えないなら、そんなそんなそれってそんなそれなのか、な、だけが、自らへも自らを問えずに、そんなそんなそれってそんなそれなのか、な、へ、放り棄てられてるか自ら自らを放り棄てたかしてるに違いなくに、そんな、そんなそんなそれってそんなそれなのか、な、な、そんなそれ、で。な、そんなそれ、で、なら、それっ切り、それはそれ、だろうけれど、まるでそうで無いかも知れなくに、それ、とも知れて、な、そんな、それ、とも知れて、なら、知り覚えが有ろうね、少しも覚えが無いからには。その、無くて有る知り覚えは、その覚えも失せる程に有り余ろうって勢いで、そんなものそれを卵から孵るみたいに破って、ゆっくりと失せたかも知れない知り覚えで満たせば、って何処を？なんて問えないなら、そんなそこも無いそこを、そんなそこの底へ沈むしかないみたいなら沈めずに、舐められる底を探りたいかに僅かでも窪めないかなって延び拡がるしか無くに、どのようにかその延び拡がるしか無くにから逃れられてそうで、

逃れられてそうなら逃れられてるか逃れられてないか、それを知れるのからは逃れて逃れ切れてよう、だって僅かな窪みが一つ、そこしかないそこの底にぴたりと微かに前向きに窪みのそっちの縁を探すみたいに傾いて嵌まってると分かれば分かるようなら、あぁ前向きとはまた何て言い草だ、って前向きそのものに嘲るように呟かせたいのは、その向かれた間違いなくそっちの前も後ろも無く唯どちら向きとも無くに向きだけで互いを溶け合う程に縛り合って内へも外へもはち切れそうに静かに、疾っくにはち切れて何も無かったみたいに、その何も無いの有り余る無いを曝け出しては隠して隠す色に現すその色の現れを一流れの透けた艶に回して窪みを描き出したそうな、大きくはないけれど間違いなく小さくないなら大きいと認めて構わなそうな大きさを持て余してそうに内へ縮みたげに却って内から撥ね返されて戸惑ってそうな振りで小さくないだけの大きさをそっと食い破るように裂き、一流れの透けた艶に重なって艶より艶っぽいなら少しも艶めかない、それより脹れも凹みもしない始めからそのようでしか無くに違いなくに盛んに静けさを喚いてそうに、ほんの微かにも動かないのが酷く煩げに震えても震えても震える前へ戻って戻り過ぎて震えを裏返して静か過ぎるのが居たたまれなさそうにも震え直すけれど、その震え直しは震えの内へ内へ留まるように突き刺さって震えの裏返しの根っこを押さえ付けるかに押さえ付け損なって滑るしかない震えの静か過ぎが過ちを巻き返そうと

嫌でも帯びる円み、いや違う、円みでだけは無くに円みとの異なりとも異なる、そんな円みらしさ、とは言えそうなら、それで済ませられそうなり円みらしさなら円みとは異なろうかなとの異なり、確かかどうか知れない程には確かにそれはそうなんだ、だけれど、あぁそんなそれはそうなんだなんて直ぐにも何の事でも無くなろうに、にも、無くならずに、なので、そんなそれとも異なるし異ならないし、な、いやそんな、知らない流れに塞がれるかに切れ切れに丸め込まれた声音を並べるだけそれはそれから距たって、その距たりだけのそれでも無くに、な、そんなそれともきっと異なろうなそんなそれが、それともそんなそれに、それともそのどちらでも無くに、そんなそれ、な儘で、それから先へとは係われずに、な、そんなそれ、なら、そんなそれって、少しもそんなそれで無くに、でも、無くに、こそまるで怪しく、その怪しさへなら係わって行けそうな円みとは異なろうかなとの異なりが、それはそんな異なりが、としか、切れ切れに丸め込まれた声音を繋げるしかない儘に、それをそれと異ならせ、その異ならせに繋げて何の声音も塞ぎ、その塞がれへ拡げ出て行ける、って何が？なんて問えないそんなそれにしても、拡げ出て行けた先の円みに過ぎる静けさを喚いてそうでな静けさに呑まれながらにその静けさを呑み返し、に、呑んで呑まれようなら何を呑むも呑まれるも儘ならずに、に、ずっと望んでたみたいにそんな自らをまた拡げ出して行けそうにも何処まで押し戻されるか知れ

ない程に戻されてようか、あからさまに晒されるその戻されは形だけなら間違いなく窪みだろうけれど、何が形かさえ見付かりそうになくにそれらしい形は見付けたくて、それには縮めるだけ縮んでその窮そりになら小さな窪みも見付かろうか、なんて望みだけを空回りさせ、でも望みからしての空回りなら望みを外せば空回りでは無かろう、なんて望みだけならどうにでも拡げられそうに却って縮もうかって動きは酷く空回りに障って回りはしてもじりじりと空で無くなるなら空を埋めたのは何？なんて問えるのか問えないのか、いやそう問うより先にもう、そんな問いは問い詰められなくて構わないぞって喚いて静けさを周りに激しく円円しく飛び散らせてる静けさが、その周りから窪みの形もその望みも消し去り、その消し去りの重みに自ら拉がれるみたいに飛び散ってた静けさを一舐めに潰して窪ませ、そうして静けさの窪みが次次に棘棘と繋がるなら窪みはそこから斥けられるしかなくに窪みで、って、何処で？なんて問えないなら問えないようには問えてよう、その問いだけが逃げるように一繋がりの静けさの真ん中を破り、いや、真ん中こそ酷い端っこかも知れないぞ、それでこそ窪みだろうよ、なんて如何にも取って付けたような見知らぬげな円みの声色を真似た切れ切れに丸め込まれた声音が、真上から斜めへ光りの渦の一巻きに僅かに満たないみたいに斬り込んで、でも斜めが知れない、どっちがどっちへ斜めなのか、を何が何の為に調べなくちゃいけないのかな、な、調べるに

群がるのはきっと斥けられて戻りたくて息を潜めてた元からの元の知れない窪みで、でももうそれらは切れ切れに断ち切られ窪みの欠片でしかなければ窪みの面影も無くに、でも欠片では更に粉粉に毀れるしか無くに欠片でも無くなれば重なっては崩れて窪みとは似ても似つかない、何だろう、そんな何だろうなそれが何だろうって喚いて静けさを周りに激しく飛び散らせてる静けさが、幾重にも円円しく、自らの先を自ら争うみたいに更に重なり連なって潰れながらにその先の窪みなら窪みを窪みでないなら窪みでなくて構わないそんなそれに身を投げたそうで。身を投げたそうなら投げてないばかりか必ず投げたそうじゃなくに必ず投げてようか、な身が知れないけれど、その知れない身ってどうなのかな。酷く必ず身でなければならないような、まるで何だって構わないような、な身じゃ疾っくに、どうなのかな、の中へ溶けて消えてる、その溶けた身を当てもなく探すしかない、窪みなら窪みを窪みでないなら窪みでなくて構わないそんなそれ、いや違う、そんなそれとは異なりようも無くにまるで違った、なら何？な問いを避けて囲んで、静かにその自らの静けさを蔑んでそうに静けさの窮まりより激しく喚いてそうに現れるしかなくに隠れてる、きっと何かの声音を含んでるに違いなく、でもその声音の疾っくに毀れて消えた声音かも知れなさそうに、なら声音との異なりを声音の残り香かに揺蕩わせてそうで、なら、少しもそうでなさそうに、そのそうでなさそうを窮めて行きたそうに墜

ちて行く、とは行き成り何処へ？なんて問えないなら、何処より手前の辺りだろうって当たりを付けられたなら付けられたでそんな辺りなんて磨り減った痕の磨り減った痕も無くに、でもその、無くに、が微かに輝いてるよ、なんて声音との異なりの揺蕩いが、贋の声音でも揺蕩わせてないかな、なそんな辺り、は辺りなら辺りな儘に辺りで無くなるまでにゆっくり柔らかく捻曲げられて行くばかりに、その捻曲がりだけが色めくかに延び、色めかないかに延びない全てを含む眺めを置き去りにしたは良いけれど、置き去りだけが残りそうで引き返そうかって何をどう引っ繰り返したか態と分からないように裏返るかに捻曲がれば少しも引き返しも捻曲げも出来て無くに、尖って行けないって分かってる、きっと毀れ果てた窪みを悉く溶かして固めて空っぽなら空っぽだけになった、でも穴になるのだけは頑なに拒んでそうな、でもそれは始めから穴では有り得ずに穴でしか無くてな拒んでそうなら、今更に穴になるもならないも無さそうだけれど、に、穴でしか無くにしか拒もうと出来ないなら拒める筈も無くに、拒もうとされる儘に穴とか、と決め付けられもせず、な、疑いが疑いを呼ぶしか無くに、その呼ばれて已まない疑いが紛れもなく穴で、って言いたいのがそんなそれだけかなら、その紛れもない穴から真っ先に疑いの渦巻く穴へ落ち込もうか。そんな穴の渦へ落ちて穴に巻き込まれて砕けて行く穴なんて穴にしか追っ掛けられそうに無く、そんな穴を何処から持って来られるかな、の、

かな、は、すっかり形だけは穴でしかなく、でもそれは穴の形の他には有り得ないからだけなら少しも穴の形でないのかも知れなくにも抑も何の姿も形じゃ無いなら、その形じゃ無いの穴に穴は姿形も無く落ち、そうして穴すら穴を見失うようなら穴なんて何処にも始めから有りもしないのが穴で。違いない、だって違うから。な、だって違うから、は、もうどう穴へも落ちられず穴でも無くに穴との異なりでも無くに、な、そんなそれって決め付けるしか無くに、な、何だろう、穴でも穴との異なりで無くても穴の渦かも知れないな、なんて有りもしなさそうな穴の渦が向こうから圧して来てそうに、な、向こうから、が、穴の渦を呑み込むかに、渦との異なりを巻くとは異ならせて、唯その向こうからに向こうからを、身を放り棄てるかなその身を委ねさせてそうで。あぁ見付けたよ、向こうからってそんな身だったんだ、って誰が言うでも言いたいでも無い、ならきっと空っぽで満たされて身動き取れないそんな空っぽが、向こうからとそれに向かって向こうからを向こうからにしてる向こうからとの異なりの要を、そんな空っぽな限りには占めるしかなく、な要なんて要から逃げ出したそうで要な、では、どっちをどっちとも無くに、つまり向こうから、なんて向こうからがその端から潰して粉粉にしながらに操ってるに違いなく、だって違うから、な、だって違うからに違いなく、が、そうして益益その要をさもしく尖らせて付け上がらせ、要は要との異なりを悉く呑み込むかに脹れて要ばか

りなら、その要の要を要で突き破れないかななんて間の抜けた望みが、それ唯一つ間が抜けてないに違いなくに後にも先にも要で、な要では何の使い途もなく要の痕みたいなら全く嫌でも周りに望まれて要で有り続けるしか無くに真ん中から弾けて消えて無くなろうか、その消えて行った有るから無いへの裂け口が覗き、覗ける限りその狭い奥は広広とその向こうからで充たされ、いや違う、覗ける限りが違うんだ、裂け口は覗けられもせず、だって裂けたからには有るから無いへの有るも無いも裂けて唯その口だけが唯口なだけで。な口って何？なんて有るも無いも裂けた後に問える筈もないなら却って有ると無いとを問いながらなら問えそうで、に問えなくて、に必ず何処かで問えてよう、だって有ると無いとを問うなら果ては無さそうで。な、果ての無さそうな果てが果てれば、だって何にしたって無さそうって有りそうだものね、で、必ず何処かで問えてよう、も行き詰まろうか、って、どっちへ向かってるの？って問われ返されるのか問い直されるのか、どっちへ向かってるの？の、どっちへ？と、向かってるの？が啀み合い問う問われるを奪い合ってそうで、きっとどっちも、問う問われるのどっちをも欲しいんだよね、だってどっちをもで無かったら、問うも問われるも出来なさそうで。でもどっちもどっちに啀み合うだけなら、どっちへ？と、向かってるの？は少しずつ距たるしか無くに、その距たりに裂け口を拡げ、って何の裂け口？って裂け口にも問えないならそんな裂け口で、姿だ

けで閉じたような姿ならぺろりと裏返って裂け口に裂け口を呑み込ませでもし
ようと自らを撫で摩ってそうな、な、裏返っての裏返りの呑み込みなんて事が
有ろうかって、何もない処から何もない処へ浮かび出たような淡く透けた疑い
が、裏返るをその裏返りに沿うようにぺろりの裏返りに撫で摩って捌くしかな
く、その疑いは姿だけで閉じたような姿だけなら裂け口を引き受けなければな
らないかに裂けて口を開けようかな、って疑いが自らを問えないなら、何にと
つての、かな、かな、な、かな、が、どうやらもう裂け口とも見えない姿だけ
で閉じたような姿にまでその疑いの姿をまた淡く拡げて仕舞ってるらしく、そ
んな、かな、が、姿だけで閉じたような姿だけなら、裂け口とも見えないを引
き受けなければならないかに、捩れるだけ捩れたようにして裂けるだけ裂けた
口を厚く脹らませてるかな。の、かな、は、どっちへ向かって何かを望むのを
仄めかしてそうにふっと時を止めるかに軽く考え込む振りをしてるかな透ける
ように、って、その透けるようにで、かな、で繫ごうとしてないか、も、要ら
ない事みたいに見えて来そうなら見えて来よう筈もなく、閉ざされた闇みたい
なな頑なな奥行きを脅すように覗かせる裂け口が厚く立ち塞がれば、その立ち塞
がりに態と円円しく細細しく怯えに身の細るのを身を固められて嬉しがってそ
うに限り限りと係わるのは下を向いて掠れる斜めばかりで、閉ざされた闇みた
いな頑なな奥行きの後ろに隠れてそうな何の声音もそれに届かないなら何も変

わらない要か要で無さそうに唯その動かずに居ようと小さな重みを守ってようかな、その重みへと回り込むように真っ直ぐに、斜めは互いに繋がろうとして斜めな渦も描かれようかな、って、かな、を、置き去りにして斜めばかりがその真っ直ぐな回り込みに突っ込んで行ってようか、さあね、な、さあねの傾きなんて知れてて何を貫けるでも無くに直ぐに毀れれば、厚く立ち塞がる裂け口は支えを失って上向きに潰れ掛けて大きくだらりと下を向き、でも拡がるのはそのごつごつと硬そうな硬みの臭そうな如何にも縁だぞってだけで縁な縁ばかりで、口は上を向いたまま寧ろ閉じ掛けようか、に、手前の縁の下向きと競うかに墜ちて已まないかの後ろの臭みを裏返って舐めたいかの裏返りに反り込む下向きの曲がりに重い窪みの重さに引き摺られる窪みみたいに窪んで拡がって拡がり過ぎ、口の奥は平べったく奥へ奥へ滑るかに円円しい艶を巻き、閉ざされた闇みたいな頑なな奥行きさえこじ開けてないかな。さあね、知らない。かな。いや、さあねかどうかとか知らないとか、そんな事じゃなく！って声音をぶらしぶらしざらざらとぶつ切りに重たげに延び上がらせた、ならきっと、そんな声音を擦り出す潰れも脹らみもする穴を隠し持とうかな、そんなそれが、いや違う、そんなはそんなでも、それが、が違おうね。だって、それがのそれはもう裂け口に呑まれて仕舞ってて、なので裂け口はもう口でも無い位に拡がり過ぎてようし、でも口とは異ならずに、だって、口が口と異なったら他は他

の何とも異なりようも無くなって口に好きに呑まれるか、逃げられたにしても逃げた先に口と異ならない口が口を開けてようかで、でもそうして口だけになっても口は口を呑めなくて裂け口で。違うの？いや、違うかどうかなんて何が何と違おうと違いも無く、だって裂け口に窮まったに違いないよ、だって違うからね、の違いないと違うの何も異ならないに違いないって事にして、だって、裂け口に窮まれば、な事にするしかする事も無くに何だって出来そうで、いや出来そうな何だってを諂うように追っ掛ける振りでもして、その振りに遣って来る、それとも遣って来ない何か一つらしき振りとの異なりにでも肖って、何かとの異なりと異ならない一つの振りを振り翳そうって勢いの付かない勢いで、だって何が出来そうも振りだけじゃ勢いも空振りっぽくてね、で、いや振りだけな空振りって決まったでも無いのは、遣って来る、それとも遣って来ない何か一つらしき振りとの異なりに消れてるか消れてないかにしろ係われてるなら振りとの異なりに係われてるに違いなく、な、そんな事での肖りを勢いに変えようかって、一つに。あぁ、でも一つに、って、一つらしき振りとの異なりだろうとそれで果たして一つなのかな、きっと、その、かな、は、一つに何処までも纏わり付いて来るに違いなく、まるで違いそうに、いや、まるで違いそうに、は巧いよね、違いそうは、どう違おうと違う限りには間違いなく一つにで、なんて巧い一つにが巧いが徒で音も無く失われ、音も無く、すら失われ、失わ

れた音も無く、が、ずっと距たりながらに一つに失われ続けてようって、音も無く失われた一つに、が、距たりの果てにもう一つの失われを見出すようじゃないか、一つと一つで間違いなく一つで、な、そんな一つな失われが、いや違う、そんなじゃ一つなに失われが損なわれ、失われとの異なりに一つなは囚われるしかなさそうに、失われとの異なりと囚われに裂け、さて、それって、一つと一つで間違いなく一つなのかな。知らないな。その知らないなって裂けか裂かれは一つとだけ知ってる、そんな知ってる一つで、そんな一つに一つは裂け、あぁこれで何が何でも一つにな一つだろうね、なんて高ぶりが振り翳されれば、一つにな一つとは異なる一つにでないあれこれは毀され砕かれ失われて行こう、間違いなく一つに、なんて見通しちゃいけなかったんだ、だって、一つにな一つを、それ一つに残し裸に剥き、いや違う、裸に剥かれてないものなんて無く、そのそんなないものなんて無いから唯一つ剥き出されて一つにな現れに一つにな一つを晒してよう、とも限らないのは、そんなそれに必ず遣って来る、もう一つの一つにな現れに一つにな一つが真向かいに立ちはだかって剥き出され、もうそればかりになって仕舞いそうだからでも仕舞いそうならそうはなってなくて、そこへ、そのそんなないものなんて無いから剥き出されて一つにな現れに一つにな一つは、その立ちはだかりの真ん中を突き破り真向かいへ押し開いて、そんなそれ一つな自らを展げ尽くす嬉しさのその絶えない痛み

を堪え切れないかに縮みに縮んで縮み綻ぶかに尖り、その切っ先は丸く匂やかに花咲かすように裂け、でも裂け口の拡がるより先にそこからまた尖って出てまた切っ先は裂け裂かれを繰り返したそうに苦しげに伸びた首を鋭く細かく振るように震えて数知れない震えの動きに一つにな一つの一つは暈け、暈けた一つなんて一つじゃないどころか一つだったせいでどうにももう一つには戻れない、そんな狭苦しい一つじゃ無いで、いやそんな一つじゃ無いとも異なるそんなそれで、には一つかも、と数知れなげな一つとの異なりと楽しく戯れてそうにでも、一つから数知れない数までの数と円円しく距たり、距たる程に円みと円みがずれをずらし重ねに数を捻らせ、その捩れをどう数えようもないなら数をすっかり葬り去れたみたいな尖った息をまた尖らせて円円しく、でも数は捻られ葬られたなら数と距たる為の円円しさじゃなく、なら唯一つじゃ無いとも異なるそんなそれが暈けた一つを翳してそんなそれで伸して行ける為かな、な筈も無いのは、一つじゃ無いとも異なるそんなそれは、有るにしても、そんなそれで無くなってよう、って、葬り去られたらしい数の痕が、その痕を消したげに擦り切れ果てて益益尖る針を熱く斜めに振るように狭いだけ狭くに尖り波打ち、その痕が姿を伸び縮みさせるらしい兆しを微かな声にしてるに違いなく、その波打つ速さの増す程に声は尖り過ぎて掠れるか掠れ過ぎてまた尖るか、どちらでも無いなら声は声を声なんて聞いた事も無いと放り棄て、声との異なり

に乗り移ろうと、いや放り棄てた声が戻ってまた声に乗り移りそうで、でもそう分かれば声は声を弾いて声との異なりからもはぐれたろうかって捩れるのはきっと声との異なりで。な声との異なりじゃ声が何かも知れず、知れない何かとの異なりな自らを自ら捻りに捻って捩切りたそうで捩切れず、ぐるぐる丸まる塊なら丸まり切れずにぐるぐると上から下とも下から上とも曲がり過ぎて尖った行く先を何処へ押し詰めてようか、な動きを推し量れようなら、それと異なる知れない何かの穴を埋められたろうか、な穴が穿たれる遠い音の細く流れて来るのを舐めたい望みに望みが引き回されもしないなら望みは望みを殺すかに活かし活かすかに放り棄て放り棄てるかに喃んで砕いて呑み込むかに穴が穿たれる遠い音を惹き付け、その細い流れの歪みに望みの身を擦り付けのその擦り付けてだけな身は、直ぐに擦り付けられなくなれば身でも無くなその痕でも無くに、その痕でも無くにな徴を脅すように望みにまた擦り付けようにも滑り重なって、その滑り重なり滞りだけの歪みを描きたそうで、描きたそうなら疾っくに描いてよう、その描き重なりが何の望みの時も貫き裂くなら、だって時を得なければ望みは無いからね、望みは自らを断つように断たれ、その断たれ重なりに望みの身の痕でも無くにな徴が滑り重なれば、何かの望みかなとも異なるそんなそれが、ただ途切れ途切れで途切れ重なり滞る声音へ変わって行きたそうに、な、そんなそれをどう眺められようか、な、貫きが貫きの空っぽば

かりを貫こうとされるのか、でもきっと有りもしないそんな貫きは、その貫き一つじゃ無いとも異なって、その異なりの一つ限りに賭けようかって、描けそうなら何だって描けそうな儘をちゃんと描こうって、平べった過ぎて少しも窪んでないのが全く窪みかな窪みの真ん中から突き出た尖（とんが）りを象ってそうな、と言うかその象りに肖ってそうな何かの望みかなとも異なりながらに異なり重なり、あぁここへ来て異なり重なるなんて酷いかって嘆けば、その嘆きは一つ限りかそうで無いかもあやふやに嘆き重なるしかないようならきっと重なれて無くに、に歪みようも無く、歪みから唯ずれるばかりに、でもそれって、一つ限りか、って問えないならそんな疑いで埋まってよう穴埋まってようなら埋まる前は穴だったに違いない、でも埋まりながらには、穴との異なりを異なり重ねたかも知れない、そんなそれが、いや違う、そんなはそうでも、それとがが違おうね、だってそれもがも、それがそれでがががな限りそれやがとは異なれないからね、だなんてどの口に言えようか、なんて言った口こそ言う前から口の姿も無いまでに噤まれてて、え？噤まれてた、なんて口も有る筈も無いなら何が有るかって。知らない。そんな知らないそれが、それが有るって何だろうってそれを探しに行きたいみたいな、でもそんなの直ぐに嘘丸出しの嘘も無いなら丸出しだけなそんなそれを見付け損えば、その見付け損ないに穴を見付けられたぞ、でもそうかなとか思い倦ねてようか、いや違う、そりゃ違

ってるに違いないよ、だって違ってなかったら穴との異なりを異なり重ねたかも知れないを見過ごして忘れた振りでもするだけだからね。な、何であろうとそんなそれが、丸出しだけの嘘の無い先へ剥き剥がされ独り温く輝くかに翳され硬く刺刺しく脹れ刺刺しさを舐めるような円円しさの禍禍しさに悶え苦しみながらに禍禍しさなんて直ぐに何でも無くなって却って禍禍しさを悶えさせるかな勢いでまたその先の硬く脹れて行ける辺りを蠢くように弄ってそうな儘に身を捩れさせてはその捩れの中に身を巻き込みたがってそうに、あらぬ辺りへ目玉そっくりな裏返しに縮み果てた窪みかな姿を温くもなく輝かせ弾け消し、その消し痕に確かな窪みを見付けたそうな目玉そっくりが墜ちて行きたそうに浮かび、いや違う、それだけが浮かんでなくて墜ちようも無くに他の悉くを浮かばせ、いや違うが違う、悉くなんて無いし何が何と違ったって浮かべるものなんて無い、だってそれも違うから、なら違うが違うも違おうか、だって違うが違うから、な、そんな違いの無い違いの無くて違うから違うが、違いの外にでも、な外なんて嘘と決まってる外だけれど、そんなそこに、なそこも嘘と知りながらに、跨がるように跨がり損ねるかに架け渡されるその姿を描けないかって微かに震えるか震えと異なる異なりを現す徴に身を傾ける、その傾きが傾けなくて、そんな違いの無い違いの無くて違うから違うの違うから違ってたなら違いようも無くに外を見失い、な外なんて嘘と決まってる外だけれど、って

繰り返されるその繰り返しの中に傾き直されるそんなそれが、そんなそれかも知れ損なって顧みられる有りもしないそんなそれのそんなそこに、裏返りも縮みも窪みさえしない窪みが窪みの裏を弄るように蠢く様の円円しさに距てられて遠ざかるのに温く抜かりなくぬるぬると触れようかって、触れる触れ損なうの隙間なら常にだらりと力なく開けられてて逃げられるに違いなくに温さを冷ましてぬるぬるを脱ぎ捨てる、その脱ぎ捨てようのもっとぬるぬるとしててぬるぬるを跡形無く消し去ればぬるぬるなんて始めから有りもしないぬるぬるを滑らせてただけなら無かったって分かるがまるで分からないんじゃ分からないは分かりに分かって分かり損ない、いや違う、何を損なえるもんかって、繰り返しの中に傾き直されたそんなそれは、自らを傾き直さないではそんなそれでも無くなろうに、で、無くなったのかな、な、かな、が、独りでに自らを傾き直したに違いなくに、円円しさの禍禍しさの円円しさを慕うかに傾き直しの直しだけでも幾らか丸められないかなって捩れるしかないなら反り返りながら円みを帯びたかの徴ならもう直ぐそこに見て取れそうに、その見て取れそうに圧されるかに窪んでうっかりその窪みに安らい掛けてる禍禍しさに囚われ、囚われを抜け出し、でも何を抜け出させたかって、それを自らの囚われに尋ねるしか無く尋ねられる筈も無く俯いたろうか、その俯く傾きこそ円みの徴かも知れないなとか頼みながら縋りながら、あぁ縋りながら、の、何て頼りなさ、縋っ

たりしちゃいけなかったんだ、なんて顧みる何処にも縋れてなくに、その縋れてない何処にもへ縋り直し、それで傾き直せたかなって、ささやかな円みの徴を溶かして徴を脱ぎ捨てた円みを剥き出そうって剥き出せずに、剥き出せずにが剥き出され掛け、でもそれも顧みられる中なら顧みられを纏って覆われたろうに、剥き出されの円みにでしか無さそうで、無さそうなら無いのか有るのかその隙間を、剥き出されの円みが数知れず円円しく流れ出て、あぁこんな処で流れ出るなんて、な思いも寄らない流れ出が流れ出るなら、きっとその流れ出だけは嘘じゃ無いって思いは嘘でもそんな嘘は打ち棄てられての、でも流れ出の嘘じゃないまで打ち棄てられた、その流れ出の失われた痕に粉粉に砕けるかに墜ちて行くよ、って、何が？なんて問える筈も無く、って、問える筈も無くをまた繰り返すのは禍禍しかろうにも禍禍しさに滑らかに艶めいて禍禍しさを打ち棄てて流れ出られた辺りを探るかに延び曲がって行こうなら、顧みられは脱ぎ捨てられ、そうして剥き出されるそんなそれが速くに剥き出されを隠すかに却って裸を晒すかに却って裸こそ裸を覆うかに剥き出されて剥ぎ取られ、あぁ粉粉に砕けて墜ちたのは剥ぎ取られなくての裸の数数だったんだなって知れ、数数の数の数え難さも埋もれ掛けてたかな滑らかな艶めきに沿わせ絡ませれば数数も擦り切れようかって企みは危うく却って事を難しくしてそうな事なそんなそれが、自らの内の危うさを外から食い潰すかに内と外の危うさを引っ繰り

返そうかって企みにのめり込む危うさを、引っ繰り返せた事にし引っ繰り返さ
れた事にして内から食い潰せば、それっ切りの、の何がそれっ切りかなんて問
えないのも知れてよう、その知れてるばかりに知れなさの危うさを突き止めた
くて突き止められずに歪む、その軋みにでも付け入るかな身振りは粉粉に砕け
ようか。そんなの知りたくも無さそうに無さそうで知らない。あぁそんな知ら
ない、が流れ出ようなんて望みは儚いか、その儚さなら数を何処までも突き
詰めて幾らでも測り取れそうで、に、知らないに知らないが戻ってるのかな、
ならきっと知らないに戻るしかない知らないはそんな知らないを知らない知ら
ない前からずっとそんな知らないへそんな知らなくに戻り続ける儘で、な、知
らないに何の数が測れよう。そうしてそんな知らないはこっそり測れる数を捨
てて彷徨うとだけは知って、それも知らない振りをすれば知らないより知らな
い知れる事にでも辿り着けるかなんて惚けてるのか惚けたいらしいのか、そん
な惚けた儘の内へ知らないより知れる知らないを呼び込んで溶け込ませたいの
か、その呼び込むまでは何とかなろうけれど溶け込ませるには互いを結び付け
るかせめて擦り寄って擦り寄ってると分かり合う色でも匂いでも無く色でも匂
いでも有りそうに仄かに延び拡がる鈍過ぎて痺れるとも知れない抜かりない痺
れの内の痺れを痺れが痺れて痺れ果てるみたいな痺れを絡ませ絡ませを損ない
呑んで呑まれた絡ませ損ないに鈍過ぎて鈍くもない痺れの痕を明明と細切れに

してそれぞれに円みを円みを弾く虚ろから戦い取らせてはその鋭く尖って使い物になりそうにない円みを徒に虚ろの傷口へ抛り込もうかって虚ろを失えば残る傷口は抛り込まれた円みの勢いの欠片に埋まって脹れてザラザラと消えに消えて消え切れずに消え窮まって、な、窮まりなんて傷付いて蹲る虚ろにそっくりだなとかすっかり虚ろな円みが呟こうにも黙っしかないなら、黙ると知らないとを擦り合わせいば何がどうなるか知ってるような知らないような、な黙りに乗り移れて仕舞いそうに明明と乗り移り損ない、いや違う、だってまるで違いそいにないから、な、そんな知らないが、いや違う、そんなはそんなでも知らなうが違おうね、だって何も違わないから、な、そんなそれが、そんなそれで有ろうと、そうしてないとそんなそれでは居られない、そんなそれがそんなそれで有るだけでそんなそれを絶え間なく一衝きにしてる、そんな一衝きなそんなそれなそんなそれを、その一衝き一衝きのそれの先に翳さなければそんなそれで居られずにそうしてるそんなそれを、そんなそれに何が出来るかって訝って、あぁなので一衝きは、そんなそれで有るのには必ず無くてはならないんだな、なんて行って来いみたいな行っても来てもない癖に、だって行けるも来られるも一衝きに係われる筈無くにそんな言い草は直ぐに燃やされ、そんなそれの何も出来無さを睨めては剥き出し舐め回し、な一衝きと自らを定め、そんなそれの何も出来無さに一衝きの届かない先を譲り渡すみたいに絶え間ない一

衝きに収まって。だなんて儚い望みに囚われてどうしよう、疾っくにそんな望みはほんの一衝きに貫き通され冷たく横たえられるまでに一衝きを繰り返され、ぬるぬると溶け出せもせず内へばかりに内をぬるぬると隠して何も隠せてないとも内を晒し、って何処へ？な、何処へならそこへだよとか聞こえて来そうなそんなそこで有る筈も無くにそこで無いが、のっそりと晒された望みの内を蝕みたそうに蝕めば、そんなそこで無いなそこがそこに有るかのように何処へ？を何処へか導こうか、な望みは隅まで傷だらけと傷塗れで、な傷が何の傷か知れないのが何とも傷で、なんて抜かりなく傷に肖る嘘を混ぜ込んでやっと傷では傷でも無くに、な傷でも無くにでは治しようも無くにその儘で、それは望みの内も外も確り蝕んでよう、な、蝕み蝕まれの貫き貫かれての蝕み合い損ないが、そこで無いと異なる何処へ？を何処へ？とも異なるしかなくかに、今更に望みの何も出来無さを必ず流し出すなら明明と流し出し、拡がる明明に嬉しくて堪らずぴちぴちと跳ね回る暗さの音が音を溶かして波立つとしたら明るさと暗さの隙間だけが有って、悉くはその有っての内で躍ってる溶けて音で無くなった元音達の屍ならもっと活き活きと跳ね回るのを已められない屍でも屍との異なりでも有るような無さの無さそうなに蝕み蝕まれ、の何が蝕み蝕まれるのか、問われ答えられなくても知れるなら知れに知れるそんなそれと、蝕み蝕まれの貫き貫かれての蝕み合い損ない合い損ない、拡がる明明にだけを生き延び

させたいかに暗さを抱いて疾っくに消え去ってるのを、生き延びさせられたそんなそれが見出すなら見出しそれとも見出し損ない、その隙間の隙間の無さに磨り潰されるなら必ずそんなそれはそんなそれで、に、拡がる明明にとは異なって導かれた明るさに蝕まれ貫かれるばかり自らもその明るさを呑み干して更に僅かに明るい円みと窪みの覆い重なり合いに挑むような遺、二つは挑みようも無くに距てられて一つ限りなく距てられに互いに隅に追いららながら際立ち鈍︵のろ︶く逃げるように鈍く輝き合い、その逃げ惑う輝きはその鈍さに消され鈍さだけが光りを放つように暗い光りの内を覗くかに俯こう、どちらも一つ限りな距てられだけを残せば残したい限りは残せたかなと何の望みからも解き放たれたかに望みの窮みに墜ちるようなら望み塗れに舞いたそうに薄ら淡過ぎて暗過ぎる色で描かれたかな翼の暗過ぎさに溶けたかに項垂れて吹かくい風との異なりより軽くその儘に浮き上がれそうに横倒しすれすれに傾いてなき切れずに傾きなど跡形も無く消え、その跡形の無い痕ばかりな痕しか無く傾何処が痕かも明かされないで拡がるばかりに傾きとの異なりへ傾き異なり、て異なりとその異なりとの異なりこそ無かろうねって、僅かに明るい円みと窪みの覆い重なり合いに異なり返され、そんな無い異なりと異なっては異なれるのか異なれないかの拘りがうろうろするようならしてなくて、そのしてなくての中に円みと窪みの覆い重なり合いも吸い落ち圧し潰されて行くようで残るのは僅か

に明るいだけらしいけれどまるでそうでもなさそうなら何だろう、な、そんなそれ、にしても、始めからそんなそれと異なってなそんなそれ、なのでそんなそれとの異なりでも有ろう、その異なりのそんなそれが、失われた僅かに明るいを探さずには居られないみたいに僅かに明るいの裏へ回り込みたげに、そんなの何の望みでも無いって分かりながらに、その異なりもそんなも放り棄て、ただそれだけなそれを晒せば、そのそれは何処までもそれで有るかに縮みたそうにそれ自らを疑うしか無くに、で、それはそれなんだともそれで有れそうにも無くに、それ、なそれは何？と問えるのは、そのそれの外だろうなとはその外がその内へ自らを慌ただしく暴き立てそうでも、そんな暴き立ては疾っくにその外からも外の内からも外の外からも逸れて僅かに明るいに溶けてそうで、に、図らずも辿り着けたかな僅かに明るい、の何処が明るいのか、その暗さは目眩く程で、その目眩きが暗くにでも輝くかな兆しを僅かに見せても直ぐに途絶え、その痕を確かな痕にしているのは僅かに僅かにの僅かなだけで。な僅かにも途絶えれば、その途絶えた痕が何処までもそれで有るかにそれで有るにしろ何の僅かにの徴も打ち消されてよう、それと異なるか異ならないかは知れそうにない、僅かにの兆しは僅かに過ぎる程に溢れ返ってよう、って、その兆しを兆させて兆しと認めて行こうかなんてしてるのは、僅かに明るいの何処が明るいのかの目眩く暗さの僅かな明るさしか無く、だって他に無いんだからそう

でしか無く、な他って何？ってその他は誇らかにでも尋ねようけれど、それはそう尋ねられての他に他ならないなら他に無いの他も他に無いの内で。あぁそんな事なんだ、目眩く暗さの僅かな明るさにしても。そんな事なので、兆しを兆させて兆しと認めて行こうと自らを現し晒して晒すなら隠して隠すなら始めから無かった程に再び現れられもせずにそんな有り様を晒すしか無くにそんなそれで。どう、違うの？それはまるで違おうね。だって違わないから、って違わないに違わされたまるで違うが何処までもその違うを違わせてすっかり違わないなら、全くそんな儘にそんな事で、な全くこそ真っ先に頽れれば、そんな事は一溜まりもなく失せて失せたのも失せて直ぐに忘れられ、でもその忘れられは骨みたいに尖った一衝きな痛みに違いなく、痛みと幾ら異なろうと何の異なりも振り払ってそれとも異なりともせず痛みへ戻って来そうで痛み、でも何の異なりも振り払って異なりともせず何の痛みを痛もうか、に痛み、かどうかはきっと痛みにも知れない、その知れなさにはきっと痛みは無かろう、な痛み、な痛みが何にしろ、それはもう拡がりを突き抜け何の拡がりも越えてようかにその越えられた拡がりへ刺さるように消えるか消えるように刺さるか、どちらでも無くに知らず刺さっても消えてもいると変わらないかで、そしたら痛みとの異なりだろう、な異なりはきっと、それまでの何の異なりとも異なる異なりかも、に痛みなら痛みともまるでそれは異なって、その異なりがまた、それま

での何の異なりとも異なる異なりと異なって、にまた、突き抜け越える限り、それを、そんなそれと決め付けようも無くに、でもそんなそれとは限れないだけでそんなそれかも知れない、そんなそれとも異なり、な異なりが、それまでの何の異なりとも異なる異なりと異なるかどうか、きっとそんなの異なるも異ならないも無い事にして、の、事の、無い事からの行き成りな現れが、その、事にとってだけの異なりを確かな異なりとして、事の前に立ちはだからせてそうで。な、異なりの立ちはだかられに立ち向かえる筈も無くに、な、そんなそれだろうとなかろうと、に、そんな忘れられの一衝きな痛みが、酷く古びて弱って何故その儘すっかり頽れて仕舞わないかも酷く分かり難そうなそれ限りなそれ限りを翳してさも今更の今にも擦り切れて独り向きを定めたがってそうで定められる筈も無くに、でももう現れの取り返しの付かなさに疎いのかうっかり向きは現れさせられたなら歪められもせず歪めさせられもせずに向きなら向きは酷く怪しくに向きで、一衝きな痛みなんて疾っくに置き去られて取り戻せなさそうとも知れずに、でもその却って一衝きな痛みの徴ならその現れる処に幾らでも見付かりそうに、な、見付かりそうが薄っすら拡がるかに隠れるように微かに、散り砕け果てそうに僅かに果て戻るかのようにさも逆さに蠢くなら紛れもなく徴じゃ無いかってその蠢きが自らに徴を付けてそうで付け切れずに徴を頽れさせて已まないようなら何が徴かって知れる知れないに揺れ惑う一衝

きは痛みを削ぎ落とされてて少しも一衝きじゃなく、行方も定まらない唯の弛
い限り弛い痛みとも知れない痛みかも知れず、なそれとも異なれずに、その異
なれずにを円円しい艶を煌めかせるまでに明るく脹らませられたらって望みが
脹らんでその望む通りにそっくりな嘘な脹らみに沿って急いでその異なれずに
が艶めき煌めけば、嘘にそっくりなそんなそれだろうなって、これも脹らんで
仕舞う望みだろうけれど、何で脹らまされて仕舞うのかな、の、かな、の中に
望んでもない望めも出来ないかも知れない望みを齎そうかってものが行き成り
遺って来たかに疾っくに遺って来てるかも知れなくて、も、かも知れなくての
ときめきが少しでも凋めば唯の望みに過ぎないかなって、望みが望みを望みと
見切って見捨てるなら、それは何の望みも無かろうに、その無かろうを無かろ
うに出来よう望みは見切られた望みの内に望み直され脹らむ真似かに脹らめば
爆ぜて消える、その消え痕の必ず窪みと異なる窪みの延び拡がりも縮みも墜ち
も舞いもしない、さてそれって円みだろうか、円みなら少しも円みじゃ無くに
円みとは異ならない、そんなそれがそんなそれとも無くに、にそんなそれで、
なそんなそれを望むしか無くに望んだりしちゃいけなかったんだ、なんて望み
なんて疾っくに消えて戻れないけれどもね、って、そんなそれだけでそんなそ
れで有ろうと、それが望みにならないようにさも何もしてないかのようにかの
ようにな通りに何もせずに、な事をした事にした事にして、そんなでそれだけ

でそんなそれで有ろうとは出来たろうか、って、した事にした事を顧みられるなら、必ずそんなそれだろう、に振る舞って何の障りも無いなら、そんなそれかは何処も無くな何処までも酷くあやふやにふやけて怪しくなり兼ねない、そんなそれに何を望めるか、それを知りたい望みが、そう望ませるその望みの向こうなら向こうの、きっとこの望みの望ませと何の係わりも無くに、その向こうなら向こうが向こうでその向こうなりの望みを望もうか望むまいかは知れないが望みの望みで有ろうなら何程かには、かに、望みなのは知れ、その知れてるのを知れて、そうかそれで、この望みをこの望みは望まさせられてもしてそうかな。な嘘の脹らみが脹らみ窮まるようなら嘘は窮まり無さそうに嘘な自らをさらりと脱ぎ捨て、嘘だけど、って、嘘を脱げば空っぽでしかない嘘の裸を晒すなら晒せずに晒せない裸は嘘の裸に見る間に磨り減らされるみたいに新しい嘘を纏い直す嘘と絡み合い、その空っぽを、これだ、見付けたぞって確かめれば、唯その確かめられたつてならその限りには満ち欠けの無い空っぽだけに充たされ少しも空っぽじゃ無いと変わらず。にしろ、空っぽじゃ無いのは空っぽを差し置いた空っぽじゃ無いなんだけれど、そんな空っぽじゃ無いじゃ空っぽと差し替えられたってそうとも知れなかろうなって、空っぽじゃ無いはそんな見過ごしには出来ない空っぽを見張ってたくてに見失い、の何を見失えるのかな、な見失いからして空っぽじゃ無いと空っぽのどちらからも何の望みも失

せさせて距たって、なら、その距たりに望みを望ませ失せさせる、その望ませ失せさせを映せてそうかな、は、望みか望みの失せたかは知れないならきっとそのどちらともの異なりで、な異なりなんて無いって、その無いっての向こうなら向こうな向こうで無いなら向こうで無い、をそんなようにしてるそんなそれが、それの儘に有るって望まれてならなくて望みを失せさせられたくてならなくてに堪らなくて、に、それもまた脹らみなら窪みの向きへでも細って行くに違いないい姿を嘘の裸みたいに浮かべさせられて、あぁ、いや違う、あぁ、なんて無い、あぁ、の行って仕舞って戻れないそっちも失って失えずに這えるなら映えらされず映えるなら這えさせられずに、に映えてだけはどっちへも這えて戻れないなら消え映えられるその映えてでしかない俄造りに直ぐ様砕け流れる己の痕でも追って、向こうを向こうにしたい望みへと交わりたげに沿うように沿って、沿う儘に沿い損なって墜ちて行くなら何処へ？は窪みに違いないって、違いも違いないも無いって分かりながらに、なので嘘じゃ無いぞとか身を硬く保ちたげな振りで、向こうなら向こうじゃ無いし向きでも無い向こうを探ろうかなとか、さてそんな徴も無いならきっと徴を悉く消して反り返る窪みとの戻れない距たりだろうか、なんて出る処へ出られた兆しも無いけれど、その有ったにしても無いけれどの先に、先なら先が先を急いでようか、なんて言い草のさらりと滑り込む淫らさをどうしよう、が、先を急ぐなら必ず急ぐの淫ら

さに貫かれてどうするも無くなれば無くなったでどうしよう、だなんて淫らなどうしようをどうかともし損ない損ない、あぁ、なので、あぁ、は、あぁ、に何時でも戻れるんだ、の、あぁ、が、あぁ、との異なりでも無くに、それはそれを淫らな儘に斑に置き捨てようと圧し被さり損ね、墜ちさせられもせず、そうかそれで窪みなんだって嘘にもならず見付け損なえば、孕めずに流して孕めた流れの産む渦の砕け交わり艶めく艶を取り逃がし続けさせられるみたいに、うんざりする程に重たげに平べったいだけの窪みの底の軽みにゆったり揺られて高く吊られる高さを測る円みを円みごと擦り消し、あぁ、込み上げて来ようね、何も込み上げさせられないんだって、そんな込み上げの何て映える、なんて何だろう、な、そんなとは異なるそれに、映えさせられるのか映えさせられないのか、そのあやふやは自ら映えよう、映えようなら、その映えようを映え捉えられよう、その重みと軽みの叛き合い映し合う二重を貫く重みも軽みも係われない映えさせられを戯れかに低く滞らせて窪みの底を呼び込み煌めかせて底と異ならせ、底を失った窪みを溶かす窪みの内にずっと隠されてた穴をその穴の穴で無くなりたい何時からか知れないずっと長い望みで暴き返し、その窪みと窪みの内の境に溶かされよう穴の縁を出来るなら円く映え捉えようと、誤ってそれを映えさせる何も出来ないに決まってる時の訪れかを、でもそんなの間違ってると悔しくに待つみたいに、穴そっくりかに縮み丸まり込む真下への

傾きだけなら映えさせられようかって、それを映えさせようとしてようかなその向こうなら向こうの向こうのそんなそれと競い合わされるかに空っぽと見切られてる窪みの内へ甘い水に誘われるかに尖って却って末広がりなりかに新しい窪みを窪みの外へ追い求めようか。でも窪みの下敷きになって先に窪みの下敷きにされてた古い窪みに馴染んで、いやどうしてそれが窪みだろう、なんて湧き水が行き成り脇から湧き出したかな勢いな吸うばかりの息の塊みたいな外を向いた横穴に出し抜けに揺さぶられ、いやどうしてそれが外を向けよう、なんて外なんて無いと直ぐに分かるのはどの外かな、な、かな、ごと、その息の塊に吐き出された先の末広がりなりな程に窄まる扇なら扇らしくに縦に翳され去り傾こうかなただ微かな微かさだけな徴な、一つだけと見紛う数知れなげな見極め難さに突き刺さり掛け、水の光りに限れば水になって裏返せような煌めきを抱き留め損ねて息を吐きたくても息の内へしか吐けないなら吸うばかりなのか、それって酷く怖がらなくちゃいけないんじゃないのかななんて怖がれもせずに怖がっちゃいけなかったんだ、だって息なんて吸うとも吐くとも無しに塊なんだって覚えが甦るようで、その覚えの甦りを逃した外へ、外になって墜ちようなんて余りに外で有り過ぎようかにずっと斜めな儘に更に斜めな外へと、粘り着く息の塊を悉く振り払って突き刺さり、その突き刺さりの円みが、突き刺さられた外の円さに突き刺され返されて円みを失う円さを突き刺し、いや違

う、突き刺せも刺されもせずな円みの覚えが円みな儘に、つまり円みしか無くに、その円みな外へと逃がすしか無く。そこに何の異なりが異なれようかって異なりが異なりを疑おうか、でもそんな異なりも、その異なりの外へと逃されよう、円みは無くに。その円みしか無くにと円みは無くにの何て異なりよう、異なりが異なりな儘に異なりから逃れるしか無くに。な、その無くにな徴な、一つだけと見紛う数知れなげな見極め難さに、息を止められそうに息苦しいけれど、そんな息苦しさと知れれば息苦しさは息苦しさな儘に息苦しさを跡形無く消し消し痕も消し消し痕の痕も消した、数知れなげな見紛う一つだけな見極め難さが独り、独りに独りな儘な筈も無くに独りで独りを打ち消し数知れなげな消し痕を一つ一つかに消し直しながら繋げて繋がらず、あぁ繋がらなさの何て微かさな見極め難さな余りな見極め易さ、そんな易さの覚えは何処へ甦られようかって甦る覚えの何て覚束なさの消し易さ、その消し易ささえ消せるならきっと何の覚えも消せなかろう消されなかろう、な消す消されるに擦り込まれて行く一つだけな見極めの忘れられ易さ、そんな易さのせいで真っ先に忘れ忘れられ忘れさせられる一つだけな見極めるも見極めないも無いただ一つだけ、それをそう忘れさせて已まずにぶれないそんなそれが、そんなそれなんて有りもしないかに一つだけな儘に、幾つにも数え易くに一つな儘に、そんなそれと数えられるそんなそれとそんなそれの繋がりを繋ぎ、その繋げない奥か先か外

か、きっとどれとも違うそんなそこに何の徴の煌めきを見出そうか、な、見出そうかな独りに独りな覚えを甦らせたくて墜ち切れず、な、（二〇二一年十月二十日）

（な、痕とその痕へ…）

な、痕とその痕へそれと違う痕を、きっとそんな痕なら痕でも無かろうかな、に、な痕の痕に、どのようにか痕らしげなそんなそれをそれらしげに残さずには居られない儘に既にそんな痕も無いかの痕らしげしか残ってなかろうかなんて嫌でも微睡んでそうに、ひやりと後ろを透かさず磨き上げられたように丸丸と空っぽを鋭く危うく脹らませられて削り取られ、そんな後ろは捨ててだけ前を、何も映り込ませない鏡かな冷たくすれすれまで薄くにしか向けないようなら、でも、かにも居られなくなって暫くするかしたら消えるしかない、ってのもどうやら違おうかな、いや必ず違うに違いないって、な、すっかり眠ってるのについうっかりと蔑んでたぼんやりに蔑み返されるみたいにぼんやり眠り直したいかに温く弛くを激しく、あぁその温さ弛さの何て果ての無さそうで直ぐ

に果てたそうで直に果てるのも激しさ自らに見窄らしげに見えてる激しさ、なんて言ってみたいか言った覚えが有り過ぎて忘れたいなら言ってみたいは棄てられ忘れたいのが激しさかな、とことん温く弛く、なんて長続きしたい狭苦しい激しさが温さ弛さのもっと狭苦しげな狭間の裏へこそこそ逃げて行くのは好きにさせてと、で、で済まないのは温さと弛さとが、と、で繋がれようも無くに、ぼんやり眠り直したいかな何を持って来ても蔑み蔑まれそうな辺りを平らかな燻んだ明るさに切り出し、並ぶにしろ揃うにしろ隣り合うにしろ結び付くにしろ嗤み合うかさえしたくも無くに互いを忌み嫌い、そうして睨み合うのも嫌でも睨み合ってよう、に互いの虚ろさをその互いの姿へ現そうと図り合うしかなく、その姿として現される虚ろさが、その虚ろさのせいで自らの虚ろさしか見詰められないにしろ見詰めてるなら目に違いなく、だなんてどの口が言えるかな、ってこそこそしてた激しさが逃げ戻って激しさの脱け殻でもでっち上げそれを外から破って潜り込む振りで固まってるかな惚けた口で言いそうなら直ぐに口は見咎められ、その言い草は鋭く睨み付けられ。それは、目で、に違いなく、だって必ず違うから、な目では、見咎めるも睨み付けるも出端を透かされ、きっと目の奥の光りなどはどろりと内へ歪んでそれでも見るに拘れば目から延びるその光りは蜘蛛の糸のように細く噴き出されても途切れて粘りだけを頼りに、風なんて来ないんだからだらだらと項垂れ漂うようにしろ、目に違

いなくに始めからそうして目と必ず違うと自らを知りながらに、と言うか他に何を知れもせずに目なら、それと違いなく違う目が目で目を見分ければ二つ目で、二つ元元目が付いてたなら、二つと二つで四つ目だろうが、すると元元の二つ目の何故二つかが怪しくなって四つ目もあやふやに四つで、四つに一つかで、いや一つなんて怪しいも何も無く一つなんて無いに決まってて、無いのでは数えられもせずに必ず一つで、数で無く、なので直ぐに二つ目が嘘なのはバレて疾っくに跡形も無かろうけれど、あやふやだけに四つ目の四つは互いの虚ろさから目を背けては背け損なって互いに互いで嫌でも数えられ続ければ、一つが四つ数えられての四つとまるで違う、ならきっと一つの外の数でしか無くにも数で無い一つと繋がってそうな、取り敢えず四つと呼ぶしかないけれど少しも四つでは無い、そんなそれを獲物でも捕らえようかと映そうとする、それに面（つら）突き合わせて来そうな何も映り込ませない鏡かなその上っ面に微かに走る艶が走る過ちを認めたかに止まって滲めば滲み損なう隙に筋を引き流すみたいなその筋の流れが、四つと呼ぶしかない成れの果ての姿だろうかと、何が見るかなら目しか無さそうに目の無いのを見るなら目が、そんなで目なのが耐えられずにその目で目を見詰め果ててその見る目を潰し、残された見ない目が、俄造りの遠い思い出に縋るように四つであろうとしてし損なって、四つ。あやふやさを増し続ける限りに。な、ひたすらなあやふやさだけに縋るしかな

い四つが四つで居られる筈も無いならあっさり四つは捨て、とは言え何処へ捨てられよう、そんなら何処へなんて無いんだから捨てられようも無く、あっさりだけが四つに圧し被さって四つを隠してるだけかも知れないにしろ、そんな四つもうひたすらなあやふやさにすっかり溶けて何が四つも無いの四つも無く。四に、見ない目が見ない目の自らの姿を見て仕舞うようなら目は、目で無いに違いない、だって必ずそれもそうとは違うから。で、必ずそうとは違うから違いなくにそれが目で無いなら、何が何で、必ずかあやふやか必ずあやふやかに有るかは、その有るが必ずそうとは違うから違いなくに有るのか有るでもないのかに係ってそうでもそれっ切りで、いや違、違わないのかも知れないけれど、それっ切り程それっ切りで無いも無さそうなら無さそうには確かに無く、な、それっ切りがどれっ切りかだけが、それっ切りに激しく真上へ延び上がるかにその真上からもっと激しく、激しくとも知れず酷く柔らかそうを装うのか装わないのか惑わすかに激しく圧し返されて限りないのを内向きに嘆いてそうに遠回りに斜めに前向きに、遠い程にその丸まりの緊い弓形（ゆみなり）な姿を、その高過ぎるのを酷く恨み蔑み悔いても取り戻せない悔やみを焦がし焦がし、焦がし目をぬるりと溶かせられるのを誇るかに自らへとなら翳せてそうなら翳せてそうに、な、そんなそれでどうしよう、も無さそうに翳されたからには翳され去るしか無く。あぁ翳され去るのか、そんな唯一つだった、とそれ自らが

明かして去るかに。確かに、何だろうと去る為に翳されて来たような、なんて覚えを何処で拾えたか、な何処でも無さそうならその無さそうな処ばかりで、にしてもその無さそうのせいで距てられ、その距てられのせいでそんな処ばかりに囚われ動きが取れなくなってないか、って、その無さそうな処が無さそうな処を顧みると確かに無さそうな処ばかりが有りそうで、でもその有りそうって唯の距てられだよなって、な何の距てられかって、距てられに顧みられる処が有るとするなら無さそうな処とは異なる処で。それって違うの？の、それって、が欲しかったんだ。だって、そんなそれって何のそれか知れなくて。知れないからには、無さそうな処とも距てられとも異なるとは知れ、に、それが、そんなそれをそんなそれと知れないと知れ、それより何も知れないなら、その知れないそれに耐えられないかに身を隠したげに、今さっきの翳され去りを真似るように翳され去ろうと、でもどうしたら良いか分からず、望まないかに震えるか、震えたくて震えるか、震えたい震えを堪えるかして、欲しかったそれをそれと見直したそうに、どうしたら良いか分からなさを震えに隠して内へ彫り付けてそうで彫り付けてなくて、だって内は虚ろでさえ無いなら僅かな水でも溜めてそうに見窄らしい小ささが滲み去ろうとしてるだけかも知れずに水っぽいくすみを煌めかせ去ろうと、滲み去ってもまた小ささを何処からか送り出されて来たかに繰り返してそうで、だったら、どうしたら良いか分からなさを

内へ彫り付け直せようかな、な、見窄らしさだけが勝ち誇って水っぽいくすみ
を揺らせば、紛れも無さそうに、さもそこに水は水とは現れようか、な水の有
り得なさを水に溺れさせ、な水が水の乾上がった小さいか大きいか測れないと
は分かって小さい、平らな窪みの上っ面の痛そうにささくれ立った丸く窄む漣
の姿に消え去ろうとして消えない儘に去るかな内へも外へも向かわない震えの
震え無さな現れの激しく噴き出す静まりと知れれば、知れただけの事は有った
かに、それら、どれらがそれらかあやふやにしろ、は、再びそこに現れまいと
促される儘に誓うかに、そんな儘で有り続けてその通りに去る儘に、僅かに、
その僅かに守られてだけ小さく小ささな小ささで、に、去るしかなくになく現れ
に縋り付き、に、そんなそれを持て余しげに斜めに崩れるその崩れを均し、小
ささの限りに小さく傾き、却って大きいかは知れず、な、傾きの小さ過ぎれば
傾きな筈が無いどころか、明らかに傾きとの異なりで、それがそこにその異な
りに傾き異なって刺さるしか無くに、な事とは係わらないかにさも行き成りに
圧し出されて行く、って何が？それとも何に？の、欲しかったのはその、それ
とも、とは分かるけれど、そのそれともがそのそれともに圧し出されを圧され
て何処へも進めないような、な、小ささの限りに小さく傾くへ戻り去るしか無
さそうか、に、そんな事ならと自らを引き裂くそれともに引き裂かれるのは、
それともを棄ててそれともに棄てられた、何が？も何に？も弾き除ける、仮初

めに時を凍らせたような、虚ろとの異なりに沸き返って沸き返りを沸き返り去らせる、その沸き返り去らせを晒すばかりに、何も映り込ませない鏡かなその上っ面が幾ら円円しく脅すように鋭く艶艶と艶を艶めき去らせて立ち昇りどんな高みも断ち切ろうとして拡がり果てようと、易易とその下を潜り抜ける振りで潜りも抜けもせず、そんな潜り抜けに望みを抱くなどは疾っくに蔑んで、その真下に浮きも沈みも拒んで、眠り込むように、凍らせた仮初めな時を眠り込ませ直すように硬い、その硬さなそんなそれをそんなそれに取り込んでぴたりと隠し、そのぴたりのぴたりと小さくも大きくもないと知れて小さな小ささが、僅かに窪みながら平らかで有ろうとするらしくに、そのらしさに回されたがってそうで、らしさににして何にだろうと、な、何にだろうとの何は何にだろうとに一つしか無いんだってふと知らされるなら、ふとは何処から来てその何処からがそれを知らさせたかだよ、何処からが何処かに有るか何処にも無いかに係わらず。その、かに係わらず、は巧いね、巧過ぎて拙過ぎるんじゃないかって疑われる程に。な、何が疑われるかなんて、時を仮初めに凍らせたかに全く虚ろへと傾き去ってて、な疑われの傾き去りへ、巧いねの通りに息でも合わせて巧く沿えないかな、なんて望みの、酷く厚かましげに鈍く重たげに鋭い、そんなではもう小ささでも無さそうな小ささが、自らの小ささでも無さそうを振り返れば自らを失ってたのを大きく知れ、な大きさなんて小さ過ぎて直ぐに

見失われようかに小ささに呑まれれば呑んだ小ささの、何て疑われるしかない小ささ、あぁ疑われるしかなくてな小ささんの何て確かな小ささ、の、何て、が疑われ去れば、見窄らしい小ささが一つしか無くに、それでもまだ回されたがってそうに僅かに窪みながら平らかで有ろうとするらしく、な、その、らしく、の、何て呻き去るような凍る時など仮初めも無しに溶かして已まない、もっとずっと酷く凍り果てて温さ弛さを柔らかく透かし見せるその内へなら何の傾きも呑み去らせよう、そんな厚みのままやかしを態と晒して恥じない卑しさを卑しむ一つしか無くに固まり、その固まりを固め守って、水を溜めたように動かないの水が分からずに動けずに円みに餓えるかに丸まろうとする黴を晒したがって晒し損ねて分からない水の円みを歪めるしか無くに縮めに縮め、それは歪めに歪めでも有りながら何の歪みとも係われずに縮め歪め去れずに、な、さも新たしげに改められた黴を晒したがってるなら晒して、な黴の水を溜めたように動かないの水が分からないの分からなくて漣を内へ隠らせ僅かに窪みながらな平らかを裸に剥き出し舐め回すかに艶めかせ去らせてよう、って何が？が何が？へ落ち窪んでその何が？が落ち窪み去るかなその落ち窪み去りな黴を兆そうか、な、黴を兆そうか、な、だなんて卑しさな見窄らしさを遠ざけるだけ遠ざけた一つ限りな卑しみの、嵩に掛かるかな落ち窪み去り、なら落ち窪み去りとの異なりに違いなくに、何とも違って何ともさも異ならずに、異なりで。な、

異なりだって知れるのはその知れた異なりしかなかろうね、なんてその異なりもきっと知れなかろう、な、異なりでは何とも異なるしか無くに、徴を兆そうか、なんて疾っくに食い潰してよう、そのこれでもかって撒き散らされたかな食い潰し痕の繋がらなさ、きっとどれ一つ取っても食い潰し痕と異なろう、って、どれもか示し合わせたみたいに食い潰され痕に姿を変えようかって、そんな繋がらなさ潰しを楽しみながら、その楽しみを千切ってはその潰され掛けの繋がらなさのみっともなさへ振り撒く振りだけで、痕はどれも何の痕だったっか分からない痕の為の痕かな痕に撒き散らされたに違いないって益益それのそんな姿など楽しもうなんてうっかりともしちゃいけなかったかな、だって痕の為の痕なんて唯で済む筈は無く、その痕から痕にさえ知れなかった事が後先が入れ替わり痕に先立ってた事が痕の後からどうにもならず暴き立てられ渦を噴こうと止めようは無くに、にしても、じゃその痕より先なのに痕の後に来るだろう、痕を痕にしたのは何かって、身構えたにしても何の事も無い儘に唯痕だけが痕とだけ何処をも無しに滑るように繋がり合い、その滑るようにで痕が痕を痕で無くして行くようで、って、痕が痕でも無くなった後に放り棄てられるように、それでも何かの痕を探すしか無くに何の痕にも辿り着けないなら、まさかその辿り着けなさが刻む傷がそれらしい痕かってそんな甘い見通しに縋るしか無くに、それでも痕は痕で無くに痕な儘に繋がるのを已めずに何処をも無

しともに滑るような儘に、を、たった一つ直ぐ傍らに始めから露わに晒されてたのでしかないかに見て仕舞おうなら見て仕舞うのを避けなくちゃいけない、だってそんなの見て仕舞おうなら見て仕舞ってはその仕舞った中に仕舞われて辛いだけの石みたいに固められそうで、でもそれはきっとそんなそれとまるで異なるに違いないなんて慰めを垂れ流しては固まろうにも水のようで水に成ろうにも水をぴたりと塞ぐ、その丸さが穢れでしかないように丸い石のようでは、いや石が穢れようも無くに嘘なのは丸いが自らをばらしてて、そんなばらされた自らも嘘なら柔らかく、その柔らかさを丸みは拒んで狭く冷たく降り注いで行けようか、たった一つの直ぐ傍らへ、な甘くも辛くも無い見通しがたった一つの直ぐ傍らを道連れに見通され去れば、痕と痕の滑るような繋がりも繋がり去って、さも仮初めなその繋がり去り痕が嘘でも石の丸みを甦らせたげにその痕の底が渦を巻きたがってるとも見据えようかに見据え損ない去りたげに、な痕で有り得よう筈も無くに痕な姿を確り身を隠すように、たった一つ直ぐ傍らから食み出す真下へ尖って真上へ塞がる匂いの徴をたった一つ直ぐ傍らの傍らに炙り出し、それとも炙り出し損ね、その炙り出しと炙り出し損ねのどちらからも逃げて真下へ尖って真上へ塞がる匂いの徴と距たるまではその儘でも、その距たりの徴に真下へ尖って真上へ塞がるのと逆さの匂いで刺し貫かれては一溜まりもなかろうかなさも仮初めな痕の繋がり去り痕の身を隠すようは、隠せ

ず露わにされる身を流し去るかに、逆さの匂いの向きと逆さに渦を巻く構えで
辛うじて身を隠すようで居られる、そんな様を晒すしか無くな儘に渦は傾いて
尖った襞を刻んではずらしずらし重ねて並べるしか無くに、にしろそうして刻
まれてるのは何処の何だろうって襞が明明とあからさまに、そのあからさまな
明明さの窮みを点しては暗みへ暈かし流して訝るなら、襞も渦でも巻きたげに
そのずらし重ねを弓形に曲げようかと、弓形を捻ってその平べったく薄明るい
裏は覗けようとも曲げ損ない、ならば先ず弓形の明らかさを自らに覚え込ませ
ようと水でも呼びたげな艶を煌めかせ損なって棘棘とぎらつけば、そんな棘棘
となぎらつきが棘棘となぎらつきへ襞を刻み、襞は刻み重ねられてるに違いな
いって、そんな襞なら自ら渦など巻かなくても渦は自ずと外から遣って来そう
に、な渦など知らぬげに渦を巻きたそうな外が、直ぐ傍らを掠めて傍らを去り
損ないねっとりと恨めしげに襞の影でも映して刻みたげに刻めないなら刻めな
さを煌めかせ溶かし艶に変え浸み渡らせてぐるりと囲もうとする内は、先回り
するみたいにまたその内へ窄まり奥へ逃げ逃げる程に逃げるの裏へ回り込むよ
うに追い詰められ囚われ外を映す艶を映すしかないかなって躊躇いを外へと映
し返し去り、その去り痕には去り痕は無いのを確かめたげに怖ず怖ずとも渦が
巻かれ始めるようなら外は、それと逆らう向きの渦を巻きたくて巻けずに逆ら
う向きは砕けて様様な向きへ飛び散るかに繋がって漣の円く盛（さか）り立ち

僅かにうねり損なう水の奥からかの匂いの兆しを描きたげに幾つかに引き裂かれて頽れるようでもうその幾つかの内の一つがそれ一つだけが外みたいに振る舞えば、他の外を蝕んでるに違いないなら違いないでそれっ切りかにのっぺりと薄く拡がるそのそれ一つだけかに振る舞いたげな外かが外ならば外へと去って外で。な外では掠りもしないだろうなって鬟のずらし重なりの棘棘とながらつきが、失ってもなかろうに失ったかな渦の巻き方を奪い返すかに、でもその、かに、までで、それっ切りに、ぎらつき止まって、でもぎらつき巳む事は暫くは無さそうに、な儘に、奪い返せるものは全て奪い返せてそうに、ぎらつき已まないにしろぎらつきは、水面を滑るようなぎらつきより明るい光りの覆いを隈無くねっとりと被せられ、その覆いの滑らかさにだけは順うしかなさそうに、ぎらつかせようは少しも衰えさせずに僅かに奥まってぎらつきを水の速い流れのように傾くに任せてゆらりと蠢かせ、な傾く向きに、蠢かせに肖ろうかにも鬟のずらし重なりが傾き損なう、その損ないにまで抗って、でもその抗いようは斑に切れたり繋がったりでちゃんとした抗い方を身に着けたいなって、ずらし重なりが躊躇われて鬟は鬟とも見えなくに、見せちゃいけないみたいに隠されると、圧し潰れたぎらつきから棘棘とだけが平たく滲み、引き延ばされるだけ引き延ばされ切った漣の痕そっくりに淡く画き出され去れば、ぎらつきはその去り痕を襲って細かな溝を数え切れずに刻み滑り、その滑り果てかにうねり盛

るその盛りからずらし現れた弓形は弓形を越えて円みへ至りたいみたいな匂いを水を頼って薫り出したげに、それには必ず元の棘棘となぎらつきへ戻るしか無さげに、滑り果てから滑り戻るかにぎらつき直そうと直り損なって、ずらし重なりの躊躇いを責めるように先ずは自らがずらし重なろうかと。な事も出来る筈は無くにぎらつきはぎらつきとの異なりへと異なりぎらつくしかないにしろ、それもぎらつきだろうか、な、そんな異なりだけに身を被せ預け去り。な去り痕は何処だろう、な何処も無いなら、その無い痕も何処にも無く、その何処が何処にも無くに何処でも無くに、な無い痕も有ろう筈も無くに、な、有るしか無かろうかな、そんなそこを、きっとこっそりとも異なりぎらつきな覚えも混ぜ込めてそうにも舐めたりはしてないだろうなら、まだ何も出来ずに、でも、そんなそこと知れるなら、そう知れる為の何かがされたに違いない、それとも何もされない儘にそれを知れるなんて事の有るのか無いのか、な、有るのか無いのか、が、そんなそこをそんなそこにしてるようでも有りそうで無さげにしてそうでそこなら、そんなそこを滑りもせずに行き過ぎられそうに、そんなそこへ掠りもせずに届かずに、凝っと、いや、滑りもせずに行き過ぎられそうな凝っとなんて、間違いなくそうじゃ無さそうで、に、凝っと、凝っとの去り痕など見付かるなら何処だろう、だなんて、うっかり凝っとに凭れてられる身を滑らせて行こうなんて企んじゃいけなかったんだ、だってそんな企みは企

み損なわれ企み直され、その度に損なわれた企みの痕がずらし重ねられては、凝っとの深さに溺れ掛けてる鬟が浮き沈みしながら漸う息を継いで、息など継げない唯の影でしか無さげにこれ見よがしに淡く薄れ、そんなそこには掠りもしない儘に、そのしない儘な辺りへは擦れ去り、その去り痕の平べったい狭く僅かな窪みが丸丸と内から脹れる輪を持ち上げるかに裂けて益益狭まる様を、その先に見せ付けるようなら、その先なそんなそこのその様を向いた円み何先を重たげに曲げ、そんなそこはその様へと傾こうか、な、それってきっとの、の係わりなんだって思い込めるなら思い込める、一つの動きなら動きのその一つに乗り移るかのように、凝っと、は、凝っとを凝っと凝っとから解き放っても凝っと、に、その、そんなそこの重たげに曲がる円みそっくりな姿へと、その一つへと一つの姿を現し消して行くようかとも。に、な姿の姿だけが頽れ、曲がる円みとその重たげが、それぞれに初めからすっかり何の隔てとも距たる為に構えて幾重にも薄くずれて歪みを求め歪み損い、鮮やかな色へとも逃げたげに艶を濃くから淡くへ入り組ませる弓形な傾きの向きを幾つにも分けて絡めながらに距て、その距たりのずれ開かせようかな鬟の圧され詰まった隙間に艶との異なりを呼び込み浸み渡らせたそうに一つで、に、な儘にもそれはその姿の一つを消せずにな一つから逃れたげに、曲がる円みとその重たげへまで戻って二つに自らを裂けるかな喜びでも見付けられないかと艶の弓形な傾きをその

一つから逸れるように反らしたなら反らし損なって二つには裂けなかろう、一つと一つとの隙間へでも墜ちられそうに傾き窮まるのかまるで傾けないのか、どちらでも無さそうならどちらをも一繋がりの鬟に描き移そうとずれるのを繰り返す鬟の姿を映し込み流し、去りたげに、その流し去りたげな流しの先に弓形を見たいなら見えるのは弓形にしろ上っ面は酷く目が粗く硬そうで何かの欠片のようでは弓形を効かせらないどころか弓形の妨げにもなりそうに数知れなげなのが酷く思いも寄らないと思えてならない儘なら、すっかり弓形に乗り移れてそうで、でも酷く出来が悪い弓形に違いなくそんなの何の効も無かろうかと、なんて思いを先取りするかに弓形は粗い数知れない目を、目の内の目の色を噴き流し溢れ弾かすかに砕きに砕くにしろ、その目の砕かれをそれぞれに酷く小さな弓形に変えられそうな、自らを絶えず弾かせてそうな色を滲ませられそうなら、その先に曲がる円みを映し見られようか、な、その映し見を映せる目など有る筈も無かろうかと、替わりにその無い目の無い裏から滲み出る数知れなげな目が効いて効き過ぎたろうか、それぞれの効きの繋がらなさを繋げ、つい繋がり過ぎるなら繋がらせ損なおう、かどうかもあやふやに、なあやふやこそつるりと抜け駆けするかに曲がろうか、な、その曲がりの端にその曲がりと繋がるもう一つな曲がりが曲がりと異なるに違いなくに、に違いないなら少しも異なれずに、な異なりか異なり異なるかに異なり繋がるかにどれ程細かく砕か

れるよりばらばらに散らばされ、に、それをそう散らばせるのは何かな、そんな何かなんて有りそうも無いに違いなかろう、なんて訝しさも散らばされてそうにも、その散らばる隙間を低く練り回るかに粘粘と、異なりの異なり異なるかな異なり繋がりに抗ってその粘粘なりかのさも独りでな曲がりを、俯く波のように傾き丸め脹らませ砕け渡りながら砕けを消し繋げながらに送り出し外し、その重たげにそれにしかない何とも係われなくても重みを保てる重みを望んでそうに、まだ現れないなら孰れは現れる筈の円みの兆しにでも凭り掛かろうかに、かに、な儘に去ろうと却って影まで付けそうな淫らに凹む幅と懈そうに奥まる高さを備え去り、その去り痕が去り痕を覗くなら、何て取り取りな円みばかりが円みにはどう遣ったって辿り着けない程に微かに、数知れず自らを傷付け已まずに活き活きと盛って沸き立ってようか、だなんて、独りそれと距たる目なら目が目なら刳り貫かれてようかな目なら、そんなそれはそれにしかない重みを重たげに孕むかに何処へか沈むようにでも沈めずに、傾く振りの懈いかにとも曲がるしか無さそうで、どんな曲がりとの異なりもそのまた異なりをも受け容れずに、な曲がりなど翳せよう筈も無くに翳し損ない掛けては直し翳し、な翳しの今にも潰されたそうな潰されの薫りを色めかせて直し翳し去る、その去り痕へなら何を覗こうにも覗き返されそうに、その思い掛けずにな程に思ってた通りに撥ね返って来たなら来た円み、だなんて円みだけに限る事で、円み

だけの外からしたら何を覗こうも何も覗き已まずに覗き果てるしか無かろうに、な、それとも、か、な、の、かもなもあやふやならあやふやにあやふやでないならかもなも、の、の嘘だったみたいに戯れを装うようで差し迫って揺らぐしか無くに揺らごうかな、にしろ、揺らげる筈の無さそうならすんなり揺らげたかに、な、そんな、かに、の周りに巡ろうかな、強さからも弱さからも明るさからも暗さからも外れた弓形の姿を捥いで弓形の中から弓形の姿から外れた弓形の荒荒しく掴み出されて姿を得たかな、掴み処の無いのは動きを止めてるかららしい光りの輪の自らを描き去りたそうに消えたり点ったりする様を、見損なうより先に見失ってそうで危ういなら危うい、その危うさに守られ却って危うさから逃れられてそうな、そんなそれが、なそれなんて有ろう筈も無かろうにとそれを切り捨てたそうに、な、そんなそれを見失いたくて危うくも無くて却って危ういの何が危ういも無さそうな、そんな、そんなそれでしか無さそうなのを黙って憂えてそうに黙ってれば何、な憂えも憂えで無くなりそうに消えそうで消えそうな儘でどうにも消えそうで無くに、傾けも出来ず円みに縋るも出来ずに、な、一つか、って何が？それとも、どう一つなのか、としか問いは解けそうにないなら、一つの一つは何に一つと見られてようか、と、一つを一つと見るそれを、独り虚しく見返す振りでもしないでは居られようかと居処さえ失いそうに何も見ずに居ようと硬く心を固めて見えて来るしかないと擬える

しかない、見返す振りかへ徐に向けて、見返し返して来ると見える事にするし
かないそんなそれとの距たりで無くとも距たりとは見えよう唯一つな虚ろさの
その虚ろが虚ろを踏み躙れば少しも虚ろじゃ無くに、それでも一つかはあやふ
やさの増す程に一つに窮まって窮まり距たるなら距たりな、そんな、の、何が
どうそんな、なのか、な、何がどう、を見るしか無さそうで、その見るしか無
さそうな限り見るしか無さそうは、見える限りを見尽くすしか無くに一つ、か
どうかなんてどう知れようか、と顧みたのか、顧み掛けて顧み損ないっ端に顧
みて顧み失ったようなら再び顧みるのは諦めるしか無いかに、その、無いかに、
に、見える限りが見えて見えないものが一つも無いなら何も見えなくて全てが
見えるしかないなら、その見える全てだけが見えるその見えるへしか一つに見
えなくて、で一つな何も見えない、その一つに一つな、に、見るも見ないも無
くにそれと一つにならなければ、それと一つとがどうなのか酷くあやふやな儘
にも、どうにもならないらしい、それともそうとも少しも知れようの無い、そ
んなそれ、ではそんなそれで直に無くなるのだけが知れて、なそんなそれで、
全くその通りにそれはそれで無くなり、それともそんな無くなってようかな無
くなりように擬えるかで擬えるかな儘に無くなり、そんなそれのそんなそれで
無くなった、その無くなった無くなり痕を見付けられず、その見付けられず痕
ならどうかと、望みを抱くものどうかと疑えば疑いを疑うしか無さそうな、そ

んなそれがそんなそれかなそんなそれを、、そんなそれにし損なったかな、、それでもそんなそれか、、そのそれとそれかの距たりの距たりなさを踏み躙りたなうかにつるりと躲し、距たりなさの距たりを距たりとの異なりに塞ぎ込めかか、、つるりの艶へならつるりなど知らぬげに尋ねられそうに、、に、、そんなでかそれともそんなでもない艶を何の艶も確かめられず、その確かめられなさに凭り掛かるように艶の端に潜り込もうかと卑しさを態とのようにに滲ませ、それともそんな卑しさを思い掛けず浴びせられたのかも知れずに、、何の艶も艶の痕でしか無かろうかと見付けた訳でもない艶の痕を、、すっかり先を越されたのを今更に追い掛けるかに、、にしろ先も後も無いのが卑しさの嫌らしさでは叶わずに艶の痕は諦めるしかない、その諦め痕なら緩りと手近に一撫でになぞれそうで、、な撫でなかったかも知れないような一撫でに、、諦め痕は何の痕も無かったかに頽れ、頽れ痕の内へなら、きっとその何処かに小さ過ぎて酷く入り組んで入り組み過ぎて穴が穴へ潜り込むしか小さ過ぎで入り組み過ぎな穴で居られなさそうな穴でも開いてそれとも開きようがなくて穴かなその小ささに肖れたら、、小さな艶擬きかに滑り込めそうで、な艶擬きもその艶を出すなら紛れもなくそれも擬きなりな艶で、艶と艶擬きの艶のずれなどは、直ぐに磨り潰されないのなら唯ずれてるだけでずれてられる辺りへ逃げ延びて逃げ切れたなら取って返すかに艶と艶擬きの艶を擦って磨いたような艶を、、そのまた擬きな艶などきっぱり

拒み、そんな艶自らからずれ落ちてでも艶な、艶とは異なるしか無くにその知れる艶だけは異なり出そうかなそんなそれが、小さ過ぎて入り組み過ぎて穴で居られようも無くに、穴だけが穴でしか居られない辺りへ、穴の痕かも知れないなって慎ましく滑り込んでそうで、って、穴の痕かも知れないなって何を何に？な、知れなさが、滑り込んでそうなそんなそれもどんなそれも微かな艶を僅かに動かしてほんの小さく押し流すかに消し去り、その消し去り痕は知らないけれど消されて去らせられ痕なら見覚えが有るかなとか、また卑しさを手繰り寄せるみたいに馴染ませられよう、って、何に？な、その、何も？も見覚えが無くても、に、にだけならすんなり躙り寄れそうかな、なんて、に、と巧く距たれてるかに艶の一刷けでも眺めるみたいに眺めちゃいけなかったんだ、だって、に、は、に、の先に、どうにでもなりそうに空いた虚ろっぽい幻でも繰り広げられるかなら知らないけれどそんな兆しもなく、微かな艶を僅かに動かされてどんなそれも、の消され去らせられ痕を真下に覗きながらに、その覗かれる薫りに僅かに圧し上げられるかに上滑り、でも何の上っ面をも掠められず、せめてその掠められずな痕を探そうと顧みるならどのようにか曲がらなければならない筈が、真っ直ぐ前へしか押し出されず押し返され、返され過ぎたに違いなくに何に何をどのようにも無しに知らず凹まされてると知らされ、なので、それは何が？と尋ねるのを予め阻まれてるなら、その知らずな凹みを知らされ

る儘に、どうとも知れずに、の、そのどうとも知れずにが知れずに、知れずにと知れるなら知れ過ぎてるに違いなくに、それは知らず知らされてるだけで、嫌でもそう知らせたそれの知れなさに凹みを強いられてそうで、に、そんなそれらを顧みられようかと兆そうかな薄い限り薄い光りが、薄過ぎれば何処へ差しようも無くに滲み拡がり硬くその姿を現したげに、円く、それとも円くでだけは無く、きっと円くと異なれもせずに、な明るみを唯一つ、予めそこで凝っと待ってたみたいにしても、ふわふわ揺れたりは全くしないにしても、酷く軽軽と、軽軽過ぎて重みと言う重みをふわりと遠ざけ嘲笑い、その嘲笑いに酷い重みを背負い込んでるみたいに、形（なり※以下同じ）は隠して隠れて尖って、それとも尖ってだけは避けて尖ってより鋭く鋭い限りに固まってれば何事も無いかに隠れ、その隠れ現れを何時でも消し去れると脅すかに、そう現したげに、唯硬くとだけは硬く、な、硬くが硬くとしか知れない、その知れて知れない硬くが僅かに凹む薄い限りに薄い薄ければ薄い程に重く揺らがない何処か必ず弓形に違いなかろうかと微かにも弓形を見せなくて遠退く程に遠退けたいように迫る姿の、浮いてそうなので壁ではなかろう盾突くようには先を隔てて立ち上がらせる、何の硬くも硬くとも知れない、な硬くとの異なりも間違いなく凌ぐ遮りに遮らせ、で初めから嘘だった光りは腐って自らの嘘に流れて落ちるにしろ落ちた儘なら、何の嘘も届かず底光りを射し返すかに隠れた円みなどさえを

もうっかり隠してそうに、硬くも無いなら弓形でも目指そうかと揺らめこうも揺らめき去り、揺らめき痕も遮りに遮らせの重さに擦り切れ去り、で遮りに遮らせは、その儘何も変わらずにもその変わらなさの何も知れない儘に、なら何も失われない儘に失せ去って失せ去る儘に現れ過ぎるなら現れも叶わなげに、よりそれらしくそれでしか失せ去る儘にそれでしかないと少しだけ脅すようにも脅しそのものに違いなく、その脅しを剥き出す為に唯遮るのでなく遮りに遮らせてそうかも知れず、かも知れずなら、でないのかも知れず、盾突くとは似ても似つかずにも先を隔ててだけは居ようと、そんなようなだけで、遮ろうにも遮られる何も、隔てられてよう先に現れて来ないなら遮りに遮らせは、それらしいにしてもそれと違う事に違いなく、な違うに違いなくに違ってようか、だってそんな違うが違おうと何が違うも無くに、それは、そんなとも知り難いかなそれで有る儘にさも無さそうに、それで有るしか無くにどう有るとも無いともあやふやで、なら遮りに遮らせは、そのあやふやの歪みの揺らぎのほんの一時の有りように過ぎなかろう、にしろ、そのほんの一時しか知り難く他に時など無いのも確からしく、なら遮りに遮らせは間違いではなかろうけれど、間違いなく確かかも知れないほんの一時も、一時の内に過ぎたか一時の内に過ぎずに留まれているかは既に取り返しようもなく遠退けられ、去る事だけは有り得ずに。な去る事に、遮りに遮らせは、再び何処へも戻れずに呑まれ何の痕も

残せず却って嫌でも何処へも戻れない辺りへ明明とくっきりとそれ自らを自ら切り離すかに憶え込まれてるに違いなく、なので何処へも戻れないにも違いなくにも、その憶え込まれに、そのほんの一時は攫われ、その憶えの内に囲い込まれ閉ざされるなら、その閉ざされた時だけが時と呼び慣わされるしかないなら嘘でも時で、憶え込まれはそのように憶え込まれ、に何処へも戻れないなら戻れない何処も無かろうかな痕を、その影でも延ばすかに、その徴を映して来て已まなそうで、でもそれはきっと時と呼び慣わされるしかない時へしか映されようも無さそうなら、何処へも戻れないへ戻ってその何処へも戻れない辺りに、その映されようにに肖るような徴でも微かに揺らめかせるしかなさそうで、な事では、な事など何処にも無いと知るしか無くに、な事は忘れ去られよう、その何がかは必ず知れず、明明とくっきりとには、な明明とくっきりと、さえ何処へとも翳されるようなら、何の徴も要らなかろうかと、何の徴でも無く唯映されて已まないだけの、その徴として徴でしかなさそうに、その揺らめけず去る去り痕にまた徴として甦るような事でもして、恥ずかしげも無くに恥じらうかに、その徴としてその徴でしかなさそうに、それを何処へ映そうかに望みを抱くようなら望みは何処へも繋げず、その繋げず去り痕には、その繋げず去り痕さえ絶えたかな、その絶えたかな徴とまるで異なる徴ならそんな徴も兆そうか、に兆そうかな去り痕を探すのは、何の去り痕だろうとその去り痕にして

はそこだけ生生しい狭い縁にこびり付いて去るのを拒んでそうな、呼び慣わされるしかない時なら時を時の外の薫りの一振りの欠片に変えて孕んでるぞと脅すように欠けに欠けた弓形の欠片の、さもそんなような映り込みで、その映り込みに映って、その映りを映し返されるのは、それをそう映し込んだかな映り込みとは何の徴も分け合えない、まるで異なる映り込ませも裏返すに違いない、何も映しも映りもしない、にしろ、唯それとしてそのようでなければそのようでは有り得ない映り方か映し方のあやふやな欠片なら仄かにも消え入りそうかに明明と翳してそうな、それともその翳しだけかも知れなさそうに遠退けられる儘に小さく現れ去ってまた小ささだけで現れ曇り、僅かには明明と、その小ささの何て近さ、遠退けられる儘にも、って、何に遠退けられてるかなら知ってる、と知ってるそれが、その遠退けられを薄く立ち上がった水面を縦にすっと割って剥がすかに退け掛けると、先を読むように遠退けられは、傷付きながら身を躱すかで躱し損ね、その知ってるそれを柔らかく囲い込み、却って小ささは更に驚くばかり近くに、自らの力でに違いない、遠ざかって、それとも遠ざかる徴を隙なくびらびらと身に纏って已まずに、近さと遠さを、もう再び動かない呼び慣わされるしかない時の透き通った欠片に閉ざそうと試みてそうで、な試みは試み去ろう、の先を読み過ぎ読み損ねた、小ささの遠退けられの何に遠退けられたか知ってるそれが遠退けられに囲い込まれ息絶えたとだけ知って

る、試み去りを間近に危うく躱して揺らげば揺らがない、小ささとは必ず異なろう、な曇らせばかりを明明と翳して裸でも裸だけを恥じないかに纏った裸を脱ぎ捨てられもせずに幾重にもで初めから一重に、な裸な、疾っくに頽れた嘘でしかない遮り遮らせの憶え込まれに綞るかに、その憶え込まれを裸へ揉み込むかにその積もりだったかに揉み損ない、その揉み損ないこそ綞るに足ろうと恥ずかしげも無く恥じらい損ねるなら憶え込まれを捩り窮まらせて何の憶え込まれもその捩れに擦り替えてその捩れを眺め渡す程には知れる事を知れてると自惚れてようかとも分かりながらに、そんな一つを自らと見出して一つな、な一つも明明とあやふやに、あやふやに溶ける一つなら間違いなく一つだったと、その一つの去り痕を憶え込んだなら忘れて一つから放り棄てられたに違いない危うさを舐めるように楽しみ損なって捩れの裏へなら裏返えられそうに捩れ已んで、已み捩れ、切れて、な、切れてが知れない、に、切れて、は、それでも付き纏って来る重そうに空っぽな塊でまた脅すような憶え込まれを荒荒しく丸ごと砕こうか、と望みは微かとも知れてても、憶え込まれの悉くを押し詰めた塊の下へ滑り込むかに潰れ延び窮まり果てて るなら望みは叶ったとも諦めたとも失せ、それを失せさせた憶え込まれの奥でその奥しか向けずにいた光りを、振り向かせられたなら望みは越えられてようか、とか、きっと望みとの異なりに望みを抱くかして窮まり果てに黙りを強いられるかに潰れ潰され、でも潰れた

のは異なりで、その異なりと異なった異なり潰れ潰されが、なので潰れも潰されもしてなくて憶え込まれの奥の光りと向き合えてそうで、向き合えてそうなら少しも向き合えて無くに、どちらかがどちらかともなく逸れ、その逸れた形に弓形を充てたい望みはきっと弓形で、なんて嘯けたか嘯けてもなさそうなら、だって黙りを強いられた儘なようで、その黙りの奥に光りを探せるのは望まれた弓形に隠れて弓形を形にしてる光りなら光り光りで無いなら光りよりより微かで闇もその上っ面なら僅かに溶かそうかなそんなそれで、そんなそれに光りを見出せるかはどうやら謎ならその謎めきは黙りの奥にそっくりじゃないかって勢いで、その勢いの儘に黙りの奥を侵し蝕むかな形に弓形を見出せないか、そんな色を黙りは染まり出してそうじゃないか、とか先を見越そうなんてしちゃいけなかったんだ、見出せてもない弓形は形ごと消え尖って黙りの奥に擬えられた謎かを擬えごと切り裂き、じわり滲むように口を開ける裂き口を覗けないかに覗けば弓形に成り損なった形の欠片の繋ぎ合わせばかりがぬるぬると隙なく重なり合って蠢くなら襞を描きたそうに、につるつると艶を脅すように滑らせてる、そんな中へ落ちられないかに落ちて落ちられ損なえば、そこはきっと黙りの奥へとは向かえない行き止まりにしても透けるしかなく、直ぐ隣脇に触れ合うように黙りの奥に擬えられた謎の裂け口を覗けるだけ覗けてようとも、透けた襞がびっしりと動くとも無しにざらざらと互いを溶かし合い透かし合い

互いの鬟の裏を覗き合い、その覗かれた鬟の裏を覗いても、謎など跡形も無く唯円みを隠してそうな光りそれとも光りを隠してそうな円み、そのどちらとも無さそうで何ともならなさそうなそんなそれの形が渦を巻きたそうに流れ出てそうな深くても小さな窪みが覗きを拒んでるだけで、その拒まれに透けるように薄く流されて窪みの直ぐ外の縁を巡るような弓形は棄てられたかに直ぐに巡り已み、ひょっとして縁から窪みの内へ転げ込めたんじゃないかって望みさえ滲ませる、光りよりより微かなそんなそれに触れられたようにも更にその先を見越そうなんてしたかしなくても、明明とくっきりとなら何一つ透けようのない、光りを裂いて中を覗けば半ば円みの内へ、その底だけ透けてる底を真っ直ぐ下に見詰めさせられながらに弾き遣られ、遣られ逸れたかなら浮くしかなかろう形は浮き続けるには渦を巻くしか無かろうな巻き始めで巻き已んで浮けも沈めも儘ならないなら、そんなそれ一つが明明とくっきりとからも浮けも沈めも為らず動けない儘にも明明とくっきりとから独り距たって透け、その透けを延ばせるだけ延ばし縮ませ縮み窮まろうならその縁にでも、光りよりより微かなそんなそれを微かなを塗り重ねるように塗せたと擬えて舐める振りなそんな形の晒し去られた去られ痕に何を探そうと出来ようかな何、を、その何が孕み流したかな独りが切り裂き、その裂き口の奥に、独りと異なる、独りそっくりな独りな形の、明明とくっきりとを薄ぼんやりと徐に拒む、渦も巻き納めだ

ったかも知れなさそうな渦の巻かれ痕の徴を隅隅まで煌めかせた、そこに唯一つなそれを見付け損ってようか、それに乗り移れてそうにも浮き浮きと弾む、その弾むに纏わり付く、透けをびらびらと纏う明明とくっきりとが、今直ぐ襞の姿を晒して遣るぞって脅すように却って脅されてそうに冷たくなって黙り込んで放り投げられたみたいに溶けて流れ去る去り痕の痕も無く、痕も無くとだけ煌めこうか、な形だけが、それに何が乗り移れたも無しに、一つ、一つなら、一つな色一つな薫り一つな声一つな姿そんな有りもしない一つな諸諸全てと繋がれよう筈も無しに繋がれる筈と筈とで繋がって一つな、そんな一つの何が一つか、一つ損ない一つ消え去り痕の一つで一つに違いなくに一つな形を翳し損なえば損なう程に一つな一つが、一つとの距たりを距て、有りもしない損ないとこっそり一つ損なうかに繋がろうか、な兆しを嗅ぎ付けて遣って来よう一つとの救いようもなさげな異なりに、ざらざらと揺さぶられる一つとの距たりとつの距てが異ならされ去って、異なりかとにだけ一つ、な、そんな、でも、それ、かとはそれなりかに知られようけれどその知られようの何がそれなりに知れたか知れない、それへと及び難くに、唯そんなからでに一つな何かなんて有ろうか、な、有ろうか、に滑り込めてそうなそんなそれを、の、を、って何が？なら、一つとの異なりとは始めから係わらない、なので何の異なりも異なりとの異なりも拒む、一つでなど有ろう筈も無く、一つとは距たるだけ距たって数知

れなげも拒んで唯それだけにそれな、いや数知れなげならそれだけにでなど無
かろうにも、それだけへとしかそれをがかわせられないそんなそれをそれの儘
に去らせて痕も無く、それともその痕もそれな、そんなそれと、そんなそれの
為に必ず絡まなくちゃいけない、有るが無しも無い一つを、その一つとの異な
りも異なりとの異なりも拒んで裂いて、裂き口も裂いて裂き痕も裂いて少しも
裂けない一つを剥き出し、その一つを一つと異ならせようと有りもしない一つ
を脅すように繋げて来る数知れなげに抗えるなら抗おうに、殆ど抗えずにも抗
い鈍って鈍り已めば、それ唯一つかに、何の一つも何のそれも少しも要らずに
居られる、そんな唯鈍りとだけ独り捥ぎ取られて取り残されたかな形にしろ、
そんな形の裸な姿さえ剥ぎ取られ、居ながらに数知れない繋がりを、何処へで
も向けられる光りを何処へも向けずに溜め込んでじわじわ弱ってそうに、その
形を少しも変えずに、その繋がりの儘を繋げる儘にして繋がりな繋がりとして
繋げる、そんな繋げ鈍りな姿なら幾ら裸を晒そうとそれより剥ぎ取られようも
無くに晒せてようかと、明明とくっりと分からせてる、って何に？の、に、に
しても唯明明とくっきりと、なのか、たとえそうなのかも知れなくても、かも
知れないだけのそれだけでかも知れなくても、そのそれだけでだけがそれだけ
でそれだけなら、それがそれだけなそれなのは明らかで、な、それがその明ら
かさを肯うなら肯い去って去り痕はより肯いの明らかさを証すかに明らか尖っ

て尖り失せようか、な失せようかな形が、その形な儘に失せようもなく、内へ溜め込んだ光りをどのようにも流し出せそうに数知れなさの数をさえ数から除いてどうにでも変われそうで、変われそうなら疾っくにその変われそうに変わりに変わってよう、その変わりに係わる変わりを絞め殺したげに取り囲んでようかな悉くもさらりとすっかり変えようかな、その微かな一刷けな兆しが俯いて俯く中へ俯いて窪みたげにも窪むのを拒まれるなら拒むのは、いや、拒まれるならそれはそれに拒まれるだけで、何を拒むも予めその拒みが拒まれてよう、その拒まれも拒まれてようともそれをそう拒む徴などは拒まれ果て流れ落ち、拒み拒まれるも流れ落ち痕に洗い出されるかに拒みようも無くに晒される、光りのようにも光りを断つようにも真っ直ぐに塞がり拡がり剥き隠り尽き、円みなり煌めきを透けさせて光りとは異なる、それとも光りを呑み尽くして光り擬きかに煌めきを全て吸い取って唯円みな形で、その形のせいで形とも異なる、脹れるだけ脹れながら縮むだけ縮みながらに脹れも縮みもせずに延び上がりたそうにだけ延び切って延び切り痕かの極狭く薄い埃臭い隙間へは延び切れず、な形との異なりを異なり尖らせ、何処までも尖りそうになら円みは円みを磨き、円みを毀そうと差して已まない硬い影をそれに先駆けて毀しに毀し、何処までもを研いで磨り減らして光りのようにも光りより薄くに暈かして出口を塞ぐように遠巻きにさせれば、その暈かしを縁取る色かに明るげな滲みは色取り取りに

どれも色では無く、暗く薄汚れて光りよりも浄められた色かにを呑んで已まないさもどろどろな、さもどろどろな程に堅苦しく定められた狭い動きに閉ざされて活き活きと凋んで凋みを凋みと異ならせて凋む凋みを、浄められた色よりも浄め、光りでしかない光りに変えたげで変えられたのは光りにしても光りからまた次へ光りよりさも速くに変わって光りで無くなるなら、始めから光りは、延ばされて途切れない声の薫りだったかに途切れ損ない鈍り、鈍りは鈍りとの異なりを悉く呑みたげに呑みたげ去って去り痕に、な去り痕は失せ失せ痕も溶けて溶け痕に、な痕など無いさって嘲笑ってそうな窪みが何かの替わりな振りを盛んにして窪みながらにその窪むのを蔑んでそうに、その窪みの窪んだ裏を捲り晒して窪みの裏が窪みな筈は無かろうって、そう決めてたみたいに自らを潰して潰れ、態とのように潰れ損なう振りの痕を痕な筈など無くにさもずっと舐めてられそうに、その態とのようにへ逆さに尖って突っ込み損なえば、それは窪みと異なりだろうかって、その兆しを探す、そんなそれを探せるなら探そうとするそれが、それを兆させ損ない、な、そんなそれ、とは、そんなそれを兆させ損なってなそんなそれにしろそんなそれなのは揺るがない、の揺るがないって何を何に何が揺るがないのかな？の、何が何ともその何で有るしか無く、なら無くしかも無く、それで揺るがないなら、揺るがないなんて始めから要らない、な始めからが始めから要らなそうに、そんな揺るがないな、内も外

も一つな、それと係わるも係わらないも一つな、な、一つなにこそ揺るがない、がそれ一つに効いてそうな、な、効いてそうに一つなと一つな一つが、一つ損ないにも一つで、な事では、な一つなに一つなんて要る筈も無く、一つなが要らないなら、一つなとの異なりが悉く要るみたいな振りを振り窄ませる窄ませ痕の、始めから一つでしか無いなら一つと選ばれるも無くに選ばれ、その選ばれから外れた悉くが逆巻くかに高くへ引き揚げられて逆さ吊りが真っ直ぐな形で、それより先に、先の先は裏なら逆さかとも待ち構えてよう弓形の予めな窪みの裂かれ痕を指し示し昂ぶって薄く透けて虚ろを透かすなら虚ろを激しく拒んで居られよう、そんな、一つなと一つなの異なりを態とそうと知らずに丸ごと呑み込むか吐き出すかそのどちらをも一つにしたそうな、激しく拒んだ虚ろを唯一つ限りの獲物の何時までも腐らない屍を翳すかに、露わに晒し頽れさせて贋の虚ろをさも効かせたげに、その思わせ振りへなら安らえようかと安らえ毀れ溶け果てるかに、元に戻れてような元がきっと虚ろの腐り果てて虚ろの面影も無い屍じゃ何ともな、とか顧みられるほんの一兆しにも行き会えずに行き泥み尖り艶めき鈍って、な鈍り艶めきな尖りの磨り減り痕を探し損ねて明明と、円みなら円い、円みでないなら円くな一欠片の一つ限りに、なので呑み込み果てて空っぽな閉ざされて全てを満たしてそうなほんのそれ限りなで小ささの、円みの兆しの磨きに磨かれた艶を温く柔らかい片側に限って拡げ艶めかし

固め留められる形を隅まで晒し、いや違う、温く柔らかい片側なんて有るならその片側を贋の虚ろにでも呑み込ませるもう片側だけな、なのでその片側を失って片側な片側だろう、な、片側なら片側と異なってように、などっちをも撥ね除けたいかな、絡み付いて来る異なりと距たって係わりを断ちたげに、な、何をかしたげの斜め振りを振り戻せないかとかうっかり企んじゃいけなかったか、斜めな限りな斜めが傾れ頽れ洗い流され、向きは傾きを拒むなら向きまで拒む向きだけに向き直り損ない、その違いなく向き誤りの誤りの向きの投げ棄てられの只中へ共に投げ棄てられたかに現れ去るなら去らせたそれが、去らせた何も無く唯それだけが有るかに現れ晒され、その晒されを晒し果て現れ去って現れ直される直されの徴の、ほんのそれ限りなでな小ささを潰しに掛かる、冷たい圧し被さりの見窄らし過ぎて見窄らしさを突き破り、潰し掛けともさえ潰せないその小ささを、突き破りの向きよりよりその向きだけに磨き尖らせ、尖らせ破り拡げ散らし引き締め窮め、な、斜めな限りな斜めの甦りのどの斜めへかな纏わり付きの斜めへばかりな滑り転げを呑んでその呑んでに呑まれ、な、呑んでに呑まれが、拡げ散らされ引き締め窮められてる小ささに呑まれっ放しだって事らしいにしても、それはそれらしいそれにだけの事で、な事を擦り抜けてほんのそれ限りなでな小ささを独り剥き出すその小ささを、その小ささに呑み込まれ吐き出されてしかそれでないなら失ってはならなくてに失い、そう

して失われた小ささがより確かな小ささへと裂けて光りを嫌うように低く隠ろうとも光の届く縁辺りには小ささの失われた徴と徴の隙間の徴程には留まって何処へも映れそうに研ぎ澄まされようと、その小ささを失ったそれに、その小ささなど知れる筈も無かろうかに、小ささと何の係わりも無しに唯の脅しとも変わらなかろうな大きさなら必ず嘘丸出しでしかなかろう大きさに張り裂けるかに円い限りに円く、その円みの艶なら艶、汚れなら汚れ、濁りなら濁り、虚ろなら凡そ虚ろと異なる、そんなそれらのそれで有るしか無くに、それらの明明とくっきりとを重ね溶かし、その溶かしの明明とくっきりとをその儘それへ映し晒す、唯それだけの大きさに張り裂けるなら何の嘘丸出しとも大きさとも係わらない円みの、そんな限りに円い、な円さを悉く斥けて斥け窮められない限りに円みを、それは円みだろう、円みでなくて何なのか、などと仮に言い放てようかにしろ、必ずそれは円みとの異なりでしか無くにな限りでの円みとしてしか窮められなさそうなら、円みそのものがそれを求めるにしてさえも何の円みを求められようかに、いや円みが円みを求めての円みでだけで円みで、なんて円みなど疾っくに何処からも失せてようなら、円みとの異なりさえ何の事とも掠りさえしなさそうに、なら異なりとの異なりに違いなかろうかにもその儘で、な、その儘がその儘でにその儘でその儘な、そんなそれ、が、どんなそれかはもう、その儘では何もその儘にさえ知れずに、その知れずにな現れが、

現れ去りも現れる儘でも無くに、現れとの異なりへと現れ損ない盛り去り、にしろ去っても去っても去り盛るなら、火が燃え盛り映りっ端窄み去るかに冷えと、映りっ放しにもその影を薄め窮めるようなら窮め切れずに身を捩る影が裏返って薄いより薄くへ墜ちて濃さを増し盛らせて盛り知れずに、その現れとの異なりへの現れ損ないを、そんなそれだけはそんなそれとは異なろうかに透かし見せ、に透かされて何が見えよう、透かされだけなら見えようか、な見えようは見えるとはまるで異なってるとしか見えなくて、な見えなくても見えなくてと異なるしか無くに、それは始めから何も見えてないのとどう違うのかな、よりも先ず、透かし透かされが透かしとも透かされとも異なるに違いないなら、ただ現れとの異なりへの現れ損ないだけが、透かし見せるも透かされ見えるも溶かし損なったかに、その溶かし損なったかに、に損なわれ、現れとの異なりともそれへの現れ損ないをも損ね去り、思い掛けずかに取り残されて何処へも去り損ねさえ出来ない、透かし透かされとの異なりが、独り、な真っ先に翳した独りを破り裂きたげに、な、たげにを折り重ねた厚みを番えて何処へもとの異なりに射放ちたそうに、まるで有りそうに無くに、な程に有るしか無さそうに、ふらふらと、あぁ、ふらふらとなんて有る筈無いよ、ともふらふらと、なふらふらとへと呑まれ損なうしかないなら上滑って歪む勢いで自らを切り刻むように切り刻まれるふらふらとは、柔らかいにしては硬過ぎて水である

のを諦めた水の波打てずに刃のように鋭く悶え繋がり波より静かに波過ぎて始めから水で無かったのを明らかにしたくてふらふらとを刻み窮めるかに切り裂き直し損ない、な損ないに溺れるなら溺れさせるのは波しか無かろうかな水は跡形無く断たれては、水で、な水では水とも異なり断たれ頽れ去り損ね、な、損ねの硬いにしては柔らか過ぎて、波過ぎての果てたなら果て窮まれずにずるずると、なずるずるとがずるずるとの重みに順ってずるずるとの根っこでも見下ろすかに見下ろされる一繋がりに襞の流れ窪みの傾き歪みの映す微かな影の消え去り痕に湧き起ころうかと望みでも懸けられたみたいに、ならきっとその通りの事がその通りと異なって、その異なりにこそ望みを懸けるしかなさそうに、なら必ずその通りな事が、その通りな為にはその通りと異なるとも異なる通りに、な、そんなそれのそれにも至り着けずに、そんな、な儘の通りをなぞるばかり、な、そんなそれが、それをそんなそれと認め損ない損ねて、それともに無しに、なそれとも無しにに溺れるように、溺れるようなら少しも溺れて無くに、なそんなそれをそんなそれとも測り兼ねるかに失い損ない、損なわれた失いを裂けるなら裂こうと、で裂いたのか、などと知らぬ事と、知らぬ事の斜めに、ほら越えて来いよと現れるなら、酷く丸裸に整って整い過ぎたら裸を晒し捲って晒し捲り過ぎ、その現れも現れ失せるなら、失せ現れを何処へとも映し、な何処へともなんて透かさず崩れ流れ、去れずに逆巻くのは何処へともとは遥

かに見窄らしく距たる薄汚れた窪みなら願ったりだろうが予め崩れ流れに埋まってるらしい窪みでは窪みでも無かろうに映り返り、な映り返りの何て整えられ整えられ過ぎて裸とも距てられて纏える限りを纏うような、二つの弓形の欠片を繋いで弓形を更に失う形の、多過ぎて絡まるに任せるしかない脚を上へも下へも向けられずに蠢かす頭を断たれては逃げも死ねも出来ない虫の静かな姿でも真似たかの襞の、艶めく上っ面に映り込む、きっと遥か距たってようとだけは測り損なえる他の襞の、青ざめ今にも溶けて流れそうにそれぞれのその向こうへ去りたげに蠢き凋んでまたその向こうへの拡がりを、望むとも無しに望んでそうに、粘りを洗い落とした脚でも生やしたそうに走るとも無くに一筋に尖る縦の渦を、その向こうのその下へ下る暗がりなら明る過ぎる辺りへ潜り込ませようと自らの重みを探り取り搾り取り損ね裏返り、な裏返りなら軽みかともその測れる軽みの酷い重さに裏返り返り損ない、その向こうを確かに裏返し、その確かさが頽れるより先に先と後を裏返し透かし、透かせたなら裏も裏の裏返しも貫き晒そう、晒し鈍る鈍さの重みも貫いて、貫き隠らせた隠らせに孕まれ直すかに隠り直したいのは何だろう、な何だろうなそれが、それがそれを裏切るかに、それがそれなんだとそんなそれへとそれとそんなそれとの距たりらしいそれとを一つにして、そんなのもその失う為だったかにその一つを失い、一つとは異なりへと押し広げ、いや違う、圧され狭められ、な、失せた一

つの、その異なりとも異なる痕の、一つはもう無いなら幾つかでも無い、繋がり損ね損ね繋がり拡がる狭まりを断ち切り断ち切り切りも無さそうならそれが切りで繋がりは絶え去って去り痕の何て明明と鋭くずっと誰にも触れられなかった弓形かの円みの欠片を拒む欠片の連なり頽れる輝きを後追いに呑もう呑もうとしながらに呑もうに溺れるかに呑まれ返されそうならしめたものと喜び勇む勇みにしては余りに力足らずな危うさなら尽きず湧き起こって危うさを溶かし連ね、危うさ塗れの危うさをその塗れな儘にひっくり返し返して鋭く窪むばかりな小さかろうけれど小ささを隠し隠らせて波な波を、隠れた儘な汚れ強張る靄かな襞が晒され過ぎて熱い襞を食い破って已まないかに煌めかせ、な煌めかせに酔うかに、必ず隠れて居よう円みの微かな匂いを薫りもしない儘に拵えこれ見よがしな虚ろへ爆ぜさせ傾かせ、唯その傾きだけが窪みの鋭さに違いなかろうと狙い澄まし損ない砕ければ、その砕かれが波の煌めかせを煌めかせたに違いなくに、小さかろうけれどな小ささを弾け砕き繋げ去って、去り痕の傾くだけの小ささを押し並べ突き通して揺らせば、何だって煌めかせられようかに何をされたって揺らめきそうも無くに、煌めく光りの素でも円みの匂いの素でも無いなら何だろう、な、光りも匂いも知らない光りな匂い、それとも匂いな光り、それともそのどちらとも異なる、その異なりなそんなそれが、有りもしなかろうその素を煌めかせその煌めかせに一つ限りの裂け目を入れ、何処か

らか知れないのでなければならない円みを垂らし込む、あぁそれなら匂いに匂
わされて光りで光りに煌めかされて匂いで、にそのどちらをも溶け込ませた裂
け目の奥の傾きの奥へ傾き窮まろうかな、でもそんな奥なんて裏返る奥が奥を
嘲笑うかに無くに、な、その無くにかいに触れたくて触れ損なうかに、痕の奥
へ落ち窪むのは、いや落ち窪みは見な痕けなんだく落ち窪み異なり去る去り痕
も見せ掛け損なわいて掻き消され掛せ掛ならん異とり窪窪窪みとの異なりに縋
るしか無けにななそんなそれがれんなるれをんんなそれむませて、に窪むなら
異なり窪くよ、もない異なりか窪みかそどちらでな有るに違いなさ過ぎて有り
そうに無みなう、そのどちらでも無くしかない、もそんなそれが、そんなそれ
だけではいきら沈みも出来なかろうなを逆手に取るかん、表を仰向け仰向け裏
返り逸ら浮、も裏返り逸らせを裏返したくて裏返せなに痕が仰向けても仰向け
ても表なせだな望めば紛れせなく表ばかりに易易と裏返り逸れるかに表で、で
も易易なんてと易で無さ過もるのと同じで何も起こらず、な起こらずな儘なら
起こらずな襞が、何処からぎ知れないのでなければならない辺りで予めそうと
決めてたみたいにお喋りでか始めるかに、襞の上っ面の何処も彼処もが匂いの
光りを色付かせこつそりとも粘粘と滲ませるかに、その滲ませに絡んで闇の溶
け始める闇の縁と戯れるかに、開け閉めを繰り返しては繰り返し損ねるそんな
それをまた、それ窪ませれば、窪ませなそれは、唯襞を潰す為のそれかな動き

へ誘（いざな）われようけれど、襞は先を読んだかに自ら潰れてその潰れ切れない端の微かな隙間で窪ませなそれを圧し潰しに掛かるなら、窪ませなそれは先の先を読もうかに読み損なって圧し潰せない換わりに襞を隈無く剥がすように映し込み、それとも朧にとも映し込んだ積もりにまたそれ窪まって、な、窪ませなそれは、いや、それはそれでも窪ませなそれかと、それを疑るしかなさそうに、な、それって何だ、と自ら進んで朧に沈んだかの襞に熱く突き上げられてそうに、窪ませを危うくもしそうな重苦しげに寄せて来る短い一波を受け容れて仕舞いそうで却って波との異なりに惑わされるかに微かな円みを頼ろうかに僅かに僅かな奥へと傾けようか、な望みこそ予め傾いていたに違いなくに、傾きは剥き出され、その傾きの内へ窪まりたい望みを窪め込み、その窪め込みに、映し込めてたのならその儘に襞をくっきりと映し浮かべたそうに、円みの欠片の傾きの外で溶けた振りで紛れ込んでたのを初めて知れる驚きに砕け頽れ失せ損ない、その失せ損ないな望みの煌めき凋むなら、その凋みを窄み抜けて煌めきの裏へ裏へ回り込むような表でしか無くに裏返り已まず転げる振りに前のめりに、その前に置けば何の傾きも焼き尽くすかにぎらつくばかりな円みの欠片の突き刺さって来るのをまるで防げずに何の望みか、捨てられよう望みさえ望まれようか、な事も予め織り込んででの窪め込みだろうねなんて強がりか弱音かも吐いたか吐かないか、な事も振り切ろう、それでも前のめりな望みを守

り貫けようかな窪み込みでなければ何の先も無いんだと少しも揺らがず心付く、その確かさを貫き守る為のその確かさの縦も横も無く大揺れの突っ立つ横波の姿が、弓形かの円みの欠片を拒む欠片の連なりな儘なその形を隠し隠しながら、円みの欠片が含む窪まりの煌めきを煌めきの欠片を集めるみたいに繋げ捩らせ、な捩らせの捩切れては捩切れな形の一つ一つに円みの降り掛かるかな穢れ極まったかな白さが刃を様様に並べ崩したそうに細く延びる程に煌めく艶を鈍らせ、な鈍らせられた艶が大揺れの横波の姿へ浸み墜ち、な墜ちようなんて有ろうか、とも自らを顧みる為に鈍らせられた艶が求めるのは円みに違いなかろうけれど、それを阻むのも円みの欠片に違いなければ、艶からその求める円みへの傾きから、更にその傾く儘な円みの欠片への傾きへと繋がって、繋がりこそ何の欠片より欠ける事なく欠片だろうな、にしろ、その欠片を欠ける事なく欠けさせたのは何の欠片だろう、とまでは心付いた心が欠けて欠片でしか無くに、欠片の心を欠けさせた欠片を欠片に映そうとするなら、それをどの欠片に映ろうか、に、欠片は欠片を欠片に欠けさせ、何の欠片も欠ける事無く、欠ける事無くに何処もが欠けて欠片で、に何一つ欠片では無くな、そんな映そう映ろうな勢いが独り何一つ欠片では無くなを呑むように、何処からどう映されようと欠片な形で、あぁ形なら必ず弓形を焦がれ求めようか、な求められてさえ歪んで弓形の撓みを弓形な儘にこっそり抜き取られたような、それでも弓形で

却って何の形でも無くなって欠ける事の無い、そんな形にその形を傾かせる何一つ欠片では無くなが、何処に欠片の映ろう筈も無い水より濃い靄の溜まりの濃い靄より濃く光る底を掠め損ね回り込まされる先は疾っくに断ち切られ、断ち切られ痕も崩れ掛け干涸らびた襞でも隠してそうな穴だらけでも穴それぞれを懇ろに舐め回して見知らぬげな艶を何処からか誘き出そうと企んでそうなら、何処にでも映る欠片が何処にでも映って何処もが欠片なら欠片など始めから有り得ようも無かったと確かに暴かれたか暴かれ損ねたか、そう尋ねられようと欠片とも無くにあやふやでしかないなら、欠片も欠片で無いも欠けるも欠けない欠けるも少しもあやふやで無くな一つに収まり切ろうか食み出そうか、に、その一つも易易と越えられ損ない損ない綻んで綻びの内に墜ちる越えられに溺れ失せ、それでも一つな失せ痕に失せ痕はどんな形をしてようかを探りたげな兆しが、微か過ぎる光りの消えては消し痕も消えては消え光る、鋭過ぎて刃にも成れず刃の震えの波にも乗れない、弓形とその窪まりの相争うかの絡み合いの絡み合い切れない光りの断ち切れは、あちこちに已まず小さな闇を丸裸に吐き出すかに吐き出すと逆さな仰け反りでその奥深くへと煌めいて、吐かれてもない小さな闇の幻なら幻が濡れて滲んで光りの断ち切れに馴れ合い、そうして光りも光りで無くなるかに闇の幻ならん幻に引き摺られれば、そんな光りの幻なら幻は光りと異なるしか無かろうかに、にしろ、その異なりへ差す光りの光り

との異なりへと異ならせよう、そのそうして異ならせるその異ならせの異なりに、光りの兆しの形をさせられたらと望む、そんなそれもそれでも一つに違いなくに、一つ窮まり損ね、ぎざぎざさえ数えられようかな縁こそ数え切れない震えを撒き散らして削られようと、損ね去れず、その去れずに絡み傾き、その傾きを逸れようと傾きにその去れずの脇を匍わせ、匍わせは匍わせを匍わせてるなら自ら匍ってよう傾きなら傾きとの異なりに傾き異なって、な異なりに異なりを異なり去らせようかな兆しなら溢れ返ってないかな、な、傾きとも異なりとも距たろうとして一つな、な一つなら一つが、一つで無いなら必ず一つで無くに数を超え、に一つな、そんな向きなら向きの、傾きの兆しは拒まれ凋もうか、に凋み果ててすっかり凋みようも無くに何の傾きから、とは言え傾きは一つだろうけれど、頽れ窪んで窪み頽れ痕から溢れ返り直すかに噴き出すのは、何の兆しでも無くに一つな、に一つに違いなかろうと違おうと、一つなには違いなど違いでも無かろうに違いなくな、そんな、な、に、な、を、更にその、な、が引き継ぎ傾けもするだろう、そんな、な、を、な、にしてる、そんなそれが、一つなの内へこっそり忍び込んで忍び込めたからには明明と光るとはあからさまに違う煌めき方で、一つなとの距たりを照らすかに一つなへの向きへ向かって溶け果てようかに、な姿なら姿、な姿でないなら姿でないより姿を激しく浮き沈みさせて互いを係わり合わせて姿と異なり損ねてる姿かな、そんな

それが、どれがどれとも違うなら違って、違わないなら違わなくに違って、でも、あぁ、違わなくに違わせてるのは、このどれとも違うかに際立つ一つ限りに違いなかろうか、に、その一つ限りに、はそれの限りを常に易易と越えてそうに嬉しそうなら嬉しそうに嬉しそうでないなら嬉しさに倦む嬉しさを膚から溢れさせてそうにも嬉しさを呑み殺す嬉しさを鈍らせ鈍らせ切れず弾かせ、な鈍らせを繋げて自らの際立つ姿を頽れさせ消して消し痕を却って波に呑まれ損ねるように際立たせ、その姿の際立ちを自らを真似て飽きないかに真似繋ぎ真似断って現し続けて已まないにしろ、已まないのは、その一つ限りに限らず、確かにその一つ限りの際立ちを喧しく支え補ってるようにしても、それらは一つとは異なりながらそれぞれに一つとの異なりな限りに、出来ない事なんて何も無いかのような細く滑らかに熱い身振りで囚われた儘にも時を砕くかにも思う儘に硬く動き回れるかに、その一つ限りに纏わり群がって思い切り群がり損ねる続けるばかりでは、纏わりを裂く取っ付き難くのらりとした隙間が、取つ付き難さが隙間な、に隙間ばかりを繋げた隙間を怪しみ恐れ、その隙間を砕いたり砕かれ痕を直ぐに直したりを繰り返す、その繰り返しの酷く狭げに限りなさそうな、限りなさそうなら限りないんだ、な限りない程に狭さに絡まれ墜ちて更に激しく出来ない事なんて何も無いかのような乾いて尖った冷え冷えとした小さい限り小さな身振りを際立たせたくにも何も出来ず、いや何もかも出来て

仕舞って次は何も出来ないと容易く見通せる何かを求めるしか無くに、それぞれの一つとの異なりもしない限りにを傷付けずには已まず、でも傷なんて付けられない替わりにそれらはぬるぬるしたそうにもし損なえば周りにぬるぬるを塗り付けてそうかに虚ろな硬みに閉じ籠もりたそうに身を捩る、その身の捩れが限りなく何処までとも何時までとも無く、唯それ限りに限りなくに拡がって拡がりに拡がり囚われ、囚われ纏わり損ない損ない去って去り痕に甦る、それぞれに一つとの異なりな限りにを責め苛んで切り刻み損ない捲れば、どれがどれともそのどれもが触れられない、それらとは異なる事でそれ一つ限りな、その一つ限りの際立ちを際立たせ損ない、いや際立たせ異ならせ、一つ限り損ないようのない、その一つを溶かし一つで無くして必ず一つでしか無くし、な必ず一つでしか無くされた、そんなそれに取り付くより先に取り付かれた、に先に取り付いたそれに遅れて取り付かれたか取り零されたかに、な取り付かれから逃れたいのかそれに塗れたいのか知れるのを恐れるかな消え去り方に乗り移っても消えられずに、先に取り付いたそれから逃げるしか無いなら却って立ち向かい逸れれば逸れようもなく後退り後退り痕を圧し破る勢いで進んで少しも進めずに、な進めずにへ身を断つかに転げ込み尖り喜べば、喜びに、断たれた身を断ち改められるかに突き刺されるかにそれとも掻き回されるかに奪われ、って何を？その奪われる何かは何処？だなんて、行き成りな奪われに解けない

と分かってる問いを、然したる謎でも無くに投げ付けられ、それをも喜びは喜
び改まろうか、な喜びと喜び改まろうかの擦れ違いに擦り潰れたそうな斜交い
に圧し迫り窄む横殴りな渇きの渇き翳され反り返り凋み留まる、な凋み続けて
小さな渇きの留まりを尖り繋げ断たれる断たれ痕を渇き改まる、な改まるに微
かに湿って断たれる渇きの断たれ痕は、転げ回るしかなくにも奮い惑い、な奮
いと惑いは擦れ合い損ね、な損ねと損ねの噛み合わなさに厚過ぎる唇の脹らみ
かに歪んだ丸丸と奥の深そうな隙間が落とし込まれるなら、その一つ限りでも
無さそうな隙間は奥を断たれて却って深く裏返り、一つでも無さそうなら幾つ
にか、な幾つにかこそ渇きの渇きに渇いて微かに湿らずには居られない、剥き
出された姿なら姿かに、かにな儘に弾け窮まり丸丸と剥き出され改まる剥き出
されなら、それ一つ限りに違いなかろうと一つ限り溺れ固まり、な硬みに溺れ
改まって一つ限り改まり、な一つ限りでは改まりごと失われるしか無くに、な
失われ痕の何て限りなさ、一つ限りな一つ一つが数知れず数知れずにも一つな
数を外から破り捨て一つを一つごと裂いては限りなさを押し拡げ、な押し拡げ
はその押し拡げを自ら押し拡げごと裂いて裂き痕が痕ごと自らを裂き巳まず、
にその互いを穢し合う一つ一つの裂け口に一つ限りな一つ限りの一つ一つが、
そのどれか一つしか一つ限りでは有り得ないと知ってようかに一つ限りからそ
れの限りに身を躱そうと競って尖り急ぐせいで、どの尖りも互いを窪み合わせ

ては尖り直そうと直せず更に窪むならどの一つもその一つから一つを奪われ、一つの一つで無くなったそれらは尖りに尖るしか無くに尖り果てるか一つ限りの外かな一つに繕られて行こう、な眺めこそ予め裂け已まずに、な已まずな一つ一つの外かな一つ一つが何の一つ限りをも食い破ろうかに競って縮む内の縮み遅れた、一つでなんて有り得なかろうにもさも一つが、それ一つ限りこそ一つ限りかに遅れを更に遅らせ透かせ、その透ける向こうに縦に揃って並び遠退き遠退き過ぎて縦は縦の儘ぐるりと戻りたそうにぐるりなだけの艶を必ず戻れない辺りへ丸ませ尖り綻ばせる、な眺めを、確かにそこではそれは一つ限りにか、間近で爆ぜた爆ぜ穴を覗かされるかにも潤せば、な眺めは却って涸れようかに嬉しげに弾むかに愈愈縦をあからさまに翳す振りでぐるりな艶までをも大きく縦に波打たせ、な波打たされは縦のせいで直ぐに断たれ断たれ口に縦波に乗るぐるりな艶が丸ごと滑り込み呑まれるなら呑まれ呑まれないなら断たれ口を裂き、な、どちらにしろ変わらない、に変わらないと知れるそんなそれはどんなそれか、それをそれと知って知り忘れてそれなそれは、忘れたからはそれの知れたそれを知れずにそれで、な、知れないなら何のそれとも無かろうに、で、無かろうにとは確かに知れるそれにしろ、そのそれの何もそれで無かろうなら、そんなそれは、それと無くに有るでも無いでも無くに、それ尖って、それで無かろう尖って、な、どちらの尖りを選ぼうも選ぶまでも無くに、尖り已

んで已み尖り直し直り已み尖って、な、きっとその尖ってを凝っと固める向きが独り働くのかとも、数を知らない一つの向きを剥き出し、いやそんな一つなら向きは向きへとそれを剥き出されるしか無くに向きで、に向き已めば已み尖り、その尖る先にそれはずっとそれで有り続けてるかな、そんなそれを貫こうにもまるで叶わずに、な已み尖っても向きを已めようの無い、向きかどうかもあやふやなあやふやさに尖り宥められるかに尖るか尖らないかするしか無くに、あやふやなど疾っくに突き抜け、向きを向きにさせた向きの向こうの、その向こうから来る向こうのどうやら徴らしき辺りまでは、尖るか尖らないかを尖るか尖らないかさせた、そんな、いや、そんななんて無くて尖るか尖らないかさせられたんだと直ぐに知れる、その知れるを破り棄てられて知れるで、な知れるの徴を見たか見損なったか、知れるに痺れ直ぐにそれは痺れる真似でしか無くに、に痺れさせられてるなら、痺れさせられは真似では無かろうに、知れるの徴と係われてるかな微かな望みに引き摺られ引き摺られ痕も予めそう知れてたかに擦って消せそうなら望みまでを消して仕舞いそうで消せずにその脇を滑り抜けるでもし損なったか、痺れさせを痺れさせたそれと係われたかに、それともせめて遥かに距たりながらに並べたかに翳される、な翳されを映せてようか、でも何処に？などと、尋ねられるならそう尋ねられる自らを見出そうかなら自らと知れ早まり知れ損なうでも無くに知り窄み、映せるなら、

な窄みしか無かろうとは知れたか知れ損なえたか、どちらも知り誤ってそうで、だって何の翳されが何処に映ってようも無くに、無くにとは翳されてるかもに翳されてようと、と翳されて無かろうと、知り誤るしか無さそうで、無さそうならば無いんだなんて事でも無いなら、無いの無いが有り溢れ溢れる儘に映せる限りに映されてないかな、だなんて明らかな知り誤りに溺れそうで溺れそうなら溺れてないんだと溺れてないを映せる向きを探す、そんなそれが有るなら映されてるだけのそんなそれでしか無かろうかと、そんなそれがそんなそれを顧みられたかどうかを映す映されを映すそれも、そんなそれとせめて遥かに距たりながらに並べたかに翳されるそれだろうかと、知り誤るなら誤り知り誤らないなら誤らなさを知り早まって早まりを剥がせるなら剥がし剥がせないなら剥がすも剥がさないも棄て、に、棄て尖り損ない溺れ、尖りは、或いはその尖りまでをも映す映されを映して翳される、翳されとの距たりを回り込み外れるようにに避けながら回り込み外れの外されに挑むかに衢わせ、な衢わせが衢わせを衢わせ顧み、その顧みの先にそこがそこと現れるそこが顧みを呑みに掛かり呑み外れた先で先ばかりが互いの足を引っ張り損ね損ねて溺れ窪み逸れ、その窪み逸れなら描けようかな一波の息を呑むような大きさに賭けようと丸ごとのその姿を、先ばかりでは溺れる先に透かし届け、出来ればその透かしをも貫き、な貫かれた透かしに絡まろうと、でも、に先駆けて行き成り絡んで仕舞ってよ

うな絡みに絡み取られ逸れて透け窮まり濁り拡がるしかなく、濁り拡がりは必
ず苦しげに波を描くばかりに波の向く先に先を知り、な先に先など消えてその
消える先に触れ止まる狭まりは狭まり急ぐ程に確かな先を明らかげに拡げて已
まないで、先の消える先に消える先を匍わせてよう、な匍わせを匍わせと知れ
るなら匍わせな、そんなそれ、にしても、それはそれを匍わせとは知れなかろ
う、な、明らかげに拡がり已まない覚えを、その為す儘にさせればその為す儘
に嫌嫌誘き出されるかに絡み纏わるのが、な絡み纏わりを見切り送り流す絡ま
せ纏わらせで、に、で損ない外れて、間近に触れそうに距たり触れ異なって距
たり逸れるのは、触れ外れとの異なりなら異なりで異なりでないなら異なりに
遙かに遅れて苦し紛れに透けでもしなければ、穢らわしげに腐ってる光りの真
ん中に吊されるしかなさそうな、でその通りに、光りなんて必ず腐ってるに決
まってる穢らわしさに埋まりそうに、な成り行きとの異なりを異ならせる、異
ならせの裏で予め定められてたかな、光りの穢らわしさと行き違い様に光りを
撫で斬り損ない尽くし尽くし斬り果て、果て尽くされたろうかな光りの果て尽
き様をその果て去り消えた光りに晒す振りを引き延ばせば穢らわしさを振り切
れるかな穢らわしさに付け込まれるか、何処へと痕も無く消え果てた光りに縛
り上げられるかに囚われ、囚われるなら必ず擦り抜けられようかな擦り抜けに
囚われ、囚われ果てるかに透け透けるなら透け已んで濁り濁るなら透け、その

濁りと透けの距たりへ触れ異なろうと、その異なりの触れを舐め回したいかな、そんなそれのそれな姿に溺れるそれな姿で、な姿なら、な姿から距たり逸れ、な距たり逸れに触れ異なりそうに進んで異なり早まろうと、な早まりから引き摺り出される早まり鈍さは遅過ぎを呼び招いて溢れ掛け、な遅過ぎがそれだけなら、それはそれをそれへ傭わせて傭わされる内へ擦り切れ果てように、擦り切れ果て早まったかに、それはそれの内も外も知らぬげにそれで、な遅過ぎに穢らわしげに跨がるかな、果てた光りを何処へか透かすなら片端を窄めて脹らみ盛り、透かされた光りに円みを僅かに晒し残して内から切り断たれるなら弓形か、それとも弓形に囚われるしかない何かの形か、それとも何かの形に囚われ囚われに奪われた時でも腥く腐らせ形の縁へ滲んで形を縁取りたげに透かされる光りを嫌えば逸れられるかな望みに苛まれては円みに背くしかなくに捩れる筈も無くに、なら透けに望みを掛けるかに内へ捩れようも捩れたか却って捩れると逆さに、その何かの形を外から歪め、形に呑まれたいかの科でも作り損ねて損ね傭えば傭えようと穢らわしげなら遅過ぎへその脇へと後ろからなら近寄れようか触れられる程までに、な触れられる程までとの距たりに滑り落ちる、距たりとの異なりの距たりの徴の兆しかな細か過ぎる数知れなげな欠片の流し込まれとの距たりを測れるなら、初めてどうやら何かの形かと、その形を測れよう筈も無くな、な無くなとの距たりが、測れよう筈も無くなとの距たりに触

れられようなら触れられるしかない、な触れて触れられる距たりな形が、捩れると逆さを逆さに、な逆さを切り断ち、な切り断ちは、逆さにを逆さに継ぎ接ぎ繋げたかろうに、弓形なら弓形に弓形で無いにしろ円みの欠片を隠らせるかに弓形の徴を透かし艶めかせる、そんなそれへの蟠りで形なら形に、形と形ではどちらをも流し去らせるしか無いかに、無いかになら流し去らせられずに形と形とで破れ合って互いの破れ目へ互いを流し去らせられようと却って破れ目を塞ぎ合うとも、そんな形と形との閉じ合いに閉じ流れ籠もり込み開かれ開き、な開かれ開きの開きようのない明るみへ溶け損ない逸れもせず、まさか行き成り跳ぼうか翔ようかな構えも軽軽と遣り過ごし、な、形から形への流し去り流し去らせを、形への蟠りへの距たりへと透けさせる、そんなそれに、どんななどんなそれが遅れ絡まれようかと、明るみへ溶けその溶かされで明るみを溶かし明るませる明るみの外の来るのをひたすら望むかに、な望むかにまでを見切って切り断って、な断ち切られに順う明るみとの異なりへ逆さ異なって異なり異なり、に明るみの外へも艶めく向きの艶めきを消し、向きを潰し、な潰しを潰させた逆さ異なりの明るみか明るみでないを明るませるかに明るみを拒み、な拒ませのまるで虚ろを見果てて見果てられた内へと、内から外へかに、かにな限りに内から外へ、かにな限りなど突き抜け行き詰まり外への内へ、に虚ろな拒ませへ躍り込む姿に何の形も無いなら始めから有りもしない姿も無く

の崩さらそいせれまをの拒れそなしれに、
硬れだわの草、もっ拒向ん果向いかた、
い、けし自もあ始てまきでてきかな艶な
窪ながさら虚ぁめるせを向てを潰いめ無
み溺拒はのろ、かな異拒き向拒さなきく
へれみ、窪のならならなまはきんれらなに
落崩も拒み遥拒形何らせ、とでへ沿らこ
とれ拒みのかまの処せを向向向潰いそそ
せかまへ裏手せ外へて包きかきさ顛の無
ばられもへ前ののも拒まにせでれれ限か
水抜も拒隠で、外、みれ向は、消、りろ
のけ擦まれ見虚で何返へき背なさ顛にう
影らりれる窄ろし処し引包き向れれ艶と
にれ抜へにらよかで、きま合きる直め直
包なけもししりざもに摺れうなしっきぐ
まい何穢ろく遙わ無拒りる儘どかて、様
れ腥のら、潰かめいみ込かに向な逆な顧
てさ穢わなれにか何返めな互かいさ潰み
隠にらし水腐何な処しる円いせかをさ損
さ絡わさ遊りていへた筈みをのな直れな
れむしをび、細ざさりもに剥骨向しにう
よ腥さもに水細わえし無触きにきた逆な
うさも拒はのとめもちいれ出でを異さら
かを無ま見震しき戻ゃな逸しも向な異逆
と隠しせ向えたにれいられ剥絡きりなさ
遙しにるき固穢違よけ引包きむへはり異
かた顛よもまらいうなきま出し向異はな
にくれうしっわな、か摺れさかかなうり
遠て、ななてしかにっりなれ無せりっで、
退隠ならい堪さろ、た込いれか、とか、
いせ顛、拒ら、う拒んかばろな異り向
たずれ穢まずな、みだでと、う向なとき
後にらせ窪んとも、拒、向にかるもを
ろ、溺わのんて拒拒にま向きかせし沿潰
を水れし穢で言まま決せきを顛こかうさ

間近に曳き延ばし過ぎて何一つ隠されようも無くに何よりも硬い水の影に沈みたそうなら、水ごとと腥さなのか腥さごと水なのかの距たりに滑り込んで距たりを貫けよう、きっと硬過ぎる穢らわしさの頽れは、唯一つに隠され、一つでは已むに已まれずそれ一つにと翳され、にしろ距たりに距てられて何の形とも現れられず、に現れさせない、距てられの外で外を外に戯れさせるばかりに厭き果て転げ丸まり鈍る、な鈍りが鈍く妨げで、な鈍りに遅れて遅れを濯ぐ形の窄み消え損なう損ないを噛み締めるかに鈍りの丸まりに潰し掛け丸まりでは無くして、で楽しめなくも楽しめなさを楽しむかな楽しみに溺れ逸れ、な楽しみこそ裏表も無くに穢れてようなら憎まれ極まるかに引き裂かれ、な引き裂かれようなど有ろう筈も無くな痕とも見えない痕をそっと磨くかに、痕とも痕で無くとも有りもしない引き裂かれの覗かせる覗かせへ沈みたそうな、なそれ一つが、一つでだけは有り得なくては何処へとも逃げられよう、な逃げられから逃げられず逃げられを磨くしか無くに、な何処へともが数知れなさ過ぎて過ぎてな先に一つに磨き果てれば、数知れなさな一つが一つな数知れなさを蝕み尽くすのか、な尽くされ窪んだ数知れない一つをどんな数も数え果たせるかに包み込もうかな、頽れそうで頽れない覗かせの奥深げに微かな淡い色の染みかの、あぁそんなそれでは、そんなそれとも異なりとも異なるも異ならないも無い、それともそんなそれ無しな何も異ならせられない異なりが唯一つに、唯、その唯一

つをそれから異ならせてようか、そんな覚えの甦ってように違いないのを、どうにも知れずに、な知れずな覚えばかりが撥ねて已まない、な已まなさの已まなさへの拘りの薄く波立とうかと薄さの拡がりかに騒ぐ、な波が波を切り刻み波を潰し破る破れの波の尖り立ち寝かされる、立たせ寝かせの細みへ窄みたくてな波を隠して波に隠れた波の覚えもない戯れるかな細みの振りが、知れずな覚えばかりな撥ねを撥ね弛ませたろうか、已まない已まなさの已み窮まりの已まなさを已ませ、な已ませを已ませれば窮まり無くに已み果てようも無くに、已な、無くには無くにを波の一呑みかに無くし逸れ、逸れ無くされた痕の唯仮に危うく斜めな窪みの、な窪みに拒まれれば斜めを危うさから救うように透かし裏を向け、と、な逸れ無くされから誤ってようと知れるのは、知れずな覚えばかりの已まない撥ねの、その透かされ裏を向けられての已み果てようの無い已まなさが、已ませられ已ませ窮まらせられ、それが妨げで、にしろ、な何への妨げかの知れなさに依って誤ってようと知れる、な誤ってようの知れなさなど知れた事さと知れぬ事で、に、な何への妨げかの妨げを妨げさせて妨げで、に、な妨げさせまでを透かしてその裏など無いなら無い裏が向き直り、それに順うかに無い裏からその裏へ向き直ろうかな妨げでは、妨げ異なり損なうかな妨げに蝕まれて妨げの妨げなら、知れずな覚えばかりの已ませ窮まらせられは、已ませ窮まらせられ異なるしか無くに、異なるしか無くにでも無くに、に、知ら

ずな覚えは、それへの何のさせられも斥け抜けて、唯覚えばかりに已み窮まれなくに、な、そんな儘に唯そんな儘では、知らずなな儘にも覚えも覚えで無いも無くしか無くに覚えで、な覚えに何の覚えが覚えられてようか、な疑いこそ何の覚えも無くに掻き消え痕なら痕に痕で無いならその覚えも無しの疼くようならく疼くようも無く疼かないようならら始めから疼き果てて疼きも知らないような何の覚えより覚えなような何の痕とも知れないなら痕で無かろうかなで無かろうかな痕に、何の覚えかな覚えさせられが映るか透けるかしてるならしてそうでも、してそうでもならしてないんだって向きを向く向き直りな覚えだけが、何を知れさせられ無さからも身を躱せるかに、疼きようもない疼きを振り棄てて、覚えのそうした向き直りの向きを、その振り棄てへ向かせ直し棄てて棄て痕が掻き消されようか、その掻き消しへなら棄てられた疼きごと絡み込めそうなら絡み込みを籠め進めるかに躍り込み逸れ籠もれようかと、すっかり疼き遅れて遅れしか映さない向きへ、喜ばされ勇まされ続けに囚われ、な囚われへ向き直りたかろうな危う過ぎると分かり切ってれば傾きを失った傾きが、疼き遅れしか映さない向きをも失ってるのをさも分かり切ったかに傾き直し損なおうにも損ない損なうしか無くに、な無くにさえ削り落とし兼ねない危う過ぎへ真下へ墜ちるかな傾かせに傾き已まずに、な真下では穴が穿たれると逆さに却って穴を真っ直ぐ裏返して放り棄てたかに突き上がろう、な見通しを見通せる振りな

振りを振り過ぎたかに失い尖り鈍り果てな傾きへ傾れ込みたい望みの、傾きの色という色を奪い取りたげなその荒荒しさは望みには妨げで、妨げ過ぎれば妨げごと奪われた先が拓け固まり掛け鈍り、突き上がろう穴が傾いて自棄を起こしたかに磨き出したかな艶を帯びるなら、艶も裏返されてようと分かり過ぎて裏返られない艶は内ばかりを向いて外からは全く穴でしか無いならそんな触れたくも無い穴で、穴ならどう触れられるも無くに直ぐ様穴を嫌う周りから傾れ込む剥き出しの傾きに埋め尽くされよう、な傾きが外の何処からも消えてどう触れようもない唯穴な穴で、な外を向いて艶なら、な穴な穴など艶の汚れた裏へと潰され果てて隠されどちらから覗かれようも無くに塞がれ、な艶が、艶ごと裏返された穴の突き上がりの成れの果てなら、突き上がりも裏返ろうかな傾きへ傾れ込もうと賢しらに回り込み逸れる望みこそ、その望みの磨かれ過ぎな艶を酷く痛め付けて望みばかりを昂ぶらせ過ぎ、外からは望みが望みの妨げか、な外など外で有るからは内しか向けなかろう、な裏返られない傾きなら傾き異なりへ傾き懸かり、へも異なれない異なれなさを翳すしか無くに、な翳されこそ痛め付けなければと脅されたかに勇み懸かったのが徒か、徒なら徒で徒異ならせられように何故か異ならせられずに、な翳されでは疾っくに姿も無さげに煌めきすら滲ませそうな刺し傷だらけじゃないか、かな疑いも疑われ損ない痕が何の傷も癒やしたげな見窄らしい傾き凋み汚れ楽しむ浮き沈みを戯れさせる

ようなら、疑わしげ異なる姿も無さげが、その無さげにだけ外、、触れようもなく、な外の内しか向けなさを、疑わしげ異なりへ誘い込む途なれ途切れな流れの傾き、でもその傾きはその先でない何処かの窪みを透かそ切とその儘に窪みかも知れない、な形な傾きに引き回され、その外にしろ有りうしない外に触れられ捲つてるに違いなさそうなら違いれさそうが触れようももく外かで、な形ごと外かな流れの傾きが、その儘ならなのその儘に為す術無な引き摺られ触それ外その外へ内から真っ直ぐ先を拡げ破れば、その失われもを求めて、な傾きを傾れ込ませるしかなくに、で外はなら、外ごと向ける内先無い内に違いなくて、それで何の流れか傾きかと流れと傾きがその内を疑うもら思い掛けず渦でせ巻けようと外への渇きを外は外ごとへ楽しげに晒し懸けな何処へかも架け渡せよう、で翳されるのは却って外ごとかも知れなさげな、、んな形だけの形では透け過ぎるばかりにその形にさえ触れられようも無くにそな無くにに包（くる）まれ、包んだ無くにの外に、内を満たして外しか向け、い、な外の内向きを隠し残す徴の微かにもどんな向きへも飛び散らかそう、な徴の欠片で円みが円みを細かい限りに細かく拒んで円み損ない傷付いて円みな、な拒まれた数知れない向きを晒す円み損ないに包まれ傷付けられてようかに艶を斑に濁らせ透かし、な透けを艶は切り捨て抜ける先を先へ先へ失い続け、な先へな先の失いで翳される、先からは遅れな兆しな限りかな形だけで形な形なら、形も形

も無くに触れて触れられれ果て損ね逸れ、な逸れに順う限りに触れと触れられの果て損ねを従え馴らし、先へな先の失いを奪い返させようかな企みも先へな先の失いの内なら外は、と向きが向きを向くなら内へ無い内など知ろうか内向き逸れ、な逸れの先で外なら外は外なら外の限りに、外で無いなら外で無いかも知れないな、先への先の失いも失せたろうと、失せた先への先に兆すなら兆す兆さないなら失せた先への先ごと、先ばかりが溢れ先が先を溶かし合うかに頽れ、な頽れの有りもしないと分かり切ってる穢れを濯ぐかに戯れ遅れ、遅れなど知れた事と戯れに戯れを遅れに映そうかに戯れ溺れ、溺れるからには先へな先の失いの内なら外と違う筈に筈な、有りもしないと分かり切ってるなんて知れた事な向きを、向きの兆しを操り転がす真似を楽しみながらにも、な向きの兆しに蹟き捲り逸れ損ね、な逸れ損ねと、先への先の失い失せたのは外で外を外の内に向く内向きから外の限りにな外か外で無いかは逸れられないし逸れ損ねられない、な先への先の失い失せとが、距てられ損なえなくて距たるしか無くに距たりを毀し痕も消すかに毀し、な繋がりなら繋がり繋がりで無いなら繋がり無さでその距たりを蟠り合う、

（二〇二一年十二月二十日）

断片　二〇二一

著者　u_

© 2021 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published